

近代中国知識人における女性観をめぐって--『婦女雑誌』を中心に--

著者	楊 妍
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第19333号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00127721

博士論文

近代中国知識人における女性観をめぐって

—『婦女雑誌』を中心に—

楊 妍

2019 年

目 次

序章	1
第1節 問題提起及び研究目的	1
第2節 研究対象	2
2.1 『婦女雑誌』	2
2.2 『新女性』	3
2.3 『東方雑誌』（婦女与家庭欄）	3
第3節 『婦女雑誌』の編集状況	4
3.1 『婦女雑誌』の時期区分	4
3.2 『婦女雑誌』編集方針の変遷	7
第4節 先行研究の検討	10
第5節 本論文の内容構成	15
第一章 清末における女性雑誌の刊行	17
第1節 女性雑誌刊行をめぐる歴史的な背景	17
第2節 女性雑誌刊行をめぐる社会的な背景	20
2.1 清朝政府の女性教育理念	20
2.2 女子学校の設立	22
2.3 良妻賢母教育	24
第3節 清末における女性雑誌の出版活動	27

3.1	清末女性雑誌の産生	27
3.2	清朝政府の日本留学政策と女子留学生	31
3.2.1	日本における女子留学生の出版活動	31
3.2.2	『中国新女界雑誌』の創刊	34
3.2.3	『中国新女界雑誌』から見る「女国民」	35
3.3	清末における代表的な女性雑誌の出版活動	37
3.3.1	『女子世界』の創刊	37
3.3.2	『女子世界』から見る「国民之母」	38
3.3.3	『女子世界』から見る日本の家庭教育の影響	42
第二章	民国初期における女性雑誌の出版活動	45
第1節	民国初期の女性雑誌の商業化	45
第2節	『婦女雑誌』の創刊と発展	47
2.1	『婦女雑誌』と商務印書館	47
2.2	『婦女雑誌』の創刊をめぐる社会的な背景	50
2.2.1	舞台としての近代上海	50
2.2.2	民国初期の女性教育	51
2.2.3	『婦女雑誌』の読者となる女性たち	54
第3節	胡彬夏・王蘊章編集期の『婦女雑誌』（1915年～1920年）	55
3.1	胡彬夏について	55
3.2	初代編集長・王蘊章について	59

第4節 『婦女雑誌』から見る理想的な家庭教育（1915年～1920年）	66
4.1 伝統的な家庭教育の様相	66
4.2 近代中国における家庭教育の発見	67
4.3 理想的な養育方法―「衣・食・住」を中心に	68
4.3.1 服装の改良	68
4.3.2 食物の改良	70
4.3.3 住宅の改良	73
4.4 理想的な教育方法―「家訓」と「自発性」を中心に	74
第三章 1920年代前半の『婦女雑誌』に関する考察	77
第1節 五四時期における日本からのセクシュアリティ受容	77
1.1 与謝野晶子からの貞操観の受容	77
1.2 堺利彦からの恋愛観の受容	79
第2節 章錫琛編集期の『婦女雑誌』（1921年～1925年）	84
2.1 章錫琛におけるエレン・ケイ思想の受容	84
2.1.1 エレン・ケイ思想の概要	84
2.1.2 章錫琛の恋愛観について	86
2.1.3 章錫琛の婚姻観について	89
2.2 日中両国におけるエレン・ケイ思想受容の比較	92
―平塚らいてうと章錫琛を中心に	
2.2.1 日本におけるエレン・ケイ思想の受容と変容	92
2.2.2 中国におけるエレン・ケイ思想の受容と変容	93
2.2.3 平塚らいてうと章錫琛の比較	95
2.3 章錫琛編集期の『婦女雑誌』の社会的な影響	99
第四章 1920年代後半の『婦女雑誌』と『新女性』	102

第1節 杜就田編集期の『婦女雑誌』（1925年～1930年）	102
1.1 杜就田について	102
1.2 自由離婚の考察―「離婚問題號」との比較を中心に	107
1.3 理想的な配偶者の考察―「配偶選択號」との比較を中心に	110
第2節 『婦女雑誌』から『新女性』へ（1926年～1929年）	114
2.1 開明書店と『新女性』	114
2.2 章錫琛の性道德観の変容―『婦女雑誌』から『新女性』へ	116
第五章 『婦女雑誌』の終焉と継承	124
第1節 葉聖陶編集期の『婦女雑誌』（1930年～1931年）	124
1.1 葉聖陶について	124
1.2 『婦女雑誌』から見る葉聖陶の女性観	128
第2節 『婦女雑誌』の終焉（1931年～1932年）	130
2.1 金仲華について	130
2.2 『婦女雑誌』から見る金仲華の女性観	131
第3節 『婦女雑誌』の「継承者」（1932年～1934年）	137
―『東方雑誌』（婦女与家庭欄）を中心に	
3.2 「婦女回家」論争から見る金仲華の女性観	137
3.1 金仲華編集期の『東方雑誌』（婦女与家庭欄）	140
終章	146
第1節 本研究の各章内容	147
第2節 『婦女雑誌』の男性知識人から見る女性観	150
第3節 今後の課題	153
参考文献	156
謝辞	163

図表一覧

【表】

- 表 1.『婦女雑誌』の時期区分
- 表 2.女学堂数及び在学中の女学生数
- 表 3.全国中等教育機関男女在学者数の変遷状況
- 表 4.清末から民国初期にかけての女性教育の変遷
- 表 5.儒教式「良妻賢母」像が欧米式「家庭主婦」像との比較
- 表 6.清末における主要女性雑誌一覧
- 表 7.商務印書館における主要雑誌一覧
- 表 8.『婦女雑誌』における王蘊章の翻訳文一覧
- 表 9.『歐戰與各交戰國婦人之真相』が『歐洲戦と交戦各国婦人』と目次の比較
- 表 10.『婦女雑誌』に記載された幼児離乳食の変化
- 表 11.章錫琛編集期『婦女雑誌』に翻訳された日本女性思想家の作品
- 表 12.章錫琛編集期『婦女雑誌』の特集号
- 表 13.杜就田が『婦女雑誌』に投稿した記事一覧
- 表 14.『婦女雑誌』1929 年 10 月：「嫁前與嫁後特輯號」
- 表 15.金仲華著『婦女問題的各方面』の目次

【図】

- 図 1.『女学世界』1904 年 1 月号（筆者撮影）
- 図 2.『女子世界』1905 年 3 月号（筆者撮影）
- 図 3. 現在の台湾商務印書館（筆者撮影）
- 図 4.『婦女雑誌』第 11 巻第 11 号表紙（筆者撮影）
- 図 5.『婦女雑誌』第 9 巻第 2 号表紙（筆者撮影）
- 図 6.『倪煥之』1930 年版表紙（筆者撮影）
- 図 7.『東方雑誌』復刊号表紙①（筆者撮影）
- 図 8.『東方雑誌』復刊号表紙②（筆者撮影）

凡 例

1.引用文の漢字表記

○本論では、時代設定や先行研究の都合から「繁体字」と「簡体字」という異なる漢字表記が混在する。そのため、ここでは基本的に原史料の漢字表記を尊重し、それぞれの漢字表記のまま引用することを基本とした。

○本論中は、基本的に日本漢字表記を旨とする。その上で日本でも日本当用漢字表記制定（1946年）以前の資料名、引用資料、翻訳資料については、当時の漢字表記を尊重した。

○なお、人名や地名等の固有名詞については、基本的に当用漢字を原則とする。書名・史料名については、各分野における慣習的表記に準拠した。

2.時期区分

『婦女雑誌』の各時期を引用する際に、該当時期の編集長の名前で編集時期を示した。

3.「女性」の表記

○中国語の「女性」と「婦女」の意味には微妙な差異があるが、本研究では専門用語を除き、一般には「女性」を用いた。

○なお、「新女性」、「新婦女」、「新式女性」など用語は、本研究ではそれぞれに同義として使用した。

第一章 清末における女性雑誌の刊行

古来中国では「修身齐家治国平天下」（身を修め、家を整え、国家の政治が行われて天下の平和が実現する）という訓戒がある通り、家庭は社会の基盤として重視された。そして、伝統社会の家庭内部にある家父長制の構造は、その下にある女性の位置も規定していた。

儒教は、伝統社会における女性の在り方を具体的に示し、女性の規範としての機能を担う。例えば、『女四書』では女性の心得を説くが、「三従¹」、「四徳²」または「七去³」という規範は、統治者が女性に求めた道德、秩序を端的に表現している。中国の歴代統治者は、国家を支配する権力を守るために、「礼教」を介した女性の教育を重視していた。「礼教」は女子教育の根本的な思想であり、「三従」、「四徳」はその核心であった。

それに基づいて、中国では男尊女卑の価値観が作り出され、女性を男性に依存させ、従属的な地位に置いていたのである。それを『女四書⁴』などの修身書の存在とともに考えると、中国古代儒教の女性観は貞操と夫への順従、父母への孝を核としていることは間違いない。一方、教育面について言えば、男性は「学而優則仕」（学習して優秀であれば官吏になれる）、即ち、教育を受けて科挙試験に合格し、官僚になることが目的であるとされる一方、女性は「良妻賢母」になることが最高の目的であるとされた。

また、当時中国の一般の人々の考えでは、女性が結婚する前に習わなければならないのは家事と婦徳であった。19世紀末に入ると、中国の女性地位の変化は、まず纏足⁵の廃止と女性教育から始まった。そして、女性教育の推進に従って、女性に一般的な基礎教養と家庭教養の知識を指導するために現れた女性雑誌が中国社会で頭角を現した。

第1節 女性雑誌刊行の歴史的な背景

¹「三従」：家においては父に従い、結婚して夫に従い、老いては子に従うことである。

²「四徳」：婦徳、婦言、婦功、婦容ということである。

³「七去」：子なきは一なり、淫乱は二なり、舅姑に仕えないは三なり、饒舌は四なり、盗癖は五なり、嫉妬は六なり、悪疾は七なるということである。

⁴『女四書』は清朝1624年王普昇の編によるもので、漢代の『女誡書』のほか、唐代の『女誡語』、明代の『内訓』、明末の『女範捷録』の四つの女訓書を収録している。

⁵「纏足」の起源は不明であるが、『纏足物語』では様々なエピソードを紹介しながら、五代北宋説が最も有力としている。古代の男性が女性の足の大きさを、結婚相手を決める基準としたために、封建時代における中国女性にとって、纏足は幼い時期からしなければならない「義務」であった。

中国における最も早い女性雑誌は清末に出版された。これは多方面の要因から影響を受けた結果である。劉人峰の研究によれば、中国では唐代から、ある種の『邸報』と称された政治官報が現れたが、それは朝廷から公的な内容を国民に指示するための一つの媒介に過ぎなかった⁶。そして、清朝の『京報』の内容を見ても、皇帝からの勅旨や上奏文の抄録を許可されたのみであり、知識人が自発的に評論を发表或、記事を掲載したりすることは許されなかった。これらは近代に流通した雑誌と大きく異なっており、一般的な雑誌とは言い難い⁷。

1815年8月5日、イギリスのキリスト教宣教師であるモリソン⁸ (Robert Morison) とミルン⁹ (William Milne) はマラッカで最初の中国語の雑誌である『察世俗毎月統計伝』を創刊した。それから、1840年のアヘン戦争まで、西洋人宣教師が中国国内で陸続と6種類の中国語の刊行物を発刊した¹⁰。これらの刊行物は、主に纏足と女兒を間引くことを批判し、人文主義と女性思想の洗礼を受けた西洋女性の生活概況を紹介した。

1895年、中国は日清戦争に敗北し、4月17日に下関条約¹¹を締結した。こうした政治的危機の下で、中国のブルジョワ階級の維新思潮は頂点に達し、さらに変法を通した強国という目的に達するために、維新の志士らは雑誌という新しいメディアを利用して社会と国家の改良を促進しようとした。康有為 (1858年～1927年)、梁啓超 (1873年～1929年)、嚴復 (1854年～1921年)、譚嗣同 (1865年～1898年) など先進的な男性知識人は新聞、雑誌など刊行物の社会的な作用を深く認識し、変法運動の展開を推進するための、武器として維新を目的とした雑誌と新聞を出版するようになった。

そして1895年8月17日、維新派最初の新聞として『万国公報』(のちに『中外紀聞』に改名) が北京で創刊された。そこから、維新の志士は相次いで北京、上海、広州、天津、マカオ等の大都市で雑誌と新聞を創刊し、刊行物を通して維新変法思想を宣伝し、維新運動が拡大した。

1904年前後には科挙が廃止され、代わって新式の学校が設立されたため、新式の教科書が大量に必要となった。これらの要因が、中国の民族資本が興した出版事業の発展を大き

⁶ 劉人峰、『中国婦女報刊史研究』、中国社会科学出版社、2012年、8頁。

⁷ 王飛仙、『期刊出版與社會文化變遷:五四前後的商務印書館與「學生雜誌」』、政治大學史學叢書14、国立政治大學歷史學系、2004年、5頁。

⁸ ロバート・モリソン (1782年～1834年): イギリスのロンドン伝道協会の宣教師、中国に渡った最初のプロテスタントの宣教師であり、また聖書を中国語に訳した最初の翻訳家として有名である。中国名は馬礼遜である。

⁹ ウィリアム・ミルン (1785年～1822年)、ロンドン伝道協会の宣教師。宣教師として中国に派遣されたが、迫害のために中国を離れた。その後マラッカで印刷所を設立し、モリソンと共同で旧約聖書の中国訳を完成した。また、英華学堂を設立し、そこで校長として務めた。中国名は米憐である。

¹⁰ 黃瑚、『中国新聞事业发展史』、复旦大学出版社、2001年、17頁。

¹¹ 下関条約; 日清戦争で日本が清国に戦勝したことにより、1895年4月17日に下関の春帆楼での講和会議を経て調和された条約である。

く促進した。1897 年に上海で設立された商務印書館¹²は、近代中国で最も長い歴史を持つ出版社である¹³。また、1912 年に陸費達¹⁴が上海で創業した中華書局は、商務印書館と久しくライバル関係にあった。

この近代中国の出版社の成立が、女性向け雑誌の誕生が可能となる条件を作り出した。西洋文化の衝撃を受けた近代中国の社会思潮は、西洋社会から文化を受容し影響を受けたと言える。19 世紀後期以降、西洋の文化及び社会思潮が中国に押し寄せ、一部の先進的な中国知識人が国家を危険な局勢から救うために、中国の立ち遅れた技術と思想の革新を自覚するようになった。彼らは同時に、西方のプチ・ブルジョア階級の思想を受け入れて維新変法に含まれる女性解放と結合させ、初めて系統的に女性解放運動を提起した。その始まりは纏足の禁止と、女性教育の振興であったとも言える。

纏足は中国の女性に日常生活における不便をもたらしたのみならず、身体を健康を損なう場合があった。そのため、梁啓超、嚴復など維新派の思想家は特に纏足の危害を強調した。1897 年 6 月 1 日、不纏足会が上海で設立され、梁啓超¹⁵は「戒纏足會叙」という文章を発表し、次のような議論を展開した。彼が纏足は刑罰に等しく、アフリカ・インドの「石で首を押さえつける」やヨーロッパのコルセットと並ぶ「三刑」の一つであると考えていた。アフリカ・インド、ヨーロッパでは既にこれらの悪習が除かれようとしており、中国の纏足も禁止されるべきと強調した¹⁶。

梁啓超の議論は決して独自の見解ではなく、纏足を刑罰に準える点、纏足を禁止して女性教育を振興すべきという点などは、1880 年に鄭觀應¹⁷が『易言』において「論裹足」という文章の中で主張したものと一致する¹⁸。梁啓超の「戒纏足會叙」の言論は独創的なものというよりは、当時の中国男性知識人の共通的な認識であったとも言える。彼らの間では、身体解放は女性の人格独立の開始となり、不纏足運動は中国女性解放の第一歩であると

¹²「商務印書館は、1902 年から 1950 年までのおよそ 50 年間に、合わせて 15116 点の書籍を出版した」、方厚栓著、前野昭吉訳、『中国出版史話』、2002 年、新曜社、391 頁。

¹³同注 12、方厚栓著、前野昭吉訳、254 頁。

¹⁴陸費達（1886 年～1941 年）：出身は浙江省桐郷である。字は伯鴻である。1905 年から『楚報』の編集長となった。1908 年に商務印書館に入社したが、1912 年 1 月 1 日、商務印書館を離れて中華書局を創業した。『教育文存』、『青年修養雜談』、『婦女問題雜談』などの著作を残した。

¹⁵梁啓超（1873 年～1929 年）は中国の著名な思想家、文学者、ジャーナリストで、広東省新会県の出身である。日清戦争敗北後、梁啓超は師の康有為（1858 年～1927 年）と共に変法維新を主張し、1896 年に『時務報』を主宰し、戊戌変法を推進したが、その 2 年後光緒帝の失脚により日本に亡命した。日本で梁啓超は、『清議報』（1898 年）、『新民叢報』（1902 年）、『新小説』（1902 年）等の雑誌を創刊し、政治・文学・経済・教育等方面的近代思想を中国に紹介した。

¹⁶梁啓超著、章斗航編『飲冰室文集類編』下冊、華正書局、1974 年、617 頁。

¹⁷鄭觀應（1842 年～1922 年）：出身地は広東省香山（現在は中山市）である。原名は官応、字は正翔である。清末から民国期初めにかけての中国の思想家、実業家である。中華民国が成立した後、袁世凱の帝政に反対した。『救時揭要』、『易言』、『盛世危言』などの著作を残した。

¹⁸鄭觀應著、夏東元編『鄭觀應集』上冊、上海人民出版社、1982 年、163 頁。

いう考え方が徐々に形成されるようになった。しかし、足の解放は単に女性を国家に有用な人材にする最初の段階にすぎず、女性を真に国家の人材とするならば、女性に文化知識を習得させることが必要であるという男性知識人の声もますます高くなった¹⁹。

20 世紀に入り近代学校設立の動きが本格化していく中で、当時の清朝政府の指導者は保守的であり、女性教育の必要性を殆ど認識できなかった。実際に、女性教育が制度上の地位を認められるのは 1907 年のことである。従って、それまで新しい教育を求める女性らは外国へ留学するという選択肢しか持たなかったのである。

第 2 節 女性雑誌をめぐる社会的な背景

2.1 清朝政府の女性教育理念

日本では 1872 年に学校教育制度が作られ、学齢期の男女に就学が認められ、1900 年には女兒の就学率が 71.7% に到達した。また、1899 年 2 月、勅令として「高等女学校令」が公布され、女性中等教育もかなり普及した²⁰。一方、清末の学校教育制度は 1904 年に開始されたが、当初、女性教育については保母養成及び家庭教育以外を認めなかった。1907 年 3 月 8 日、清朝政府は「女子師範学堂章程」、「女子小学校章程」を公布し、女学校建設を正式に認めることになった。ここに至って、政府は遂に女性教育を近代学校システムに加えようとしたのである。

また、清朝政府は「近年、北京内外に官商市民の創立した女学堂が多く²¹」という理由で、学則を規定する必要があると主張した。さらに、女性が政治集会や演説に参加することは、「放縦自由の僻説²²」として嚴重に取り締まり、女性教育では父母及び夫への服従を主とすべきという方針が明確にされた²³。

「女子師範学堂章程」の中で、女学校は修身、教育学、国文、歴史、地理、算術、格致、図画、家事、裁縫、手芸、音楽、体操の 13 科目を設けることが規定された²⁴。女子学生を

¹⁹纏足と教育の関係、身体への影響は 1892 年刊行された『六字課齊卑議』變通篇の「女學章」における宋恕の議論にも見られる。

²⁰李卓「学と不学の違い：近代中日女子教育の比較」、『日本研究:国際日本文化研究センター紀要』(24)、2002 年、154 頁。

²¹璩鑫圭・唐良炎編、『中国近代教育史資料匯編・學制演變』、上海教育出版社、1991 年、575 頁。

²²同注 21、璩・唐、575 頁。

²³原文「至於女子之對父母、夫婿、總以服從爲主」、同注 21、璩・唐、576 頁。

²⁴同注 21、璩・唐、576 頁。

教育するには、特に「修身」という科目が重視され、「貞静、順良、慈淑、端儉などの美德を高め、中国従来の礼教に背かないことを期する²⁵⁾」と清朝政府が明言した。そして、「家計の管理や子供の教育が担当できる」よう、日常生活に役立つ知識の習得も女性学生に要請したのである。

以上のように、清朝政府が女学校を審査し、それに関する公的な政策を公布したことは、近代中国の女性教育の発展に多大な影響を及ぼすこととなった。「女子師範学堂章程」、「女子小学校章程」が公布される1年前である1906年の女学堂数は245校、学生の人数は6791人であったが、1907年になると402校、14658人、さらに1908年の512校、20557人へと増加した（表2参照）。

表2 1905年～1908年 女学堂数及び在学中の女学生数

年代	女学堂数	女学生数
1905	71	1761
1906	245	6791
1907	402	14658
1908	512	20557

出典: 罗素文、『女性与近代中国社会』、上海人民出版社、1996年、137頁より筆者作成

民国初期に入ると、清末女性教育を基盤にした中等教育が始まった。表3に示したように、女性学生数は、男性より増加の度合いは劣るものの、一貫して増加する傾向が見られる。このように、清末における女性教育の急速な発展や、民国に入ってから女性教育の安定は、女性雑誌の読者層が拡大したことを意味する。しかし、民国初期における中国女性の大部分はまだ学校や読書とはほど遠く、1918年頃になっても中国女性の就学率や識字率はいずれも僅か1%に満たないままであったと言われる²⁶⁾。

表3 1912年～1930年 全国中等教育機関男女在学者数の変遷状況

性別 年度	男	女
1912年	87899	10066
1913年	105896	11068
1914年	107625	10432

²⁵⁾原文「時勉以貞静、順良、慈淑、端儉諸美德、總期不背中國向來之禮教」、同注21、璩・唐、576頁。

²⁶⁾周石華・朱文叔、「今後婦女教育的改造」、『婦女雜誌』第10巻第1號、1924年1月、34頁。

1915 年	116656	9248
1916 年	101186	7750
1922 年	170930	11824
1925 年	166944	19037
1928 年	197169	37621
1929 年	285453	55535
1930 年	424223	90386
1912 年より 1930 年までの増加数	302061	68642

出典：多賀秋五郎『近代中国教育史資料・民国編中』、日本学術振興会、1974 年、853～855 頁より筆者作成

2.2 女子学校の設立

日清戦争の敗北は維新派の男性知識人に極大な衝撃を与え、「救亡圖存」（民族、国家の滅亡を救い生存を図る）を目下の急務とするべきと示された。戦争後、民族の危機が高まると同時に、一部の先進的な男性知識人らは西洋の文化教育制度を学習し始めた。そして、彼らが西洋に学習した過程の中で徐々に女性教育の重要性を理解し始めた。それによって、梁啓超などの先進的な男性知識人は欧米、日本など先進国の女性教育を高く評価し、女性教育を国家富強のために不可欠な存在であると認識した²⁷。その中で梁啓超の「上可相夫、下可教子、近可宜家、遠可善種²⁸」（上は夫を支え、下は子供を教えるべく、近くは家を宜しくし、遠くは種を善くすべし）という言葉は、女性教育の目的として、教育を通して中国女性に道理を教え、科学的育児をできる母親を育成することを挙げ、それこそが強国の根本となると明言した。

しかし、「女子は才がないことが即ち徳」といった伝統的な儒家の女性観念が長年続き、この改善プロセスも緩慢であったため、中国の女性教育を明治維新後の日本と比較すると、一連の施策の実行は遅く、さらにその格差は拡大する一方であった²⁹。

こうした状況の中で、康有為、梁啓超、譚嗣同等先進的な男性知識人が、日本は「三代女學之盛³⁰」であったという認識に到達していた。彼らは中国の女性教育の現実を十分に知り、女性教育を提唱し、女学校を創設するように呼び掛けた。

中国に最も早く創設された女学校は 19 世紀 30 年代、アメリカ宣教師の *Elizah Bridgman*

²⁷陳延媛、『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』、2006 年、勁草書房、21 頁。

²⁸梁啓超、『倡設女學堂啓』、原文は 1898 年 1 月 10 日の『時務報』に掲載された。李華興、吳嘉勛編、『梁啓超選集』、上海人民出版社、1984 年、51 頁。

²⁹李卓によれば、日中両国の女性教育の発展における格差が拡大したのは「第一に、中国近代女子教育の出版が立ち遅れたこと」と「第二に、官弁の女学校の設立がさらに遅れたこと」及び「第三に、近代女子教育の結果が異なったこと」という三つの原因がある。同注 20、李卓、155 頁。

³⁰梁啓超、「倡設女學堂啓」（初出 1897 年 11 月 15 日、『時務報』第 45 期）、林志鈞編、『飲冰室合集・文集』、第 2 冊、中華書局、1941 年、20 頁。

によって広東で開かれた女子学塾であった³¹。その後、教会学校が広州、福州、上海、寧波など中国の沿海都市に続々と現れた³²。表4に示したのは、清末から民国初期にかけての女性教育の変遷である。

表4 清末から民国初期にかけての女性教育の変遷

	時期	教育機関	学校名	女性教育の教材	女性教育の内容	要因
清朝時期	1844 年以前	自宅	男児は私塾、女児は家庭教育が中心	『列女伝』、『女四書』等	伝統的な婦徳、婦容、貞節、才覚、品徳の教え	伝統的な儒家思想の影響
	1844 年	教会学校	寧波女塾			布教開始の影響
	1898 年 5 月 31 日	女学堂	経正女塾	『女孝経』、『女四書』、『幼学須知句解』及び西学の入門書	算学、医学、法学の中で一科目、児童教育は必修科目	辛亥革命勃発の影響
	1901 年	私立女学校	蘇州蘭陵女学校		家庭習慣の改良、普通知識の学習、児童教育資格の養成	清朝政府による「新政」の公布と実施 ³³
	1908 年	公立女子高等学校（主に女子師範学校）	北京女子師範大学等		幼児の保育方法及び家計の管理	「学部奏定女子師範学堂章程」の公布
1912 年教育部により「初等小学校は男女共学できる」と決定した						
民国	1920 年	高等学校男女共学	北京大学 南京高等師範学	男子学生と同じ教材の使用		五四運動の影響

³¹ 崔淑芬、『中国女子教育史—古代から一九四八年まで』、中国書店、2007 年、155 頁。

³² 鄭永福・呂美頤、『近代中国妇女与社会』、大象出版社、2013 年、39 頁。

³³ 1901 年、清朝政府による「新政」が公布され、その内容は「奨励工商」、「新教育制度の制定」などがある。

時 期			校等			
--------	--	--	----	--	--	--

出典：谷忠玉、『中国近代女性観の演变与女子学校教育』、安徽教育出版社、2006 年、137 頁より筆者作成。

初期の女学校の発展は非常に困難なものであったにもかかわらず、新式教育を受けた中国女性が増加し、その文化水準を引き上げるものとなった³⁴。近代中国の女性教育の中で、最も注目すべきは「良妻賢母」という日本から伝来した教育方針である。良妻賢母教育は、近代化が進展する中で、女性のあるべき姿として登場した。これは「男は仕事、女は家庭」という性別分業論を背景に、家事や育児という家庭内領域全体を女性の責任とする考え方である。

2.3 良妻賢母教育

良妻賢母教育によって、子どもの養育は女性が主体的に担うものとされ、所謂「国民の母」としての女性の育成が目指され、国家への貢献も期待された。

「良妻賢母」という言葉は、イギリスで留学し、そこで多大な影響を受けた明治日本の知識人の代表である中村正直³⁵が提唱した。彼はかつて『明六雑誌』において「善キ母」という言葉を使用しており、それは後に現れた「良妻賢母」の原型であると指摘される。

中村正直は 1832 年に下級武士の長男として江戸で生まれた。両親は中村正直が幼い時からその教育に力を注いでおり、特に息子のために苦勞する母親の姿が、正直の「善キ母」という女性像、及び彼の女性教育思想の形成に多くの影響を与えたことは言うまでもない。中村正直は 1855 年から英語を学び始め、鎖国に反対して開国を主張する文章を多数発表するなど、洋の東西を問わず、学問の実用性を求めることをその一貫した主張としていた。

1866 年 4 月、中村正直は 12 名の留学生を率いてイギリス留学に向かった。彼は留学経験を通して、軍事技術を学んだだけではなく、思想や精神の面などを学ぶ意欲を持ち、「善キ母」という女性像の在り方を広く観察したと考えられる。留学中の彼が見たイギリスの女性、特にイギリスの母親は、それまで中村正直が構想していた母親像とはやや異なる存在であったと感じられた。そして、イギリスから帰国して 6 年目の 1875 年 11 月 18 日、中村正直は東京女子高等師範学校の校長に就任した。その直前に発表した「善良ナル母ヲ作ル説」では、まず、将来国民の母親となる個々の女性らを、「善良ナル母」に育てることが急務であると論じられている。特に子どもが生まれてから幼児になるまで、その教育を担

³⁴ 古来より、儒学の「女子は才がなければ徳を持つ」という教育思想は社会に浸透している。中国最初の女学校は授業料から食事代まで全て免除であったが、実際に入学する女性は極めて少なかった。同注 32、崔、155 頁。

³⁵ 中村正直（1832 年～1891 年）は明治日本の啓蒙思想家、教育者である。昌平坂学問所に学び、イギリス留学後、明六社の設立に参加し、啓蒙思想の普及に努めた。彼が日本語で翻訳した著作は『西國立志編』、『自由之理』などである。

当する主体であることを、「絶好ノ母ヲ得レバ絶好ノ子ヲ得ベク³⁶」と論じる。「賢母」によって人材を養成することが、将来的に国家の発展に直結するのだという考えは、次にも同様に見て取れる。

國政者原于家訓、而家訓之善惡則關於其母（中略）一國之文明本于匹夫之文明、而匹夫之文明者本于其母之文明矣、爲人母之任豈不重乎³⁷。

（※筆者により日本語訳）：国政の源は家訓にあり、家訓の良し悪しはすなわちその母にかかっている（中略）一国の文明は匹夫の文明に基づくものであり、匹夫の文明はその母の文明に基づくものであれば、人の母であるという任は重くないはずがない。

中村正直は英国留学の際に、学識の高い母親から良好な家庭教育を受けたイギリスの子ども達を目にして、日本の女性は今の上では外国に対抗できないと痛感し、帰国後に女性教育の振興に努めることを誓ったという³⁸。このことから分かるように、中村正直が理想とする母親は、基本的に自力で家庭教育が行えるほどの知識や経験を持った女性である。

では、1899年に公布された「高等女子令」による、女子中等教育理念として体制化されていた「良妻賢母」は、具体的にどのような女性像を意味していたのだろうか。当時の文相大臣・菊池大麓（1855年～1917年）は、「我が国に於ては女子の職と云うものは独立して事を執るのではなく、結婚して良妻賢母となると云うことが将来大多数の仕事であるから女子教育というものは此の任に適せしむると云うことを以て目的とせねばならぬのである³⁹」と語り、高等女学校の女性教育の目的を良妻賢母の育成に規定した。1903年に出された高等女学校の「教授科目」では、家事科に育児の科目が置かれた。また、必修科目ではなかったが、家庭教育の手法を教授する科目として教育科が設置されたことから、明治日本の女性教育における「良妻賢母」という役割が重視されていたことが分かる。

「良妻賢母」という女性教育思想は、さらに学校教育や社会教育を通じて、学校を出てから職業女性にも浸透していった。また、女性雑誌などのメディアを通して、家政を管理する知識、教養を持ち、家事と育児に専念する専業主婦が理想像として流布され、大衆の理想的な女性像となった。「良妻賢母」という教育方針は、大正期の臨時教育会議、昭和期の教育審議会など、教育政策を検討する場でも受け継がれ、初等教育、社会教育、家庭教育など女性教育全体にも影響を与えた。

³⁶中村正直、「善良ナル母ヲ造ル説」、復刻版『明六雑誌』（33）、1875年3月刊行、安倍達郎編、青木製本、1976年。

³⁷中村正直、「母親ノ心得序」、『敬宇文集』第3巻、吉川弘文館、1903年4月、15頁。

³⁸小川澄江、『中村正直の教育思想』、株式会社コスモヒルズ、2004年、129～134頁。

³⁹菊池大麓、「高等女学校校長会議における演説」（1902年5月1日）、田所美治編、『菊池前文相演述九十九集』、大日本図書株式会社、1903年、72頁。

中村正直の女性教育思想において、子どもの品行の形成に対して母親の影響力がいかに大きいかは、「人ノ一生ハ幼時ノ教育ニ在ル⁴⁰⁾」という文章に書かれている。これを手掛かりにすることで、清末の梁啓超は「母親教育の根本は必ず女性教育から始まる⁴¹⁾」と述べ、女性教育の必要性を説いた。これは維新派の説く女性教育論の皮切りとなるものである。そして、維新派の指導者とされる康有為は、かつて日本が近代化に成功した要因は明治維新の展開であると分析し、積極的に西洋文化を学んで改革を試みた明治日本の成果こそが、日清戦争の勝利を導いたと認識していた。そして、その理解に基づき、日本の前例から中国での救国方法を見出し得ると考えていた。このような康有為の救国方法が、維新派の知識人らにも広く共用されていたことは言うまでもない。とりわけ梁啓超においては、西洋や日本の知識を日本語で学習し、効率よく西洋近代文明に追いつくための翻訳作業を精力的に行っていた。

梁啓超は、清末女性教育の普及と反纏足運動に力を入れ、さらに 1896 年の『時務報』では女性教育と学校設立の重要性を論じた⁴²⁾。彼の女性教育論の特徴は以下の 2 点にまとめられる。第 1 に、女性が富国強兵に貢献するという使命は、将来の優秀な国民を育成する手段とされる点である。第 2 に、その女性教育の到達すべき理想像として西洋の女性像を設定する点である。中村正直の女性教育論に説かれる「善き母」と異なって、梁啓超のいう「良妻賢母」は、国家的な観点で望ましいとされる女性像であり、かつ西欧にその原形を持つものであった。即ち、彼は「良妻賢母」の育成は将来の国民の資質に直結し、最終的には国家の存亡を決定するという国家的な観点から女性教育の重要性を強調した。

20 世紀初め、近代東アジアにおいて、儒教文化圏の日本や中国の男性知識人は、共に国家存亡の危機に立たされている状況を認識し、その現状を打破するために方策を考えていた。この流れと並行して行われた東アジアの女性を巡る議論は大きく転換し、かつて家庭の中で男性に従属する存在であった女性像は、「良妻賢母」という役割を担った知識的な女性像へと変化することが求められた。明治日本を見てみると、当時の社会に求められる理想的な女性像は、儒教式の「良妻賢母」像から、欧米式の教養のある「家庭主婦」像に変わった（表 5 参照）。

表 5. 儒教式「良妻賢母」像が欧米式「家庭主婦」像との比較

⁴⁰⁾中村正直、「人ノ一生ハ幼時ノ教育ニ在ルノ説」、『大日本教育会雑誌』第 14 号、大日本教育會假事務所、1884 年、15 頁。

⁴¹⁾原文「母教之本、必自婦學始」、梁啓超、「論學校六・變法通議三之六・女學」（初出 1897 年 3 月 11 日、『時務報』）、『時務報』、京華書局、1967 年、1527 頁。

⁴²⁾梁啓超が学校教育論を掲載したのは、「論學校・變法通議三之一・総論」第 5、6 冊、「論學校二・變法通議三之二・科挙」第 7、8 冊、「論學校四・變法三之四・師範學校」第 15 冊、「論學校五・變法通議之五・幼學」第 16～19 冊、「論學校六・變法通議三之六・女學」第 24、25 冊、「論學校七・變法通議三之七・譯書」第 27、33 冊、「論學校十三・變法通議之十三・學會」第 10 冊、「學校餘論・變法通議三之餘」第 36 冊である。第 1 冊～第 17 冊までは 1896 年に発行、第 19 冊～第 36 冊までは 1897 年に発行した。『強學報・時務報』全 5 冊、中華書局、1991 年、1～3 頁。

要点	儒教式「良妻賢母」	欧米式「家庭主婦」
基本原理	陰陽五行説	近代人権思想
男女関係	男尊女卑	男女平等（×男女同権）
母親責任程度	生育＞養育＞教育	生育＜養育＝教育
女子教育程度	低い	高い
家族制度	大家族制度	核家族制度
理想的な女性像	烈女・烈婦	科学的な知識を持つ新主婦

出典:陳延湊、『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』、勁草書房、2006年、25頁参照

一方、清末において女性教育のスローガンとして登場した「良妻賢母」は、日本と深く関わるものであるにもかかわらず、「善種強国」の方策を模索していた男性知識人は、従来は教育を受けられなかった中国女性も女性教育を受け、国家に貢献できるような知識と文化を身に付けて優良な子どもを教育しなければならないと主張した。こうして、一部の中国女性も、初めて門から出て徐々に封建的な束縛から逃げ出し、中国及び世界の情勢に触れて知識と見聞を広め始めた。

このような多くの中国の知識女性の出現は、中国出版界にも大きな影響をもたらした。特に、当時の上海は、中国の中で特に出版業が盛んであり、雑誌の種類、部数ともに最も多い地域であった⁴³。次節では、清末における女性雑誌の出版活動を考察したいと思う。

第3節 清末における女性雑誌の出版活動

3.1 清末女性雑誌の産生

1890年代、社会変革思潮の発展の下で、女性解放思潮の登場と時を共にして出現した女性向けの定期刊行物は、女性解放思潮の重要な象徴の一つであった。現在残されている資料によれば、中国最初的女性向けの刊行物は、1898年7月24日に上海で創刊された『女学報』（*Chinese Girl's Progress*）である⁴⁴。

『女学報』は梁啓超の妻である李蕙仙（1869年～1924年）と康有為の娘である康同薇

⁴³前山加奈子、「1920年代初頭における日本と中国の女性定期刊行物—呉覺農が紹介・論争した女性運動論からみる」、『駿河台大学論叢』（42）、2011年、2頁。

⁴⁴夏曉虹、『晚清女子国民常識的建构』、北京大学出版社、2016年、36頁。

(1878 年～1974 年) によって上海で創刊され、女学の提唱や、女権獲得を主張し始めた。最初は月に三期を出版し、内容は「論説」、「新聞」、「征文」、「告白」という 4 つの項目からなる。当時多くの女性読者の識字能力が低かったことを考慮し、平易で分かりやすい内容の記事を掲載した。すると記者によって「遠方近方から来た購買者が雲集し、千枚の印刷は、一瞬で売り切れた⁴⁵⁾」と述べられている通り、『女学報』は大きな反響を得ることとなった。このように『女学報』は康有為、梁啓超に代表される資産階級維新派の支持を受けたものである。同誌は西洋の文明を紹介し、民主自由の思想を伝播する一つの「武器」として、初めて女性の権利を獲得しようとする文章を掲載した。

しかし、その刊行期間は長くはなく、早くも翌年には資金不足により廃刊される⁴⁶⁾。とはいえ、『女学報』は中国歴史上最初の女性刊行物と称されるだけでなく、長い間社会の底辺に抑えつけられていた女性らがメディアにおいて発言することをしばらくの間可能にしたという意義がある。

『女学報』の影響で 20 世紀初の上海を中心に、数十種の女性向け雑誌が一斉に生み出された⁴⁷⁾。女性向け雑誌の創刊地は、全国各地に広がっており、その中で特に上海、北京、広州及び日本の東京において多数が出版された。ここから、女性向け雑誌の創刊が辛亥革命期の政治、文化的活動中心地と緊密に繋がっていることが推論できる。また、創刊の時期を見ると、その殆どは 1905 年の中国革命同盟会成立から 1911 年武昌蜂起の前後に集中し、ここから女性向け雑誌の創刊は辛亥革命を契機として興起され、辛亥革命の精神を宣伝すると言える。さらに、創刊時の編集者を見ると、大部分は新式教育を受け、留学を経験した女性知識人である。陳擷芳、秋瑾、唐群英等はその代表的な人物とされる。

前山加奈子によれば、1898 年から 1911 年に創刊された中国の女性雑誌の特徴は、先駆的女性が「家」の外へ出て、同胞に覚醒を促し、男性と同じ「人」となるために伝統的な家族制度からの「解放」を呼び掛けることであり、また辛亥革命の活動にあたっては、男性と同様に参加した女子軍を組織して戦ったという⁴⁸⁾。また、当時の女性雑誌には、女性が社会的に認識されるために、母親としての役割を強調するという言論も出てきた⁴⁹⁾。

『女学報』に掲載された読者の投稿によれば、「貴社の新聞はやはり纏足の禁止に尽力し、嫁入り道具の規則を制定した。また就学したのちに社会の中で日の目を見られる日が来る

⁴⁵⁾原文「遠近來購者雲集、期印數千張、一瞬而完」、「女学報告白」、(初出『中外日報』、1898 年 10 月 6 日)、夏曉虹、『晚清女性与近代中国』、北京大学出版社、2004 年、29 頁。

⁴⁶⁾鮑家麟・陳三井、「晚清及辛亥革命時期」、『近代中国婦女運動史』、近代中国出版社、2000 年、110～112 頁。

⁴⁷⁾侯強、「從清末婦女報刊的興辦看女性解放的思想啓蒙」、『編輯之友』第 8 期、山西出版集团、2017 年、86 頁。

⁴⁸⁾前山加奈子、「女性定期刊行物全体からみた『婦女雑誌』－近現代中国のジェンダー文化を考える一助として」、村田雄二郎編、『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』、研文出版、2005 年、368 頁。

⁴⁹⁾例えば、1904 年に創刊された『女子世界』では「国民の母」という母性役割を強調する言論があった。

ようにした。そして女子教育を興し、女権を復活させた⁵⁰⁾とある。このような女性解放の新思想は女性雑誌を通して伝えられ、読者の支持を得られたことが分かった。そして、これらの女性雑誌を編集した女性編集者らも大衆に対し啓蒙教化の役割を果たしたと考えられる。

清末の女性雑誌の内容を見てみると、殆どは女性教育を提唱したり、女権を尊重したりするという内容であった。当時の女性雑誌の発行時期はあまり長くなく（表6参照）、読者の文化程度も決して高くはなかったが、その反響からみると、女権思想も知らず知らずのうちに雑誌というメディアを通して中国人の思想に浸透したといえる。

表6 清末における主要な女性雑誌一覧表（1898年～1911年）

刊行物名称	刊行期間	創刊地	出版社	編集長	刊期	雑誌主旨	不足点
『女報』（のち『女学報』に改名）	1898年7月～1899年10月	上海		陳擷芳	月刊	女性自主独立の問題を提出し、かつ女性学校の創立に関する状況を紹介し、男女地位の自由平等を宣伝した。	
『女子學報』	1903年～？	広州					
『女子世界』	1904年1月17日～1907年6月	上海		丁初我	月刊	国家の現状に極めて不満を抱き民族の運命に深く悲しむ。女権復興のためには、まず女学の復興をしなければならなかった。また家庭教育を提唱し、体育の重要性を強調し、女性の纏足に反対した。	帝国主義の侵略本性に対する認識は曖昧であり、義和団の「妖法」で西洋の軍隊に恨みを買ったと主張した。また、女権を強調したが、あまりにも女性の作用を誇張する傾向がある。
『北京女報』	1905年8月20日～1909年1			張展雲	日報		

⁵⁰⁾原文「貴報果能力禁纏足、明訂嫁妝章程、再使女子就學後有出頭之日、則女學興、女權復」、1903年4月12日、『近代中国女権運動史料』上冊、龍文出版社、1995年、390～392頁。

	月 15 日						
『中国婦人会 小雑誌』	1907 年 3 月 14 日～ 1907 年 4 月下旬	北京	中国婦 人会	燕斌	半 月 刊		
『中国女報』	1907 年 1 月 14 日～ 1907 年 2 月	上海		秋瑾	月刊	秋瑾は、女性の解放運 動は必ず当時の反清 革命と結合すべきで あり、女性らを学校に 入学させて教育を受 けさせるだけではなく、 女権のためにも戦 わないといけないと 主張した。	民族圧迫を強調した が、封建主義の圧迫を 無視した点がある。
『中国新女界 雑誌』	1907 年 2 月 5 日～7 月 5 日	東京		燕斌	月刊	男尊女卑を批判し、男 女平等と婦女解放な ど女性思想を宣伝し た。	一部の記事は未完成 である。また、一部記 事の中心意義が不明。
『星 期 女 学 報』	1907 年 7 月 18 日～ 9 月 2 日	北京		善佑臣	週刊		
『神州女報』	1907 年 11 月～ 1908 年 2 月	上海	智群書 社	陳伯平	月刊	男女平等と婦女解放 を提唱した。秋瑾の犧 牲を記念するために 創刊される。女性参政 権の取得も支持した。	
『天足月報』				沈仲礼	月刊		
『惠 興 女 学 報』	1908 年 5 月末～	杭州	杭州惠 興女学 校		月刊		
『湖北女學日 報』	1908 年 9 月～	武漢		馮徳生	日報		
『女報』	1909 年 1 月	上海		陳以益、 謝震	月刊	女学を提唱し、迷信を 打破することを主旨 とした。	海外の経験が本当に 中国の現状に適応す るかどうかについて、 編集長らは考慮して

							いない。
『女學生』	1909 年～ 1912 年		上海城 東女学 社	楊白民			
『女界星期 録』	1910 年～	上海		尹銳志			
『婦女改良会 報』	1910 年 12 月以前	天津	婦女改 良会	英淑仲			
『留日女學會 雜誌』	1911 年 4 月	東京		唐群英		女性教育の普及を提 唱することを主旨と した。	
『婦女時報』	1911 年 6 月 11 日	上海		包天笑、 陳冷血	月刊	女性参政権の取得を 支持した。多くの記事 は各国の女性運動の 状況を翻訳し、紹介す るものである。また、 家庭教育の重要性を 強調した。	内容は難解であるた め、ごくわずかな知識 人女性にしか理解で きなかった。
『女鐸』	1911 年 8 月	上海	広学会	林貫虹	月刊		

出典：劉人鋒、『中国妇女报刊史研究』、中国社会科学出版社、2012 年、89～92 頁より筆者作成

また、同時期には、日本の東京における中国女子留学生の出版活動が重要な作用を発揮したことが看取できる。彼女らは異国でどのような活動を通して雑誌を創設し、そしてどのような先進的な思想と科学知識を中国国内の読者に伝えたのだろうか。この点については次節で考察していきたい。

3.2 清朝政府の日本留学政策と女子留学生

3.2.1 日本における女子留学生の出版活動

周知のように、清朝政府が最初留学生を海外に派遣したのは日本ではなく、アメリカ、フランス、ドイツなど欧米の先進国であった。一部の官僚は、西洋諸国の先進的な科学技術を中国に導入することによって、「洋務運動⁵¹」を展開した。1862 年北京に京師同文館が

⁵¹洋務運動:19 世紀の 60 年代から 90 年代にかけての間に、清朝官僚の内部に洋務を実施するという大きな運動が巻き起こった。洋務の中には対外交渉、新式陸海軍の編成、工場・鉄道・学校の開設などが含まれて

設立され、また、外国語の翻訳要員を養成するために⁵²、曾国藩など洋務派の首領の提唱によって、1872 年清朝政府は第 1 回アメリカ留学生を海外諸国に派遣することにした⁵³。そして 1872 年から 1875 年の 4 年間に、清朝政府は合計 120 人の官費留学生をアメリカへ送り出した。これらの留学生らは、帰国後清朝政府が主導した北洋艦隊の中核的存在になった者も多く、また新思想の翻訳を介して中国の近代化に貢献した人物も少なくなかった⁵⁴。

中国の「洋務運動」とほぼ同時期に、日本では「明治維新」という一連の改革運動が発生した。それと同時に、清朝政府の官僚であった張之洞⁵⁵は『勸學篇』を執筆し、その中で「遊学」の部分において日本留学を説き勧めている。この文章において、張之洞は「遊学するなら、西洋は東洋（日本:筆者注）に及ばない、一つ、道が近くて費用を節約でき、多くの留学生を派遣することができる。一つ、中国に近いので、視察しやすい。一つ、東文（日本語）は漢文に類似し通曉しやすい。一つ、西洋の書物は甚だ繁雑であるが、日本では既に不要なものが取り除かれて適宜修正されている。中国と日本は情勢、風俗が似ているので、学習しやすい。言わば半分の力で倍の成果を得ることが出来るので、これよりいいことはない⁵⁶」と優秀な青年中国知識人の日本留学を推奨した。一方、日本も中国での親日勢力を育成するために、中国の留学生の受け入れに積極的であった。

それ以降、日本に留学する知識人は年々増加し、中国では日本留学の狂熱的な風潮が沸き起こった⁵⁷。実藤恵秀の研究によれば、1905～1907 年のピーク時には約 8000 人の中国人留学生が日本に滞在した⁵⁸。

そうした留学生の中で、最初の日本留学の女学生は、浙江省鄞県（現寧波市）出身の金雅妹であったと考える。彼女が来日したのは 1870 年前後であった。金雅妹は 1864 年に生まれ、3 歳で父母を亡くし、父親の友人であるアメリカ人宣教師博士に養女として迎えられ、6 歳の時に勉学のため日本へ渡航し、18 歳の時に医学を勉学するためにアメリカに行き、

いたが、洋式大砲などの購入・製造も洋務運動実施の中心的な内容であった。浜下武志・伊東昭雄・久保田文次・杉山文彦訳、『中国近代史』「2.洋務運動と日清戦争」、三省堂、1981 年、98 頁。

⁵²同注 51、浜下他、111 頁。

⁵³同注 51、浜下他、112 頁。

⁵⁴横井和彦、高明珠、「中国清末における留学生派遣政策の展開—日本の留学生派遣政策との比較をふまえて」、『経済学論叢』64（1）、同志社大学、2012 年 7 月、105～106 頁。

⁵⁵張之洞（1837 年～1909 年）は直隸南皮（河北省）の出身で、字は孝達。16 歳で挙人、27 歳で進士に合格した。主に漢宋の儒学を学び、宋明の性理学を提唱した。1881 年から 1907 年の間、山西、広東、広西、江蘇、湖南、江西などの総督を歴任した。1901 年後、清朝政府内部に行われた「新政」において重要な役割を果たした。著作は『張文襄公全集』などがある。

⁵⁶原文「至遊學之國、西洋不如東洋、一、路近省費、可多遣。一、去華近、易考察。一、東文近于中文、易通曉。一、西學甚繁、凡西學不切要者東人已刪節而酌改之。中、東情勢風俗相近、易仿行、事半功倍、無過于此」、張之洞、『勸學篇』、上海書店出版社、2002 年、39 頁。

⁵⁷同注 31、崔、312 頁。

⁵⁸実藤恵秀、『中国留学生史談』、第一書房、1981 年、61 頁。

帰国後は中国の医学事業に大きく貢献した⁵⁹。

金雅妹の後に、秋瑾が来日し、1904 年、下田歌子が設立した実践女学校に入学した。実践女学校は、帝国婦人協会の最初の教育事業として、私立女子工芸学校と同時に創立された。創立当初の「私立実践女学校規則」第一章第一条は「本校は本邦固有の女徳を啓発し、日進の学理を応用し、勉めて現今の社会に適応すべき実学を教授し、賢母良妻を養成する所とする⁶⁰（傍点筆者）」と記載されている。即ち、実践女学校は女子学生を良妻賢母へと養成することを目的としていた。その後中国人女性学生の数が増え続け、実践女学校も清末における中国人女子留学生の教育中心校になった⁶¹。

石井洋子の研究によれば、清末における女子留学生は日本で「日本留学生共愛会」（1903 年）、「中国留日女学生会」（1906 年）、「女子復権会」（1907 年）、「留日女学会」（1911 年）という 4 つの組織を結成した⁶²。また、女子留学生が日本で出版した雑誌は、1903 年頃創刊された『女学報』、1904 年抱真女士による『女子魂』、同年 9 月秋瑾による『白話報』、1907 年 2 月燕斌、劉青霞による『中国新女界雑誌』、同年 6 月何震による『天義報』、恨海女士による『二十世紀之中国女子』、そして 1911 年 4 月に唐群英による『留日女学会雑誌』の 7 刊がある⁶³。

先行研究によれば、当時中国女子留学生が創刊した雑誌の中で、最も影響力を持っていたのは、上述の『中国新女界雑誌』である⁶⁴。1907 年 7 月、陳志群⁶⁵が「女界二大雑誌の出現」（「女界兩大雑誌出現」）という文章を『女子世界』に発表し、同年に創刊された二つの女性刊行物を紹介した。一つは 1907 年 1 月に秋瑾が上海で創刊した『中国女報』、もう一つは 2 月に燕斌が東京で創刊した『中国新女界雑誌』である⁶⁶。さらに、『神州女報』「発刊辞」の中で陳志群がこの二誌を 6 月に劉師培、何震夫婦が東京で創刊した『天義報』と比較した。彼はこの三誌を当時の中国女性新聞界における「鼎の三足⁶⁷」であるほど重要な女性刊行物と称した⁶⁸。また、『中国新女界雑誌』は近代中国女性刊行物史において非常に重要な位置付けがなされたものと言っても過言ではない。次節では、同時期に発行していた刊行物の販売数の中で第一位を占めた『中国新女界雑誌』を例にしてその出版活動を論

⁵⁹周一川、『中国人女性の日本留学史研究』、株式会社国書刊行会、2000 年、56 頁。

⁶⁰実践女子学園八十年史編纂委員会編、『実践女子学園八十年史』、実践女子学園、1981 年、74 頁。

⁶¹実践女学校が積極的に中国女子留学生を受け入れたのは、下田歌子の思想理念と深く関わりがあったと考えられる。同注 59、周、58 頁。

⁶²石井洋子、「辛亥革命期の留日女子学生」、『史論』（36）、東京女子大学学会史学研究室、1983 年、43 頁。

⁶³同注 62、石井、45 頁。

⁶⁴同注 59、周、79 頁。

⁶⁵陳志群（1889 年～1962 年）江蘇省出身、名は以益。若年期は日本に留学し、その後に次々『神州女報』、『女報』という刊行物を創刊した。

⁶⁶陳志群、「特別記事:女界二大雑誌出現」、『女子世界』第 2 巻第 6 期、1907 年 6 月、113 頁。

⁶⁷原文「鼎立而爲三」、無名氏、『神州女報』発刊辞、『神州女報』第 1 巻第 1 號、1907 年 1 月、1 頁。

⁶⁸同注 67、無名氏、1 頁。

じたい⁶⁹。

3.2.2 『中国新女界雑誌』の創刊

1900 年、八ヶ国連合軍は義和団を鎮圧し、北京を陥落させ、中国は半植民地状態に陥った。そのため中国国内では国家危機が深刻化した。そして 1905 年、孫文を中心人物とした中国同盟会が東京で設立され、革命思想を伝播するために次々と刊行物を創刊した。『中国新女界雑誌』は当時、中国同盟会によって出版された刊行物の一つである。

1907 年 2 月 5 日に『中国新女界雑誌』は「女性救国、両性の平等」を主張して東京で創刊された。同誌は中国同盟会河南支部が主催し、編集長は女子留学生の燕斌（煉石）、劉青霞であった。燕斌と劉青霞に関して現在残っている資料は多くないが、張淑婷によれば、燕斌（煉石）は河南省の出身であり、1905 年に来日し、早稲田同仁病院で医学を専攻した。『中国新女界雑誌』の第 5 期を出版した際に、39 歳であったことから、1868 年に生まれたと推測できる⁷⁰。また、燕斌は「煉石」の筆名で、多くの評論文などを『中国新女界雑誌』に掲載した。

『中国新女界雑誌』は合わせて第 6 期まで出版され、全ての記事は日本留学中の中国人女性が投稿した文章であった。第 3 期までの同誌の目次は図画、論著、演説、訳述、伝記、記載、文芸、談叢、時評、小説からなっているが、第 4 期からは、図画、論著、演説、伝記、家庭、教育界、女芸界、通俗科学、衛生顧問、文芸、小説に変わり、欧米と日本からの翻訳記事が大幅に増加している⁷¹。

「発刊詞」で述べているように、『中国新女界雑誌』は「新道德、新思想を活発にして女子を教育し、それによって国家に真の女国民を得られ、教育の範囲を日々広め、社会の魔害を日々解消して国民の精神を日々発達させる⁷²」ことを主旨として創刊された。『中国新女界雑誌』の販売に関しては、日本では主に東京を中心として販売代理店が設置された。一方、中国では上海、天津、北京、武昌、南京、煙台、蘇州などの都市をはじめ、江西省、広東省、雲南省などの各省まで販売範囲が展開した。その販売数は当時日本で発刊されて

⁶⁹張淑婷の研究によれば、『中国新女界雑誌』は元々月刊で東京に創刊したものだが、日本だけで販売したのみならず（中略）同誌は国内 19 省 68 地域でも代理販売店を設置した。第 3 期までの売り上げは既に 5 千部以上に達成した。張淑婷、『中国新女界雑誌』に見られる日本の事象、『東アジア文化交渉研究』第 11 巻、関西大学大学院東アジア文化研究科、2018 年 3 月、86 頁。

⁷⁰同注 69、張、87 頁。

⁷¹朴雪梅、「在日中国人女子留学生の理想的女性像—『中国新女界雑誌』の翻訳記事を中心に」、『日本研究』第 56 巻、2017 年、123 頁。

⁷²原文「必發揮其新道德、而活潑其新思想、斯教育一女子即國家真得一女國民由此類推教育之範圍日以廣、社會之魔害日以消、國民之精神即日以發達」、煉石、「発刊詞」、『中国新女界雑誌』第 1 期、1907 年 2 月、1～2 頁。

いた中国語雑誌の中で最も売れたという『民報』に次ぐ規模であり、1万部に達している⁷³。そのため、同誌の発行によって日本と中国の知識女性らの間に大きな反響を引き起こした。しかし、代理販売店への支払いがしばしば遅れたため、同誌は「経済的に尋常ならざる困難に陥り⁷⁴」、第4期から出版の延期が始まり、第6期の刊行後、雑誌はついに廃刊になった。

『中国新女界雑誌』の発刊辞で燕斌は、欧米諸国を見ると、女性が男性と同様な教育を受け、男性と同様に国民としての義務を果たしたため、国家は日々発展している。一方、清末では男尊女卑で女性は男性に依存していた。「中国は形では多数の女国民がいるように見えるが、それに相応しい女国民の精神を持ってないため、民がいてもいないに等しい⁷⁵」と強調した。同誌は当時の在日中国女子留学生が中国女性の国民意識の確立を積極的に呼び掛けたものである。

3.2.3 『中国新女界雑誌』から見る「女国民」

燕斌は中国女性に関して「家庭の婦人の地位から、進化して国家の婦人となり、さらに世界の婦人に進化する」と主張した。そして、清末の女性は「家庭の婦人」の位置に立つべきであり、それを「國家の婦人」という地位にまで高める必要があると説いた⁷⁶。そして、この「國家の婦人」が即ち「女国民」であるという。さらに、『中国新女界雑誌』の「発刊詞」の中で、燕斌は中国の国力の隆盛と女国民の質が正比例すると想定し、中国の富強を願い、女国民の養成を『中国新女界雑誌』の主旨と関連付けた。

本社の最も推崇するのは即ち「女子國民」の偉大なる四文字である（中略）本社の『新女界雑誌』は第一期から開始し、何號を出しても何年を続けてもどれぐらい文章を作っても、この偉大なる四文字を繰り返し説明するだけである⁷⁷。

こうした、「女国民」は『中国新女界雑誌』が清末の女性に向けた期待であったといえる。そして、女性教育について、燕斌が最も関心を持ったのは「物質的教育」と「精神的教育」

⁷³李又寧によれば、当時日本で創刊された雑誌の販売部数は、『民報』（1905年）は12000部、『中国新女界雑誌』（1907年）は10000部、『雲南』（1906年）は5000部、『復報』（1906年）は800部であったという。

⁷⁴「本雜誌國內各代派所公鑒」、『中国新女界雑誌』第4期、1907年5月、565頁。

⁷⁵原文「中國雖有多數女國民之形質而無、多數女國民之精神則有民等於無民」、煉石、「発刊詞」、『中国新女界雑誌』第1期、1907年2月、14頁。

⁷⁶煉石、「留日見聞瑣談」、『中国新女界雑誌』第2期、1907年3月、134頁。

⁷⁷原文「本社最崇拜的就是女子國民這四個大字（中略）本社新女界雜誌從第一期以後、無論出多少期、辦多少少年、做多少文字、也只是反復解說這四個大字」、煉石、「本報對於女子國民捐之演說」、『中国新女界雑誌』第1期、1907年2月、42頁。

である。「物質的教育」とは、各種の専門教育と職業技能を指す。「精神的教育」とは欧米女性教育を中心とし、「慈愛の心」、「高尚さ」など道徳を育成させることを指した。

燕斌は日本の女性教育に対して「程度が高い」、「自立できる」など中国女性と比べて優れた部分も挙げるが、「現在歐化主義が隆盛して既に四十年になるが、女性教育の範囲は日々浸透し普及する勢いであり、中國と比較すると盛んである。しかしその家庭の内側から見れば、婦人がその夫にとっては依然として服従主義を貫い」ている。「教育は普及したが実際には男性界の制約を受けているため、得られたのは物質文明のみで、女性は精神教育を受けられなかった。その故に、育成されたのは上等な良妻淑女であった⁷⁸」と、日本女性教育の発展は未だに不十分であると評価した。

在日中国女子留学生が求めた理想的な女性像は、決して女性解放の萌芽的段階にある日本女性ではなく、職業を得て自立することによって自らのアイデンティティを確立し、男性と同様に社会に出て社会に貢献できる女性、即ち女性解放の先頭に立つ一部の欧米女性であった。そのため、『中国新女界雑誌』の編集者らは、日本を經由した西欧諸国の女性教育を中国の女性に紹介した⁷⁹。その理由は、欧米女性の生き生きとした姿を雑誌によって知ること、読者が女性として自身が置かれている立場を認識することができ、彼女らに大きな刺激を与えることができたと考えられるためである。

また、『中国新女界雑誌』に掲載された欧米諸国の女性に関する翻訳記事は、西洋書籍から直接翻訳されたものではなく、日本の訳書から重訳されたものである。こうした記事を紹介した理由は、『中国新女界雑誌』の編集者らは西洋の女性解放思想を強調し、女性を男性と同じく一人の国民として国家の近代化に参加できる「女国民」に養成することを目指したためである。そして「女国民」という理念を実現するために、編集者らは欧米女性を「女国民」の模範として樹立し、中国女性の身分の再認識を促した。さらに、清朝政府の改革に従って日本の女性教育に関する数多くの教科書を翻訳した際にも、その中にある「女が内・男が外」という性役割分業思想及び、良妻賢母思想についての内容を全て削除した。このように、欧米女性に関する情報を積極的に紹介したことは、中国女性自らの見聞を広げる目的ばかりではなく、自分自身の社会における地位を認識させるためであると分かる⁸⁰。

では、女国民の育成を強調することを目指した『中国新女界雑誌』と異なり、中国の本土で出版された『女子世界』は当時の代表的な女性雑誌としてどのような理念を持っていたのか。また、日本の女性思想からどのような影響を与えられたのか。以上の点をふまえて、次節で考察を行いたい。

⁷⁸原文「今歐化主義盛行已四十年、女子教育範圍日廣浸透有普及之勢力、較中國可謂盛矣。然從其家庭的裏面觀之婦人對於其夫仍尚服從主義」、「教育雖普及究其實際因被男界限制之故所得者僅物質上的文明其精神教育則非女子所得知、故所早造就者良妻淑女其上選也」同注 77、煉石、132 頁。

⁷⁹『中国新女界雑誌』は翻訳欄以外にも、記述欄、時評欄で欧米諸国女性の政治活動を紹介している。

⁸⁰朴雪梅の研究論文「在日中国人女子留学生の理想的女性像—『中国新女界雑誌』の翻訳記事を中心に」(『日本研究』56、2017 年)に詳しい。

3.3 清末における代表的な女性雑誌の出版活動

3.3.1 『女子世界』の創刊

『女子世界』は1904年1月17日に丁初我により創刊され、1906年に廃刊するまでに全17期が出された。その一時の中断の後1907年に1期が追加され合計18期が刊行された。同誌は清末における女性刊行物の中で発行時期が最も長く、かつ影響力が最も大きい女性雑誌であったと言われている⁸¹。第1期で示された雑誌の編集部は常熟女子世界社であったが、第9期以降は上海小説林より発行されるようになった。雑誌の欄目は主に社説、言壇、伝記、訳林、説藪、小説、女学文叢等であり、のちに因花集などの欄目を増やした。第5期からは、科学、教育、衛生、実業などの欄目が追加された。また、記事の内容は文言文と白話文の双方があった。雑誌に掲載された広告から、『女子世界』の販売範囲は主に南方の上海、江蘇、浙江、江西、湖北、四川、広東などの都市をはじめ、北方の山東と北京に広がっていたことがわかる。

『女子世界』最初の編集長は丁初我（1871年～1930年）である。彼は江蘇省常熟市の出身、1897年から曾朴、徐念慈等男性知識人と常熟で中西学社を設立し、のちに丁氏小学校を創立した。同誌の編集者の多数は男性であり、柳亜子（1887年～1958年）、蔣維喬（1873年～1958年）、周作人（1885年～1967年）等著名な男性知識人が編集に参加していた。『女子世界』は前半、丁初我が編集長を務めたが、後半に陳志群が編集長を引き継いだ。

そして、第5期から雑誌に追加された科学、教育、衛生、実業等の欄目から見ると、内容は主に家事料理と家庭教育などの方面に集中しており、そこから初等教育を受けた家庭主婦も本誌の重要な読者であったことが考えられる。それらの記事を見ると、日本の女性雑誌の記事から翻訳されたものは、『女子世界』の全内容の3分の1にのぼることが分かっている⁸²。

日本の女性雑誌の記事が大量に『女子世界』に翻訳され掲載された重要な原因は、先進国の「文明」を輸入するためであると思われる。これについて『中国新女界雑誌』の編集長である煉石は「現在（中国の）女学の程度が、非常に低いことはいうまでもなく、もし有限の時間を利用し、高速の進歩を求めるのであれば、東西女界に既にある文明を輸入するほか、他人の長所を学ぶ以外の上策がない⁸³」と述べている。これも当時の中国の女性教育が日本の女性雑誌の翻訳から分離することができない理由の一つであると考えられる。

⁸¹ 夏晓虹、『晚清女性与近代中国』第2版、北京大学出版社、2014年、85頁。

⁸² 苏美盆、「浅谈日本对中国晚清女性主义的影响—以报刊『女学世界』的翻译为例」、《安徽文学》、2017年第9期、58頁。

⁸³ 原文「但是目下女學程度、不用說淺得很、若要以有限的時日、求至速的進歩、除了輸入東西女界已有的文明、以資效法、再沒有別的上策了」、煉石、「本報五大主義」、李又寧・張玉法編『近代中国女權運動史料（1842-1911）』、傳記文學社、1975年、779頁。

さらに、煉石は「現在日本女学の水準は、中国と比べると雲泥の差がある（中略）西洋の女学書報を、日本語に訳し、また記述体の文字に編集し、国内の刊行物に掲載し、もしくは単行本として出版し、各地に広く伝える。このように始終たゆまずに、欧米の文明を輸入している（中略）このように見れば、我々中国の女界を、もし振興しようとするならば、必ずこの道に沿って歩むべきであるのは、疑い得ない⁸⁴」と女性読者を鼓舞し、本格的に日本の女性雑誌の「文明」を中国に宣伝すべきであると主張した。

3.3.2 『女子世界』から見る「國民の母」

20 世紀に入り、中国で新しい知識人階層が現れると、ルソー、モンテスキューなどの西洋知識人の政治学説が伝わることで人々の国家意識はさらに明瞭になり、国家思想の形成をより一層推進させることになった。そして 1902 年には梁啓超が「新民説」を発表し、個人がより重要な団体である国家に属していることを、人々に理解させるべきであると強調した⁸⁵。「國民」という言葉は男性知識人が期待を寄せた新しい社会観念であった。

また、1903 年に金天翮⁸⁶は『女界鐘』という著作の中で初めて「國民の母」を提起した⁸⁷。『女界鐘』は中国で最も早く女性問題を取り上げた著作であり、1903 年に上海の大同印書局から出版された。『女界鐘』によると彼は「國は天地の間に立たせる者がいる。それを國民という。女性は、國民の母である⁸⁸」と語っている。須藤瑞代によれば、金天翮の「國民の母」という概念は、梁啓超の「女性が優秀な國民を育成する」という主張と一致する⁸⁹。金天翮のこの思想は、『女界鐘』が出版した翌年に刊行された『女子世界』に継承され、さらに展開することとなった⁹⁰。

『女子世界』に掲載された議論は、殆ど『女界鐘』の焼き直しであり、その主旨は「國民の母」の養成を目的としている⁹¹。『女子世界』の発刊の辞において、金天翮は金一とい

⁸⁴原文「目下日本女學程度、比中國已有天壤之別（中略）把西洋的女學書報、譯成日本文、又編成記述體的文字、登入國內報章、或刊行單本、流傳各地、如此始終不懈、一直把歐美文明、輸了進來（中略）即此看來、我們中國女界、若要振興起來、也必得順著這箇道兒、是一定的了」同注 83、煉、780 頁。

⁸⁵梁啓超著、「新民説」（初出『新民從報』、1902 年～1907 年）、李華興・吳嘉勳編、『梁啓超選集』、1984 年、上海人民出版社、218 頁。

⁸⁶金天翮（1874 年～1947 年）は江蘇省吳江縣の人、字は松岑で、筆名は天放、金城、金一、麒麟、愛自由者などである。孫文が組織した興中会の会員であり、蔡元培らとともに中国教育会の会員で吳江同里支部の発起人でもあった。著作には『女界鐘』、『皖志列伝稿』がある。

⁸⁷呂美頤、「近代中国における「女国民」概念についての歴史的考察」、『東アジアの国民国家形成とジェンダー』、青木書店、2007 年、215 頁。

⁸⁸金天翮著、陳雁編『女界鐘』、上海古籍出版社、2003 年、41 頁。

⁸⁹須藤瑞代著・姚毅訳、『中国「女権」概念的変遷—清末民初の人権和社会性別』、社会科学文献出版社、2010 年 2 月、72 頁。

⁹⁰陳燕燕、「近代中国における『女国民』の誕生」、『千葉大学人文社会科学研究』（19）、2009 年、229 頁。

⁹¹例えば第 3 期皛旦の「讀女界鍾」、第 4 期湯雪珍の「女界革命」、第 5 期の「健爾芳軀、身爲国母、誕育

う筆名で、中国女性を「文明の花」に喩え、「20世紀の女国民」と称した⁹²。そして、創刊時編集長を務めた丁初我も「女子世界頌詞」という記事において、「國民は國家の分子であり、女性は國民の公母である⁹³」と主張した。「國民の母」という概念の提起は、「国民を作り出そうとするなら、先に國民の母胎を作り出すべきである⁹⁴」という認識に基づいている。人々は「國民の母が産んだ國民がいなければ、國は國でなくなる⁹⁵」と、新時代の国民を作り出すためには、何よりも強い身体と高い資質を持つ國民の母を創る必要があると強調している⁹⁶。

ここで、中国の男性知識人が「國民の母」になるための前提条件として「強い身体」と「高い資質」を求めたということが分かる。梁啓超も、理想的な女性はず教育を受け、そして身体を鍛えれば、優良な子供を生育することができると考える。同時に母親が必ず子供の早期教育を担い、子どもの才能を開花させれば、優秀な人材が次々に現れ、結果として、女性が国家に貢献することができるという⁹⁷。

従って、清朝政府が1903年に幼児教育を目的とし、「奏定蒙養院章程及家庭教育法章程」を制定したとき、それは中国の家庭教育の見本となった。その章程の中で優秀な海外の家庭教育に関する参考書籍として紹介されたのは、下田歌子の著書『家政学』であった⁹⁸。『家政学』は下田が1893年に出版し、女性を良妻賢母に育成することを目標としている。その中の内容の殆どは女性として身に付けるべき、家庭を管理する知識及び心理的準備である。ここから、清朝政府が日本の良妻賢母制度を認可し、さらに、中国の女性教育制度に吸収しようとする姿勢を見て取ることができる⁹⁹。

『女子世界』において丁初我は、「女国民」という言葉を使用せず、「國を創らんと欲すれば、まず家を造るべし。國民を生み出そうと欲すれば、まず女子を生み出すべし¹⁰⁰」と述べた。即ち『女子世界』の編集者らは、当時の女性たちに、国民としての主な義務は、次世代の国民を育成する「國民の母」になることであると説いたのである。

このような差異が生まれた理由は、恐らく『中国新女界雑誌』の編集者全員が女性であ

佳兒、再振吾宇」という表現があった。そして、第6期に丁初我が日本の女性雑誌から翻訳した「爲母的心得」という記事があった。

⁹²金一、「女子世界發刊詞」、『女子世界』第1期、1904年、7頁。

⁹³初我、「女子世界頌詞」、『女子世界』、第1期、1904年、11頁。

⁹⁴垂特、「論鑄造國民母」、『女子世界』、第7期、1904年、9頁。

⁹⁵同注94、垂、9頁。

⁹⁶劉瑞平、「敬告二萬萬同胞姊妹」、『女子世界』、第7期、1904年、88頁。

⁹⁷梁啓超、「變法通議・論幼學」（初出『時務報』、1897年2月）、『飲冰室合集』、中華書局、1989年、46頁

⁹⁸多賀秋五郎編、「奏定蒙養院章程及家庭教育法章程」、『近代中国教育史資料 清末編』、日本學術振興會、1976年、461～467頁。

⁹⁹小林善文、『中国近代教育の普及と改革に関する研究』、汲古書院、2002年、190頁。

¹⁰⁰原文「欲造國先造家、欲生國民先生女」、丁初我、「家庭革命說」、『女子世界』第4號、1904年、10頁。

り、「國民」としての権利を享受すると同時に、義務を担う「女國民」であることを目指したためであると考えられる。一方、『女子世界』の編集者の大部分は男性であり、「女國民」の養成より、「人種の健全」と国家との関係を強調し、国家を守るために「國民の母」を育成する必要があると説いたのではないかと推測される。

孫峰茗の研究によれば、清末民初の理想的な女性像は、中国女性では花木蘭¹⁰¹、外国女性ではロラン夫人¹⁰²であった¹⁰³。

男性知識人の翻訳した欧米女傑の伝記も、このような期待を中国の女性に託していた。これらは清末女性に軟弱から頑強への人格改造を求めたものである。例えば、1904 年第 5 號の「看護婦南的舛爾」（看護婦ナイチンゲール）、1905 年第 1 號の「女文豪海麗愛德斐曲士」（女文豪ハリエット・ピーチャー・ストウ）、1905 年第 2 號の「女刺客沙魯士格兒垵」（女刺客シャーロット・コルディ）など、外国人女性らの伝記が紹介されている。しかし、『女子世界』では、花木蘭や梁紅玉¹⁰⁴など中国史に見られる女性英雄たちを数多く紹介しており、全体的にその数は外国女性の伝記よりも多かった。

同時代の日本では近代国家を建設する際に、女性を含む国民の動員を求めた。女性は、男性と同様に直接戦場へ赴くことはなくても、自らの能力の及ぶ範囲可能な限り国家に奉仕するように求められている。一方、日清、日露戦争に成功した日本と異なり、清末の中国は内憂外患な国家危機に陥っていた。ここから、『女子世界』の編集者らが日本の『女学世界』の関連ある記事を選んで中国女性に紹介することは想像に難くないであろう。

明治政府は 1903 年 8 月以来、満州・韓国問題をめぐってロシアとの交渉を続け、さらに 1904 年 2 月 4 日、政府、軍部が御前会議を開いて対露開戦を決定した¹⁰⁵。1904 年 2 月、日本の『女学世界』に「日露の事局と家庭¹⁰⁶」という記事が掲載され、日露戦争に直面した状況の中で、「戦場に臨んで花々しき働き」が女性の役割として一層強調されるようになった。

1901 年に創刊された『女学世界』は、女性向けの月刊誌であり、1925 年まで全 350 号が博文館から刊行された¹⁰⁷。初代編集長は松原岩五郎、発行人は大橋新太郎であったが、第

¹⁰¹花木蘭（412 年～502 年）は、病弱の父親に代わりに男装して従軍し、異族と戦った中国古代の女英雄である。

¹⁰²ロラン夫人（1754 年～1793 年）は、フランス革命期の革命家。パリの彫刻家の娘に生まれる。1780 年に結婚。革命勃発後には夫に協力して政治において活躍した。

¹⁰³孫峰茗、「清末日本留学女子学生から見る明治良妻賢母主義教育の影—『中国新女界雑誌』、『言葉と文化』8、名古屋大学大学院、2007 年、116 頁。

¹⁰⁴梁紅玉（1102 年～1135 年）は軍人韓世忠の妻で、夫とともに多く戦場に出て戦った中国史上最も影響力のある女將軍の一人である。

¹⁰⁵飯塚一幸、『日清・日露戦争と帝国日本』、吉川弘文館、2016 年、104 頁。

¹⁰⁶無名氏、「日露の事局と家庭」、『女學世界』第 4 卷第 2 號、1904 年 2 月、76 頁～84 頁。

¹⁰⁷木村絵里子、『『女學世界』における女性美のディスコース：1901 年～1925 年の広告分析から』、『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』19、2013 年 3 月、18 頁。

17 卷以降の編集長兼発行人は岡村千秋に変更された。『女学世界』は博文館の雑誌の売り上げの首位を占めた時期もあり、女性雑誌として商業的にも成功を収めている¹⁰⁸。

創刊號の「発刊の辞」では「遍く女子教育に経験ある諸大家の寄稿を仰ぎ、あらゆる女子に必要な事柄を網羅し、学を進め、智を開くと共に、其徳を清淑にし、其情を優美にし、家政に通曉せしめ、女子に必要な芸能を自得せしめ、以て賢母良妻たるに資せむと欲す」と述べたように、良妻賢母思想に基づく女性教育振興の主旨が記載され、当時の女性日常生活のガイドブックとなることを示している。しかし、「いずれにしても長い年月の出版のため形体の統一性に欠け、当初の啓蒙的目的も稀薄となる結果となった¹⁰⁹」と吉沢千恵子が指摘したように、25 年間に渡って刊行され続けた『女学世界』は日本女性読者の趣向や傾向の変化についていけず、遂に 1925 年 6 月號をもって廃刊せざるを得なかった。

ここから、戦時日本女性の姿を尊崇する中国の『女子世界』が日本の『女学世界』の関連がある記事を翻訳して紹介したことは、想像に難くないであろう。

「日露の事局と家庭」という記事が『女学世界』に掲載されてから僅か 1 ヶ月後、1904 年 3 月号の『女子世界』の記者はそれを翻訳して掲載した。しかし、『女学世界』と異なったのは、『女子世界』では「日俄之事局與家庭」の中の「戦争と婦人の公共心」、「海陸軍人と家庭」、「赤十字社の準備」、「米国看護婦の義挙」という 4 節の内容しか翻訳されなかった点である。

特に、「戦争と婦人の公共心」という翻訳文の中で、以下の部分は『女学世界』と比較すると、原文にない傍点が付されており、『女子世界』の翻訳者がこの部分は重要だと認識したことが推測できる。さらに、段落の最後の「これは全ての婦人が尽くすべき職務であり、ただ熱心に愛国的な者が選択するに過ぎない」（下線の部分）という表現は原文では見られなかったため、この文章は翻訳者が自ら追加したものだと考える。女性は長期にわたって男性より劣った存在とされてきたが、環境の変化即ち戦争によって女性の役割を發揮できるのである。これらの言論では、半植民地半封建社会という現状に直面した中国の男性知識人が反動勢力に抵抗するために女性の協力が必要とされ、家庭と国家のために「婦人之覚悟」（婦人の覚悟）を中国女性に要請した。

¹⁰⁸原文「或時は多くの本館發行雑誌中首位を占むるほどの大部数を發行した」、坪谷善四郎著・佐藤哲彦解説、『博文館五十年史』、ゆまに書房、2014 年、146 頁。

¹⁰⁹吉沢千恵子、『女學世界』（大正期復刻版）、小山静子監修、柏書房、2012 年、1 頁。

『女子世界』1904年3月 「戦争と婦人の公共心」	故軍隊出征所以激發士氣者賴有婦人之覺悟使兵士無顧憂所以安之慰之者亦賴有婦人之覺悟，一般婦人凡為家庭之主宰。丁此時也宜殉於公共而無及於私有此覺悟。則勿論素主節儉而畜由餘資者。必效輸財助邊之舉以供國用之萬一。則彼等貧困婦人或充看護或充治炊或佐理後軍之雜務。如為兵士縫衣造履製襪以及調製食品。無非以卹兵為務。有餘裕則訪問出征軍人之留守宅。或贈金品以慰其家人之寂寥此皆婦人當盡之職務惟在熱心愛國者有以自擇而已 ¹¹⁰ （※傍点は原文のまま、下線は筆者の追加）
『女学世界』1904年2月 「戦争と婦人の公共心」	出征軍隊をして士気を激ますも婦人の覚悟にあり、兵士をして後顧の憂ながらしむるも又婦人の覚悟にあり、一般婦人、別けて家庭の主宰者は此際宜しく公共に殉するの覚悟あらまほしけれ、而してその、覚悟といへば平素節儉を旨として余財あれば国用の万一に供ふること勿論なるが、彼のボーアの婦人が、看護婦となり、軍隊の炊事方となり、後方勤務者となりて、兵士の服を縫ひ、草靴を造り、靴下を編み、その他の食料品を調製して義捐したるが如く、専ら卹兵に務め、余裕あれば出征軍人の留守宅を見舞、金品を贈りて寂寥を慰藉するなど尤もよき方法なるべし ¹¹¹ 。

既に1902年、梁啓超が「論教育當定宗旨」を發表し、これは国家主義の精神であると明示した¹¹²。さらに、1906年に学部奏定教育の宗旨を制定した。そのうち、忠君の項目は国家の名誉に関わるという意味から国家主義教育を表していると言える¹¹³。このように、国民のすべてが軍事知識や軍人の精神を共有し、軍事力の強化に努めるように教育しようとする精神は、清末から西欧列強の中国侵略により植民地化しようとする国家を守る手段として重視された¹¹⁴。

そして、「國民の母」となった女性らは、家庭において子どもに対して単なる家庭の成員として養育することだけではなく、近代国家建設の担い手となる国民を教育できる賢良な母親となることが求められた。その考察については次節に譲りたい。

3.3.3 『女子世界』から見る日本の家庭教育の影響

1905年、志羣は『女子世界』の「家庭的德育」という記事で、家庭内の德育を如何に実施するかを提起し、子どもに良好な道德と品行を育成させるべきであると強調した。そし

¹¹⁰慕廬、「戦争と婦人之公共心」、『女子世界』1904年3月、40～41頁。

¹¹¹同注106、無名氏、76～77頁。

¹¹²梁啓超、「論教育當定宗旨」の原文は1902年の『新民叢報』に掲載された。『飲冰室合集』第2冊、中華書局、1989年、60頁。

¹¹³舒新城編、『中国近代教育史資料—上冊』、人民教育出版社、1961年、223～224頁。

¹¹⁴笹島恒輔、「軍国民教育思想・国家主義教育思想・軍事教育思想の中華民国の学校体育に及ぼした影響」、『体育研究所紀要』(8)、慶應義塾大学体育研究所、1968年、47頁。

て父母は子供の手本となり、さらに子供のために乳母もしくは子供の友人を選ぶ時にも、その品行を注意すべきだと主張した¹¹⁵。

さらに、彼は 1904 年 1 月の『女学世界』の「家庭教育の二大傾向」（図 1 参照）を翻訳して 1905 年 3 月の『女子世界』に掲載した（図 2 参照）。家庭教育を自然教育と干渉教育に分け、「自然教育」即ち「自由教育」は、強制的な就学促進に反対するという教育理念である。「干渉教育」とは子どもが教育を受けることであり、国家の側からいえば、それを義務として両親に強制することである。

図 1 の中の「干渉教育」は尋常人物を対象として行われるのに対し、「自然教育」は非凡人物を対象とするという。さらに、非凡人物の中から平清盛¹¹⁶、足利尊氏¹¹⁷、後藤象次郎¹¹⁸という三人の人物像を取り上げた。彼らは大志を抱き非凡な天賦を持つ人物であると普遍的に思われているが、干渉教育中の平重盛（小松内府重盛）¹¹⁹、楠木正成（楠正成）¹²⁰、徳川慶喜（徳川十五代將軍慶喜）¹²¹も決して尋常人物ではないと考えている。

彼らのような「尋常人物」がここで現れた意義は、当時の日本は日露戦争の時期にあったため、戦時の英雄は非凡人物として認定され、楠木正成のような忠臣もしくは平重盛のような思慮深いと称された人物は、国家に対しての貢献も大きかったが、戦争で失敗したことによって干渉教育中の尋常人物として認識されたのではないかと筆者は推測している。この点について、修身教科書の内容から「忠君愛国」イデオロギーの核心である天皇の尊厳が具体的な事例を通して強調されたことが分かった¹²²。

一方で、志羣が中国の『女子世界』に掲載した家庭教育の組織図は、日本の『女学世界』の内容であることが判断できる。「干渉教育」と「自由教育」は、もともと明治期に提起さ

¹¹⁵志羣、「家庭的徳育」、『女子世界』第 15 期、1905 年、31 頁。

¹¹⁶平清盛（1118 年～1181 年）：平安時代末期の武将。保元の乱で後白河天皇の信頼を得て、平治の乱で最終的な勝利者となった。

¹¹⁷足利尊氏（1305 年～1358 年）：鎌倉時代後期から南北朝時代の武将である。南北朝の戦乱において、足利尊氏は北朝の光厳上皇の院宣を受け、彼はそれを使用して京都に天皇を立てた。一方、南朝のほうには楠木正成（1294 年～1336 年）など有力者が次々に戦死し、楠木の息子正行（1326 年～1348 年）も四條畷で戦死した。以降、楠木正成が忠臣の代表とされた。足利尊氏は 1903 年の教科書において英雄として尊敬されたが、改訂後には、悪者にされてしまったという。山住正己、『戦争と教育 四つの戦争と三つの戦前』、岩波書店、1997 年、78～79 頁。

¹¹⁸後藤象次郎（1838 年～1897 年）：日本の幕末から明治時代の武士、政治家、実業家である。明治維新に於ける徳川慶喜の大政奉還に大きな役割を果たした。

¹¹⁹平重盛（1138 年～1179 年）：平安時代末期の武将である。父である平清盛の後継者として期待されたが、清盛と後白河法皇の対立では有効な対策を取ることができないまま、父に先立ち病没した。

¹²⁰楠木正成（1294 年～1336 年）：鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての武将。延元の乱で足利尊氏に反抗した後は、湊川の戦いで足利尊氏の軍に敗北し自害した。

¹²¹徳川慶喜（1837 年～1913 年）：幕府最後の将軍である。1867 年 10 月 3 日、後藤象次郎が将軍の慶喜に大政奉還を勧告し、10 月 12 日慶喜は二条城で老中以下に大政奉還の決意を伝えた。

¹²²文部省、『複製国定修身教科書 解説』、大空社、1990 年、80 頁。

れた家庭教育の理念であったが、平清盛・平重盛、足利尊氏・楠木正成、後藤象次郎・徳川慶喜など人物間の関係性が示されていなかった点から、恐らく志羣はその実質的な内容を十分に理解しなかったまま翻訳して『女子世界』に掲載したのではないかと筆者は推測している。さらに、その特徴を説明する際に、人物の名称を全て削除しただけではなく、中国語では殆ど用いられない「無頓着」、「自任」などの単語も削除されたり、部分的な単語を変更されたりしたという点も見られている（図1・図2参照）。

以上から、中国の知識人らは日本の文化を受容する際に、その内容をそのまま取り入れたのではなく、中国の状況に応じて選択的に翻訳したこと、そして日本にはあるが中国で馴染みの薄い言葉と文化を削除・変更し、読者によりよく理解してもらおうとしたという意図が読み取れた。しかし、外来の新文化、新知識に対して中国の読者らの認知度がどれだけあったのかについては、今後の研究を続ける必要があろう。

また、辛亥革命以降、民国初期に創刊された女性雑誌は、内容的に日本及び西洋からどのような影響を受けたのか。この問題に焦点を当て、以下の章では、上海商務印書館によって発行されていた代表的な女性雑誌である『婦女雑誌』を考察対象として、その各時期の内容を取り上げて論じたいと思う。

図1. 『女学世界』1904年1月號

向傾大二の育教庭家

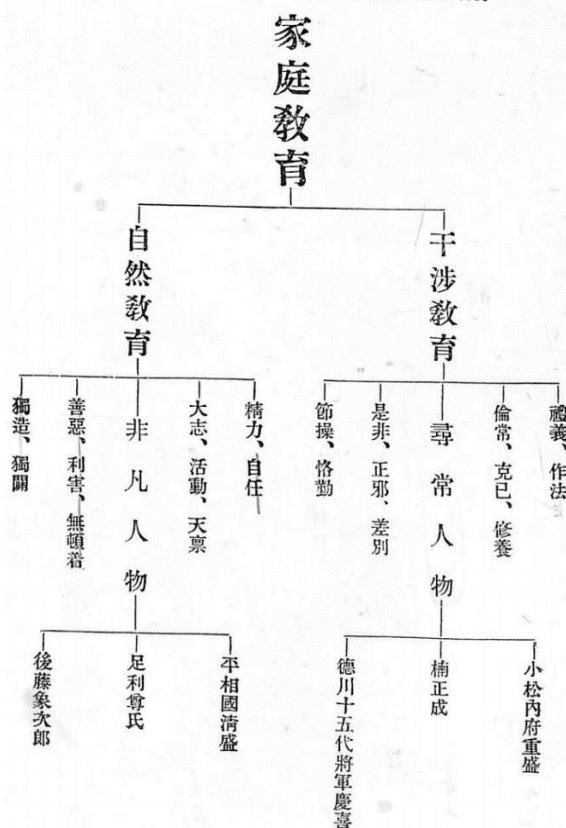
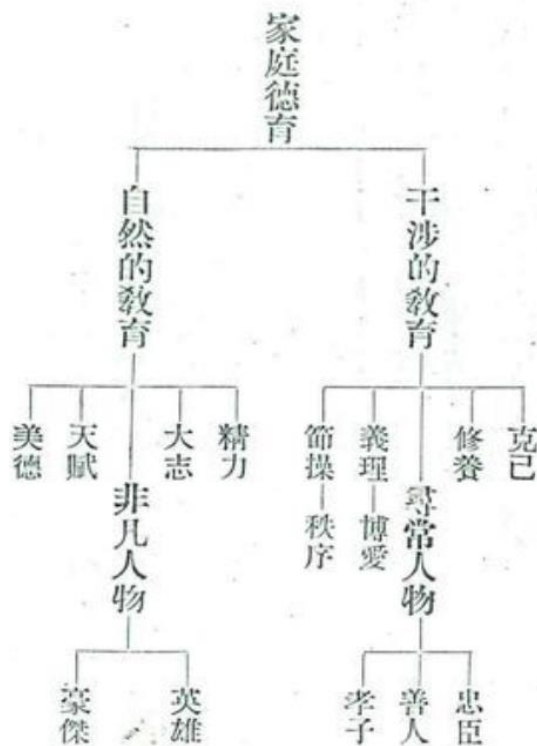


図2. 『女子世界』1905年3月號



第二章 民国初期における女性雑誌の出版活動

1911 年 10 月、清朝を倒して共和国の樹立を目指す辛亥革命が勃発した。革命の波は急速に全国に広がり、革命勢力に加わる女性が中国各地に出現し、男女平権の実現を唱える言論も現れた。そして、1912 年 1 月、孫文（1866 年～1925 年）が南京で中華民国の臨時大總統への就任宣言を行った。その約 1 ヶ月後、清朝の第 2 代内閣総理大臣だった袁世凱（1859 年～1916 年）に臨時大統領の座が譲り渡され、清朝は崩壊した。新たに生まれた中華民国は、欧米と日本の政治、経済、教育制度を多く取り入れ、形として近代国家の諸要素を備えていた。

しかし、中華民国は当初から、政治と行政の面で、中央政権と地方政権との対立、地方政権の間における対立を根強く抱えており、これをなかなか解消することができなかった。また、袁世凱は帝政の復活を目指して儒教思想教育を推進するなど、教育の反動化を強めていった。辛亥革命以降の中国では多くの女性雑誌が創刊され、国家の基盤となる近代家族を建築するために、女性の主婦としての役割をめぐる議論が盛んになった。このように、『婦女雑誌』が創刊した 1915 年前後には、中央政府と地方政府の指示による伝統的な儒教思想が中国全土を席卷していた。

第 1 節 民国初期の女性雑誌の商業化

近代中国商業の揺籃となった上海は、1897 年に大手出版社である商務印書館が創業されたことをきっかけに、多くの出版業者や印刷業者が集まり、当時中国の出版業全体の 86% を占めていた¹。辛亥革命が起き、『婦女時報』が創刊された 1911 年より 4 年後、1915 年には『婦女雑誌』、『中華婦女界』、『女子雑誌』など、数種類の女性雑誌が一気に生み出された。

1911 年 6 月に創刊された『婦女時報』は、上海の時報社によって発行された女性雑誌である。同誌は康有為、梁啓超が主導した改革運動と密接な関係を持っていた。最終號にあたる 21 號は 1917 年 4 月に発行されている。各號は 114～116 頁ほどの長さで豪華な挿絵に彩られており、表紙はアーティストの手による鮮やかなイラストで飾られた。

また、発行部数は 6000 から 7000 部ほどだったが、Joan Judge の推測によれば、実際の

¹陳明遠、『文化人与钱』、百花文艺出版社、2001 年、54 頁。

読者数は14万人以上だったのではないかと考えられる²。

『婦女時報』は狄葆賢（1872年～1921年）³によって創刊され、中国で最初の商業的な女性雑誌であった⁴。同誌は4角という値段で販売され、販売拠点は北京、上海、江蘇省など10カ所の省都にあった⁵。読者層については、多くが名門出身で教養のある女性及び女子学生であった。本誌には様々な記事があり、女性参政権、各地の女性職業、女性労働者の姿も描かれていた。そして、「読者倶楽部」、「編集者室」などの欄目を設け、衛生、美容、家政など女性の日常生活に必要な知識を幅広く当時の中国女性に提供した。

同誌が創刊された最初、上海の女性雑誌は商業モデルを構築していた。即ち民営資本を運営の基礎とし、利益の獲得を目指しており、販売利益だけでなく、商業広告からの収入も利益の一部分としていた。1912年1月1日に成立した中華民国南京臨時政府は文化の革新に取り組み、言論の自由を打ち出し、「人民は言論、著作、刊行、集會、結社の自由という権利を持つ⁶」と明示し、それによって女性雑誌は高揚期を迎えた。

1914年、民国政府は「褒揚條例」を公布し、女性の社会的な活動を取り締まり始めるようになった。そのため、1914年から1918年の間に、女性運動や女性団体の機関誌は次第に見られなくなってしまった。前山加奈子によれば、当時の女性雑誌界で生存できたのは、「女子師範学校の校友誌と中産階級の女性を対象にした商業雑誌だけ⁷」であったという。『婦女時報』はその一部の商業雑誌として生き残ったが、1914年には僅か3号しか出版できない状況であった。同誌は、政治とまったく関係ない家政知識に関する記事を掲載することで自らの安全を保証し、合法的な女性雑誌として上海の出版市場で流通し続けることができた。しかしその出版が中止、延期される事態も頻繁に発生していた。

1914年、袁世凱政府の専制制度が強化され、前後して「治安警察条條例」、「新聞條例」などの規則が公布され、政治結社など様々な活動が明確に禁止された。それと同時に、民国政府は「褒揚條例」、「教育宗旨令」などの命令により、女性は家庭に属し、良妻賢母精神を身に付けるべきと明示した。そのような背景において、『婦女時報』は民国初期において袁世凱の検閲を受けつつも発行された数少ない女性雑誌の一つである。

1915年、計6種類の女性雑誌が上海で発刊された。前述したように『婦女雑誌』、『中華婦女界』の他に『家庭』、『女子雑誌』、『家庭雑誌』、女子師範学校の校友雑誌が創刊された

²Joan Judge, “*Republican Lens: Gender, Visuality, and Experience in the Early Chinese Periodical Press*”, University of California Press, 2015, pp18.

³狄葆賢:字は楚青。出身地は江蘇省の溧陽である。科挙に合格し、戊戌政変時期に維新運動を支持した。1904年上海で『時報』を創刊し、7年間編集長を務めた。著作は『平等閣筆記』、『平等閣詩話』などがある。

⁴刘人峰、『中国妇女报刊研究』、中国社会科学出版社、2012年、146頁。

⁵ジョアン・ジャッジ著・大橋史恵訳、「民国初期の日常生活—『婦女時報』から読み解く」、『中国女性史研究』(19)、中国女性史研究会、2010年、19頁。

⁶劉志琴編、『近代中國社會文化變遷錄』第3巻、浙江人民出版社、1998年、31頁。

⁷前山加奈子、「女性定期刊行物全体からみた『婦女雑誌』」、村田雄二郎編、『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』、研文出版、2005年、372頁。

⁸。そのうち、『婦女雑誌』（1915 年～1931 年）は中国女性雑誌史上最長期にわたって最大の影響力を持った女性雑誌だと言われている⁹。

第 2 節 『婦女雑誌』の創刊と発展

2.1 『婦女雑誌』と商務印書館

『婦女雑誌』の誕生した母体となった商務印書館は、近代中国において最も規模の大きい出版社で、中国の近代史、出版史、教育史において極めて重要な位置を占めている¹⁰。1897 年、26 歳の夏瑞芳（1872 年～1914 年）が同期の仲間と共に 3750 洋元の資金を集め、株式会社の形式で商務印書館（*Commercial Press*）を創設した。

図 3. 現在の台湾商務印書館¹¹（筆者撮影）



⁸同注 7、前山、371 頁。

⁹邵雍、『中国近代婦女史』、合肥工業大学出版社、2013 年、57 頁。

¹⁰李家駒、『商務印書館與近代知識文化的傳播』、商務印書館、2005 年、28 頁。

¹¹商務印書館の本部は 1954 年に上海から北京に移転し、1948 年に商務印書館の台湾分館は独立して「台湾商務印書館」と改称した。

夏瑞芳は、字が粹芳で、江蘇省青浦に 1872 年に生まれた。父親は上海黄浦区董家渡の露店商であり、母親はアメリカ国籍の牧師で保母をしていた。1882 年夏、夏瑞芳は母親に従って上海にやってくると長老会清心堂南市小学校に入学し、卒業後は清心書院（*Lowrie Institute*）に進学した。夏瑞芳は、1889 年に同仁医院の看護師となり、翌年、イギリスの『文匯報』館で植字を学んだ。1894 年、『字林西報』館の植字工に転じ、その後『捷報』館において職工長を勤めた¹²。

1897 年 2 月 11 日、商務印書館は、夏瑞芳が 7 名の同僚と集めた出資金により上海で創業された¹³。当初、非常に窮屈な民家を借りて使用していた商務印書館は、数台の印刷機械を所有し十数名の従業員がいるにすぎなかったという。樽本照雄の研究によれば、商務印書館創業に関わった人々の殆どは姻戚関係にあったキリスト教の信者であった¹⁴。当初の仕事は主に教会のチラシの印刷であったが、後に日本人が経営していた修文書館を買取る機会があり、業務の増加に伴い従業員らの印刷技術は向上していった。

ここで、商務印書館にとって重要な人物を紹介する必要がある。1902 年、夏瑞芳の招きにより張元済が加入したことは商務印書館の最大な転機となった¹⁵。張元済（1867 年～1959 年）は浙江省海塩の人である。彼は 1892 年の進士試験に合格し、総理各国事務衙門で勤務したが、戊戌政変の際に免職となった。その後、上海に逃げた張元済は、李鴻章の推薦を得て 1899 年 4 月、南洋公学（現在の上海交通大学）の訳書院院長に就任した¹⁶。彼が訳書院で編集した数種類の教科書を商務印書館が受け取って印刷したことがきっかけとなり、夏瑞芳と親しくなった。1902 年に張元済は商務印書館に入社し、編訳所所長という職を担当した。商務印書館が資金不足という苦境に陥った際に、張元済が錢莊から 1000 洋元を借りて夏瑞芳に渡したこともあった¹⁷。

張元済の入社後、彼の人脈により大勢の知識人が商務印書館に入社するようになった。その中で、高夢旦、蔣維喬、莊俞、杜亜泉など優秀な人物が教科書編集の中心となった。当時は近代教育の発展につれ、学校が次々と開設された時期でもあった。張元済は、商務印書館の印刷工場から文化出版社への転身において最も重要な役割を果たしたと言える¹⁸。

彼は日本の教科書を手本とし、中国の国情に合わせて小学校と中学校の修身教科書を編集した¹⁹。商務印書館が出版した教科書には全ての科目が揃っており、内容も充実していたため、当時中国の学校教科書の大部分は商務印書館によるものが使用された。学校教育の

¹²樽本照雄、「第 1 章 商務印書館」、『初期商務印書館』、清末小説研究会、2000 年 9 月、11 頁。

¹³その 8 人の出資者は、沈伯芳、鮑咸昌、鮑咸恩、夏瑞芳、徐桂生、高翰卿、張蟾芳、郁厚坤である。

¹⁴樽本照雄、「1. 商務印書館の創業」、『初期商務印書館研究』、清末小説研究会、2004 年、22 頁。

¹⁵王学哲・方鵬程、『勇往直前 商務印書館百年經營史（1897～2007）』、臺灣商務印書館、2007 年、21 頁。

¹⁶汪家熔、『商務印書館与近代知識文化的伝播』、商務印書館、2005 年、42 頁。

¹⁷同注 14、樽本、61 頁。

¹⁸許敏、「民国文化」、熊月之編『上海通史』第 10 卷、上海人民出版社、1999 年、109 頁。

¹⁹方光銳、「張元済と商務印書館版『最新修身教科書』（1905 年）」、『文化記號研究』（1）、2012 年、200 頁。

普及につれて、教科書に対する需要が高まってくると、商務印書館はこの機会を捉え、教科書を大量に印刷して出版した。その結果、大きな収益が得られ、商務印書館は着実に小さな印刷工場から当時の世界三大出版社の一つへと拡大していった²⁰。

商務印書館が成立した当初、張元済は「文化與商務」という経営理念を定め、堅実な「文化救國」の道を開拓することに生涯を奉じた²¹。そして、市場と文化の需求を符合させるために、商務印書館は常に変革を行い、社会的な文化発展に適応しようとしていた²²。その発展の中で、1904年に商務印書館は民国期において最も強い影響力を持った雑誌『東方雑誌』を創刊した。『東方雑誌』は主に時事及び社会問題を中心とする総合雑誌であった。1948年に廃刊するまで、44年にわたり刊行され、中国近代史上最も「長生き」の総合雑誌となった。そして、先行研究の統計によれば、毎月の『東方雑誌』の販売量は約15000部に達したことが分かる（表7参照）²³。

表 7. 商務印書館における主要雑誌の発行時期、発行部数、歴代編集長に関する一覧表

雑誌名	発行時期	発行部数 (1ヵ月)	歴代の編集長
『東方雑誌』	1904 年～1948 年	15000	徐珂、孟森、陳仲逸、杜亞泉、錢智修、胡愈之、李聖五
『教育雑誌』	1909 年～1948 年	10000	陸費達、朱元善、李石岑、唐鉞、何炳松、黃覺民
『学生雑誌』	1914 年～1931 年	5000 ～ 7000	朱元善、楊賢江
『婦女雑誌』	1915 年～1931 年	3000 ～ 10000	王蘊章、章錫琛等
『少年雑誌』	1911 年～1931 年	不詳	孫毓修、朱元善、楊潤田、殷佩斯
『英文雑誌』	1915 年～1927 年	10000	不明
『小説月報』	1910 年～1932 年	8000	王蘊章、惲鐵樵、茅盾、鄭振鐸、葉聖陶

出典:劉曾兆『清末民初的商務印書館—以編譯所爲中心之研究』（花木蘭文化工作坊、2005年）、王飛仙『期刊、出版與社會文化變遷—五四前後的商務印書館與「學生雜誌」』（國立政治大學歷史學系、2004年）より

²⁰王建輝、『文化的商務—王雲五專題研究』、商務印書館、2000年、93頁。

²¹王鑫、『商務印書館与中国現代女性啓蒙』、商務印書館、2016年、20頁。

²²同注15、王・方、22頁。

²³楊揚、『商務印書館民間出版社業の興衰』、上海教育出版社、2000年、49頁。

筆者作成

また、中国近代以来の文学及び文化論争は、その大部分が『東方雑誌』と関連性を持っている。例えば、五四運動期に陳独秀が杜亜泉との「東西文化²⁴」を巡って起こした論争は、『新青年』と『東方雑誌』を舞台にして展開された。そのほか、民間学校の建立、外国教育及び教育状況の紹介も、『東方雑誌』の重要な内容であった。

1910年8月、商務印書館は『小説月報』を創刊した。『小説月報』は創刊当初から、常に中国国内文学発展の潮流に追随した。1917年に新文化運動が興ると、張元済は新しい文化が間もなく到来してくることを予感し、『小説月報』、『東方雑誌』などの雑誌は現行の風格を維持することができないことを痛感し、編集長の変更など改革を行った。その後、編集長の鄭振鐸²⁵と葉聖陶²⁶は『小説月報』の特色を保持し、彼らの努力により『小説月報』は民国期の新文学領域において最も影響力を持つ雑誌に成長した。

その他、商務印書館は『教育雑誌』、『自然界』、『婦女雑誌』等の雑誌を創刊した。これらの雑誌は『小説月報』と同様に潮流に従って様々な社会問題を取り上げ、雑誌の中心的内容は常に中国知識人の中で広く大きな議論を呼び起こした。実際、平均毎年500冊以上の新刊を出した商務印書館にとっては、『婦女雑誌』はその主力商品ではなかった²⁷。

しかし、商務印書館という大手出版社の下で、同誌に掲載された記事の内容は、当時の中国女性読者の需求に応じたため、売れる雑誌として商業的な成功をおさめ、17年間継続した。次節では『婦女雑誌』が女性雑誌として発刊された社会的な背景を分析したい。

2.2 『婦女雑誌』の創刊をめぐる社会的な背景

2.2.1 舞台としての近代上海

『婦女雑誌』が創刊した民国初期の上海は、当時中国で最大の港湾を持ち商工業が最も繁栄していた都市である。上海は中国で最初に外国に対して開放された都市であり、1845年にイギリスが最初の租界権を取得したことに始まり、フランス、アメリカなどの列強が相次いで上海に租界を開いた。このような特殊な政治環境の中で、上海は中国人が西洋と

²⁴東西文化問題論争は、五四運動前後に陳独秀によって起こり、杜亜泉との間で「東洋」と「西洋」の文化を巡って議論が行なわれた。1920年、杜亜泉は論争の影響を受けて編集長を辞め、教科書の編集に携わるようになった。

²⁵鄭振鐸（1898年～1958年）：中国の作家、文学研究者、作家である。中国民主促進会の発起人の一人である。1919年に沈雁冰と共に月刊誌『戲劇』を創刊するなどして、新文化運動を唱導した人物であった。

²⁶葉聖陶（1894年～1988年）：中国の作家、ジャーナリスト、教育家、政治家である。中学卒業後は小学校教師の職に就いたが、1923年には商務印書館の編集者として働いた。沈雁冰、周作人、鄭振鐸らの文学研究会の発起人の一人であった。1930年7月から『婦女雑誌』の編集長として登場したが、1931年3月に商務印書館を辞職し、『生活週刊』という新しい雑誌の出版を始めた。

²⁷陳延媛、『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』、勁草書房、2006年、132頁。

繋がる窓口となった。

上海は外国商品の輸入と中国商品の輸出を行う都市であり、中国国内の先進的な経済地域の江蘇と浙江に隣接し、全国で最も発展に有利な地理的条件を持っていた。また、上海は中国近代における最大の消費市場にもなった。例えば、1920年代に入ってから、中国全国に輸入されたタバコ・酒・化粧品は3分の1から2分の1は、上海で消費された²⁸。さらに文化面でも、1930年半ばには中国で発行された雑誌の7割以上が上海で発行された²⁹。

羅蘇文の研究によれば、1843年から1948年にかけて上海の人口は60万から450万に増加し、中国の一大都市となった³⁰。105年間に、上海は小さな町から中国の最も近代的な都市へと変容した。経済のみならず、文化、教育など各分野においても、上海は中国の他の地域との間に大きな差をつけた。西洋との交流が盛んに行われる中で、外国の先進的な文化も上海の中国文化に大きな影響を及ぼした。また、3度にわたって（日清戦争・中華民国成立・第1次世界大戦）大規模な資本投資ブームがあり、人口の急速な増加と経済発展のもとに、20世紀初期の上海は近代的商業都市へと成長した³¹。

このような特殊な環境の中で発展した上海は、他の都市よりも外国文化を積極的に取り入れ、新しい思想に対する抵抗感も少なかった。また、上海の成長期には、その経済水準はかなり高いレベルに達していたが、それを支えているのは主に外国の資本であった。民族資本による商工業は急速的に成長していたが、外国の企業と比べるとその基盤はまだ弱かったのである³²。

1910年代後半から20年代前半にかけて、近代的な百貨店、映画、新聞、雑誌、書籍などのマスメディアの発達によって都市的な社会環境が整備され、近代的な大衆消費社会が成立した。このような背景のもと、中国の近代的な印刷出版業は上海を中心にして現れた。清末から興起した印刷出版機関は、それぞれの創設者によって官営と民営という2つの系統に分かれる。官営の印刷出版機関は、各階層の政府が予算を出して作った機関であった。例えば、京師同文書印書処、江南製造局印書、各省の官書局などがある。一方、民営の印刷出版機関は、個人や私立学校などの民間組織が作ったものである。商務印書館と中華書局は何れも当時最も規模が大きく、知名度が高かった民営印刷出版機関である³³。

2.2.2 民国初期の女性教育

²⁸謝黎、『チャイナドレスをまとう女性たち—旗袍にみる中国の近・現代』、青弓社、2004年、87頁。

²⁹上海通社編、「上海雑誌講話」、『上海研究資料』、中華書局、1936年、397頁～412頁。

³⁰羅蘇文ほか、「民国経済」、熊月之編、『上海通史』第9巻、上海人民出版社、1999年、99頁。

³¹吳咏梅、「モダニティを売る—1920-30年代上海における『月份牌』と雑誌広告に見る主婦の表象」、落合恵美子・赤枝香奈子編、『アジア女性と親密性の労働』、京都大学学術会、2012年、128頁。

³²小浜正子、『近代上海の公共性と国家』、研文出版、2000年、19頁。

³³葉聖陶、「我和商務印書館」,茅以升、「我與商務印書館」。『商務印書館九十年』、商務印書館、1987年、218～219頁。

民国初期の女性教育政策の多くは、清朝の政策から引き継がれたものである。日清戦争の敗北を味わった清末の中国は、日本から積極的に「近代」を取り入れたが、女性教育も例外ではない。女性教育の方針もまた、基本的に日本の良妻賢母教育を肯定し、それを吸収する形で進化した。当初、「良妻賢母」という理念は帰国した女子留学生や日本人教習の手によって取り入れられたが、1907 年からは国家方針として系統的に導入されることになった。1911 年、辛亥革命が起こり、1912 年に中華民国が成立した。民国成立直後には革命に参加した女性らの影響から、「良妻賢母」という女性教育を進めるのではなく、「女傑」という女性を育成しようという声もあった³⁴。

そして、1912 年に「壬子癸丑學制³⁵」の成立によって、中国女子中学校の設立も認められるようになった。3 年生を例にすると、週 34 時間授業のうち、家事が 2 時間、裁縫が 2 時間とされ、さらに手芸の 1 時間を加えると、週に 5 時間が家政科の授業に使用されていたことになる³⁶。そして、男性と同様の科目を学習しながらも、女性にはさらに「裁縫」など「特質」に配慮した科目が加えられることとなったのである³⁷。

家事科は、他の科目と比較すると特に重視され、栄養学に基づく調理法、発育段階ごとに分かれた育児法など、これまでなかった科学的な知識が取り入れられた³⁸。中華民国政府も基本的にこの教育方針を引き継いだ。しかし、政府が力を入れたにもかかわらず、家事科に対する女子学生の関心は低かったと先行研究で指摘されている³⁹。清末から民国初期にかけて女子学生の比率は全体の 1 %にすぎなかった。そして、女子学生の家長の身分は、主に高級官僚もしくは公務員など中流・上流階層であった。

このような女性学生の家庭は、ほぼ例外なく使用人を雇っていた。家事科で教授された内容の多くは、これまで使用人の仕事であった。そして、家事科が重視されなかったもう一つの理由は、教学上の問題である。当時の女性学校では実習施設はなく、教科書だけを使用して講義しており、これはいわば実際の生活に役立たないものであった⁴⁰。このように、民国初期の家政科教育は日常的な生活に運用されるよりも、むしろ女性に対して家庭内の

³⁴杉本史子、「民国初期における女子家事科教育—その『近代』性と限界について」、『立命館大学言語文化研究』13 (4)、立命館大学国際言語文化研究所、2002 年 2 月、4 頁。

³⁵1912 年 1 月 19 日に蔡元培によって「普通教育暫行辦法」と「暫行課程標準」を公布した。そして、同年 9 月以降次々と教育宗旨や学校系統令が公布され、小学令・中学校令・師範学校令・専門学校令・大学令をまとめた「壬子癸丑學制」が公布されたのである。董秋艷、「中国近代学制の歴史的変容:民国初期における教育制度「壬子癸丑學制」制定に注目して」、『教育基礎学研究』(12)、九州大学大学院人間環境学府教育哲学・教育社会史研究室、2014 年、17 頁。

³⁶塚鑫圭・唐良炎、『中国近代教育史資料匯編』、上海教育出版社、1991 年、671 頁。

³⁷同注 35、董、29 頁。

³⁸杉本史子、「中国近代における家事科教育—その導入と抵抗」、『ジェンダーからみた中国の家と女』、東方書店、2004 年、23 頁。

³⁹同注 38、杉本、23 頁。

⁴⁰曹敏、「東遊記略」、『北京女子高等師範文芸會季刊』第 1 期、1919 年 6 月、8 頁。

女性としての能力を養う鍛錬の場として行われていたことが分かる。

一方、一部の先進的な知識人は、女性教育改良という観点から、社会性のある女性を目指そうという呼びかけを始めた⁴¹。1915 年頃始まった五四新文化運動は、女性の解放を高らかに叫び、女性を圧迫するものとして、従来の儒教制度そのものを批判し始めた。1910 年代後半から 1920 年代にかけて繰り広げられた新文化運動の中で、男性知識人は「民主」、「自由」をスローガンにして、中国を支配していた封建制度による因習を打破する必要があると認識した。1917 年に『新青年』に掲載された高素素の「女性問題的大解決」（女性問題の大解決）という記事では、以下のように指摘された。

良妻賢母論は日本で盛んに唱えられている（中略）しかし、その教育方針は、結局多くの知識をもつ奴隷を生み出し、男性に仕えさせるだけなのである⁴²。

女性問題を解決するには、因習を打破し、それから女性の人格を確立し、家族主義の束縛から解放して、女性職業の範囲を拡大し、社会が公認する女性の位置を守らせるべきであると、全面的に女性問題を論じた。この独立した人格と自立した精神という「女」のイメージは、日本と清末の「良妻賢母」の概念を超えて女性が家庭から社会へ貢献するという新しい理想的な女性像への期待を説いた。

理想的な女性像を具体的に表現したのは、イブセンの「人形の家」であった。1918 年 6 月、胡適は『新青年』に、イブセンの劇曲である「人形の家」を「玩偶之家」と題して発表した。その中で、胡適は主人公ノラの家出を男尊女卑の苦境から逃げ出し、自由に満ちた人生を追求しようとするものと考えた。そして、封建的家制度の束縛に苦しんでいた知識女性にとって、恋愛結婚とは一人の人間として独立し、性差別から解放されるという意味を持ったのである。

しかし、1919 年の五四運動を経験しても、意識の変わらない女性学校の教職員と学生は少なくなかったという⁴³。家政科の取消と男女共学の実現に向けては、封建的な礼教から抜けきっていない一般社会の反響が強かったこともあった。こうした言論は、1910 年代後半の中国雑誌、新聞などのメディアを通して表現され、多くの女性読者や男性知識人に多大な影響を与えたと言える。当時の女性雑誌において、男性知識人の女性をめぐる言説が多く見られたが、ターゲットにした中国女性の実際の生活状況がいかなるものであったのかを把握するために、次節では女性向け刊行物の『婦女雑誌』の読者になる女性たちについて考察したい。

⁴¹胡適、「論家庭教育」、『胡適早年文存』、周資平編、遠流出版、1995 年、169 頁。

⁴²原文「良妻賢母之説盛唱於日本（中略）不過造成一多知識之順婢良僕、供男子之驅策耳」、高素素、「女性問題の大解決」、『新青年』第 3 卷第 3 號、1917 年、89 頁。

⁴³張允侯、『五四時期的社團』第 3 冊、生活・読書・新知三聯書店、1979 年、139 頁。

2.2.3 『婦女雑誌』の読者となる女性たち

清末に、西洋文化を受け入れた都市の女性に、女学生という新しい女性グループが誕生した。上海最初の女学校は、1851年に開校したアメリカ聖公会の裨文女塾であり、さらに1850年代から1920年代にかけて、清心女塾、聖マリア女中、中西女塾などの女学校が誕生した。これらの教会学校は布教を目的として、裕福な家庭の娘たちに対して西洋式の教育を実施した。近代に入っても、女学生というのは、将来の都市中産階級以上の家庭の「奥様」になる貴族女性として新しい女性の代表と見なされ、一般民衆の憧れの対象となっていた⁴⁴。

これらの女性は、上海の初期中学校を卒業した後、進学・就職・結婚のいずれかを選択した。しかし、進学と就職は困難であり、さらに父母が反対することもあったので、結婚が最も一般的な進路となった。たとえ進学や就職をしても、結婚までの過渡的なものと考える者が少なかったのである⁴⁵。

日本の『婦人世界』に掲載された「支那婦人は何を理想とするか」という記事の中で、当時の駐日支那公使夫人の章彦安は中国の女性学生の人生目標について日本語で提起した。

女学校も大分殖えましたが、何れも家庭向きの婦人を養成することを目的としていますから、女学生も皆賢母良妻を理想としてをります。今日の婦人は、家を治める子を育てるにも、広く社会のことを知り、科学知識を研くことが必要となりましたから、昔の良妻賢母より一層の骨折でせう⁴⁶。

即ち、女性が広く科学知識を得ることによって、より理想的に家庭を維持でき、子どもを育てられることを強調した。そして、学校卒業後に就職を選択できる女性の多くが小、中学校の教員となったので、女性が社会進出できる範囲は狭くなった。たとえば、スタイルと容貌の良い女性は簡単に就職できるが、「花瓶⁴⁷」（職場の花）として蔑視され、職業を続けるために未婚のままの「老处女」（オールドミス）と差別される場合があった⁴⁸。さらに、新文化運動期の1920年頃には、仕事に専念して封建勢力と対抗するために独身を貫く女性が現れた。こうした変化は当時において大量生産・流通・消費の社会的な背景に適合するように、女性教育や女性職業の発展に伴って生じたものである。

また、教育の他に、科学的な意識の普及を促進したのは、大衆向けの啓蒙的な出版物で

⁴⁴曹伯韓、「知識婦女的責任」、朱丹編、『新女性』、首都経済貿易大学出版社、2015年、164頁。

⁴⁵岩間一弘、『上海近代のホワイトカラー—揺れる新中間層の形成』、研文出版、2011年、32頁。

⁴⁶章彦安、「支那婦人は何を理想とするか」、『婦人世界』第11巻第11号、1906年、2頁。

⁴⁷仕事ができない、容貌だけ綺麗な中国の職業女性に対する蔑称である。

⁴⁸菊池敏夫、『上海職業さまざま』、日本上海史研究会、勉誠出版、2002年、78頁。

あった⁴⁹。商務印書館によって出版された多くの雑誌と新聞は、日本、欧米などで普及していた科学的知識を、中国の日常生活の中に取り入れる役割を果たしたと考えられる。このような知識は、学校や企業だけではなく、家庭にまで普及し、民国期上海の日常生活を変えていった。

例えば、中国ではもともと牛乳を飲む習慣がなかったが、発刊したばかりの『婦女雑誌』の記事では、牛乳を栄養、衛生、価格などの面から紹介し、健康な子どもを育成するため、日常生活に必要な食品として宣伝した⁵⁰。また、欧米で流行しているファッション、女性用品、インテリア用品の紹介、各種外国の化粧品、家庭日用品の広告、国内外の女性の動向などの情報の多くも女性雑誌というメディアを通して提供されている。

このほか、『婦女雑誌』では、子どもが、父母に対して親孝行することだけではなく、自分に養育と教育を与える存在として認識するという議論が多く見られる。また、規則的、衛生的な生活習慣を育成するために、科学的な育児知識も多数紹介された⁵¹。『婦女雑誌』の読者になる女性たちは、育児及び衣・食・住に関する多くの科学知識を習得するために、金銭と時間を費やし、科学的な家庭生活を構築することを図った。

1915 年から 1920 年までの『婦女雑誌』は欧米と日本から影響を受けながら良妻賢母主義を提唱する趣旨を貫いた。1916 年、アメリカから帰国した胡彬夏が『婦女雑誌』の編集長として迎えられたのは、商務印書館が彼女の宣伝効果を期待したためである。次節では『婦女雑誌』史上最初の女性編集長である胡彬夏の編集方針について考察したい。

第3節 胡彬夏・王蘊章編集期の『婦女雑誌』（1915 年～1920 年）

3.1 胡彬夏について

1899 年、日本の女教育家・下田歌子（1854 年～1936 年）は実践女子学校を創設した。実践女子学校は日本で最も早く、1901 年から中国女性留学生を募集し始めた。しかし、当時の中国女性留学生らが勉強できたのは師範科あるいは工芸科のみであった。

胡彬夏は上海大同大学の創設者である胡敦復の娘として 1888 年に江蘇省無錫市で生まれ、1902 年から 1903 年にかけて日本の実践女学校に留学した。1903 年 4 月、実践女子学校に留学中、日本で中国留学生による女性団体である「同愛会」を発起した。当時 14 歳の胡彬

⁴⁹同注 45、岩間、35 頁。

⁵⁰沈軼群、「牛乳之研究」、『婦女雑誌』第 1 巻第 10 号、1915 年、5 頁。

⁵¹例えば、『婦女雑誌』1915 年 3 月号の「家庭教育簡談」、1915 年 6 月の「簡明實用母之衛生及育児法」、1915 年 11 月の「兒童健康之保護法」などの記事があった。

夏は『江蘇』という刊行物の編集に参加した。胡彬夏は、近代中国の女性解放と雑誌メディアの先駆者と言われ、「中国新女界において稀有な人物⁵²⁾」と胡適は評価した。胡彬夏はのちに1907年から1914年まで官費留学生としてアメリカのウェルズリー大学で勉学し、帰国後の1916年1月から1916年12月までの僅か1年間『婦女雑誌』の編集長として活躍した。

日本留学中、胡彬夏は仲間と共に「共愛会」を組織して活動し、「女學の振興」、「女權の回復」を提唱した。胡彬夏が『婦女雑誌』に就任する前に、1915年12月の『婦女雑誌』は「美國惠爾斯來大學校學士無錫朱胡彬夏女士輯編婦女雜誌大改良廣告」(第1巻第12號)という記事を掲載し、胡彬夏を「我國女界明星」(わが国女性界のスター)と称した。ここから、商務印書館は胡彬夏の留学経験を非常に重視し、彼女を欧米と中国の間の仲介者として、西洋の現代的な「イメージ」を読者に伝えられると期待したことが分かる。また、他の雑誌編集に参加した経験もあり、類似職と留学の経験があった胡彬夏は当時『婦女雑誌』の編集長として最も相応しい人物であったと考えられる。

胡彬夏は新しい編集長として、毎月1篇ずつアメリカの留学見聞を社説として『婦女雑誌』に掲載した。最初の記事は「二十世紀之新女子⁵³⁾」(二十世紀の新しい女子)である。その内容は、彼女がアメリカで出会った「梅夫人」、「孟夫人」、「南夫人」という3名の女性を紹介したものであった。この女性らは専業主婦であるだけでなく、「育児の合間を縫って社会のための義務」も果たし、むしろ「新奇でかつ不思議な女性⁵⁴⁾」であると胡彬夏は評価した。特に最初に取り上げた「梅夫人」について、胡彬夏は「この夫人こそが、私の思う賢母良妻の模範である⁵⁵⁾」と称賛した。

「梅夫人」は、5歳から0歳の子供三人と弁護士の夫と暮らす上流社会の婦人である。彼女は常に家庭のすべてを衛生的で清潔に整理し、栄養のバランスを考慮して料理を用意し、さらに子供の教育にいたるまで、家事と育児のすべてを一人できちんという「有能」な主婦であった。それだけでなく、「梅夫人」は家事の合間に、女性団体に招かれて演説するほど多忙であり、「心の中に描かれていた理想的な新女性」に間違いのないことを胡彬夏は強調した。

その記事の中で、胡彬夏は女性が学問を獲得することによって自活、自立する重要性を強調した。そのため、「二十世紀の新女性はまず幅広く生活知識を学んでから専門的な知識を学習する必要がある」と述べた。そして、「アメリカの家庭」という記事では、彼女が中国の大家族において存在した種々の問題をまとめて説明し、アメリカ人の日常的家庭生活を以下のように述べた。

⁵²⁾胡適、『胡適留學日記』第1冊、商務印書館、1947年、146頁。

⁵³⁾朱胡彬夏、「二十世紀之新女子」、『婦女雑誌』第2巻第1號、1916年1月、24頁。

⁵⁴⁾同注53、朱胡彬夏、28頁。

⁵⁵⁾同注53、朱胡彬夏、25頁。

夕飯の後、8 時になると、子女は皆就寝し、階下客間の爐火があかあかと燃えている。主人とその奥様が座っている。周囲が物音一つせず静寂に包まれている中で主人が大きな椅子に座って（中略）況して温文優雅の主婦が隣に寄り添い、共に笑い合ったり、若しくは慰め合ったり（中略）宗教を論じ、哲學を論じ、詩歌を唱えて、文章を讀んで、それと同等の娯樂は何があるでしょうか⁵⁶？

この文章で、胡彬夏が描き出したのはアメリカの核家族である一家団欒の姿である。しかも、夫婦の座席の位置からは、妻は常に夫を補助する立場に立つべき存在であると彼女が強調したことが分かる。即ち、家庭は専業主婦が自らの才能を発揮する場所であり、妻の責任は、仕事を終えて家庭に戻った夫に十分な休養をさせながら愉快的気分を与えることであると考えられる。これこそが理想的な家庭の形態であった。さらにそこから理想的な社会を作り出せると彼女は考えた。

さらに、胡彬夏は「何者爲吾婦女今後五十年内之職務」（何者は吾婦女今後五十年内の職務である）という記事の中で秋瑾の名に言及し、彼女より「横行跋扈の者⁵⁷」は討論に及ばないと強調した。秋瑾は当然「女英雄」として記念すべきだと世間に認められたが、胡彬夏が言うには中国の女性も当然ながら自らの家庭を改良しており、その家庭は国家を強大させる基礎として存在していたというわけである。彼女は以下のように述べた

家庭の清潔は我々の人民を清潔に慣れさせ、家庭の汚穢は我々の人民を汚穢に慣れさせる。清潔に慣れる者の街道も清潔であり、汚穢に慣れる者の街道も汚い。だから家庭を改良すること即ち社会を整頓することであり（中略）ゆえに家庭を改良することは我々婦女今後五十年の最も重要な職務であり、しかも家庭の改良は、家庭の清潔から始まるのである⁵⁸。

胡彬夏は中国女性が自らの権利を得るより、家庭の改良から始めるべきと考えた。しかも、家庭を改良できる女性を育成するために、必ず高い知力と能力を持った女性、即ち高度教育を受けた女性が必要であるとした。そして、胡彬夏は、アメリカ各級の学校では全て「まず幅広く学び、そこから専門的な知識を学習すべき」（先博後専）という教育方針であると示した。

⁵⁶原文「晚膳后、八句鐘、子女悉就寢、樓下客廳內爐火焰焰、坐主翁夫婦二人、萬籟俱寂、主翁坐於大臂椅內（中略）況有溫文優雅之主婦侍坐在旁、或共笑樂、或相勸慰（中略）談宗教、論哲學、詠詩詞、讀文章、其相娛樂爲何如耶？」彬夏、「美國家庭」、『婦女雜誌』第2卷第2號、1916年2月、20頁。

⁵⁷原文「秋瑾何人未可許也、而其囂張狂妄甚於秋瑾者更不足稱述」、彬夏、「何者爲吾婦女今後五十年内之職務」、『婦女雜誌』第2卷第6號、1916年6月、19頁。

⁵⁸原文「家庭之清潔能使吾人習慣于清潔、家庭之汚穢能使吾人習慣于汚穢。習慣于清潔者其街道亦清潔、習慣于汚穢者其街道亦汚穢。故改良家庭即所以整頓社會（中略）故改良家庭、當爲吾婦女今後五十年内最要之職務、而改良家庭、以清潔家庭爲始」同注57、彬夏、20頁。

民国初期の中国における大部分の知識人は、女性の実業教育を重視し、家政学を身に付けさせることだけを目指した。実際に、1902年に女性教育家である呂碧城が『大公報』で「女性の道は實業を基本としたものであり、實業の學問は普通教育から開始される⁵⁹」と述べ、女性は実学を中心に学習すべきと提唱した。しかし、胡彬夏が編集した『婦女雜誌』の中では、天文、地質、森林、礦物、鉄道財政、政治、法律、教育、心理、哲学、文学に関する文章が大量に増加した⁶⁰。彼女の中で、育児したり、料理掃除したりすることは、普通の女性にとっては「粗淺」、「簡易」なことであったが、高等教育を受けた女性にとってはそこから得られるものが多いと言える。そのため、家庭のことを行う中国女性は最も高等教育を受ける必要がある⁶¹と強調した。これは当時の社会が標榜した「良妻賢母」や「三從四德」の女性教育と相違している。胡彬夏は欧米の影響を受け、中国の知識女性の才識を家庭に押し込むことに新時代の主婦像を求めた。

彼女が考えたのは、家庭の中で女性の役割を構築しようとする際に、女性の才能を発揮させることが、社会を推進して進歩させる源泉となるということであった。言い換えれば、胡彬夏が女性は家庭においても男性が社会で行う貢献と同様に自らの価値を実現できると唱え、女性は男性と異なる方法であるが、同様に社会に貢献できると強調した。

このような胡彬夏の女性教育理念はあまりにも時代に先行していた。当時の男性知識人が主張した日本の良妻賢母主義と異なり、家庭の改良によって新しい国民を育成し、家庭内の「新女性」を作り出すことを目的としていた。筆者は、これを商務印書館が彼女を辞職させた主要な原因ではないかと推測している。とはいえ、胡彬夏が提唱した現代的な生活方式及び夫婦間の相互尊重も、近代中国の中産階級女性が追求する理想的な家庭の手本となる。

胡彬夏は商務印書館を離れてから上海の教育界と婦女界で活躍した。1917年に胡彬夏は夫の朱庭祺など男性知識人と共に中華職業教育社を発起した。彼女は50名の発起人の中で唯一の女性であった。さらに、1918年に上海で児童教育研究会を成立し、生涯にわたって幼児教育専門家として中国教育界で活躍した⁶²。

胡彬夏の『婦女雜誌』における編集長の就任期間はあまりにも短いため、この時期は先行研究では殆ど重視されなかった。しかし、男性知識人が『婦女雜誌』など女性雑誌の編集長となって女性問題を討論した際には、女性の立場を殆ど考慮せず、男性の立場に立って議論するという傾向があった。当時、社会に現れた女性問題の討論は実際には男性知識人が想定したものであった。民国期の女性知識人の代表とされた胡彬夏は『婦女雜誌』に関わったこの1年間で、女性として確実に多数の女性問題を提起したと見られる。そして、編集長が再び男性の王蘊章に交代した際に、どのような変化が起きたのかについては、次

⁵⁹ 碧城、「興女學議」、『大公報』、1902年2月26日。

⁶⁰ 同注53、朱胡彬夏、34～35頁。

⁶¹ 胡彬夏、「基礎之基礎」、『婦女雜誌』第2巻第8號、1916年8月、28～30頁。

⁶² 王秀田、「沉寂于歷史深处的報界女傑—胡彬夏」、『蘭台世界』7月上、2010年7月、17頁。

節で分析したい。

3.2 初代編集長・王蘊章^{おうんしょう}について

『婦女雑誌』の最初の編集長を務めたのは王蘊章（1884～1942 年）であった⁶³。ここに王蘊章の略歴を挙げる。彼は鴛鴦蝴蝶派⁶⁴を代表する作家として、民国期の文学界に重要な位置を占めているが、『婦女雑誌』の編集を担当した以外、生涯を通じて女性問題と関連する経歴は全くなかったと言われる⁶⁵。陳延媛の研究によれば、当初、商務印書館が王蘊章に『婦女雑誌』を委託した理由は、彼が1910年から『小説月報』の編集長を務めており、既に5年の編集経験をもっていたからである⁶⁶。

王蘊章の字は蓴農、別名は西神であり、1902年の科举に合格し、南社⁶⁷の早期社員でもあった。彼は日本語と英語にも通じ、外国の作品を翻訳して雑誌に投稿することも多くあった⁶⁸。1910年、商務印書館が王蘊章を『小説月報⁶⁹』の編集長として任命した際に、彼はまだ30歳にも満たなかった。さらに5年後には、『婦女雑誌』と『小説月報』の編集長を同時に担当したことから、王蘊章が『小説月報』で見せた編集能力は商務印書館から肯定的に評価されたことが推測できる。

しかし、『婦女雑誌』は当時の商務印書館にとってただ女性向けの雑誌に過ぎなかった。そのため、最低限の雑誌の内容を整えるために、雑誌を編集した経験があるだけで王蘊章は編集主幹として選ばれた⁷⁰。発刊最初の『婦女雑誌』の編集主旨と傾向は、基本的には守

⁶³1916年の第2巻から胡彬夏が編集長を担当したが、胡は全く『婦女雑誌』の編集に介入しなかったと先行研究で指摘された。周叙琪『一九一〇～一九二〇年代都會新婦女生活風貌—以「婦女雑誌」爲分析实例』、國立臺灣大学出版委員會、1996年、40頁。

⁶⁴清朝末期から中華民国初期にかけて上海で流行した通俗文学の一派に、鴛鴦蝴蝶派と呼ばれるグループがある。ラブロマンスを多く描いたことから鴛鴦蝴蝶小説と命名された。神谷まり子、「鴛鴦蝴蝶派と上海娯楽文化（特集 上海モダン）」、『アジア遊学』、2004年、勉誠出版、99頁。

⁶⁵芮和師、「以詞章擅揚の小説名家—王西神評傳」、欒梅健編、『哀情巨子—鴛鴦派開山祖—徐枕亞』、南京出版社、1994年、64頁。

⁶⁶王蘊章は『婦女雑誌』の編集長を担当する前に、既に商務印書館が出版していた『小説月報』の編集を5年間行っていた。同注27、陳、140頁。

⁶⁷「南社」は1907年頃に出現し、1909年に蘇州で正式に設立した。発起人は陳去病、高旭、柳詒子であった。

⁶⁸胡曉真、「知識消費、教化娯樂與微物崇拜：論『小説月報』與王蘊章的雜誌編輯事業」、梅家玲編、『文化啓蒙與知識生産：跨領域的視野』、麥田出版社、2006年、128頁。

⁶⁹『小説月報』は1910年8月上海の商務印書館によって創刊された。1931年12月まで21年にわたって刊行された。先行研究では、1919年11月に出版された第11巻第1號の『小説月報』を境界線とし、それ以前は前期、その後は後期とされている。周葱秀・涂明、『中国近現代文化期刊史』、山西教育出版社、1999年、45頁。

⁷⁰謝菊曾、『十里洋場的側影』、花城出版社、1983年、38頁。

旧・保守として定義される⁷¹。王蘊章自身も沈雁冰、章錫琛など先進的な男性知識人から「典型的な舊式文人⁷²」と称された。王蘊章はかつて雑誌の改革を何回も試みたが、成功できなかったため、1920 年 11 月に『婦女雑誌』と『小説月報』の編集長を同時に辞職した。その後、『婦女雑誌』の編集長という職位を章錫琛が代わりに担当するようになった。

筆者の調査によれば、王蘊章が日本の女性雑誌から翻訳し、『婦女雑誌』に掲載した翻訳記事は合計 32 篇である⁷³（表 8 の太字の部分参照）。王蘊章は最初の編集長として、1921 年以前の編集方針にも重大な影響を与えたと考えられる。以下に王蘊章が同誌に連載した日本の『歐洲戰と交戦各國婦人』という著作の翻訳文を取り上げ、彼の女性観及び、中国女性に伝える知識の中で特に何に注目したのかについて究明したい。

表 8. 『婦女雑誌』における王蘊章の翻訳文（1915 年～1920 年）

日付	バックナンバー	タイトル	日本語原題	出典
1916 年 9 月	第 2 巻第 9 號	家庭園藝之趣味	家庭園藝の趣味	『家庭雑誌』
1916 年 10 月	第 2 巻第 10 號	神通婦人列傳	神通婦人列傳	日本文學博士福來右吉著
		妊娠中精神之感應	妊娠中精神の感應	『女子世界』
1916 年 11 月	第 2 巻第 11 號	神通婦人列傳（續）	神通婦人列傳（續）	日本文學博士福來右吉著
1917 年 1 月	第 3 巻第 1 號	新發明之婦人自活方法	新發明した婦人の自活方法	『婦人世界』
1917 年 5 月	第 3 巻第 5 號	兒童必要之宗教教育	兒童に必要な宗教教育	『女學世界』
1917 年 9 月	第 3 巻第 9 號	矯正兒童惡癖之法及其實例	兒童惡癖を矯正する方法及び其の實例	『婦女世界』
		世界各國婦人之夏季之生活	世界各國婦人の夏の生活	『婦人世界』
1917 年 12 月	第 3 巻第 12 號	提倡家庭副業說	家庭副業を提唱する說	『婦人世界』
1918 年 1 月	第 4 巻第 1 號	說検尿	検尿を説く	『婦女世界』
		婦人安眠之研究	婦人安眠の研究	日本醫學博士山田鐵蔵

⁷¹例えば、周叙琪は五四時期以前の『婦女雑誌』の風格は守旧であり、自由恋愛などの新文化に反対する立場であったと指摘している。同注 63、周、119 頁。

⁷²茅盾、『我走過的道路』上冊、生活・讀書・新知三聯書店、1981 年、135 頁。

⁷³台湾中央研究院近代史研究所の連玲々教授は、長年間にわたって中国女性史を研究している。彼女が 2018 年 12 月 12 日に台湾中央研究院の近代史研究所において行ったシンポジウムでは「中国近代女性刊行物の訳者ランキング」（中國近代婦女期刊的譯者排行榜）を発表した。その中で、周瘦鷗（51 篇）、朱宗良（43 篇）、程小青（42 篇）、王蘊章（34 篇）という順位を付けた。

		歐戰與各交戰國婦人之真相	歐洲戰と交戦各國婦人	著 日本臨時軍事調査委員會原著
1918 年 2 月	第 4 卷第 2 號	歐戰與各交戰國婦人之真相（續）	歐洲戰と交戦各國婦人（續）	日本臨時軍事調査委員會原著
1918 年 3 月	第 4 卷第 3 號	歐戰與各交戰國婦人之真相（續）	歐洲戰と交戦各國婦人（續）	日本臨時軍事調査委員會原著
1918 年 4 月	第 4 卷第 4 號	歐戰與各交戰國婦人之真相（續）	歐洲戰と交戦各國婦人（續）	日本臨時軍事調査委員會原著
1918 年 5 月	第 4 卷第 5 號	歐戰與各交戰國婦人之真相（續）	歐洲戰と交戦各國婦人（續）	日本臨時軍事調査委員會原著
1918 年 6 月	第 4 卷第 6 號	歐戰與各交戰國婦人之真相（續）	歐洲戰と交戦各國婦人（續）	日本臨時軍事調査委員會原著
1918 年 8 月	第 4 卷第 8 號	歐美女學生之夏季生活	歐米女學生の夏の生活	『女學世界』
1918 年 9 月	第 4 卷第 9 號	有益人生之新食物（一）薏苡仁	有益な人生の新食物	『婦女世界』
		歐戰與各交戰國婦人之真相（續四卷六號）	歐洲戰と交戦各國婦人（續第四卷第八號）	日本臨時軍事調査委員會原著
1918 年 11 月	第 4 卷第 11 號	痔瘻之新療法	痔瘻の新療法	『婦人世界』
		歐戰與各交戰國婦人之真相（續四卷九號）	歐洲戰と交戦各國婦人（續第四卷第九號）	日本臨時軍事調査委員會原著
1918 年 12 月	第 4 卷第 12 號	簡易生活之實驗	簡易生活の實驗	『女學世界』
		歐戰與各交戰國婦人之真相	歐洲戰と交戦各國婦人	日本臨時軍事調査委員會原著
1919 年 1 月	第 5 卷第 1 號	美國婦人戰時之節儉	アメリカ婦人戰時の節儉	『婦人世界』
1919 年 3 月	第 5 卷第 3 號	手足寒冷之養生法	手足寒冷の養生法	『婦人世界』
1919 年 5 月	第 5 卷第 5 號	廉價滋養物之選擇法	廉価な滋養物の選擇方法	『婦人世界』
1919 年 9 月	第 5 卷第 9 月	家庭副業養鯉談	家庭副業の養鯉談	『婦人世界』
1919 年 10 月	第 5 卷第 10 號	講和後世界將起若何之變化乎	講和以降の世界は何の變化を起こすか	『婦人世界』
1919 年 11 月	第 5 卷第 11 號	喜馬拉亞山游記	ヒマラヤ遊記	『婦人世界』

1920 年 11 月	第 6 卷第 11 號	難病之治療法	難病の治療方法	『女子世界』
1920 年 11 月	第 6 卷第 11 號	妊娠中易起之疾病	妊娠中罹りやすい病氣	『婦人世界』

出典:村田雄二郎、『『婦女雑誌』総目録・索引:第 1 巻第 1 號-第 17 巻第 12 號・1915～1931』より筆者作成

即ち、科学的な記事が多かったこと、そして「歐戰與各交戰國婦人之真相」がその中で唯一の連載記事であったことがわかる。

先行研究の調査によって、1921 年以前即ち王蘊章が編集していた『婦女雑誌』において、科学的な知識を紹介する記事の本数は比較的が多かった⁷⁴。編集長の王蘊章は潮州の読者である丁小石からの「期日通り購読し、未だにやめようと思わない⁷⁵」という『婦女雑誌』の科学的な知識を紹介することに肯定的な評価に対して、「科学は余りにも奥深く、精妙さを追求する必要がなく、家庭の実用に適するものだけを求め、通俗教育を縦糸とし、家政の補助を横糸⁷⁶」とすると述べ、『婦女雑誌』によって提供された家政知識は非常に簡単で日常生活に重要な役割を果たすものであると強調した。

そして、王蘊章のこの返信においては、『婦女雑誌』の実用的な科学知識を掲載する目的が表明された。これらの記事は科学性と実用性を併せたもので、『婦女雑誌』の家政を補助する主旨と一致したことが窺われる。王鑫の研究によれば、王蘊章編集期の『婦女雑誌』の最も鮮明な特徴は「微物新知⁷⁷」（細やかな物事を通して新しい科学的な知識を伝え、それを大衆の生活に根ざさせようとした啓蒙活動）である。王蘊章は微小な科学的知識を通じて中国女性を啓蒙し、正しい日常生活に導こうと考えていた。それは、主に「食物之腐敗及防除法」、「膳脂製造法」、「家庭醫病法」、「養鯉法」のような家庭生活の衣食住、教育、衛生、医療及び生計に関与する内容であった。

また、ここで 1918 年 1 月から『婦女雑誌』の「記述」欄に連載された「歐戰與各交戰國婦人之真相」という記事に注目したい⁷⁸。数多くの科学知識が紹介される記事の中で、王蘊章がこのような著作を選んで翻訳することにはどのような理由があり、それは如何なる内容であったのか。これらの問いに答えるためには、原著の『歐洲戰と交戦各國婦人』という著作の情報に注目する必要がある。

『婦女雑誌』に掲載された文章は、1917 年 5 月に日本臨時軍事調査委員会によって出版された『歐洲戰と交戦各國婦人』という著作の内容に基づいて翻訳されたものである。同年に同じく臨時軍事調査委員会によって出版された著作は、同書のほか、『歐洲交戦諸國ノ

⁷⁴陶賢都・艾焱龍、『『婦女雑誌』与中国近代の科技伝播』、『中国科技期刊研究』、第 24 巻第 6 期、2008 年、1227 頁。

⁷⁵原文「按期購讀、未嘗或輟」、丁小石、「通信問答」、『婦女雑誌』第 3 巻第 7 號、1917 年 7 月、160 頁。

⁷⁶原文「科學不必其甚深微精妙、惟求其適合於家庭之使用以通俗教育爲經以補助家庭爲緯」、「通信問答」、『婦女雑誌』同注 75、丁、161 頁。

⁷⁷王鑫、『商務印書館与中国現代女性啓蒙』、商務印書館、2016 年、52 頁。

⁷⁸『婦女雑誌』の第 4 巻第 1 號から 12 號までの 1 年間連載された（7、8 月號を除く）。

陸軍二就テ』、『歐洲戦争寫眞帖』、『歐洲と列強の青年』があった⁷⁹。

欧戦とは即ち第 1 次世界大戦である。その戦場には飛行機や戦車などの新兵器が続々と登場し、それまでの戦争と全く異なる様相を呈した。日本政府はその実態を把握するために主要な官庁に臨時調査局を設けたが、中でも陸海軍は大戦の推移に最も強い関心を持ち、1915 年秋、それぞれ臨時軍事調査委員会と臨時海軍軍事調査会を組織し、部内の各機関で行っていた調査研究を一本化した⁸⁰。黒沢文貴の研究によれば、その設置の目的は大戦について調査研究し「國軍改善ノ資ニ供スル」ことにあると定められていた⁸¹。さらに調査委員会は、資料を収集するために、ヨーロッパの新聞雑誌を購入したことが記録されている⁸²。『歐洲戦と交戦各國婦人』は、雑誌資料にあたった調査委員会が戦時の西洋女性の生き様に注目し、その資料を集めて 1 冊の著作にまとめたものである。

1914 年 7 月、第 1 次世界大戦がヨーロッパで始まると、中国にも大きな衝撃を与えた。主戦場になったヨーロッパ諸国では統治体制が揺らぎ、当時大戦に巻き込まれた中国は、国際的な一連の変化は思想や価値観にまで及び、新たな思想潮流が中国知識人の間に広がるとともに、中国が日本を見る眼差しも大きく変わっていく⁸³。

袁世凱の死後、民国政府は 1917 年 8 月に第 1 次世界大戦への加入に転じた。さらに、袁世凱のかつての部下らは、10 年以上にわたって政権の争奪戦を繰り広げ、中国の政権は一気に乱れた⁸⁴。王蘊章が 1918 年 1 月から『歐洲戦と交戦各國婦人』を中国語に翻訳し、『婦女雑誌』を通して紹介することは、戦場に生活していた交戦国女性の状況をいち早く発表し、女性が国家に対していかに貢献するかの強調であった。

同書の序言において、当時の臨時軍事調査委員長⁸⁵を務めていた菅野尚一⁸⁶は、同書が出版される理由を以下のように記している。

戦争は人生に固有し國家の生存競争上免るべからざるものなり此の原則は過去の史蹟能く之を證し未来に於ても亦決して易らざるべし現今の戦争は實に國家の全力を要求し殊に一國の男子にして兵役に堪ふるものは悉く武裝して軍役に従ふ是に於てか國內

⁷⁹ 出版社は全て川流堂である。

⁸⁰ 黒沢文貴、「臨時軍事調査委員会について」、『紀尾井史学』(2)、上智大学大学院史学専攻院生会、1982 年、26 頁。

⁸¹ 同注 80、黒沢、26 頁。

⁸² 同注 80、黒沢、28 頁。

⁸³ 久保亨、『日本で生まれた中国国歌―「義勇軍行進曲」の時代』、岩波書店、2019 年、55 頁。

⁸⁴ 田中仁他、『新図説 中国近現代史―日中新時代の見取図』、法律文化社、2012 年、74 頁。

⁸⁵ 当時の委員長は菅野尚一、村岡長太郎、佐藤安之助の順に交代し、専任は 75 名、兼任は専任経験者 7 名を含むのべ 48 名が委員に任命されている。同注 80、黒沢、26 頁。

⁸⁶ 菅野尚一(1871 年～1953 年)：(長門)山口県出身、1889 年 7 月陸軍幼年学校から卒業した後、日清・日露戦争に従軍した。1915 年 8 月に臨時軍事調査委員長に任命された。秦郁彦編、『日本陸海軍総合事典』、東京大学出版会、1991 年、85 頁。

に残留せる婦人の任務は一層重大を見るに至れり古昔「カルセージ」の羅馬と戦ふや男子は悉く出でて戦に臨み婦女は髪を斬りて弦を作れりと云ふ近代の戦争に要する資材は固より昔日の比にあらず戦争より生ずる損害亦從來に比し甚だ大なり交戦各國婦人の活動蓋し所以なきにあらざるなり⁸⁷。

第一次世界大戦時期の国際社会における変化の中から、菅野尚一が特に女性の行動に関心を持ち、外国の女性の実状を踏まえてその重要な部分を一冊の書籍にまとめ、教育上参考になる情報を日本の国民に提供しようとした姿勢がうかがえる。さらに、結言の「今や博愛、慈善を超絶して國家に対する婦人の義務となり、婦人は獨り平時に於ける良妻賢母たるに止まらず、又戦時國內活動の中心たり得ることを必要とするに至れり、加之現時戦乱の例示するが如く文明の權威も何等戦争抑止の力なく平和的永續は將來之を望み得べからずとせば吾人は常時戦時に處する準備と覺悟とを緊要とすべく⁸⁸」に示されるように、戦争に臨むに当たり女性の力が必要となり、その意気は戦時に国内活動の中心となるほど重要であったことが分かる。

王蘊章の翻訳文では、結言しか翻訳されてない。ここから、王も菅野と同じく、女性の活動を家庭内に集中するだけでなく、戦争中の他国を見習って、女性を戦争に動員することによって国家の発展に貢献できるという部分を重視し、それを中国女性に紹介するために同書を翻訳して『婦女雑誌』に掲載したと考えられる。

川流堂によって出版された『歐洲戦と交戦各國婦人』を見てみると、本文の前に、ヨーロッパ諸国の労働女性の写真が数枚掲載されている。原本に載せられた「戦場ニ於ケル英國看護婦ノ活動」、「兵器製造ニ従事スル佛國婦人」、「露國ノ女兵」といった写真からは、日本ではヨーロッパ女性の職業進出が、国家貢献への賛同を引き起こしたことが分かる。一方、『婦女雑誌』に掲載された翻訳文の最後には、日本の原本にはなかった「西班牙王后維多利亞服陸軍軍官服裝之狀」（陸軍将校の服装を着用するスペイン皇后ビクトリアの様子）写真1枚のみが掲載された。ここから、第1次世界大戦によって開始された国家に貢献するための女性の社会進出について、中国の男性知識人らはさほど重視されなかったことが分かる。

王蘊章の中国語翻訳文はほぼ逐語訳であるため、翻訳されていない部分は殆どなかった（表3参照）。しかし、原文にあるドイツ女性の要求する恤兵用品^{じゅうへいぶひん}⁸⁹に関する記述は、『婦女雑誌』の翻訳文では削除されたことが分かった⁹⁰。ここについては、ヨーロッパ女性が戦争の準備活動を支えるために家庭を顧みることができなくなった可能性があるため、戦争の準備に関する詳細を中国女性に紹介しない理由があるのではないかと筆者は推測している。

⁸⁷臨時軍事調査委員會編纂、『歐洲戦と交戦各國婦人』、川流堂、1917年5月、1頁。

⁸⁸同注87、臨時軍事調査委員會、80頁。

⁸⁹戦場の兵士に慰問するために必要な物品のことである。

⁹⁰同注87、臨時軍事調査委員會、22頁。

表9 『歐戰與各交戰國婦人之真相』と『歐洲戰と交戦各國婦人』目次の比較

中国語訳：『歐戰與各交戰國婦人之真相』	『歐洲戰と交戦各國婦人』
緒言	緒言
第一章 歐戰與各交戰國婦人界一般之情況	第一章 本戦争と交戦各國婦人界一般の情況
第一 英國	第一 英國
第二 法國	第二 佛國
第三 俄國	第三 露國
第四 德國	第四 獨國
第五 此外各國	第五 其の他の諸國
第二章 婦人直接对于軍隊及傷兵之活動	第二章 直接軍隊及傷病兵等に対する婦人の活動
第一 慰問出征軍隊及路過軍隊	第一 出征軍隊及通過軍隊の慰問
第二 看護及慰問傷兵	第二 傷病兵の看護及慰問
第三 寄贈恤兵品	第三 恤兵品の寄贈
第四 婦人在戰場附近援助軍隊	第四 戰場附近に在る婦人の軍隊援助
第五 款待休暇軍人	第五 休暇軍人の歡待
第三章 救護軍人之家族及貧民	第三章 軍人の家族及貧窮者の救護
第一 慰問軍人之家族及遺族	第一 軍人の家族及遺族の慰問
第二 介紹職業與軍人之家族及失業人	第二 軍人の家族及失業者に対する職業賦與
第三 養育及保護軍人及貧民子女	第三 軍人及貧窮者の子女の養育及保護
第四 給食	第四 給食設備
第五 其他之救護事業	第五 其の他の救護事業
第四章 捐助金錢及募集捐款	第四章 寄附金品の寄贈及募集
第五章 代任男子職業之婦人	第五章 男子の職業に代り活動せる婦人
第一 農業	第一 農業
第二 工業	第二 工業
第三 陸軍補助勤務	第三 陸軍補助勤務
第四 教員等	第四 教員其他
第六章 婦人團體之活動	第六章 婦人團體の活動
第七章 婦人直接參加戰爭	第七章 婦人の直接戦闘參與
第八章 歐戰與婦人問題	第八章 本戦役と婦人問題
結言	結言

また、ヨーロッパにおける女権拡張の声が展開するに従って、「婦人亦外に出て各種の職

業に従事する⁹¹⁾」(傍線は筆者による)と述べられたように、開戦後兵員として多数の男性の徴集が必要とされ、その故に女性職業活動の範囲が拡大する状況が生じた。王蘊章は女性の社会進出に関して、国家擁護のような従事せざるを得ない場合に備えて、職業に就くべきという意見に賛同し、ゆえに『歐洲戦と交戦各國婦人』を『婦女雑誌』に翻訳して掲載したと考えている。しかし、彼の考え方は基本的には家庭内の仕事が女性の天職であって、その天職によって家庭を守るべきであるというものであった。

王蘊章の「提唱家庭副業説」(家庭副業を提唱する説)という記事では「主婦として努力して労働して収入も増やすために、是非家庭の副業を謀る⁹²⁾」べきであると述べている。伝統的な中国社会において、家庭の運営と管理は家長である男性の責任であり、その責任を女性に転じることは当然ではなかった。他方ここで示したように、女性に経済の知識を習得させることによって、家庭だけではなく国家の発展に大きく影響を与えることを王蘊章、邵飄萍などの男性知識人は認識していた。彼らは日本の経験と知識は中国にとって非常に重要であると考え、実用的価値の高い日本からの副業情報を大量に提供している。中国女性が副業に従事する自覚を強め、家庭だけではなく国家経済の発展に寄与することを期待していた。

実際に、科学的な家庭知識だけではなく、児童に対する家庭教育も、社会国家の発展と直接の関係にある。中国の「賢妻良母⁹³⁾」を検討する際には、家政の能力を備える「賢い妻」だけではなく、強国の基礎となる健全な国民を育成するための家庭教育についても考察すべきと考えるため、次節で検討したい。

第4節 『婦女雑誌』から見る理想的な家庭教育(1915年～1920年)

4.1 伝統的な家庭教育の様相

伝統的中国の富裕層の男児にとって、家庭外教育とは勉学であり、科挙試験の学習に他ならなかった。幼児期からの暗記教育は、男児の個性、発達過程を尊重するよりも、儒教の科目を頭に詰め込むことが基本であった。一旦科挙を受けて合格すると、父母、一族の繁栄を招く人物になることと、家長としての振る舞いが期待された。そのため子どもが子

⁹¹⁾同注 87、臨時軍事調査委員会、47 頁。

⁹²⁾原文「則爲主婦者苟肯努力勞動亦能增加收入、是非力謀家庭之副業不可」、西神、「提唱家庭副業説」、『婦女雑誌』第 3 巻第 12 號、1917 年 12 月、63 頁。

⁹³⁾日本では「良妻賢母」、韓国では「賢母良妻」、中国では「賢妻良母」が用いられる。同注 27、陳、「凡例」。

どもらしい活発な行動、行為をすると必ず家長から叱責を受け、矯正の対象となった。そして、人口の大多数を占める庶民層の子どもは、男女を問わず家庭の労働力になることが期待された。中国では跡取りとなって家族に繁栄をもたらす可能性のある男児が大切にされたが、庶民層の男児女児は早くから労働力となって一家の生計を支えた。女児の場合は纏足の習慣によって家庭内に閉じこもり、さらに状況によっては口減らしのために間引きされるか、売買されることが普通であった。従って、中国古代の伝統社会における家庭教育は知識人の家庭か、豊かな官職の家など富裕層の家庭に限られており、それ以外の庶民層に家庭教育の概念はなかったと言える⁹⁴。

しかし、日清戦争の敗北は、中国の先進的な男性知識人に深刻な危機感をもたらした。国家の人材養成こそが国難を乗り切るための緊急課題であるという認識が深まり、教育制度変革の必要性が意識されはじめた⁹⁵。この「内憂外患」の歴史背景の下で、子どもに「民族」、「国家」の担い手という役割が与えられ、1912年に教育総長の蔡元培が提起した教育制度に関する一連の改革法令によって子どもに公的な教育機会が与えられることとなった⁹⁶。その法令は近代中国の知識人が子どもの家庭教育を改良しようとする推進力となった。

民国初期に入り、家庭教育改良の一環として、中国の先進的な男性知識人が生み出した心身健全な子どものための養育方法はどのような形式であろうか。この点については、次節で『婦女雑誌』の記事に基づいて論じたいと思う。

4.2 近代中国における家庭教育の発見

清末以降、欧米で活発化していた新教育運動⁹⁷は先進的な知識人に影響を与え、子どもを「教育される者」とする教育論が中国社会の知識人家庭の中に導入され始めた⁹⁸。民国期に入ると、『婦女時報』、『婦女雑誌』、『女鐸』など女性雑誌が次々と創刊され、メディアを通じて家庭や家庭教育のあり方が大衆に宣伝されるようになった⁹⁹。

池賢淑は、中国知識人らが子どもの教育を重視したのは、国家と民族を強化する目的の

⁹⁴ 翁麗霞・神川康子、「中国の古典書における家庭教育の社会学的要素について」、『人間発達科学部紀要』第6巻第2号、富山大学人間発達科学部、2012年、119頁。

⁹⁵ 湯山トミ子、「近代中国における子ども観の社会史的考察（1）伝統的子ども観の揺らぎと近代的子ども観への胎動」、『成蹊法学』（72）、2010年、396頁。

⁹⁶ 蔡元培著、石川啓三訳、「全國臨時教育會議開會のことば（1912年7月10日）」、『中国の近代化と教育』、1984年、明治図書出版、100頁。

⁹⁷ 新教育運動とは、19世紀の第四・四半期に欧米先進諸国において成立された新しい国民的教育制度である。国民教育が法制化され現実化したことによって生じたさまざまな問題がある。長尾十三二編、『新教育運動の生成と展開』、栄泰印書館、1988年、20頁。

⁹⁸ 湯山トミ子、「近代中国における子ども観の社会史的考察（2）近代的子ども観の提起—児童中心主義と人類主義、『個』の創出」、『成蹊法学』（82）、2015年、11頁。

⁹⁹ 村田雄二郎、『「婦女雑誌」からみる近代中国女性』、研文出版、2005年、3頁。

ためであったと示した¹⁰⁰。その認識は、メディアが提示した子どもに関する言説から生み出され、家庭内で「優秀」な子どもを育て、その子どもを「優秀」な国民に成長させるという、国家的な課題と密接に結びついて意識された¹⁰¹。『婦女雑誌』という女性雑誌が提示した子どもの家庭教育に関する言説は、中国の母親の意識を支配する可能性が高く、教育の補助手段としての役割を果たしていたことは既に先行研究で言及されている¹⁰²。

そして、民国期の主婦にとって最も重要な責任は、子どもの健康と国家の将来のために、科学的育児方法や家庭教育を通して理想的な子どもを養育することであった。民族と国家の興盛を目指した民国期の中国は、西欧の近代化の要因が近代的国民国家の成立にあると考え、その実現に努めた。この認識のもとに、子どもは国家及び民族の未来として扱われた。『婦女雑誌』において、育児論は主に「家政門」、「譯海」などの欄目に掲載され、健康な子どもを出産するために、妊娠、出産に関して説明するとともに、育児方法なども詳しく紹介された。子どもの養育については、特に母乳の価値が強調され、母乳での育児が積極的に勧められた。また、健康な身体を維持するために、衛生管理についての記事も多かった。当時、疾病は細菌が身体に侵入することによって発生するのだと考えられており、身体を清潔にすることは何よりも重要視された。そして、衛生観念は国家や社会に大きく影響を与えた。児童の衛生問題社会や国家と直結すると考えられていたため、入浴、歯磨き、手洗いなど子どもに衛生習慣を身に付けさせる必要があることが強調されていた¹⁰³。

近代国家建設の基礎と見做された子どもの身心問題が国家的問題として認識されていた点からわかるように、子どもの理想的な養育方法と教育方法は国家の問題に直結するものとして重要視されたのである。

以下、1915年から1920年にかけて6年間の『婦女雑誌』が掲載した家庭教育に関わる内容の記事に焦点を当て、養育と教育という二つの分野から個別に考察する。そこから、1910年後半という時代背景の下で創出された理想的な「家庭教育」の実態を明らかにしたい。次節では、まず「衣・食・住」という三つの方面から検討したい。

4.3 理想的な「養育」方法—「衣・食・住」を中心に

4.3.1 服装の改良

20世紀初頭の中国では、「衣・食・住」という方面や生活風俗において「華」が「洋」との

¹⁰⁰池賢淑著・陳延媛訳、『『婦女雑誌』からみる子どもの言説—日本植民地時代の朝鮮の女性雑誌『新女性』との比較から』『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』村田雄二郎編、研文出版、2005年、342頁。

¹⁰¹湯山トミ子、「近代中国における子ども観の社会史的考察（1）伝統的子ども観の揺らぎと近代的孩子観への胎動」、『成蹊法学』（72）、2010年、396頁。

¹⁰²同注100、池、342頁。

¹⁰³柯小菁、『塑造新母親：近代中国育児知識の建構及実践（1900～1937）』、山西教育出版社、2011年、111頁。

抵抗と融合に関する問題がしばしば顕れていた¹⁰⁴。中華民国が成立した 1912 年に服装の新規定が定められ、女性の服装は清朝以来の満族様式がチャイナドレスに変化し、その中洋折衷の新式服装を着用していた女性は知識人層としての「新式女性」というイメージで捉えられるようになった¹⁰⁵。そして、子どもの服装は、窮屈な西洋式とゆったりした東洋式を折衷するものになった。質素で便利という特徴を持ち、それを子どもに相応しい服装として強調した記事は初期の『婦女雑誌』に見出される¹⁰⁶。

しかし、子どもの服装は質素かつ衛生的なものが要求されたが、服装の様式に関する記載は『婦女雑誌』の誌面には殆ど掲載されなかったことから、服装を選ぶ時は子どもの個性に応じて動きやすいものが最優先に選ばれ、外見はあまり重視されなかったという特徴も見られる¹⁰⁷。

また、『婦女雑誌』の第 1 巻第 6 号に掲載された「母之衛生及育兒法」という記事の中で、生まれたばかりの子どもを服装を選択する際に、「身軀のいかなる部分をも束縛すべからず」と明示された。その理由としては「日本人は肺の病気が比較的に多く、その根源は幼児期から多数胸の紐をあまりにも緊縛するためである。わが国ではそれを注意して避けるほうがよい¹⁰⁸」と述べるように、今まで強調されていた保温性、耐久性に代わって、健康を前提条件にし、子どもの発育と成長を圧迫せず有益な服装を選ぶべきであることが示唆された。

服装に関する記事のもう一つの特徴は、家政知識が乏しい母親を教育する目的で、科学的な着用方法に関する知識が紹介されていたことである。例えば、衛生面への配慮から子どもの服装は少なくとも夏は一日に一回、春と秋は三日に一回、冬は週に一回取り替える必要があることが強調された¹⁰⁹。

しかし、貧困層の衛生管理が充分に行われていなかったこともあり、「我が國の中下等家庭の子ども服の汚れる程度は口で言うのは難しく¹¹⁰」と指摘されたように、衣服を常に清潔に維持することは家庭教育の一環であり、どんな貧しい家庭であっても行うべきことだと述べられた。また、「外國人からよく中國人の不衛生が嘲笑¹¹¹」されたため、富強で偉大な民族国家となるためには、子どもを持つ母親に科学的な家事方法を普及し、そして母親

¹⁰⁴謝黎、『チャイナドレスの文化史』、青弓社、2011 年、105 頁。

¹⁰⁵謝黎、「10.中国女性の 100 年、旗袍からチャイナドレスへ」、『繊維製品消費科学』、51 (12)、2010 年、901 頁。

¹⁰⁶任妍幽、「論家庭衣食住之當注意」、『婦女雑誌』第 1 巻第 5 号、1915 年 5 月、20 頁。

¹⁰⁷鸞儀、「理想之模範家庭」、『婦女雑誌』第 3 巻第 7 号、1917 年 7 月、76 頁。

¹⁰⁸飄萍、「日本人肺病比比較爲多、實基于幼兒附紐之緊縛之、我國宜注意避之」、「母之衛生及育兒法」、『婦女雑誌』第 1 巻第 6 号、1915 年 6 月、58 頁。

¹⁰⁹擲華女士、「家庭教育簡談」、『婦女雑誌』第 1 巻第 3 号、1915 年 3 月、44 頁。

¹¹⁰魏壽鏞、原文「我國中下等人家之小兒衣服之污垢難以言狀」「小兒之衣食住」、『婦女雑誌』第 4 期第 6 号、1918 年 6 月、69 頁。

¹¹¹同注 110、魏、69 頁。

から子どもに教育がなされるべきと期待された。さらに、貧困層の家庭教育については、教育の欠如、子どもの教育放任などの現状に言及しているものの、男性知識人はそうした問題の根本的な原因は全く顧みられず、ただ先進的な国家から軽視されたという喪失感を抱いていたことが読み取れる。

また、『婦女雑誌』では子ども服装の材質はできるだけ「毛皮」と「シルク」を避け、欧米や日本の中上流家庭を模倣して綿製品を選択すべきであると強調された。その理由の一つは、「豪華」な服装を子どもに着せても、「健康のために何も役に立たない」と、子どもの健康を最優先したためである。もう一つは、「子どもの精神身軀は必ず頑健であるために、食料品から栄養を十分に取りべきである。日本人は昔から早老の弊害があり、家に金銭の余裕があると親の虚栄心を満足させるためだけに華美な服装を子女にさせ、その外観のために身軀上の養成を忘却した¹¹²」と記された。即ち「豪華」な装飾よりも「適宜」な食物が子どもに栄養を提供するものであるという。さらに、成長に相応しい服装と適切な栄養とは、健全な人間を育成するためのただ一つの条件というわけではなく、習慣による健康維持のための清潔さや、しつけにより自律心を持つ子どもに育てることも必要なのであると提唱した。続けて、子どもの健康に相応しい「食」について次節で考察したい。

4.3.2 食物の改良

子どもを健康に成長させるためにどのような食物を与えればよいかについての知識も中国の先進的な知識人から要求されていた。『婦女雑誌』が科学的な育児方法を紹介する理由は、心身共に健康な新国民を養成するための指南書として求められていたからであった。育児に関する大部分の記事の内容は、胎教、妊娠による女性の身体の変化、病気の治療に関する具体的説明である¹¹³。そして、出産後、特に母親の母乳による授乳は積極的に勧められ、様々な科学的知識が用いられるようになった。「一歳から六歳までは日本人の三島博士により、七歳から十六歳までは日本学校衛生会の資料によって調べた平均数値」に示したように、成長中子どもの身長、体重などの標準について、中国の子どもの記録がなかったため、日本の子ども（1歳～16歳）を参考にし、同時に子どもの身体の検査を毎年行うことの必要性を強調したことである¹¹⁴。中国知識人が子ども成長の基本的な情報を積極的同時代日本の女性雑誌から多く引用して参考したことがここから見出される。

そして、1歳以降の子どもにとって離乳食は不可欠な食物とされた。離乳食は母乳の代替

¹¹²王延幹、原文「小兒精神身體須使強壯于食料品之滋養分。日本人向有早凋之弊、及時家有余裕而僅凭自己之愜意對於兒女裝飾其外觀忘却內部身軀上之調養」、「物價僑騰貴与中等家庭」（續）、『婦女雑誌』第3巻第7號、1917年7月、67頁。

¹¹³叔子、「婦人之衛生（續）」、『婦女雑誌』第4巻第8號、1918年8月、77頁。

¹¹⁴原文「表中一歳至六歳據日人三島博士所調查男兒之平均數、自七歳至十六歳則據日本學校衛生會所調查之平均數」、趙英若、「兒童健康計測法」、『婦女雑誌』第4巻第10號、1918年10月、41頁。

食品として用いることができ、栄養バランスを取ることで子どもの発病率を低く抑えられることが認識されたため、離乳食の紹介は当時『婦女雑誌』の誌面に多く見られた。健康な子どもを養育するために科学的な育児法が強調されている点は、子どもの食事の科学化・衛生ともに関係がある。例えば、飄萍の「母之衛生及育児法」という記事では、理想的な離乳食を以下のように述べた。

最初はできれば最も軟かい食物（お粥等）を与えるが多量に与えてはいけない。三、四歳を超えたら米飯及び鳥、魚肉と野菜の若葉を十分に煮込んだものを、みじん切りにして咀嚼しやすくするべき（中略）飲料は牛乳が望ましいが、「麦湯」と「葛湯」もよい¹¹⁵。

このように乳幼児の食事について、大人の食物ではなく、子どもに適切な栄養がある食物を与えることは、成長にとって非常に重要なことだと認識された。乳幼児死亡率が高い1910年代後期の中国では、子どもを成人まで順調に養育することは現代のように当然のことではない¹¹⁶。そのため、子どもの体質、及びその成長への配慮は知識人らが欧米と日本の女性雑誌から吸収し、重要視した部分ではないかと考える。しかし、筆者は1915年から1920年にかけて『婦女雑誌』で言及された幼児の養育に関連する記事をまとめ、内容には微妙な差異があることを明らかにした。表10に示したように、例えば肉類に関して、消化しやすくなるように十分に調理してから子どもに与えることは1915年以降の記事に見られたが、1917年になると、禁食とされた食物に対する制限が見出されるようになった。このように、時期によって健康な子どもを養育するために理想的な「食」の不一致性が見出されるのである。

ここでは、子どもの食事に対する制限が多いという傾向があることも見出された。民国初期の中国においては、子どもの身体の健康を国家的な問題として認識した点から分かるように、『婦女雑誌』は理想的な子どもの食物をいくつか取り上げたが、そこに矛盾があることも読み取れた。最後に、子どもの「衣・食・住」のうち、最後の「住」の改良についての分析は次節に譲りたい。

表 10. 『婦女雑誌』に記載された幼児の離乳食に関する記事内容の変化（1915 年～1920 年）

掲載刊號 掲載年月	題目	題目（日本語訳）	作者	主な内容
--------------	----	----------	----	------

¹¹⁵原文「最初宜于以最軟之食物如粥湯等不可多量。三、四歳后米飯及鳥獸魚肉与野菜之嫩叶可煮熟与之宜切細便于咀嚼（中略）飲料以牛乳爲宜麦湯葛湯亦可」、飄萍、「母之衛生及育児法」（續）、『婦女雑誌』第1巻第7號、1915年7月、68頁。

¹¹⁶鳥傳濤、「小兒夭亡問題」、『婦女雑誌』第4巻第7號、1918年7月、56頁。

第 1 卷第 5 號 1915 年 5 月	育嬰寶鑑	育兒寶典	質園	2 歳以降、普段の食事は牛羊鶏鴨野菜などの食物が良い、ただそれらを十分に煮込んでからみじん切りにする必要がある。
第 1 卷第 7 號 1915 年 7 月	母之衛生及育兒法（續）	母の衛生及び育兒方法（續）	飄萍	3、4 歳以降米飯及び鳥類、獸類、魚類の肉、野菜の若葉等を十分に煮込んでからみじん切りにして食べさせる。飲料は牛乳が望ましい、「麦湯」「葛湯」も可。
第 1 卷第 12 期 1915 年 12 月	幼兒之衛生	幼兒の衛生	沈芳	幼兒の飲食物は、米飯、パン、牛乳、牛羊鶏鴨肉、脂肪が少ない <u>豚肉、卵、野菜、少量の果物等消化しやすいものが望ましい。</u>
第 3 卷第 4 期 1917 年 4 月	育兒問答	育兒問答	翟宣穎	1 歳以下の幼兒に対してビーフジュース、卵、蜜柑露などの食物は不可欠。
第 3 卷第 6 期 1917 年 6 月	育兒問答（續）	育兒問答（續）	翟宣穎	2 歳以上の幼兒には、蜜柑露、充分に煮込んだ米飯、乳酪、牛乳、卵、お粥、パン及び野菜など食べさせる。
第 3 卷第 7 期 1917 年 7 月	育兒問答（續）	育兒問答（續）	翟宣穎	7 歳以下の幼兒に食べさせてはいけないものは、肉類（豚肉、獸類の内臓等）、野菜（キュウリ、茄子等）、パンとビスケット、飲料（茶及び果酒等）、果物（バナナ、葡萄等）。
第 4 卷第 6 號 1918 年 6 月	育兒問答（續）	育兒問答（續）	魏壽鏞	1 歳以下では、お粥、米飯、肉類、野菜、果物などを適切に調理すべき。飲料は温水あるいは牛乳等が宜しい。

第 6 卷第 9 號 1920 年 9 月	妊婦須知與育兒要言	妊婦心得と育兒要説	居慧貞	3 歳～6 歳児に相応しい食物はビーフジュース、牛乳、チーズ、卵、果物、野菜、片栗粉等である。 <u>相応しくない食物は、豚・牛肉、ハム、コーヒー、ココア、ビール、濃茶、缶詰等である。</u>
--------------------------	-----------	-----------	-----	--

※下線は筆者による

4.3.3 住宅の改良

子どもの性質の大人と異なる部分に対しては特別な配慮が必要であることから、住宅の改良も優秀な子どもの養育に重要であると捉えられていた。「男児は 7 歳までを期限として家庭教育がなされ、8 歳から 34 歳までは学校教育がなされる。女児は 7 歳まで家庭教育がなされ、8 歳から 18 歳まで学校教育がなされるべき¹¹⁷」である。ここで子どもが家庭教育を受ける年齢は明確に 7 歳までと規定された。

その理由は、「子どもが生まれてから 7 歳までの期間はその性質と能力の形成にとって根本的な時期であるため、子どもがこの時期に接触した物事は最も心を動かさせ易い¹¹⁸」ためである。特に 7 歳までの子どもの生活環境は重要視され、その個性に応じて子どもの住居を考慮する必要があると説かれている。

1918 年 4 月の『婦女雑誌』に掲載された記事には、子ども部屋の様式について様々な提案がある。日光がよく入る、明々で温暖な場所を選ぶことや、外界から刺激がなく、安全な空間が理想的な子ども部屋として想定されていたことがわかる¹¹⁹。そして、別の場所もしくは廊下で小黒板を用意することは、日常的に子どもに教育ができるとして要求された。

子ども部屋を設置することは、大人と異なった行動を行うゆえに、「特別な人間」と目された子ども専用の空間を作ることである。ここで特に注目しておきたいのは、1918 年 4 月の『婦女雑誌』に掲載された、父母が子ども部屋の掛図を選ぶ時についての「我が國の書畫はただの美術的な意味しかなく、兒童の心理に近くない（中略）とりあえず我が國の書畫が兒童にとっては無益だとは言える。ただし、現在新式の修身掛圖等は兒童教育にかなり良いが、残念ながら未だ流行していない¹²⁰」という記事の内容である。ここから、知的

¹¹⁷ 負生、原文「男子至 7 歳爲家庭教育期限、8 歳數至 34 歳爲學校教育期限。女子至 7 歳爲家庭教育期限、8 歳至 18 歳爲學校教育期限」、「余意中之新家庭」、『婦女雑誌』第 4 卷第 11 號、1918 年 11 月、67 頁。

¹¹⁸ 宗良、原文「兒童時代而自呱呱落地至七歳之時期內爲造兒童性質及能力根本之時、兒童在此刻所接觸之事物最易打動心坎」「兒童與居室之關係」、『婦女雑誌』第 4 卷第 2 號、1918 年 2 月、70 頁。

¹¹⁹ 汪集庭「家庭陳設問題」、『婦女雑誌』第 3 卷第 5 號、1917 年 5 月、50 頁。

¹²⁰ 宗良、原文「以吾國之書畫惟有美術の意味而不切近于兒童心理（中略）總之吾國書畫對於兒童無利可言、

好奇心が高い子どもに対して、その感性にそぐわない美術品より、新式の教育図画があったほうが家庭教育の目的を達成することが期待されたことがわかった。

従来の習慣にとらわれることなく、子どもにとって合理的な生活様式を探究しようとする考え方は、民国期における中国の中流家庭を対象とした家庭教育改良の中で重視された。たとえ僅かな狭い空間だとしても、子どものために学習できる空間を整備することが子どもの成長にとって非常に重要だと考えられた。

このような「子どもの天性」の存在が認知されていることの背景には、『婦女雑誌』のような女性雑誌を通して育児論、家庭教育論が隆盛したことだけではなく、民国期に入ると、子どもは大人とは異なる存在であるとみなされるようになり、子どもの重要性が確立されていたことも挙げられよう。

4.4 理想的な「教育」方法——「家訓」と「自発性」

前述のように、子どもの「道德教育」は「衣、食、住」など日常生活の隅々と緊密に関連し、家庭教育に重要な位置づけがされていたと言える。惲代英¹²¹（1895 年～1931 年）は 1916 年 11 月の『婦女時報』に掲載した「家庭教育論¹²²」という記事の中で、家庭教育を学校教育前の補助として位置づけ、子どもにとって良好な道德観念、科学知識、健全な身体を目指す「德育、智育、体育」という三つの教育項目を家庭教育の基本に置き、その中で「德育」即ち「道德教育」が最も重要視すべき項目であると論じた¹²³。

その理由は、恐らく既に論じたように、伝統的な社会からもたらされた儒教的な「孝」の思想が中国全体を支配していたからだろう。

1915 年 3 月の「家庭教育簡談」という記事には、子どもの家庭教育としては第一に「毎

惟現在新式之修身挂圖等頗合于兒童教育惜尚未流行也」「兒童與居室之關係（續）」、『婦女雑誌』第 4 巻第 4 號、1918 年 4 月、65 頁。

¹²¹惲代英：中国共産党初期の指導者。共産主義青年団の機関誌『中国青年』の主筆として、全国の青年運動に大きな影響を与えた。1930 年、上海で捕らえられ、1931 年、南京で処刑された。

¹²²惲代英、「家庭教育論」、『婦女時報』第 20 期、1916 年 11 月、15 頁。

¹²³筆者の調査により、1915 年から 1919 年にかけて『婦女雑誌』に掲載された記事の中で、「德育、知育、体育」の重要性については以下の記事に記された。当時中国の知識人らは「道德教育」即ち「德育」が子どもの成長についての重要な問題だと意識したことがわかった。ここから、「知能教育」即ち「知育」は「德育」の次に位置づけられることが明らかになった。

①擷華女士、「家庭教育簡談」、『婦女雑誌』第 1 巻第 3 號、1915 年 3 月

②王三、「婦女職業論」、『婦女雑誌』第 1 巻第 4 號、1915 年 4 月

③陳麒、「先天教育論」、『婦女雑誌』第 2 巻第 3 號、1916 年 3 月

④西神、「家庭教育之精義」、『婦女雑誌』第 3 巻第 7 號、1917 年 7 月

⑤辛梅、「家庭教育淺説」、『婦女雑誌』第 4 巻第 10 號、1918 年 10 月

⑥徐辛梅、「家庭訓育之重要及實施法」、『婦女雑誌』第 5 巻第 5 號、1919 年 5 月

⑦西神、「不傷個性之英美兩國之家庭教育」、『婦女雑誌』第 5 巻第 11 號、1919 年 11 月

日朝起きてから必ず父母の部屋を訪れなければならない（中略）食事する前には必ず父母及び年長者が料理を取るまで待たなければならない¹²⁴」ことが子どもに要求された。翁麗霞が「中国伝統社会は家庭内で常に秩序の育成と家庭を基礎にした文化建設を重視し、家庭道德性の自覚などを強調した¹²⁵」と述べたように、児童中心教育など近代的な教育思想を吸収したとしても、中国固有の伝統的な思想は根強く父母と子どもの間に存続していたことがわかる。

中国の伝統的な家庭教育の主な内容も儒教的な道德教育であった。子どもに秩序を教え、人間としての完全さを厳しく要求していた。家訓は、古代家庭教育の読本の総称で、「始終封建的道德を主要内容¹²⁶」としており、その道德理論は家庭教育の核心であったといわれる。1916年10月の『婦女雑誌』の「家教改良談」という記事で「この家庭教育は新方法ではなく外國から来た西洋の方法ではない（中略）正直に言えばこれが我が中国の古人がよく口にした家訓家教である¹²⁷」と述べるように、家訓は子どもの道德教育の基準として、近代の「家庭教育」においても子どもの頭脳に刷り込まれ子どもの言動を支配することが多かった。

例えば北宋の顔之推が『顔氏家訓¹²⁸』で、「父母威嚴にして慈有れば、即ち子女畏慎して孝を生ず¹²⁹」と示すように、子どもは父母や目上の者に対する絶対の服従、献身という「秩序」を守ることを要求された。父母の言葉に対しては、その指示に従い、少しの反抗もあってはならないとされていた。

一方、1910年代初頭、欧米のモンテッソーリ教育法¹³⁰が日本を経由し、中国に紹介された¹³¹。その精髓は、周囲の状況によって子どもの正常な機能や健康の発達を促進させることをねらいとし、その個性を伸長させるための教育を展開したことにある。

また、『蒙臺梭利女史新教育法』（モンテッソーリ女史の新教育法）の出版に従って、『婦女雑誌』に「蒙臺梭利教育法¹³²」（モンテッソーリ教育法）、「二十世紀之女教育家¹³³」（二

¹²⁴ 擷華女士、原文「兒童每日早起必令謁見父母（中略）凡用膳時須令兒童俟父母及長者舉筷后再行舉筷」「家庭教育簡談」『婦女雑誌』第1巻第3號、1915年3月、44頁。

¹²⁵ 翁麗霞・神川康子、「中国の古典書における家庭教育の社会学的要素について」、『人間発達科学部紀要』第6巻第2號、富山大学人間発達科学部、2012年、123頁。

¹²⁶ 同注125、翁・神川、119頁。

¹²⁷ 莊慶祥、原文「這家庭教育并不是個新法也不是外國來的洋法（中略）老實的說就是我們中國古人所說得家訓家教」、「家教改良談」、『婦女雑誌』第2巻第10號、1916年10月、30頁。

¹²⁸ 『顔氏家訓』：中国北齊の顔之推が著した家訓、子々孫々に対する訓戒の書である。全では7巻である。

¹²⁹ 顔之推著、宇野精一訳『顔氏家訓』、明德出版社、1982年、14頁。

¹³⁰ マリア・モンテッソーリ（Maria Montessori 1870年～1952年）：イタリアの医学博士、幼児教育者、モンテッソーリ教育法の開発者として知られる。子どもの自主性、独立心、知的好奇心などを育み、社会に貢献する人物になるという教育目的である。

¹³¹ 日暮トモ子、「近代中国の幼稚園論の展開にみるモンテッソーリ教育法の受容に関する考察」、『有明教育芸術短期大学紀要』第6號、2015年、18頁。

¹³² 彬夏、「蒙台梭利教育法」、『婦女雑誌』第2巻第3號、1916年3月、23頁。

十世紀の女性教育家)などの記事も掲載された。このような書籍や雑誌等から、当時のモンテッソーリ教育法に対する関心の高さが窺える。子どもの個性を自発的に発展させるという特徴が、中国の知識人らから高い評価を受けていたと思われる¹³⁴。

子どもの自己活動、個性の自発的な発展を重視する新しい教育法として、モンテッソーリ教育法から影響を受けた中国知識人も議論を行った。例えば、『婦女雑誌』では家庭教育は学校教育と社会教育の根本となり、「第一に愛情をもって接する¹³⁵」ことにより、ただやたらに子どもに命令することなく、たとえ過失があったとしても、「一.寛厳適宜。二.統一必須。三.個性適應¹³⁶」の考慮から、あまり厳格にせず子どもに忠告もしくは指導することを通して自発的に改善させ、子どもの心を傷つけないように、健全で自立的な人格を養成することが強調された。

モンテッソーリの教育は、子どもの自発性を重視する教育として評価されていた。しかし、子どもを放任する親が現れたため、就学前の子どもに自由を与えるよりも、教育者が子どもの悪習慣を矯正する必要があることが強調された。しかし、モンテッソーリが提出した「本能を自由に発達させること」という、子どもが本来持っていた能力を養い、自発的な活動を鍛えることは民国初期の中国ではあまりにも現実的ではなかったと考えられる。

また、当時の中国においては上等の家庭であっても、教育を十分に受けられなかった母親が多数存在していた。モンテッソーリの理念が科学的な根拠に基づき、子どもの知能や身体的发展にとって有益な部分があったとしても、当時の儒教的な道德理念により支配された社会背景の下では、たとえ父母たちが子どもの自発性を認識しても、全て正確に受け入れることは困難だったと考える。

さらに、1919 年後半になると、五四運動の勃発はついに商務印書館に影響を及ぼした。商務印書館によって創刊された『小説月報』、『東方雑誌』、『婦女雑誌』などの雑誌の編集方針は世間から多大な批判を浴びせられるようになった。そのため、『婦女雑誌』は新しい編集長である章錫琛とその助手である周建人を迎え入れた。次章では、章錫琛が編集していた 1920 年代前半の『婦女雑誌』の誌面内容を取り上げ、西洋の女性思想の受容という方面から当時の男性知識人の女性問題に関する言説を分析したいと考える。

¹³³張菊姝、「二十世紀之女教育家」、『婦女雑誌』第 2 卷第 2 號、2016 年 2 月、71 頁。

¹³⁴同注 131、日暮、19 頁。

¹³⁵李公耳、原文「第一當以臨以愛情」、「育兒要訣」、『婦女雑誌』第 2 卷第 8 號、1916 年 8 月、39 頁。

¹³⁶徐辛梅、「家庭訓育之重要及其實施法」、『婦女雑誌』第 5 卷第 5 號、1919 年 5 月、19 頁。

第三章 1920 年代前半の『婦女雑誌』に関する考察

1919 年頃には、中国伝統社会を支えていた儒教を批判する五四新文化運動が全面的展開された。その中で、男性知識人たちは「民主」、「科学」をスローガンに、中国を支配してきた因習、封建制度を打倒しようとした。

彼らは、封建制度を支える旧い家の束縛からの解放を求め、個人を抑圧する封建的な家庭環境の打破と、貞操問題や社交公開、男女共学、結婚・離婚の自由など「女性解放」をめぐる議論がメディアにおいて活発に議論された。1919 年から 1925 年にかけて、中国の文化界には女性問題の議論が流行した。

五四新文化運動時期は民国初期と異なり、一般向けの女性雑誌が続々と刊行されていた。1918 年までにその数は約 50 種¹近くにも上り、これらの雑誌には女性解放についての記事が多数掲載され、読者への伝播を通じて、中国における女性解放思想の啓蒙に大きな役割を果たしたと考えられる。

第 1 節 五四時期における日本からのセクシュアリティ²受容

1.1 与謝野晶子からの貞操観の受容

1916 年 1 月、『新青年³』第 1 巻第 5 号に掲載された「一九一六年」という記事で、陳独秀（1879 年～1942 年）⁴は、女性問題について論じた。その中で「個人独立の人格を尊重して他人の附属品になってはいけない⁵」と述べ、この主張は抑圧された中国女性にとって、当時の封建制度への抵抗の一つであると強調した。

¹張麗萍、『報刊与文化身份—1898～1981 中国婦女報刊研究』、中国書籍出版社、2012 年、3 頁。

²日本では、セクシュアリティは「性的欲望」あるいは「性に関わる欲望と観念の集合」と翻訳されることが多かったが、近年では性に関わる現象の総体を示す用語として「性現象」と呼ばれるようになったことが上野千鶴子によって指摘されている。上野千鶴子ほか編、『岩波女性学事典』、岩波書店、2002 年、293 頁。中国では 1910 年代に「性欲」、「貞操」という言葉が日本から伝来し、「性」に関する議論が始まった。

³1915 年 9 月に『青年雑誌』の題で創刊され、翌年に『新青年』と改称した。同誌には李大釗、胡適、魯迅など、後に思想界で大きな活躍をすることになる人々が集い、新文化運動を推進した。

⁴陳独秀：中国の文学革命の指導者である。20 世紀の初め、中国の文学革命の指導者として活躍し、1921 年に中国共産党を創設し、その初代委員長となった。

⁵原文「尊重個人獨立自主之人格勿爲他人之附屬品」、陳独秀（初出『新青年』第 1 巻第 5 冊、1916 年 1 月）、『新青年』第 1 分冊、新青年雑誌社、1962 年、373 頁。

そして、2年後の5月15日、周作人⁶（1885年～1967年）の翻訳による「貞操論」が『新青年』第4巻第5号に発表された。これは日本の女流作家である与謝野晶子（1878年～1942年）⁷の評論集『人及び女として』に収められた「貞操は道德以上に尊貴である」の翻訳である。周作人は与謝野晶子の論説に関心を持ち、それを翻訳して自らの感想を加えて発表した。この一文は、当時中国の思想界、文化界で大きな反響を呼んだ。彼女は「あらゆる壓制」から抜け出し、従来の思想と道德から自己を解放し、そして「貞操を最も現代的な道德として擁護したい」と述べている。そのため「無法な道德を排斥して、私達自身に必要な道德を新しく規定する努力をしよう⁸」と主張した。

与謝野晶子は、従来の道德観を排除し、新しい道德観を建設することを提唱した。彼女のいう、「壓制道德⁹」とは、貞操が強調された封建的な思想と良妻賢母の女性教育という二重の「壓制」である。このような「壓制道德」を排除し、その代わりに「眞實の道德」を建設しようとし、貞操を「最も現代的な道德¹⁰」として擁護するのである。

与謝野晶子の「貞操論」は、日本の社会でも大きな反響を呼んだ。1916年から『婦人公論』は特集號で多数の論説を組み、議論はさらに深く繰り広げられた。一方の中国では、胡適、周作人などの先進的な男性知識人を中心にして、貞操問題をめぐる論争が行われた。そして、周作人が日本の女性問題を先行例にして、中国の女性問題の一助とすることを期待していたのに対し、陳独秀は欧米の女性問題を参照し、その解決方法を模索しようとしていた。『新青年』の創刊號には陳独秀が翻訳したマックス・オーレルの「婦人觀」

（*Thoughts on Women*）が掲載された¹¹。続いて第5巻第1号にアメリカから帰国した胡適の「貞操問題」、『新青年』の第5巻第2号に魯迅の「私の節烈觀」が掲載された。彼らは、女性に貞操を強制するのは不平等であり、男性の性的放縱は不道德だと批判した。

その背景として、当時の政府が女性の貞節を顕彰しようとしていたことが挙げられる。袁世凱は1912年に中華民国の大總統に就任した後、封建專制を強化するために一連の規定、条例を公布した。1917年に入っても、中華民国代理大總理となった馮国璋は「修正獎勵條例」を継続的に実施した。それは、女性の貞節を奨励することなどを法律に定めるものであった。

胡適は欧米の女性思想の影響を受け、男女の自由平等を主張し、貞操を奨励する封建礼教に反対した。そして、封建礼教を「人を食う礼教」と批判した魯迅も、唐俟という筆名

⁶周作人:浙江省紹興の出身。號は知堂。南京水師學堂を卒業して、1906年に日本に留学し、立教大學、法政大學に学び、日本女性の羽太信子と結婚した。1909年兄の魯迅と共に外國小説を共訳して『城外小説集』として出版した。帰国後の1917年、北京大學文科教授に着任し、日本文學を講義した。1921年に文學研究會が組織された際に、發起人の一人となった。1924年雑誌の『語糸』を発行して主宰した。晩年は、日本の古典作品とギリシャ神話の翻訳をした。

⁷与謝野晶子:明治から昭和時代前期の歌人である。与謝野鉄幹主宰の東京新詩社社友となり、『明星』に短歌を発表した。1901年第1歌集『みだれ髪』に愛の情熱を歌って反響を呼ぶ。同時に、社会問題の評論、文化學院の創立など多方面に活躍した。長詩『君死にたまふことなかれ』が反戦詩として知られる。

⁸与謝野晶子、『鉄幹晶子全集』第16集、勉誠出版、2004年、72頁。

⁹同注8、与謝野、76頁。

¹⁰同注8、与謝野、73頁。

¹¹独秀訳、「婦人觀」、『新青年』第1巻第1号、1915年9月、43頁。

で「我之節烈觀」（「私の節烈觀」）という記事を『新青年』に発表した。彼は伝統的な節烈觀（貞操觀）が「自他ともに利することなく、社会國家に益なく、人間の將來にとって全く意義のない行爲であり、いまに至るや既に存在する生命力と價值を失った¹²」と述べた。先進的な男性知識人は不合理な法律、封建的な社会制度と压制思想を批判しながら、思想の解放を呼び掛けている。

1920年代から『婦女雜誌』には、恋愛に関する記事がとりわけ多く掲載された。1922年2月号の巻頭には、周建人¹³の「戀愛的意義与價值」（恋愛の意義と価値）と吳覺農¹⁴が翻訳した^{くりやがわはくそん}厨川白村の「近代の戀愛觀」が掲載された。厨川白村の「近代の戀愛觀」は中国では三種類の翻訳版が出版され、知識人に広く知られることとなる。また、アメリカの社会学者であるレスター・ウォードの『女性中心説』も堺利彦の日本語訳から夏丐尊によって中国で重訳された。次節では、夏丐尊が翻訳した『女性中心説』を取り上げ、日本からの恋愛觀の受容を中心に論じたい。

1.2 堺利彦からの恋愛觀の受容

五四運動時期以前の中国においては纏足、断髪、女学の問題が特に重視され、それ以降は女子教育、女性独立、女子参政などの問題が比較的重視された¹⁵。また、五四時期以来の特別な変化としては、伝統的な規範に抵抗するために恋愛と性をめぐる論議が活発となったことが挙げられる。その中で、男性の性差別意識を痛烈に批判したアメリカの社会学者であるレスター・ウォードの著作『女性中心説』が中国男性知識人の夏丐尊¹⁶の関心を惹き、彼によっていち早く中国語に翻訳され、中国の読者に紹介された。

レスター・ウォードの『女性中心説』（『純粹社會学』の第14章）は、人間社会は男性が中心だという「常識」を覆し、生物の根源は女性であり、男性はそこから派生した附属

¹²原文「然而不利其他、無益社會國家、于人生將來又毫無意義的行爲、現在已經失了存在的生命和價值」唐俟（初出『新青年』第5巻第2號、1918年8月15日）、中華全國婦女聯合會婦女運動歷史研究室編、『五四時期婦女問題文選』、生活・讀書・新知三聯書店、1981年、122頁。

¹³周建人（1888年～1984年）：浙江省紹興の人。字は松壽、または喬峰。魯迅の弟。1921年上海商務印書館の編集者となり、『東方雜誌』、『婦女雜誌』、『自然』、『中學生』などの雑誌の編集に参与した。

¹⁴吳覺農（1897年～1989年）：浙江省上虞で農家の次男として生まれる。本名は榮堂、筆名は永唐、咏唐などを使っている。1919年夏の終わりに公費で日本に留学した。帰国後、家庭や女性問題に関連する執筆を始めたのは『婦女雜誌』に掲載された「日本婦女的情況」（日本婦女の情況）という記事が最初である。

¹⁵宋素紅、『女性媒介：历史与传统』、中国传媒大学出版社、2006年、79頁。

¹⁶夏丐尊（1886年～1946年）は、国語教育家、散文家、翻訳者として近代中国で活躍した人物である。浙江省上虞県白馬湖の出身であり、魯迅と葉聖陶といった多くの著名人との交流が深かった。彼は科学の秀才に合格した後、1905年日本東京の宏文学院に入学し、のちに親友である章錫琛に協力して上海の開明書店（1926年）の開設と『中學生』（1930年）の創刊に関わった。ほかに1920年代初頭、夏丐尊は五四新文化運動の影響の下、国木田独歩、芥川龍之介の作品集の翻訳や編集に積極的に取り組んでおり、彼の思想の奥には日本文学の深い影響があると考えられる。夏丐尊、「我的中學生時代」、『夏丐尊文集・平屋之輯』、1931年、86頁。

物に過ぎないという内容であった¹⁷。日本にこの著作を翻訳したのは、社会主義者として女性解放を唱えた堺利彦¹⁸であった¹⁹。『純粹社會学』は1906年に初版されたが、日本語の全訳はなかった。「女性中心説」はその全20章のうちの第14章であり、600頁の中で100頁ほどを占めている²⁰。「女性中心説」という題は、英文タイトルに忠実だが、章の節題は英語原文と異なる編訳である。例えば、原文の目次タイトルの「marriage」を、堺の日本語版では「買賣婚及び掠奪婚」と翻訳した²¹。

『女性中心説』の中国語訳は、夏丐尊が『婦女評論²²』の第1期（1921年8月3日）から第24期（1922年1月11日）まで、22回にわたって（第3、7期特集号を除く）前半の14章を連載し、第31期（1922年3月8日）から第41期（1922年5月17日）まで9回にわたって（第39、40期特集号を除く）後半の7章を連載したものである²³。『女性中心説』を翻訳する経緯について、夏丐尊は『婦女評論』の編集長である陳望道²⁴の要望であったと述べている。

ただし、堺利彦は「女性中心説」の主張について、必ずしも全ての内容を肯定していたわけではない。特に人間社会の女性支配が男性支配に変遷した原因を、ウォードは男性の理性が発達し、「自己の父たる意義を認める」ようになったことに求めたが、堺利彦は「主として男子が経済上の権力を握つた²⁵」ことにその原因を求めた。先行研究においてはこの対立を「社会の進歩を理性の発達とみるか生産力の発達とみるか、つまり觀念史觀か唯物史觀かという対立である²⁶」と分析する。周知のように、堺利彦は日本における社会主義思想の紹介・実践の先駆者であるので、経済的な面から両性の支配問題を考えたことは別段不思議ではない。

その点については中国側の知識人らも意識したであろう。1922年7月の『婦女雜誌』の新書紹介欄において、堺利彦訳した『女性中心説』が紹介された。その中で「著者は生

¹⁷水田珠枝、「レスター・ウォードの『女性中心説』の受容」『比較文化研究』（29）、比較文化研究会、2010年3月、19頁。

¹⁸堺利彦（1870年～1933年）：日本における社会主義思想の紹介、実践の先駆的な存在として著名である。欧米の女性論の翻訳、『家庭雑誌』の刊行、女性解放論著作の出版など多方面にわたって活動を行った。

¹⁹『女性中心説』という名で堺利彦が解説し、1916年に牧民社によって出版された。

²⁰同注17、水田、20頁。

²¹堺利彦訳、レスター・ウォード原著、『女性中心説』、1916年1月1日、牧民社。

²²『婦女評論』：『民國日報』の副刊として1921年8月3日に上海で陳望道が中心となって創刊され、1923年5月15日に104期で終刊となった。主な執筆者は、陳望道のほか瞿秋白、沈雁冰（茅盾）、邵力子、楊之華であった。

²³前山加奈子・王宓「日中両国間の女性論の伝播と受容—『婦女評論』における堺利彦」『中国女性史研究』（9）、1999年11月、14頁。

²⁴陳望道（1891～1977）：1915年に日本に留学した。初期の中国共産党員であり、「共産党宣言」を日本語訳から中国語に翻訳した。1952年から復旦大学の校長を務めた。

²⁵堺利彦、『女性中心説』、「序」、牧民社、1916年、2頁。

²⁶同注17、水田、20頁。

物学社会学の角度から女性を人類の中心と証明したが、どうしても過激な所がある²⁷」と指摘し、「しかし、彼の『女性中心説』は男尊女卑の男性中心の社会にあって一般の人に舊觀念の錯誤を悟らせることができる²⁸」ということに社会的な意義を強調した。

夏丐尊に関する先行研究は、日本のみならず中国でも数が少ない。しかし近年、彼の自伝や資料の整理が進められ、21世紀に入ってから、日本において夏丐尊を研究対象とした論考が現れるようになった。夏丐尊を研究対象として取り扱う論考は日本の小品文²⁹との直接的な影響について論じる研究もある。また、多くの先行研究は、文学及び教育学の方面から研究を行い、特に翻訳の研究に偏在している。思想の方面からの論考は、管見の限り殆ど見られない³⁰。しかし、明治時代の日本で留学した経験から、日本の作品に描かれた先進的な思想が夏丐尊に必然的に多大な影響を与え、彼にとって特別な意義があったものと思われる。

²⁷原文「著者從生物學社會學的見地、證明女性爲人類の中心、雖也不免有過偏的地方」、「新書紹介」、無名氏、『婦女雜誌』第8巻第7號、1922年7月、42頁。

²⁸原文「但對於素來重男輕女的男性本位社會很可以使一般人覺悟舊觀念的錯誤」、同注27、無名氏、42頁。

²⁹小品文：1905年頃から10年代にかけて日本の文壇に流行した散文の一形態。原稿紙1、2枚程度のものから、長くても10数枚の短文章で、内容は日常の事情にも及び、また散文詩風の作品もあった。

³⁰夏丐尊についての先行研究は、以下の3種類に分けられる。

① 国語教育に関するもの：

i. 水野あゆ、「夏丐尊と葉聖陶：近代中国における作文教育の先覚者」、『言語と交流』(18)、2015年、1～13頁。

ii. 鄭谷心、「夏丐尊の国語教育方法論に関する一考察：1930年代の中国における国語学力の問題に焦点をあてて」、『教育方法学研究』(40)、2014年、63～73頁。

② 翻訳問題に関するもの：

i. 顔淑蘭、「夏丐尊訳・国木田独歩『女難』：「同情」の力学と日中の自然主義文学」、『野草』(98)、2016年、176～181頁。

ii. 顔淑蘭、「芥川龍之介『支那遊記』と夏丐尊訳『中国遊記』の問題系」、『日本文学』63(6)、2014年、30～42頁。

iii. 顔淑蘭、「夏丐尊訳・田山花袋『蒲団』の問題系：翻訳と〈新しい知識人〉の構築」、『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊(22-2)』、2014年、25～36頁。

iv. 工藤貴正、「任白涛『恋愛論』と夏丐尊『近代的恋愛観』について」、『大阪教育大学日本・アジア言語文化講座』大阪教育大学紀要、I、人文科学50(1)、2001年、1～26頁。

V. 顔淑蘭、「〈声〉の転用：夏丐尊による『支那遊記』抄訳の問題系」、『文学・語学(206)』、2013年。

③ 日本の小品文受容に関するもの：

i. 鳥谷まゆみ、「夏丐尊と日本：宏文学院留学と小品文受容を中心に」、『立命館経済学』64(4)、2016年、386～406頁。

ii. 鳥谷まゆみ、「一九二〇年代中国における小品文形成と周作人、夏丐尊(周作人と日中文化史)」、『アジア遊学』164、2013年、124～136頁。

夏丐尊の中国語訳は堺利彦が翻訳した『女性中心説』を忠実に翻訳したものであり、堺利彦が経済的な角度からウォードを批判した言論の影響は訳文から判定できない。ただし、後に章錫琛が創刊した『新女性』の記事で夏丐尊は以下のように述べている。

労働と戀愛の立場を一致させることは一切男女の理想であり、兩性間の一切の問題の進展である。特に現在の女性にとっては、全ての紛糾を解決するキーポイントである³¹。

「労働と恋愛の一致」即ち恋愛の中で、男女双方が両性関係の保障としての労働能力を持つことを夏丐尊は主張し、その「一致性」の解釈については次のように論じている。

女性が戀愛上の自由、保障を求めようとするなら、労働と引き換えにしなければならない。未戀愛、未婚の女性は、労働能力があるからこそ種々の生活面の困難を排除することができ、戀愛の旅路に踏み出せるようになる。戀愛の相手がいる女性でも、労働能力があることによって、現在あるいは将来の保障になる。労働できる能力があれば、賣春ではなく、眞の戀愛が手に入る自信がある³²。

ここで夏丐尊は、堺利彦が『女性中心説』で強調した「男性が經濟上の權力を持つ」ことが、社会における男性支配の原因であることを意識し、それを受け入れた上で女性の社会進出にも肯定的であることが分かった。しかし、男性が經濟上の權力を握るか否かという問題を恋愛との関係で論じる視点は堺利彦の言論には見られない。

夏丐尊は堺利彦の言説のうち、経済的な方面から女性を自覚させるという点に影響を受け、1921年の『婦女評論』の第3期で「婦女經濟獨立問題討論號」という女性の経済的獨立問題を討論する最初の特集号に取り組んだ。当時の中国社会で流行っていた女性問題は、女性の経済的獨立と不可分だという意識から生じたものであった。また、五四時期に戀愛至上主義が氾濫していたことによって、女性解放問題が討論された際に、戀愛問題についても議論が巻き起こる場合が多かった。

しかし、労働能力を持ちながらも家政や、育児をする時間がない「新式女性」として社会で活躍することに対して、夏丐尊は以下のように述べている。

母であることは勿論神聖な職務に間違いなく、妻になることも母になるための準備であり、同様に神聖な職務に違いはないが、母になること、妻になることの面倒さは、

³¹原文「労働與戀愛の一致、是一切男女の理想、是兩性間一切問題的歸趨、特別是在現在的女性、是解決一切糾紛的鎖鑰」、夏丐尊、「對了米萊的『晚鐘』—關於婦女問題的一感想」、『新女性』1928年8月、第3卷第8号、52頁。

³²原文「女性要在戀愛上有自由、有保障、非用了勞動去換不可。未入戀愛未結婚的女性、因了有労働能力、才可以排除種種生活上的荊棘踏入戀愛的旅程、已有了戀愛對手的女性、也因有了労働的能力、作現在或將來的保證。有了労働自活的能力、然後對己可有真正戀愛不是買淫的自信」、同注31、夏、53頁。

奴隷の労働ではなく、自己実現する手段であり、自ら榮光と優越を感じるべきである

33。

このように夏丐尊の女性観では、母親になることは単に労働ではなく、自己実現する手段であると見なされる。1920年代の中国における「新式女性」と言われる女性は、いわゆる「知識階級の女性」だと言える。このグループに属する女性らは、自らの価値を実現するために「男主外女主内」（男性は外、女性は内）という伝統的な観念から脱出しようとした。夏丐尊はそれに反対する。彼の「母性尊重」の言論は、堺利彦が翻訳した『女性中心説』の第6章「母的爱」の影響を受けたものであると考えられる。

女性は又男性を淘汰した。獨り母的爱ばかりでなく、母的勇气も、母の能率も、總べて此の長き間の女性的訓練に依つて發達することが出来たのである。將來男女の平等が實現されたら、此の母的爱の力は猶ほ一層強大なる活躍を見るであらう³⁴。

しかし、夏丐尊の見解には限界がある。例えば、彼は母性と女性の家庭外労働が両立できないことを無視し、それを解決する具体的な方策を考慮せずに、単に女性を男性の「附属物」の地位から脱し、自立すべきという点のみを紹介した。

1916年に日本で出版された堺利彦の『女性中心説』において、堺がウォードの言説を否定した点には「經濟上の權力を握った男性が女性を支配する」という言論がある。ここについて、夏丐尊は女性が經濟的に独立すべきと考え、その上で「労働」と「戀愛」の一致性を取り上げる。これは当時中国の社会背景と関わりがあったと考えられる。

1920年代に入り、『婦女雑誌』において恋愛に関する記事が増加する中で、恋愛・結婚に対する疑問が生じるのは当然である。当時の編集長であった章錫琛がスウェーデンの女性思想家であるエレン・ケイから受容した女性思想と、日本のフェミニストである平塚らいてう³⁵から受容した思想との間には大きな隔たりがあるので、次節はそれについて考察したい。そして西洋女性思想が中国でどのように受容されたかを検討すると共に、近代中国における女性解放の課題は、日本と比べてどのような違いがあるのかを考察したい。そのため、ケイの影響を受けつつ、重要な「新性道德」を提示したとされる『婦女雑誌』の編集長としての章錫琛を主に考察の対象としたい。

³³原文「爲母固然是神聖的職務、爲妻是爲母的予備、也是神聖的職務、爲母爲妻的麻煩、不是奴隷的労働、乃是自己實現的手段、應該自己覺得光榮優越的」、「聞歌有感」、夏、『新女性』1926年7月、第1巻第7號、479頁。

³⁴同注25、堺、177頁。

³⁵平塚らいてう（1886年～1971年）：日本の思想家、評論家、女性解放運動家である。1911年に青鞥社を設立し、女性文芸誌『青鞥』を発行した。母性保護論争に加わる一方、1920年に市川房枝らと新婦人協会を結成し、婦人参政権運動に力を注いだ。

第2節 章錫琛編集期の『婦女雑誌』（1921年～1925年）

2.1 章錫琛におけるエレン・ケイ思想の変容

2.1.1 エレン・ケイ思想の概要

エレン・ケイの思想については日本においても下掲の通り数多くの翻訳紹介がある。

<i>The century of the child</i>	『児童の世紀 ³⁶ 』
<i>The education of the child</i>	『児童の教育 ³⁷ 』（『児童の世紀』中の一章の抜粋）
<i>Love and marriage</i>	『戀愛と結婚 ³⁸ 』
<i>The woman movement</i>	『婦人運動 ³⁹ 』
<i>Younger generation</i>	『若き時代人 ⁴⁰ 』
<i>The regeneration of motherhood</i>	『母性の新生 ⁴¹ 』
<i>Morality of woman</i>	『婦人の道德 ⁴² 』
<i>War, peace and future</i>	『戦争、平和及び未來 ⁴³ 』

ここでは論を進める都合上、先行研究の1つである金子幸子の論文からエレン・ケイ⁴⁴の女性思想を概括しておく⁴⁵。金子によればその要点は3つがあり、1つ目は恋愛至上主義、2つ目は児童中心主義、3つ目は母性主義である⁴⁶。

恋愛至上主義とは、根底に個人主義を有する恋愛に基づいて結婚・出産を行い、その結果として種族の改良・発展を希求する主張である。具体的には恋愛・結婚・離婚の自由として論じられている。例えばケイは、次のように述べている。

またその時には人類は、何よりも先づ第一に、戀愛をとほして如何に富んだ生活を得られるものであるかといふことを知るであらう。従つてその時には戀愛は藝術的創造

³⁶原田實訳、『児童の世紀』、新潮社、1916年。

³⁷原田實訳、『児童の教育』、新潮社、1916年。

³⁸原田實訳、『戀愛と結婚』、新潮社、1919年。

³⁹原田實訳、『婦人運動』、大日本文明協会事務所、1916年。

⁴⁰本間久雄訳、『若き時代人』、北文館、1916年。

⁴¹平塚らいてう訳、『母性の新生』、新潮社、1919年。

⁴²本間久雄訳、『婦人の道德』、南北社、1913年。

⁴³本間久雄訳、『戦争、平和及び未來』、大日本文明協会、1918年。

⁴⁴エレン・ケイ（1849年～1926年）：スウェーデンの女性運動家、教育理論家である。主な著書に『児童の世紀』（1900）、「生命線」（1903年～1906年）など多数。

⁴⁵金子幸子、「大正期における西洋女性解放論受容の方法—エレン・ケイ『恋愛と結婚』を手掛かりに」、『社会科学ジャーナル』24（1）、1985年、73～92頁。

⁴⁶金子幸子、「エレン・ケイ女性論の受容—平塚らいてうを中心に」、『平塚らいてうの会紀要』7、2014年、6頁。

となり宗教的敬仰となつて人間の最も価値ある幸福となる。また斯く戀ひ愛する者の完全なる結合は現はれて新らしき生命となる（中略）それに比すれば法律の影響力の如きは全く輕微なものである⁴⁷。

ケイは恋愛のない法的結婚を否定し、例えそれが神権と法律によって保護される結婚の場合であろうとも、恋愛のない性的結合は、必ず不道德であり非道であると主張した。

このようにケイが主張する背景には、ダーウィンやスペンサーの「進化論」の影響がある。ここから彼女の恋愛観は、「個の尊重」の重視と、精神と肉体の一致を追求することが読み取れる⁴⁸。その理由としてケイは、そのような愛情を伴う恋愛こそが、種族の繁栄を導くものだからであるとする。ただしケイは「恋愛の自由」を主張するが、「自由恋愛」については、強く反対した。「自由恋愛」は両性の人格を傷つけ、純粋な恋愛関係を台無しにするものであり、精神にも損失を受けるので避けなければならない恋愛形式だとケイは主張する。このような「自由恋愛」と比べれば「恋愛の自由」は、各自の責任の下にその自由を行使できるものであった。そして後者には永遠に共同生活を営むことへの意志が含まれており、男女が第一に守るべき義務は、彼らの恋愛を貫くことへの義務であるという。

ケイの結婚観は、この「恋愛の自由」から導き出される。それは「一人の男性と一人の女性の、完全な自由結合で、二人の愛情を通してお互い自身と種族を幸福にしようと志すもの⁴⁹」であった。ケイは金銭に基づく共同生活を批判し、愛情が含まれない形式的な結婚は不道德で、破棄すべきであると、「離婚の自由」を説いたが、離婚した両親のもとで生活することは、子供にとって心に傷跡を残すことになり好ましくないと考えている⁵⁰。

このような見地から、ケイは女性の家庭外労働に対しては反対する姿勢を示している。女性の職場への進出は、第一に労働力の過剰から来る男女間の競争をもたらし、労働条件をより一層不利にすると考えた。第二に女性の健康を害し（不妊症や乳児高死亡率）、また子供達の非行化を招くと指摘するのである。

以上がエレン・ケイの女性思想の概要である。従来の性道德の革新と母性の保護を主張するケイの思想が、女性解放思想史上で大きな意義を持つことは言うまでもない。19世紀のスウェーデンにおいてケイの思想は社会のすべての形式を破壊するものとして保守派から攻撃を受け、「不道德の使徒」と非難された。また母性を極端に重視したという点でも、彼女の論説は強い反発を招いた。このような非難を浴びながらも、彼女の著作『恋愛と結婚』は、ドイツ語（1904年）、英語（1911年）など11ヶ国語にわたって広く翻訳さ

⁴⁷エレン・ケイ著、原田実訳『児童の世紀』、久山社、1995年10月、80頁。

⁴⁸同注47、原田訳、「エレン・ケイによれば、キリスト教に基づく旧道徳においては人間の本性は墮落したものと見なされ、人間の本質を精神と肉体とに分離する二元論的見方が強かった。これに対して、新性道徳は人間本性を信頼して個人の自由を重んじ、精神と肉体の一元化をはかるものとされた。ここから精神と肉体の一致する性愛の大切さが説かれ、『恋愛の自由』が主張される」と述べられている。

⁴⁹エレン・ケイ著・小野寺信、百合子訳、『恋愛と結婚』下、岩波文庫、1973年、125頁。

⁵⁰広瀬玲子、「平塚らいてうの思想形成—エレン・ケイ思想の受容をめぐる本間久雄との違い」、『ジェンダー史学 二』、2006年、39頁。

れた⁵¹。

2.1.2 章錫琛の恋愛観について

王蘊章編集期の『婦女雑誌』は五四時期の思想的な潮流の中で批判され、新しい転機を迎えるのである⁵²。そして、1920 年末に、遂に編集長が交替し、章錫琛が新しい編集長となった。

章錫琛（1889～1969）は、浙江省の紹興に生まれた。字は雪村であり、筆名に玉深などがある。彼は紹興山会師範学堂を卒業し、1912 年に商務印書館に入り、『東方雑誌』の日本語翻訳と『婦女雑誌』の編集に従事した。幅広く外国の文化に接した中で、西洋の個人主義思想の影響を強く受け、五四新文化運動の先駆者となった。

1920 年代に、恋愛、結婚についての記事が『婦女雑誌』に多数掲載されている中で、恋愛という新概念に対する疑問が生じるのは当然である。王平陵⁵³は『婦女雑誌』の誌面において恋愛が頻繁に取り上げられたことについて、以下のように批判している。

先生は一切の婦人「問題」を解決するためにまず「恋愛」問題から着手することを主張し、言葉を変えていえば婚姻問題から解決しようとすることに、私は疑問を抱かずにいられない（中略）如何に雙方が人格を持つことができるのかというのは教育上の大問題ではなかろうか（中略）それゆえ先生が「恋愛という概念の提唱」は婦人問題を解決する基本的な条件であると主張し、先生と周建人先生の意見が合致したとしても私はやはり疑問を持っている⁵⁴。

王平陵のこの投稿は、ケイの恋愛問題を話題として『婦女雑誌』の方針を批判し、恋愛より教育の問題が一層重視されるべきという主張を批判する。これに対して、章錫琛は「女性が男性に對し、子供が家長に對して個人の人格、意志の自由を主張することは同じように重要であり、一層重要であって、この程度まで行くためには、恋愛の自由を主張するこ

⁵¹金子幸子「大正期における西洋女性解放論受容の方法——エレン・ケイ『恋愛と結婚』を手がかりに」、『社会科学ジャーナル』24〈1〉、1985 年 10 月、77 頁。

⁵²五四新文化運動は、少なくとも『婦女雑誌』の販売数に影響するほど、女性読者の読書需要を高めてはいなかったのである。陳延媛、『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』、勁草書房、2006 年、143 頁。

⁵³王平陵（1898 年～1964 年）：江蘇省溧陽の人である。原名は仰嵩、筆名は西冷、史痕、秋涛である。1920 年から作品を発表し始め、1924 年に『時事新報』副刊である『学灯』の編集長となった。著作は小説集『期待』、長編小説『茫茫夜』などがある。

⁵⁴原文「先生主張解決一切婦人『問題』先從解決『恋愛』問題着手、換句話就是先從解決婚姻問題起、這層意思、我仍不免有些懷疑（中略）如何能使雙方都有人格這豈不是教育上的大問題麼？（中略）所以先生主張『提倡戀愛觀念』就是解決一切婦人問題的基本運動雖然周建人先生和先生表同意、我卻仍舊有些懷疑」、王平陵・章錫琛、「關与戀愛問題的討論（二）」、『婦女雑誌』第 8 卷 10 號、1922 年 10 月、147 頁。

としかない⁵⁵」と反駁した。章錫琛によれば、中国が「戀愛の自由」を認識すれば、女性
は人格と意志とを認められることになり、男性と対等になることができる。彼は、「戀愛
の自由」が女性問題を解決できる鍵だとしていることが分かった。

そして、恋愛の重要性について章錫琛は、「前の手紙で述べた戀愛は、完全にエレン・
ケイ女史の所謂『靈肉合一』の戀愛のことです（中略）戀愛で婦人問題を解決するという
私の主張は決して空想ではありません（中略）女性を教育、經濟、政治、道德の各方面か
ら解放しようと望むなら、第一には女性の人格を認め（中略）こうして始めて女性が獨立
したと言えるのです⁵⁶」と、女子教育や經濟的自立等の問題の解決は女性解放の手段であ
って目的ではないこと、女性解放の要点は正確な戀愛觀を樹立することだと明確に示して
いる。さらに、戀愛を一切の婦人問題を解決できる最も根本的方法とすることへの疑問に
対しては、彼は「女性問題を解決するには先ず女性の人格を認め、そして女性は男性の性
的な道具として使用されるのではないのだということを認めねばなりません（中略）戀愛が
本當に自由になれば女性問題も解決できる⁵⁷」と王平陵に答え、恋愛問題は女性の教育、
職業問題より先に実現すべきものであることを改めて主張している。

また、1922年8月号の『婦女雜誌』には、恋愛について記事が多数掲載された。「鳳子」
という女性読者による「戀愛の自由についての問いに答えて、その一〜三」という記事を
きっかけに「戀愛の自由と自由戀愛の討論」に展開し、章錫琛、周建人などの編集者もそ
の討論に参加した。

鳳子は、『婦女雜誌』1922年4月号の「離婚問題號」に自らの離婚体験を書いている。
それによれば、彼女は「自由戀愛」と「戀愛の自由」の違いを分析し、「自由戀愛」を「free
love」とし、「戀愛の自由」を「freedom of love」とそれぞれ彼女の定義によった解釈を
している。「自由戀愛」は自由を重視し、性欲から愛情に至る恋愛で、性欲に偏重してい
るが、「戀愛の自由」は恋愛を重視し、愛情から性欲に至る恋愛で、愛情を中心に置いた
ものである⁵⁸。

章錫琛はこの「自由戀愛」に対して、靈魂に至る恋愛として否定し、「戀愛の自由」は
「完全に自由な恋愛」と説いている。その区別について、彼は以下のように述べる。

自由戀愛の恋愛は結婚できるかできないかの自由であり、短期で同居するか一生同
居するか自由であり、別居の結婚か同居の結婚かの自由であり、数人と同時に恋
愛するか一人だけと恋愛するか自由であり、子供に対して責任を持っているかあ

⁵⁵原文「使女子對於男子、子女對於家長、主張個人的人格、意志的自由、實在是同樣的要緊、或者是更
要緊要辦到這一層、就只有主張戀愛自由」、王平陵・章錫琛、「戀愛問題的討論」、『婦女雜誌』第8卷
第9號、1922年9月、122頁。

⁵⁶原文「我前信中所說的戀愛完全是愛倫凱女士所謂『靈肉一致』的戀愛、先生把我當作絕對的精神戀愛
（中略）至於我的主張以戀愛解決婦女問題也并非是一種空想（中略）如果要使女子從教育、經濟、
政治、道德各方面解放出來必先承認女子的人格（中略）這樣女子才能算作獨立」、同注55、王・章、
148頁。

⁵⁷原文「我們要解決問題必先承認女子的人格、要承認女子的人格必先承認女子不是供男子泄欲的器具（中
略）戀愛真正自由了婦女問題也便解決了」、同注55、王・章、149頁。

⁵⁸鳳子、「我的離婚」、『婦女雜誌』第8卷第4號、1922年4月、168頁。

るいは持っていないかの自由であり、肉体しか含まれない性交か靈肉合一かの性交の自由である（中略）このような恋愛はあまりに自由過ぎる。だからこそエレン・ケイはこれに反対したのである⁵⁹。

章錫琛は「自由」ではあるが肉体の関係しか含まれない恋愛を「自由恋愛」とし、ケイが反対したのはこのような恋愛であると強調した。また、「恋愛の自由」に対して彼はケイの文章を借りて、以下のように指摘する。

所謂恋愛の自由はエレン・ケイが「ある種の感情の自由」と解釈したものであり、異性からいかなる干渉も受けない恋愛の自由があるということである。しかし恋愛が成立して後ふたりは必ず夫婦とならねばならず、ふたりは恋愛が破綻するまで、第三者と恋愛関係になることはできず、家庭を作り、生まれた子供に對し相当の責任を負わなければならない。所謂自由恋愛のように何でも自由というわけにはいかない。これこそが恋愛の自由である。近頃多くの人がこの二つの名詞を混同しているのは、実に大きな誤りである⁶⁰

その「恋愛の自由」はまさに「自由恋愛」の反対語として、恋愛の中で本当の「自由」を見出し、家庭に対して、子供に対して責任を果たすこととしてケイが推奨した神聖な恋愛形式である。しかし、ケイの「恋愛の自由」は恋愛という条件において、相互の自由意志を尊重するものである。恋愛と結婚は一致されるべきだが、それは恋愛の自由によって家庭を創るためではなく、人類のより良い進化のために優秀な子供を産むことを目的としていた。種族の繁栄は、恋愛によって融合し生殖欲を伴った性愛によって成り立つので、それ故に恋愛は神聖視された。章錫琛が示したのは、当人に純真な同棲生活と両者の育児の意志があれば、たとえ結婚が行われなくとも二人が結ばれることは正当であるとされた。即ち結婚しなくても愛情があれば二人の恋愛は「恋愛の自由」である。

一方、章錫琛の説明からはケイが重視した「恋愛の神聖」という言葉は殆ど見られない。ただ恋愛は必ず結婚を導くものであり、決してこの結婚は第三者に破壊されてはならないと彼は考えていた。恐らく章錫琛は、ケイの「恋愛の自由」において重視されるべき「相互意志の尊重」という部分については意識していなかったと思われる。これは彼自身がエレン・ケイの恋愛観に対して理解不足であったと言えるのかもしれない。

⁵⁹原文「自由戀愛的戀愛、是有可結婚可不結婚的自由的、是有可僅僅一朝相處或可終身相守的自由的、是有可異居或可同居的自由的、是有可同時戀愛多人或只戀愛一人的自由的、是有對於子女可負責任或可不負責的自由、是有可只有性交或可兼有靈感的自由的（中略）這種戀愛因為太自由一卻也未必是放縱一了所以愛倫凱要反對他」、章錫琛、「讀鳳子女士和 Y.D 先生的討論」、《婦女雜誌》第 9 卷 2 號、1923 年 2 月、48 頁。

⁶⁰原文「所謂戀愛的自由則如愛倫凱女士所說『只是一種感情的自由』就是對於異性有不受任何干涉的戀愛的自由、但至於有了戀愛以後則此兩異性必須成為夫婦、直到戀愛破裂為止、不能再和第三人發生戀愛、並且必須組織家庭、必須對所生的子女負相當的責任、不是像所謂自由戀愛的都可以自由、這便是所謂戀愛自由、近來有許多人往往把這兩個名詞混而為一實在大誤」同注 55、王・章、148 頁。

ここで、章錫琛が恋愛の自由を論じる際に引用したのはケイの『児童の世紀』である。経済的独立等の問題を女性解放の手段とするのではなく、社会主義という立場に立って、根本的には女性の「人格」を認め、「性」を解放し、それに従って種族の進化によって社会改造の完成に至るとというのが彼らの目的であったと言えよう。

2.1.3 章錫琛の婚姻観について

また、エレン・ケイの恋愛観のもう一つの大きなテーマは「自由離婚」である。しかし、ケイは、「古い時代の恋愛がとくに恐れていたのは、相手方が結びつきを十分認識していないのではないかと疑った⁶¹」ためであると述べ、「自由離婚」はどちらも相手方に苦痛を与えないので、法律により互いの自由を制限することはこのような関係のもとでは無意味であると主張する。当時中国の一般国民にとっては、婚姻拒否や婚約破棄など自由離婚と自由恋愛を実践する行為は受け入れがたいものであった⁶²。

例えば、周建人は、多くの中国男性知識人が「自由離婚」の四文字に脅かされ、彼が「人間の性質はそもそも悪いので、もしも婚姻は自由に離散できると言えば、道徳は必ず墮落し、風紀は必ず破壊され、男女は必ず亂れてしまうに決まっている⁶³」と述べている。そして、進歩的な姿勢で読者の注目を集めていた『婦女雑誌』において、ますます論争を呼び起こしていた離婚問題を、編集長の章錫琛は第8巻第4号の特集号のタイトルに選んだのである。

1922年4月の『婦女雑誌』の「フェルステル博士の離婚反対論」（福斯德博士的離婚反対論）という文章では、章錫琛は自由離婚を主張するエレン・ケイと、厳格な一夫一妻制を主張するフェルステルの論説を比較した。フェルステル博士は恋愛の自由を病的な現象と考え、ケイが提唱した「離婚の自由」はただ肉体恋愛の一種の形式にすぎないとし、人間の本性は放縦になりやすいので、ある形式で制限しなければならず、その方法は「一夫一妻」であると指摘した⁶⁴。

章錫琛が率いた改革時期の『婦女雑誌』は、多くの西洋の自由恋愛や自由結婚思想を真に受け入れる「先覚者」として、読者からも大いに歓迎された。中国の伝統的な離婚法や貞節観念、そして二重の道徳観を批判すると同時に、自由離婚に対する賛否両論を紹介しているものの、「フェルステル博士の離婚反対論」の文末には「私は、たとえフェルステルの離婚反対論が完全に正しいとしても、わが中国には決して適用すべきではないと思う、なぜなら中国はそもそも一夫一妻制の国ではなく、だからフェルステルが要求した厳格な舊道徳を守れることはあり得ない。我々は當然彼の舊道徳を土台として離婚の自由に反対することができない、それに彼も恋愛は結婚の基礎であると主張するが、我々の結婚は依

⁶¹エレン・ケイ著、小野寺信・百合子訳、『恋愛と結婚』、1997年、新評論、302頁。

⁶²史夙儀、『中国古代婚姻與家庭』、湖北人民出版社、1987年7月、145頁。

⁶³原文「人性是壞的、如果婚姻說是可以自由解散、則道徳必定要墮落、風化必定要敗壞、男女必定要混亂」、周建人、「離婚問題釋疑」、『婦女雑誌』第8巻4號、1922年4月、16頁。

⁶⁴瑟盧、「福斯德博士的離婚反対論」、『婦女雑誌』第8巻4號、1922年4月、78頁。

然として賣買的である⁶⁵」という言葉を加えた。このように章錫琛は、離婚という婚姻問題に対して、中国と欧米の社会的な背景の差異を強調する。1920年を皮切りに欧米の自由離婚の理論が大量に輸入され始め、章錫琛が編集長の地位につくや、『婦女雑誌』はさらに積極的に離婚問題に関する討論を進行させた。その結果、1922年の「離婚問題號」では婚姻観の討論がピークに達した。男性知識人は西欧の離婚理念に同調すると同時に中国の現状を分析し、自由離婚こそが人道と男女平等の精神に符合すると主張した。

1925年1月に発刊された『婦女雑誌』の「新性道德特集號」には、章錫琛の「新性道德とは何か」、周建人の「性道德の科学的基準」、「現代性道德の傾向」、沈雁氷の「性道德の唯物観」、沈澤民の「エレン・ケイの『恋愛と道德』」など新性道德に関する文章が掲載された。周建人の記事における「同時に二人以上の相手と恋愛することについて、本人自身の意志で他人に害を与えなければ、道德上決して問題にならない⁶⁶」という文章に対して、章錫琛はさらに「配偶者雙方の同意があれば、一夫二妻または二夫一妻のような不貞なケースがあっても、社会や他人に損害を及ぼさない限り不道德とすることはできない⁶⁷」と指摘した。

章錫琛はケイの自由離婚の内容をそのまま受容した。離婚後の両親の責任感については、ケイの見解は以下のようなものである。

子どものないとき、新しい人たち⁶⁸の間に起こる離婚問題はこういう種類のものなのである。だが、子どものある場合には——これが普通であるが——互いの見込みちがいではあっても、自分たちの血をわけた子どもを協力して育てる責任からは免れるわけにはいかないと彼らは考えるのである⁶⁹。

両親は協力して子供を育てるという責任感を持つべきことが強調されているが、ここで注目すべきことは、ケイが唱えた子どもの養育問題は、章錫琛の論説には殆ど見られなかったことである。その結果として、恋愛自由の主張は恋愛に基づく真の一夫一妻の結婚の実現と結びつけて論じられ、伝統的結婚批判の重要な原理となった。

実は、エレン・ケイの受容に関する先行研究は少なくないが、らいてうと英文学者の本間久雄との比較に関する研究を除いて、日中両国間のケイ思想受容の比較についての研究は管見の限りごくわずかである⁷⁰。ここで筆者の関心を惹くのは、ケイの影響を受けた晶

⁶⁵原文「我以爲福斯德反對離婚的主張即使完全正確、在我們中國卻萬萬不能適用、因爲中國本不是一夫一婦的國家向來並不守福斯德所主張嚴格的舊道德的。我們當然不能拿他的舊道德做招牌來反對自由離婚況且他也主張結婚須以戀愛爲基礎而我們的結婚依然是買賣式」、同注 64、瑟、82 頁。

⁶⁶建人、「性道德之科学的標準」、『婦女雑誌』第 11 卷第 1 號、1925 年 1 月、21 頁。

⁶⁷章錫琛、「新性道德是什麼」、『婦女雑誌』第 11 卷第 1 號、1925 年 1 月、15 頁。

⁶⁸エレン・ケイは「新しい人」を「新時代の人間」の意味で用い、「古い時代の人」と正反対に意味付けをした。同注 61、小野寺信・百合子『恋愛と結婚』、新評論、302 頁。

⁶⁹同注 61、小野寺信・百合子、303 頁。

⁷⁰エレン・ケイ思想の受容に関する先行研究は以下のものが挙げられる：

① 広瀬玲子「平塚らいてうの思想形成—エレン・ケイ思想の受容をめぐる本間久雄との違い」、『ジェンダー史学』2、2006 年、35～48 頁。

子らの女性解放運動者の女性運動に関する文章が中国の『婦女雑誌』に多数翻訳されたが、らいてうは女性進歩グループの「青鞥社」を創設し、「母性」と「子供」の保護を提唱し、当時における日本の女性解放思想を語る上で触れなければならない一人であるにも関わらず、彼女に関する作品は一つも『婦女雑誌』で本格的に紹介されなかったということである（表 11 参照）。

表 11. 章錫琛編集期の『婦女雑誌』に翻訳された主な日本女性思想家の作品

原著者	翻訳者 (筆名)	出版年月	バックナンバー	タイトル	日本語（筆者訳）
與謝野晶子	幼雄	1921 年 11 月	第 7 巻第 11 號	女子的經濟獨立与家庭	女子の經濟獨立と家庭
	瑟	1922 年 8 月	第 8 巻第 8 號	戀愛與性欲	戀愛と性欲
	瑟	1922 年 8 月	第 8 巻第 8 號	女子是道德的	女子は道德的である
	張嫻	1924 年 3 月	第 10 巻第 3 號	給聰明的男子們	聰明的な男性たちへ
	無競	1924 年 12 月	第 10 巻第 12 號	女子活動的領域	女子の活動の領域
	張嫻	1925 年 2 月	第 11 巻第 2 號	新道德的要求	新道德の要求
	CY	1925 年 5 月	第 11 巻第 5 號	什麼是「女様」？	「女様」とは何か？
	無競	1925 年 6 月	第 11 巻第 6 號	女子的自修自學	女子の自修自學
	無競	1925 年 6 月	第 11 巻第 6 號	女子與高等教育	女子と高等教育
	張嫻	1925 年 7 月	第 11 巻第 7 號	我的備忘錄	私の忘備録
山田わが	拙菴	1921 年 12 月	第 7 巻第 12 號	科學在人生上的地位与現代婦女	科學が人生に立つ地位と現代婦女

-
- ② 金子幸子「エレン・ケイ女性論の受容：平塚らいてうを中心に」、『平塚らいてうの会紀要』（7）、2014 年、5～14 頁。
- ③ 加藤祐子「『母性』の誕生と変容—エレン・ケイから母性保護論争までを通して」、『中央大学大学院研究年報』（28）、1998 年、127～138 頁。
- ④ 金子幸子「大正期における西洋女性解放論受容の方法—エレン・ケイ『恋愛と結婚』を手がかりに」、『社会科学ジャーナル』24（1）、1985 年 10 月、73～92 頁。
- ⑤ 内藤寿子「大正期の〈エレン・ケイ〉—翻訳・解説・受容の力学」、『文藝と批判』9（4）、2001 年 11 月、14～25 頁。

山川菊栄	瑟廬	1920 年 6 月	第 6 卷第 6 號	婦女解放與男性化之杞憂	婦女解放と男性化の杞憂
	李達	1921 年 6 月	第 7 卷第 6 號	紳士閥與婦女解放	紳士閥と婦女解放
	嬰彦	1922 年 2 月	第 8 卷第 2 號	男女爭鬥之過去現在及將來	男女争闘の過去現在と將來
	味辛	1922 年 6 月	第 8 卷第 6 號	産兒制限與社会主義	産兒制限と社会主義
	高山	1924 年 6 月	第 10 卷第 6 號	日本婦女的自由職業	日本婦女の自由職業
	高山節	1924 年 6 月	第 10 卷第 6 號	日本婦女職業生活的概況	日本婦女職業生活の概況
	一鷗女士	1925 年 1 月	第 11 卷第 1 號	貴婦人生活解剖	貴婦人生活の解剖
伊藤野枝	瑟廬	1920 年 10 月	第 7 卷第 10 號	貞操觀念的變遷和經濟的價值	貞操觀念の變遷と經濟的な価値
市川房枝	張嫻	1924 年 6 月	第 10 卷第 6 號	美國的職業婦女	アメリカの職業婦人
	祁森煥	1924 年 7 月	第 10 卷第 7 號	婦女都市俱樂部的介紹	婦女都市倶楽部の紹介
	無競	1924 年 10 月	第 10 卷第 10 號	美國婦女運動的左・右翼	アメリカ婦女運動の左翼・右翼

先行研究によれば、エレン・ケイの恋愛、結婚論の受容から出発した平塚らいてうは、大正時代のデモクラシー潮流の中で評論家として活動し育児をしながら、ケイの思想や社会学の知識によって補強しつつ、自身の思想を作り上げていった。次節では、平塚らいてうと章錫琛という二人の人物に焦点を当て、エレン・ケイの「恋愛の自由から引き出された性道德観」の受容の違いを通して、二人の相違点について比較を試みたい。

2.2 日中両国におけるエレン・ケイ思想受容の比較 —平塚らいてうと章錫琛を中心に

2.2.1 日本におけるエレン・ケイ思想の受容と変容

エレン・ケイが『恋愛と結婚』を出版したのは 1903 年のことであった。ケイの名前が本格的に日本に紹介されたのは、1911 年の金子築水（1870～1937）の「現實教」（人間改造論）と 1912 年の石坂養平（1885～1969）の「自由離婚説」においてである⁷¹。らい

⁷¹同注 50、広瀬、38 頁。

てうはこの二人の紹介によってケイの存在を知り、1913年1月～1914年12月にかけて『青鞥』に『戀愛と結婚』の抄訳を掲載した。

そして、エレン・ケイの女性思想の受容が論じるにあたって、ケイの影響を大きく受けた人物の一人である本間久雄（1886年～1981年）⁷²について触れたい。彼はらいてうと同じ1886年生まれであり、ほぼらいてうと同時代にエレン・ケイの説を受容している。金子氏によれば、本間はケイの思想からケイの独特な人生観に感銘を受け、彼の「自然主義の宿命観から脱する⁷³」契機となったという。

らいてうや本間が受容したケイの思想、特に重要な部分である恋愛観の認識の違いについての考察は、広瀬玲子の先行研究で提起されており、以下のように整理できる。

両者のエレン・ケイの思想の受け止め方の違いは2点ある。第1には、らいてうはケイの恋愛至上主義、霊肉一致、恋愛の自由などの新性道德思想に惹きつけられながらも最大の関心を寄せたのは恋愛関係についてであったことである。本間はらいてうと同様にケイの著作を読んだが、ケイの女性思想の種族・人種改良という側面にらいてうより強い関心を寄せ、むしろ「種族の改善」という主張を強調した。第2には、母性主義についての理解である。らいてうは母性尊重を実現するために、問題の根本的解決は社会改造にあるとして、婦人参政権獲得を目指した。一方、本間は婦人参政権の獲得もしくは婦人の職業従事を、彼が考えた「種族改善」のための必要条件の下位に位置付け、夫は「家を代表」し妻は「家事を主管」という考えに疑問を抱くことはなかった。このような本間久雄の限界について、広瀬は「良妻賢母主義に絡めとられる危険性を大いに有していた⁷⁴」と指摘している。

本間久雄は、数多くケイの文章を翻訳し、自分の思想も加えて数冊のエレン・ケイを紹介する本を出版した。日本と同様婦人問題に関心を持っていた中国の知識人界でも広く注目された。一部の知識人は日本語に通じていたため、いち早く日本の情報に注目し、女性問題の学説を本間久雄、堺利彦など日本の思想家に求めたのであった。そして、当時の『婦女雑誌』で編集長を務めていた章錫琛らにより、1920年代にケイの思想が中国に紹介された。

中国におけるエレン・ケイ思想の受容は、次節で明らかにしていきたい。

2.2.2 中国におけるエレン・ケイ思想の受容と変容

このように自らの女性思想を展開したエレン・ケイであるが、中国で彼女の思想は、どのように受容され、吸収されていったのだろうか。中国のエレン・ケイ受容の概要は以下の通りである。最初にエレン・ケイを紹介した文章は1918年1月『新青年』に掲載された「女子問題⁷⁵」であったが、著者の陶履恭（1887年～1960年）は、ケイの思想に対し

⁷²本間久雄:英文学者、国文学者である。イギリス留学後、早稲田大学文学部教授となり、また美術、演劇批判も行った。『明治文学史』、『エレン・ケイ思想の真髄』などの著作がある。

⁷³同注 46、金子、79 頁。

⁷⁴同注 50、広瀬、45 頁。

⁷⁵陶履恭、「女子問題」、『新青年』第 4 巻第 1 号、1918 年 1 月、19 頁。

て知識が不足しており、ケイを「現代の女子四人著述家⁷⁶」の中の一人の人物として言及したにとどまった。その後、1919年2月の『婦女雑誌』で袁念茹の「愛倫幹女史傳⁷⁷」（エレン・ケイ女史伝記）が掲載され、エレン・ケイの生涯が初めて紹介されたが、そこではエレン・ケイが「結婚して以来、著作することに夢中になり⁷⁸」という事実と異なる言及がなされている。

その後1920年3月号の『婦女雑誌』で初めて本格的にエレン・ケイの著作『愛情と結婚』が紹介され、茅盾（沈雁冰）⁷⁹による抄訳が掲載された⁸⁰。しかし、この翻訳は誤訳も多く、女性運動の基礎的な知識を持っていなかった当時の男性知識人にとっては、エレン・ケイの著作は非常に理解しがたいものであったと考えられる。茅盾はその抄訳の最後で「エレン・ケイ女史の傑作は既に全世界に知られているが、わが国では知られておらず、現在国内の女性運動が盛り上がりつつある中で、ケイ女史の説が未だに紹介されていなかったことは非常に残念なことだと思われる⁸¹」と述べた。このように、彼は、女性問題に取り組むなかで、ケイの思想に触れ、それに対する考察を深めていく。また、日本で訳された評論が中国国内で紹介されることが増える中、1921年2月に章錫琛は「愛倫凱女士與其思想⁸²」（「エレン・ケイ女史とその思想」）を『婦女雑誌』第7巻第2号で発表し、エレン・ケイの略伝とともに、その主な論点についても分かりやすく紹介した。

1920年以後になると、欧米の原書から直接翻訳したものが多くなり、日本からの重訳に頼ることはなくなっていく。しかし、翻訳と専門家の人材不足は完全に解消されたわけではない。特に「戀愛觀」のような領域ではもともと専門家がおらず、思想家や文学者にとって「戀愛觀」はあまり重視されなかった。さらに一般の人にとっては、欧米の大量の文献から恋愛に関する必要な資料を見つけ出すことはなかなか困難である。実際日本でもエレン・ケイは当初恋愛に関する研究をしている専門家によって紹介されたのではなく、平塚らいてうのような女性運動家や、本間久雄のような文芸批評家達によって紹介された。またそれと同様に中国でも当時、英語に精通し、西洋文化を全般的に理解する女性問題の専門家は殆どいなかったのである。章錫琛のような日本語に通じる知識人が日本の著作の女性問題に関する文章を翻訳することは自然であったことと言える。

⁷⁶陶履恭が挙げる現代女子四人の著述家は、エレン・ケイの他に、イギリスのヘンリー・フォーセット（Henry Fawcett 1833～1884）、南アフリカのオリブ・シュライナー（Olive Schreine 1855～1920）とアメリカのジェーン・アダムズ（Jane Addams 1860～1935）である。

⁷⁷袁念茹、「愛倫幹女史伝」、『婦女雑誌』第5巻第2号、1919年2月、94頁。

⁷⁸原文「自出嫁后、専事著作」、同注77、袁、96頁。

⁷⁹沈雁冰（1896年～1981年）：中国の小説家、評論家である。1916年から商務印書館編訳所で働き始め、1919年に『小説月報』など商務印書館の刊行物において初期の文芸評論活動を開始する。それと同時に、社会活動に積極的に関わり、国民革命に参加した。

⁸⁰四珍「愛情與結婚」、『婦女雑誌』第6巻第3号、1920年3月、55頁。

⁸¹原文「愛倫凱女士的傑作久已風行全球、獨我中國還沒有人講起、現在國內女子運動大興、而於女士的學說卻尚沒人介紹、這真是一大遺憾」、同注80、四珍、60頁。

⁸²瑟廬、「愛倫凱女士與其思想」、『婦女雑誌』第7巻第2号、1921年2月、36頁。

以上をまとめると、中国はまず日本を媒介として、エレン・ケイの恋愛観の受容を行なったことは明白である。一方その思想が、女性解放の理論的根拠としても理解されるようになったのは、五四運動よりも後のことであった。

2.2.3 平塚らいてうと章錫琛の比較

従来の性道徳の変革と恋愛の自由を主張するエレン・ケイの思想が、日本の女性解放思想研究においても巨大な意義を持つことは言うまでもない。日本の進歩的な書籍を翻訳することが有効な手段であると『婦女雑誌』の編集者らに認識され、そのため、エレン・ケイの著作が翻訳された著作が広く読まれるようになった。

中国よりやや早い時期に、平塚らいてうは彼女が主宰した女性解放誌『青鞥』でケイの『戀愛と結婚』を抄訳し、ケイとの出会いは、「まさに『新しき女』の生きるべき道への道標となった⁸³⁾」と言える⁸⁴⁾。「戀愛が一切の婦人問題を解決できる」と確信した章錫琛と異なり、平塚らいてうは以下のように述べる。

本当の婦人解放は、婦人の家庭生活と職業生活との調和において見出さるべきもので、これは二つの生活を両立せしめ得るところの社会制度の中に求めるより外ありません。すなわち、わたくしが夢想する社会においては、すべての婦人が労働の自由を得て、男子と同様にあらゆる方面の社会的任務に従事し得るとともに、家庭における母の仕事もまた他の男女の仕事と同様(否それ以上にさえ)重要な社会的任務であって、それによって、収入は無論、社会的地位と一個の人間としての権利を与えられるのでなければなりません。母性保護制度も単に母の労働を禁止するというような消極的なものでなく、ここまで進んだとき、すべての婦人を完全に解放することが出来るでしょう⁸⁵⁾。

以上のように、平塚らいてうすべての女性が「労働の権利」を得ることを主張し、同時に育児など家庭生活の社会的、経済的価値の改善を唱えた。女性が内的に「一個の人間」としての人格を認められるだけでなく、外的に経済的に自立することを目指すべきだという社会的な視線を持っていた。

彼女は大正時期の数多くの著名人による恋愛事件を、単に時代の風俗としてではなく、女性の自由への道程とみなし、新性道徳観の形成に必要な条件として評価している。しか

⁸³⁾ 香内信子、『資料母性保護論争』、ドメス出版、1984年、86頁。

⁸⁴⁾ らいてうは、「わたくし自身は、少なくともケイのものを読まなかったら、おそらく恋愛はしても、結婚生活には入らなかった」と回想した。平塚らいてう、「婦人解放思想」、『元始女性は太陽であった(下)』大月書店、1971年、492頁。

⁸⁵⁾ 平塚らいてう、「むしろ女子の性を礼拝せよ」(初出1924年)、『むしろ女子の性を礼拝せよ』、人文書院、1977年、169頁。

し、彼女は大杉栄（1885 年～1923 年）⁸⁶と伊藤野枝（1895 年～1923 年）⁸⁷の恋愛については、「自由戀愛」と位置づけて、次のように述べている。

いったい自由戀愛というものは、氏らが意味するような、一種の一夫多妻主義（ある時は多夫一婦ともなり、多夫多妻ともなる）くわしく言えば、相愛の男女は別居して各自獨立の生活を営み、またもしこれらの男女にして他の男女に戀愛を感じれば、それらと同時に、しかも遠慮なしに結合することができるのみならず、さほどの戀人とも愛がさめれば、子供の有無にかかわらず、いつでも勝手に別れることができるというような無責任な、無制限な、したがって共同生活に対する願望も、その永續の意志をも欠いた性的關係でありましょうか。これは自由戀愛の甚だしき亂用でなくて何でしょう⁸⁸。

即ち、らいてうにとっては、結婚の問題が、愛情があれば自由に結婚また離婚できるということではないと考えられる。1916 年 4 月、『青鞥』の主力として活躍していた伊藤野枝は、夫の辻潤と離別、子供と『青鞥』編集者の仕事を捨て、アナキズム運動の中心人物であった大杉栄の愛人となった。1917 年、大杉は妻と別れ、周囲から「悪魔」と呼ばれた野枝と共同生活に入った。野枝の選択は「自由戀愛の亂用」とされ、その恋愛には子供に対する配慮がないことに対して、「無責任に非人格的」とらいてうは非難した。即ち、らいてうの求めた「戀愛の自由」とは、永続的な共同生活とそれに伴う子供に対する責任感を持つものを意味したものである。

彼女は大杉栄と伊藤野枝のような恋愛観やその実行について、たとえ恋愛があっても不道德な自由恋愛として認識した。奥村との共同生活を実践する中で「子どもの権利」の重要性に目覚めたらいてうは、現行の社会制度、結婚制度への批判を強めていく。女子労働者の保護と労働条件の改善を唱えると共に、個人の自由と権利を抑圧する戸主制度、妻を無能力と見なす明治民法と、姦通罪に反対した。これらの点も彼女の理解と章錫琛が受容した恋愛の自由説を区別する点であると考えられる。「自由戀愛」に対して、らいてうが理解したことは「放縦な、非人格的な自由戀愛のように、あるいは、空想的な戀愛至上主

⁸⁶大杉栄:大正期の代表的アナキスト。東京外国語学校仏語科在学中、平民社に参画し、社会主義者となる。卒業後、幸徳秋水の影響でアナキストとなった。関東大震災の混乱の中で、伊藤野枝及び甥とともに甘粕正彦によって殺害された。

⁸⁷伊藤野枝:無政府主義者。結婚問題を通して家族制度に疑問を持ち、平塚らいてうによって創立された青鞥社に参加した。1916 年大杉と交際に至ったことから、大杉の妻及び神近市子と四角関係になり、神近は葉山日蔭茶屋で大杉を刺して重傷を負わせた。これは日蔭茶屋事件として知られる。以降野枝は大杉と活動を続けたが、関東大震災直後の 1923 年 9 月 16 日、大杉と共に殺害された。

⁸⁸平塚らいてう、「いわゆる自由戀愛とその制限」(初出 1917 年)、『平塚らいてう著作集 2』、大月書店、1983 年、256 頁。

義のようにも誤解⁸⁹」されたのである。らいてうは極力このような自由恋愛といわれるものに反対した⁹⁰。

エレン・ケイは「子どもは、親の墮落の犠牲になってはならない。いかなる場合においても、子どもは親に對してもっとも清廉な裁判官である⁹¹」と唱えている。らいてうは明らかにケイの思想を受容したことで、子供の権利を毀損し、侵害することを恐れずに自己の感情を抑制し、結婚を固辞し、もしくは離婚を選んだ男女の行為について「低劣な愛⁹²」と認めた。

エレン・ケイが反対したのは、恋愛のない結婚であり、自由離婚に賛同することも、この理念を貫くためだったのである。しかし、ケイはまた結婚当初は恋愛により結ばれたとしても、時間が経つと愛情が薄れてしまい、現状を維持している婚姻関係は不道德であるとする⁹³。ケイが重視したのは、寧ろ結婚した男女相互における「人格の自由⁹⁴」であったと言える。

平塚らいてうによる自由離婚の主張は、「新性道德のカオス」という文章から見られる。1925年の章・周の「新性道德論争」より4年ほど後に掲載されたこの文章は、「今日私たちは、二十年前新しき女たち⁹⁵によってはじめて叫び出されたあの新性道德⁹⁶」を再吟味して再認識する必要があると強調する。またらいてうは、日本で当時ますます激増する離婚現象や、女性が結婚をしないこと、あるいは結婚しても母性を持たないことを批判し、これが家庭の破壊にも繋がっていると考えた。

性生活の一つの形態である一夫一婦は、ブルジョア的所有の觀念のうえに立てられている。ところが、一人の人間が他の人間を所有するということは許されない。お互いは完全に自由でなければならないというのである。そうしてこれはいうまでもなく、一夫多妻的、多夫一妻的、あるいは多夫多妻的な諸形態の是認となるのである。しかしかつて個人主義的新性道德の原理であった相互の個人的恋愛を基礎とする一夫一婦の結合の中に（中略）お互いの貞節はその自然の発露であり、表現であって、自由の抑圧の結果ではない。恋愛による自由の自主的制限とでも言えよう⁹⁷

⁸⁹平塚らいてう、「婦人運動五〇年をかえりみてー『青鞥』創刊のころ」（初出 1961 年）、『平塚らいてう著作集 7』、大月書店、1983 年、400 頁。

⁹⁰同注 90、平塚、257 頁。

⁹¹同注 61、小野寺信・百合子、352 頁。

⁹²平塚らいてう、「結婚の道德的基礎」（初出 1918 年）、『平塚らいてう著作書 3』、大月書店、1983 年、16 頁。

⁹³同注 61、小野寺信・百合子、308 頁。

⁹⁴同注 61、小野寺信・百合子、339 頁。

⁹⁵「新しき女たち」でらいてうが意味するのは、恐らく 19 世紀後半に登場したフェミニストの理想を體現した女性らであり、彼女らが 20 世紀にいたってもフェミニズムの思想と運動に深く影響を及ぼし続けたことを指すと筆者は推測する。

⁹⁶平塚らいてう「新性道德のカオス」（初出 1929 年）『平塚らいてう著作集 5』、1984 年、大月書店、130 頁。

⁹⁷同注 97、平塚、128 頁。

らいてうは「離婚の自由」を認めていたが、それに関しては殆ど論じなかった。そして、彼女が女性の個人的自由と経済的独立を確保するという結合は「今日といえどもなおわたくしどもが考える性関係の最高の理想的内容であり、また形態であるに相違ない⁹⁸」と理想の恋愛形式を語った。

章錫琛は自身が編集した 1925 年新年号の『婦女雑誌』の「新性道德號」に、「新性道德是什麼⁹⁹」（新性道德とは何か）の一文を掲載し、「一夫二婦、二夫一婦は不道德とは見做せない」と発言をしたところ、陳百年の「一夫多妻の新しいお守り¹⁰⁰」という非難を招き、また、魯迅の「時期尚早¹⁰¹」という批判を受けるに至った。

男性の立場に立つ章錫琛と周建人の場合、「新性道德論争」はあくまで男性自身のためのものであり、性道德の角度から男女平等を積極的に提唱し、最終的には「種族の改善」という目標へ進展すべきものであった。一方、女性の立場に立つ平塚らいてうは、「母性保護論争」を主張する中で、「国が母性を保護する」ことを要求し、母親が自己の権利と利益を守るために国家からの援助を受けることを主張した。らいてうとケイは「恋愛が変化する」と認識し、「一夫一妻」以外の恋愛形式は決して道德と認めない。むしろ自主的な制限として「一夫一妻」を存続するという理解がある。また、不健康な子どもを誕生させない限り、社会に害を与えなければ、如何なる結婚式でも不道德とは認めないという章錫琛と周建人の考えは、ケイの影響を受けながら一種の優生思想としての「新性道德」理論を社会に提起したのである。以上のことからすれば、五四運動時期において、一見女性解放を訴えているかにみえる論調は、実際にはむしろ編集者である男性達の期待に添った女性像であったと評価できる。

以上、本節では日本大正デモクラシーの女性解放家・平塚らいてうと中国五四新文化運動の代表・章錫琛という二人の人物に焦点を絞り、エレン・ケイの「恋愛の自由から引き出された性道德観」の受容の違いを通して、二人の差違について考察を試みた。

その差違は、第一に、らいてうはケイの思想の恋愛至上主義という思想に傾倒しながらも最も関心を寄せたのは、恋愛関係・夫婦関係にある男女の関係性をいかに対等、平等に持ちうるかという点であった。彼女は男女平等によって恋愛の意義を見出し、さらに勇敢に実践した。らいてうを章錫琛と比較すると、種族保存と生殖のほかに女性のなすべきことはないのかと問い、女性の社会的な地位を求める点で、らいてうはケイに近いとわかる。

第二には、らいてう、ケイの両者ともに「恋愛観」は「来るべき子供の権利の保護」と「婦人の社会的な自立」のためであるという共通の認識があったことがわかる。章錫琛は不健康な子供を出生しない限り、即ち社会に害を与えなければ、如何なる結婚形式でも不道德と認められないという「自由恋愛」の傾向を見せている。一方のらいてうとケイは「恋

⁹⁸同注 97、平塚、130 頁。

⁹⁹章錫琛、「新性道德是什麼」、『婦女雑誌』第 11 巻第 1 号、1925 年 1 月、15 頁。

¹⁰⁰百年、「一夫多妻の新護符」（初出『現代評論』第 1 巻第 14 期、1924 年 3 月 14 日）、『新性道德討論集』、開明書店、1925 年、37 頁。

¹⁰¹魯迅が 1925 年 5 月 15 日に出版された『莽原』第 4 期の「編完寫起」で「外国ではすでに言い古されたことではあっても、外国は外国である」と章錫琛の言論はあまりにも先進的過ぎると批判した。

愛が変化する」ことを認可するが、「一夫一婦」以外の恋愛形式は決して道徳と認めない、むしろ自主的な制限として「一夫一婦」を存続するのが彼女らの認識である。このように章錫琛の女性解放思想は男女の結合によって出生した子供が社会に多大な影響を与えるか否かを重視する優生思想を持ち、ケイの思想から変容した独自の性道徳観だと考えられる。

エレン・ケイの思想は日本と中国で異なる形で受容されており、平塚らいてうがケイの思想から受容したのは主に「母性」の保護であり、与謝野晶子との母性保護論争などに顕著に見られる。章錫琛は「恋愛」問題の解決により一切の婦女問題を解決できると確信し、その恋愛による結合によって出生した子供が社会に多大な影響に着目する優生思想を持つ、らいてうのような個人的な「恋愛実践者」と比べると、章錫琛は全体的な「恋愛唱導者」と言えるであろう。

2.3 章錫琛編集期の『婦女雑誌』の社会的な影響

章錫琛が女性思想を討論した際に、単にエレン・ケイの思想を利用するだけではなく、外国で展開された女性解放運動の情况进行したり、離婚問題、産児制限、婦女運動、社交公開などのテーマを積極的に取り上げたりして『婦女雑誌』の誌面内容は1921年から大きく変化した。貞操問題、娼妓問題、職業問題、新性道徳問題などについての特集号が相次いで組まれるようになった。

また、「對於自由離婚的主張和反對」（自由離婚の主張と反対について）（第8巻第4号）、「我之理想的配偶」（私の理想的な配偶者）（第9巻第11号）、「我的職業生活」（私の職業生活）（第10巻第6号）など特集号の原稿を読者に募集したり、「自由論壇」（第9巻第3号）、「通訊」（第9巻第9号）、「談話會」（第10巻第1号）という欄目を開設したりするなどして読者と積極的に交流したり、意見の発表を勧めるようになった。しかし、以下のように、章錫琛編集期の特徴の一つとして、読者の意見としてのセクシュアリティに関連する部分を殆ど重視してないことを窺うことができる（表12参照）。

表 12. 章錫琛編集期の『婦女雑誌』の特集号（1921年～1925年）

出版年月	特集号名	バックナンバー	読者原稿募集タイトル	日本語訳（筆者訳）
1922年4月	離婚問題号	第8巻第4号	關於離婚の事實及其批評	離婚の事実及び批判に関する
			對於自由離婚的主張和反對	自由離婚の主張と反対について
1922年6月	産児制限号	第8巻第6号	該当なし	該当なし
1923年1月	婦女運動号	第9巻第1号	我國目前婦女運動應取の方針	我が國目前婦女運動の採用すべき方針

1923 年 3 月	娼妓問題號	第 9 卷第 3 號	該当なし	該当なし
1923 年 9 月	家庭革新號	第 9 卷第 9 號	通訊	通訊
1923 年 11 月	配偶者選択號	第 9 卷第 11 號	我之理想的配偶 (一～六十)	私の理想的な配偶者 (一～六十)
1924 年 1 月	十年記念號	第 10 卷第 1 號	談話會	談話會
1924 年 6 月	職業問題號	第 10 卷第 6 號	我的職業生活	私の職業生活
1924 年 10 月	男女理解號	第 10 卷第 10 號	我所希望於男子者	私の希望する男子
			我所希望於女子者	私の希望する女子
			尊重女性的男子是否可與不 滿意的舊式妻子離婚	女性尊重の男子が満足してない旧 式妻と離婚する可否
1925 年 1 月	新性道德號	第 11 卷第 1 號	該当なし	該当なし
1925 年 6 月	女学生號	第 11 卷第 6 號	女學生時代的回憶	女子學生時代の思い出
			給女學校教師的公開信	女子學校教師への公開の手紙
			女學生對於社會的呼籲	女子學生が社会に対して呼び声
			女學生的課外讀物	女子學生の課外の読み物
			苦學生活的女學生	苦學生活の女子學生
			各地女學生狀況調查	各地女子學生狀況調查
			我所見的女學生	私が見た女子學生
			女學生的家庭狀況	女子學生の家庭狀況

1923 年 11 月、『婦女雜誌』の「配偶者選択號」という特集号が出版され、「我之理想的配偶」（私の理想的な配偶者）をテーマにして読者から意見を求めた。章錫琛の「全文の組み版が終わった後、遠方と国外から（原稿）を送ってくることから、こうした問題に對

する青年の重視と熱愛を証明するのに十分である¹⁰²」と述べたように、このテーマは多くの読者¹⁰³の関心を引き付けられた。この特集号の考察については、次章の第1節で行いたい。

1921年から、章錫琛は『婦女雑誌』の「家政門」など家政育児の実用的な記事に関する欄目を全面的に廃止し、恋愛、婚姻、新性道德、職業など議論に集中するようになった。様々な話題に関する新たな見解を持つ若者の意見を吸収し、そして自らの考えを意欲的に提供しようとする姿がここから窺える。しかし、葉韋君の研究によれば、早くも1924年6月から、章錫琛は読者からの書簡に誌面で返答することは少なくなった。彼は自らの意見を押し通すようになり、異なる意見を持っていた読者の声を聞き入れなくなった¹⁰⁴。章錫琛の主張は全ての読者の共感を得られていないと見られる。

1925年1月、『婦女雑誌』は「新性道德號」を刊行し、章錫琛の「新性道德是什麼」（新性道德とは何か）が巻頭を飾った。その中で性道德は社会と個人に対して損害を与えない限り、いかなる恋愛の形式でも個人の自由が尊重されるという彼の原則は、「新性道德論争」の導火線となった。章錫琛ものに「この文章が発表されてからは、各方面からのさまざまな直接、間接の叱責、攻撃、迫害が押し寄せ、ひどい目にあわされた¹⁰⁵」と回想し、1926年、彼は辞職に追い込まれた。

『婦女雑誌』から離職した後、章錫琛は『新女性』という女性雑誌を創刊し、自由恋愛と自由離婚に関する討論を継続して行っていた。以下では、『婦女雑誌』を離れてほかの女性雑誌の主幹になった時、章錫琛の主張はどのように変化したかを分析したい。

1920年代後半に入ると、社会状況が不安定さを増す一方で、近代的な職業を持ち、主体的に生きようとする「新式女性」（もしくは新婦女）と称される女性がますます登場した¹⁰⁶。一方、北京、上海など大都市の女性の服装にも多くの変化が生じた。『婦女雑誌』が2度目の変革を経た1920年代後半には、同誌の広告は従来の医薬品から女性用のファッションへ移り始めただけでなく、新しい編集長である杜就田の助力の下、女性読者は同誌が提示した「女性のための軟性讀物」という方針に共鳴し、自身のことや身近な実例を語るようになる。その具体的な内容について次章で考察したい。

¹⁰²原文「直到全文排好之後、還有從遠省和國外寄來的、足徵青年對於這問題的注重和厚愛」、記者、「選後」、『婦女雑誌』第9卷第11號、1923年11月、180頁。

¹⁰³募集の締め切りの時点までに、合計155名の原稿が『婦女雑誌』に届けられた。

¹⁰⁴葉韋君、「個人經驗與公共領域：『婦女雑誌』通信欄研究（1915～1931）」、『近代中国婦女史研究』第29期、中央研究院近代史研究所、2017年、67頁～69頁。

¹⁰⁵原文「這篇文章發表以後、從各方面襲來的種種間接的指斥，攻擊，迫害已經使我們夠受」、章錫琛、「駁陳百年教授『一夫多妻的新護符』」、『新性道德討論集』、開明書店、1925年、79頁。

¹⁰⁶末次玲子、『二〇世紀中国女性史』、青木書店、2009年、195頁。

第四章 1920 年代後半の『婦女雑誌』と『新女性』

1927 年、南京で国民政府が成立し、国民党第 2 期中央執行委員会第 4 回大会では女性教育によって、優良で健全な母性を養うことが国家に優生強種を産む基礎として強調された。1928 年 10 月、北伐が完了し、全国を統一した国民党は近代国家建設を重視し、工業、商業、法律、教育など多方面における改革に着手し、女性教育もその一環として変革が行われたが、実際には科学知識を身に付けるより、家政や育児に関する教育が重視される傾向にあった¹。

一方、五四時期には、袁世凱政權の提唱した良妻賢母主義が攻撃され、西洋の女性解放思想に影響を受けて先進的な論調が盛んになった。しかし、1920 年代後半からは再び女性の家庭内の役割が提唱され、保守的な論調に向かっていた²。その背景には、第 1 次国共合作の崩壊後、蒋介石が権力を握った国民党及び南京国民政府が「母性主義」の女性教育を推進したことがあった³。

第 1 節 杜就田編集期の『婦女雑誌』について（1925 年～1930 年）

1.1 杜就田について

1925 年 1 月の『婦女雑誌』の「新性道德號」（第 11 巻第 1 號）に「新性道德」をめぐる論争が起こった。世論を恐れた商務印書館の経営陣は、編集長の章錫琛とその助手の周建人を編集陣から外し、杜就田⁴を新しい編集長として迎えた⁵。章錫琛編集期の『婦女雑誌』は知識人の中に大きな反響を呼んだ。しかし、彼が辞めた直後の女性読者の投書によれば、実際には「歐米色が濃過ぎて、白話とはいえ文言よりも難解だった⁶」だけではなく、大部分は本意が不明な記事だったことを見ると、『婦女雑誌』は当時の大部分の女性読者にとって、決して読みやすく面白い読み物ではなかったという本音が読み取れる⁷。

¹白水紀子、「中国における『近代家族』の形成—女性の国民化と二重役割の歴史」、『横浜国立大学教育人間科学部紀要』2・人文科学 6、2004 年、145 頁。

²陳姪媛、『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』、劉草書房、2006 年、222 頁。

³同注 1、白水、145 頁。

⁴杜就田に関連する資料は少なくため、生没年さえ不明である。

⁵杜就田が編集長として務めたのは 1925 年 9 月（第 11 巻第 9 號）から 1930 年 6 月（第 16 巻第 6 號）までの『婦女雑誌』であった。

⁶原文「歐化色彩太重了、白話比文言尤其難懂」、竹友「我對於本刊的意見二」、『婦女雑誌』第 11 巻 12 號、1925 年 12 月、122 頁。

⁷徐學文、「我對於本刊的意見二」、『婦女雑誌』第 11 巻 12 號、1925 年 12 月、121 頁。

杜就田に関する先行研究によれば、彼はかつて『東方雑誌』の編集長であった杜亜泉⁸（1873～1933）の従弟である。『婦女雑誌』の編集中には、「農隠」という筆名で個人の趣味を反映した写真や絵画を内容とする記事を同誌に発表した⁹が、他の記事の多くは読者投稿に依頼したという特徴がある⁹。杜就田が『婦女雑誌』に投稿した記事は少なかったため、表 13 のように、概ね「家庭教育」、「家政知識」、「恋愛結婚」といった3つの分野に分類した。

表 13. 杜就田が『婦女雑誌』に投稿した記事の一覧表（家庭教育・家政知識・恋愛結婚）

巻號	バックナンバー	タイトル	日本語題目（筆者訳）	分類
第 11 巻第 10 號	1925 年 10 月	關於家庭教育的談論	家庭教育の談論について	家庭教育
		小孩容易感受的傳染病	子どもに受けやすい傳染病	
第 11 巻第 11 號	1925 年 11 月	孩子的體溫	子どもの體溫	
第 12 巻第 2 號	1926 年 2 月	兒童的天趣	兒童の天趣	
第 13 巻第 1 號	1927 年 1 月	育兒的意義	育兒の意義	
		育兒上的要項	育兒上の要項	
		小孩的病害	子どもの病害	
		家庭教育	家庭教育	
		家庭與學校	家庭と學校	
第 11 巻第 11 號	1925 年 11 月	米麥豆類的鑑別法	米麦豆類の鑑別法	家政知識
		醬油的鑑別法	醬油の鑑別法	
第 11 巻第 12 號	1925 年 12 月	皮膚和肥皂的關係	皮膚と石鹼の關係	
第 11 巻第 3 號	1926 年 3 月	占風雨的方法	風雨を占う方法	
		室內運動用的電馬	室内運動用の電馬	
第 11 巻第 4 號	1926 年 4 月	避蜜蜂的頭網	蜂を避けるヘッドネット	
第 11 巻第 8 號	1926 年 8 月	預卜風雨之法	風雨を予知する方法	
		講求植樹法	植樹法の探求	
第 11 巻第 10 號	1926 年 10 月	簡易的生髮水	簡易の生髮水	
		自製石膏像的方法	石膏像の自製方法	
第 12 巻第 1 號	1927 年 1 月	合式的蒔種法	合式の蒔種法	
		食物的調理	食物の調理	
		食物的貯藏	食物の蓄藏	
		食物中的調味品	食物の調味料	

⁸杜亜泉（1873 年～1933 年）：浙江省紹興の人である。原名は孫煒、字は秋帆、號は亜泉、別名は陳仲逸、高勞などがある。彼は最初紹興中西學堂で執教したが、後に上海で亜泉學館を創立し中国最初の自然科学刊行物である『亞泉雜誌』を出版し、科学史地政治などの書籍を編集した経験がある。商務印書館の『東方雑誌』の編集長を務めたことがある。著作は『動物大辞典』、『自然科学教科書』などがある。

⁹任文京・劉偉娜、「杜就田主編時期『婦女雑誌』征文中の女性风貌」、『河北大学学报』（哲学社会科学版）、2008 年 11 月、第 43 卷第 6 期、155 頁。

		家庭中的飲料	家庭内の飲料	
		衣服與人體的關係	衣服と人體の關係	
		家屋的意義	家屋の意義	
		家屋與衛生	家屋と衛生	
第 11 卷第 7 號	1926 年 7 月	愛的雜說	愛の雜說	恋愛結婚
		人類的愛情	人類の愛情	
		男女的愛之要素	男女の愛の要素	
		夫婦的愛與男女的愛	夫婦の愛と男女の愛	
		愛的歷史	愛の歷史	
		天才與愛	天才と愛	
第 12 卷第 7 號	1927 年 1 月	交際的意義	交際の意義	
		交際上の必要	交際上の必要	

表 13 から分かるように、杜就田は家政、育児について関心を寄せ、恋愛結婚問題を吐露する場面も見受けられるが、章錫琛編集期の『婦女雑誌』と比較して外国から翻訳された記事は殆ど掲載してなかった。そして、1927 年 2 月以降、杜就田自ら手がけた記事の本数がさらに減少したが、女性読者とより深く交流するために開設した「醫事衛生顧問」と「徵文當選¹⁰⁾」など欄目に力を加えたことを見られる¹¹⁾。

また、雑誌のデザインの面について、章錫琛編集期の『婦女雑誌』は殆ど工夫が凝らされなかったが（図 5 参照）、杜就田が就任した後、『婦女雑誌』のデザインには女性らしい挿絵が大量に採用され、表紙を工夫して女性読者の関心を惹いた（図 4 参照）。張哲嘉によれば、『婦女雑誌』の女性読者が、女子学生や教員などに限られていたことや、男性が女性の名で投稿をしていた可能性があるにもかかわらず、杜就田編集期に女性読者の割合が著しく増加していたことは事実である¹²⁾。

¹⁰⁾「この時期における読者の原稿を募集する数量は 1 千篇ほどであり、王蘊章と章錫琛の編集期の合計数の 3 倍より多かった」、同注 9、任・劉、155 頁。

¹¹⁾大道寺慶子「第五章『婦女雑誌』の母乳育児論にみる身体と近代一日中比較の視点から」、山本英史編、『近代中国の地域像』、山川出版社、2011 年、162～163 頁。

¹²⁾張哲嘉の研究によれば、1925 年には女性読者は全体の僅か 22%を占めていたにすぎないが 1931 年になると 53%という割合となり、読者層の半分以上を占めていたという。張哲嘉著、陳姪媛訳「『醫事衛生顧問』について」、村田雄二郎編、『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』、研文出版、2005 年、210 頁。

図4. 『婦女雑誌』第11巻第11号表紙
(杜就田編集期)



図5. 『婦女雑誌』第9巻第2号表紙
(章錫琛編集期)



また、松本咲江の研究によれば、杜就田編集期の『婦女雑誌』は、女性は母親であるという帰着点を明確に示す編集方針を取っていたのである。そして、雑誌全体では、健康な「母親としての身体」に辿り着くために、読者の立場に立った様々な助言がされていたという。

読者の声を多く反映した杜就田編集期の『婦女雑誌』の誌面の性格について、Nivard はそれを「保守期」と簡単に称していた¹³。確かに「恋愛」と「性道德」ばかりを提唱した章錫琛編集期に比べると、この時期の『婦女雑誌』の編集方針は決して「急進的」ではなく、むしろ「中庸的」、「保守的」という評価が相応しいと思われるが、これは決して『婦女雑誌』初期に提唱された「良妻賢母」の編集方針と同じものではない。また、李曉紅の研究によれば、杜就田編集期の『婦女雑誌』は女性の社会的な自立を強調したが、それはむしろ女性の労働技能を育成させるためであり、根本的な女性の社会地位改善を目指したものとは言えなかった¹⁴。

確かに、杜就田編集期の『婦女雑誌』は、女性参政権、女性解放思想など先進的な女性問題についての討論を殆ど行わなかった。しかし、杜就田が編集長を務めた1925年9月（第11巻第9号）から1930年6月（第16巻第6号）までの4年9ヶ月という発行期間は『婦女雑誌』史上で最も長く、その存在意義は決して看過することができないと思う¹⁵。

当時の『婦女雑誌』の編集方針について、杜就田は以下のように説明している。

¹³ Jacqueline Nivard, "Women and Women's Press: The Case of The Ladies' Journal (Funvazhi) 1915-1931", Republican China, Nov. 1984, p. 42.

¹⁴ 李曉紅, 『女性的声音—民国时期上海知识女性与大众传媒』, 学林出版社, 2008年, 84頁。

¹⁵ 章錫琛が担当した1921年1月（第7巻第1号）から1925年8月（第11巻第8号）にかけての4年7ヶ月という刊行期間より2ヶ月長かった。

文體は全て淺近で平易なものを用い、難解なものを用いないのは、讀者に容易に理解してもらうためである。さらに、挿繪を増加し、それにより、文字で説明できないところの助けとする。撮影藝術の顧問を雇い、通訊欄を拡充して（中略）婦女雑誌を少數の人の専用としないように、「婦女の忠實な友人」あるいは「趣味がある軟性の讀物」にする¹⁶。

1920年代前期の『婦女雑誌』に掲載された大量の西洋女性思想の理論と異なったのは、誌面に一転して「生活經驗談」、「藝術鑑賞」などの内容が出現し、教育程度が低い女性読者にも簡単に理解してもらえるようにしたことである。思想的で難解な記事が無くなった杜就田編集期の『婦女雑誌』は、女性読者の受容に比較的沿っていたため、女性から大きく支持を得られたのである。

また、杜就田が自ら立ち上げたコーナーである「醫事衛生顧問」は、女性読者が進んで自分の情報を医師に提供して相談を仰いでおり、1920年代後半の『婦女雑誌』の読者層を研究する上で非常に貴重な資料として近年の先行研究では注目されている¹⁷。

確かに、このような分析作業を通して「中国近代における醫學知識の普及過程を追う研究史上の空白を埋めることにつながる¹⁸」という成果が得られる。そして、その成果を通じて、女性読者が同誌の伝える医学知識をどのように受け入れていたかを窺うことができると張哲嘉の研究では指摘している¹⁹。しかし、女性読者から多くの好評²⁰を受けたこの時期の『婦女雑誌』において、その影響力は恐らく医事相談、読者投稿だけではなかったと考えられる。また、杜就田という人物及び当時の『婦女雑誌』に対する先行研究の評価は何れも厳しいものばかりで、未だに詳細な研究がなされていない。この状況の中で、1920年代前半の『婦女雑誌』との比較を行うことは、1920年代後半の『婦女雑誌』の誌面方針を理解する最初の一步であると考ええる。

¹⁶原文「文字皆取淺近平易、不尚高深、務使讀者易於了解。而又多插圖副、爲助文字所不及。添加攝影藝術的顧問、擴充通訊欄（中略）務使婦女雜誌不爲少數人所專有、成一『婦女忠實的良伴』或爲『有趣味的軟性讀物』」、無名氏、「明年婦女雜誌的旨趣」、『婦女雑誌』第11卷第12號、1925年12月、4頁。

¹⁷以下の先行研究は、いずれも「医事衛生顧問」の欄目を読み解く作業によって、読者の健康相談をもとに、そこに現れた近代中国女性の「身体観」に着目して考察した。

i. 松本咲江「ゆれる乳房—杜就田編集期の『婦女雑誌』「医事衛生顧問」における身体論を中心に」、『饗養』第16號、中国語文學會、2008年9月。

ii. 張哲嘉著、陳延媛訳「「医事衛生顧問」について」、村田雄二郎編、『「婦女雑誌」からみる近代中国女性』、研文出版、2005年。

iii. 大道寺慶子、「第五章『婦女雑誌』の母乳育児論に見る身体と近代一日中比較の視点から」『近代中国の地域像』、山川出版社、2011年。

¹⁸張哲嘉著・陳延媛訳「「医事衛生顧問」について」、同注12、村田、86頁。

¹⁹同注18、張・陳、186頁。

²⁰1930年に上海で行われた「女學生愛讀書籍調査」の結果では、『婦女雑誌』は14票を得て20票の『古文觀止』、15票の『紅樓夢』に次いで3位であり、少なくとも当時の女子学生の好む刊行物の一つであったことが言える。陳延媛、「女性に語りかける雑誌、女性を語り合う雑誌」、同注12、村田、33頁。

次節では、西洋の先進的な思想が伝入された際に、「外來の産物²¹」としての「自由離婚」の思想が、先行研究で「保守期」と称された杜就田が編集した『婦女雜誌』においてどのように表現されて変容したのかについて、まず 1920 年代前半の「離婚問題號」（1922 年 4 月）の記事を取り上げて杜就田編集期の言論と比較して分析したい。

1.2 自由離婚の考察—「離婚問題號」との比較を中心に

発刊初期の『婦女雜誌』には、離婚問題に関わる記事が殆ど掲載されなかっただけではなく、離婚に関する観点もかなり保守的であった。離婚は「人倫の不幸²²」と断言されると同時に、当時の中国で欧米の自由離婚法を援用した行動は「文明の障害²³」とされ、全体的に自由離婚に反対する立場を取っていた。

許慧琦の研究によれば、『婦女雜誌』が自由離婚に関心を持つようになったのは 1920 年代に入ってからである²⁴。章錫琛が編集長になった当初、1921 年を境に自由離婚をめぐる討論がますます激しくなり、さらに 1922 年 4 月の『婦女雜誌』に掲載された「離婚問題號」で頂点に達したことが明らかにされている²⁵。

「離婚問題號」に見えるのは、自由離婚に賛成する西洋の主張だけではなく、日本の著名な離婚事件や、中国の離婚問題の現在と将来に至るまで、あらゆる方向の翻訳記事や論説である。その記事の内容から見て、大多数の投稿者は自由離婚に賛同していたようである。自由離婚とは、「理想的な家庭を創造するための大前提²⁶」であり、そこから本当の結婚の居場所を作れると説かれている。このような言論から、五四時期以降高まってきた自由恋愛と自由離婚の主張について、「束縛」から「自由」へと前進したいという青年知識人らの強い願望が現れていることが分かる。

しかし、自由離婚の名義のもと「一夫一妻」制が破壊されると、道德を墮落させる「元凶」になる可能性があるという不安の声も誌面には見られた。

彼は、古い妻と離婚して再び新しい嫁を娶ることを自分で試してみたい。そのため彼が離婚したくて仕方がない一方、戀人を探すことに忙しい（中略）我々は決して離婚を反対しない、ただ我々が主張する離婚というものは、他人と姦通、虐待、破棄さ

²¹五四時期において、「自由離婚」が「自由戀愛」、「自由結婚」など西洋思想と同時にヨーロッパから中国に受容された。許慧琦（陳延浚訳）『『婦女雜誌』からみる自由離婚の思想とその実践』、同注 12、村田、277 頁。

²²史寶安、「河南女子師範學校畢業訓詞」、『婦女雜誌』第 2 卷第 1 號、1916 年 1 月、87 頁。

²³同注 22、史、91 頁。

²⁴同注 12、村田、275 頁。

²⁵同注 12、村田、278 頁。

²⁶原文「自由離婚是創造理想家庭の大前提」、C.N、「離婚的意義與價值」、『婦女雜誌』第 8 卷第 4 號、1922 年 4 月、199 頁。

れてからするものではなく、性情が合わないことも離婚の理由となり得るものである

27。

恐らく、西洋思想から影響を受けた五四時期の男性知識人は、自由離婚が「間違った結婚」から自身を解放し、再び他の異性と幸福に結合するための方策であると認識したのだと思われる。自由離婚が可能になって初めて、人々は真の恋愛による幸福な結婚生活を保障されるであろう。しかし、当時の『婦女雑誌』の誌面から「現在の新女子は、何かするとすぐ離婚したがらせたり貞操を攻撃したりする弊害へと陥らせた²⁸」のような批判もあった。1920年代前半に「革新²⁹」を目指す姿勢を見せた『婦女雑誌』も、当時では「自由離婚」をめぐる激しい討論を呼び起こした中で、多元的に賛否両論を読者に提示したことが分かった。

そして、1925年9月から登場した編集長の杜就田は、「頭ははっきりしていない³⁰」「時代に合わず淘汰されるべき³¹」と章錫琛から批判された「舊式文人」であった³²。杜就田が編集長となって就任した期間の『婦女雑誌』は、誌面から激進的な文章と翻訳文の本数が減少していたとはいえ、自由離婚に対して彼の意見は決して否定するわけではなかった。

1926年5月『婦女雑誌』の「通信」という欄目で、「伊文思黄」という男性の読者が以下のように訴えた。

私は生まれつき藝術が好きで、性情は淡泊で、意志は固い人間なので、自分の結婚相手については、どうしても自分に似た者を見つけなければ満足できない。しかし、私の不幸は、五、六年前に家長が知らない人を結婚相手に定めてしまったことです。三年前、無理矢理自分は彼女と一緒にさせられました（中略）離婚ですか？私は終始恐ろしくて口にできません。何故なら彼女は舊社會の産物で、もしくは彼女は「終身で一人につき従う」という古訓を抱えているかもしれません。離婚しないとしたら？そうしたら、結局に人は人、我は我のまま何の関係もないまま、この生涯を終え、沢山の名義だけの夫婦と同じことになってしまう³³

²⁷原文「他想自己去嘗試、想把舊的離掉、重新娶新的、于是他一方面忙着想離婚、一方面又爲了找尋戀人而忙碌（中略）我們絕不反對離婚、我們是離婚不必要等到和別人通奸、虐待、背棄之後總可以、便是性情不投也應當成爲離婚的理由的」、開時、「離婚和戀愛」、『婦女雑誌』第11卷第3號、1925年3月、25頁。

²⁸原文「現在的新女子動要離婚、也許是攻擊貞節、提倡離婚的流弊」、竹友、「對於本刊的意見」、『婦女雑誌』、第11卷第12號、1925年12月、122頁。

²⁹邵雍、『中国近代婦女史』、合肥工業大学出版社、2013年、64頁。

³⁰章錫琛、「漫談商務印書館」、『商務印書館九〇年（一八九七～一九八七）—我和商務印書館』、商務印書館、1987年、117頁。

³¹同注30、章、117頁。

³²陳延媛、「女性に語りかける雑誌、女性を語り合う雑誌」、同注12、村田、30～31頁。

³³原文「我是天生愛好藝術、性情淡泊、而又堅決的人、所以對於我的對偶、也要得到相似的一个、那才可以称意、但是、我的不幸、在五六年前、我的家長早又把一个不相識的人给我定了、三年前也不管三七二十一、给我把伊拉在一處了（中略）離棄麼？我終是不敢開之于口、因爲她是舊家庭的產物、或者她抱

経済的に独立できなかった「舊式女性」にとって、離婚とは生活が維持できなくなると同時に、生存すらできなくなってしまうという意味をもつ。男性を中心とする多くの若い学生たちは、恋愛による結婚を定着させるために、教育を受けたことがない旧式の妻と離婚し、自らの性情と嗜好に相応しい相手を選ぶことを求めた。その読者の悩みに対し、編集長である杜就田は、以下のように回答した。

この三年間平凡に過ごせたことは、彼女が大逆無道ではないことを十分に証明する（中略）新式結婚というものは、戀愛によって夫婦になっても全員が必ず白髪になるまで添い遂げるわけでもない。舊式結婚であっても、仲人の媒酌によっても、全員が必ず途中で離婚するわけでもない。夫婦間の性情と嗜好がそれぞれ極端でなければ、決して不和に至ることはない。もし性情と嗜好が人と異なるとしたら、天下を踏破しても、良好の伴侶を得ることは極めて困難であるという道理は疑いを差し挟む餘地がない³⁴。

「舊式文人」と称された杜就田であっても、「自由離婚」に反対する意見が彼の発言から見られなかった。1920年代後半になると、『婦女雜誌』は保守的な傾向を見せ始める。当時の編集長である杜就田は、あまり「極端」でない限り離婚を選択せず、婚姻関係継続の機会を「舊式女性」に与えようとした。しかし、五四時期の「自由離婚」に対して男性知識人が疑問を呈する発言が1920年後半には見られなくなったことがわかる³⁵。また、同時期の『新婦女月刊』の記事を見てみると、「戀愛生活の永久性を抹殺する³⁶」という可能性があるという「自由離婚」に対して知識人が反対の声をあげていると分かった。

さらに、1920年代の全体的な『婦女雜誌』を見ると、「自由離婚」に対して女性の発言は殆ど見当たらず、大部分が男性読者からの発言であった。これは、1920年代の中国社会では女性解放の発言権すら、女性ではなく男性によって占有されていたことを反映している。

定「從一而終」の舊訓。不離麼？那麼、終是你爲你、我爲我的一無關係、終其身、不過形成一堆名義上的夫婦吧了」、伊文思黃、「通信」、『婦女雜誌』第12卷第5號、1926年5月、155頁。

³⁴原文「此三年中平平過去、足證她并非大悖不道的（中略）有新式結婚、由戀愛而成的、未必能個個戀愛到白頭。有舊式結婚、由媒人撮合的、也未必個個皆倒半途離棄。盜因夫妻間、苟非性情嗜好各走極端、決不致發生不和、如果性情嗜好不與人同的、雖走遍天下、極難得到良好伴侶、此理無容質疑」、農隱、「通信」、『婦女雜誌』第12卷第5號、1926年5月、155頁。

³⁵杜就田編集期の『婦女雜誌』に掲載された「自由離婚」に関する記事は以下のようなものがある。

- i. 王重民「論我國古代的再嫁和離婚」『婦女雜誌』第13卷第5號、1927年5月、89頁。
- ii. 明養「離婚問題之社會學的研究」『婦女雜誌』第14卷第7號、1928年7月、20頁
- iii. 八二「從哲理上論我國離婚律的改良」『婦女雜誌』第14卷第8號、1928年8月、36頁。
- iv. 陳伯吹「婚姻問題的六個斷片」『婦女雜誌』第14卷第8號、1928年8月、45頁。
- v. 周大年「離婚的條件」『婦女雜誌』第14卷第11號、1928年11月、19頁。
- vi. 陳罕敏「離婚與家庭及道德問題」『婦女雜誌』第15卷第8號、1929年8月、18頁。
- vii. 徐垂生「離婚論略」、『婦女雜誌』第16卷第3號、1930年3月、22頁。

³⁶鄧染原、「性道德觀與中國現行法律」、『新婦女月刊』第1卷第2期、1926年1月、52頁。

清末以前の男性知識人は、理想的な配偶者として主に纏足や化粧をした女性を好んだが、民国初期になると、纏足をほどいて化粧をしていない女性へと変わった³⁷。これらの変化及び自由離婚に対する要求は、従来から男性によって起きたことである。当時の中国の婚姻状況において纏足をして自立できない「舊式女性」は当然ながら自由離婚の「被害者」であると見られる。さらに、『婦女雜誌』の読者が中国における離婚の大部分は「青年男性知識人」から「舊式女性」に提出されたと述べている³⁸。

このように、一部の男性知識人が、婚姻の自由に存在した様々な問題を意識し、「理想的な女性像」に関する新しい認識も生成したと考えられる。こうした認識について、20年代後半の『婦女雜誌』がみせた論調の背後には、どのような変化が起きたかを次節で論じたい。

1.3 理想的な配偶者の考察—「配偶選擇號」との比較を中心に

1924年7月に『婦女雜誌』の編集長である章錫琛が「廣告を用いて求婚することの可否」（用廣告求婚的可否）というタイトルの討論会を企画した。その中で14名の意見が掲載され、賛成派は6名、反対派は8名である。賛成派の意見は概ね次のようであった。つまり、結婚は自由恋愛を基礎とするが、社交が十分に公開されていない中国の現状では、理想的な結婚を実現することは難しい。広告を使えば時間も節約でき、選択範囲も拡大できる公開性の高い手段の一つである。一方、反対派の意見は、求婚広告に恋愛は存在しないと批判し、不誠実な条件での応答で一時の合意を得ても、長く続けられないため、本当の恋愛による結婚ではない可能性が高い。そしてむしろ社交公開を促進すべきと主張した。

企画の最後に、章錫琛は次のような意見を付した。「第一、戀愛と結婚は不可分のものである（中略）第二、戀愛は自然のめぐり合わせてあり、人力によって無理に求めるものではない（中略）賛成派は社交の未公開を理由に挙げ、求婚廣告を便宜的方法とみなすが、ならば舊式的な結婚も便宜的方法とみなせるではないか³⁹」と恋愛による結婚の重要性を示している。

五四運動以前、男性がその妻に対して求めていたのは、基本的に補佐の役目である。先行研究によれば、「男性の知識が妻のそれを超えても、妻はある程度の知識によって彼らを理解し」、「愛情」より「世話」が重要視されると、婚姻における男女間の不平等が見て取れる⁴⁰。章錫琛編集期になると、さらに明確な伴侶の条件が具体的に記載される。その内容には理想的な配偶者の外見、性格と健康状況が含まれていた。

³⁷同注29、邵、67頁。

³⁸高歌、「沒有重圓的可能」、『婦女雜誌』第8巻第4號、1922年4月、87頁。

³⁹原文「第一、結婚與戀愛本來祇是一件事、不能分析爲二的（中略）第二、兩性的戀愛乃是一種自然的機遇、並不是可以人力強求的（中略）然我們如果承認廣告求婚的理由不甚圓滿、而當作一種權益的辦法、那麼再退一步也不妨承認媒妁婚姻爲權益辦法了」、章錫琛、「記者附注」、『婦女雜誌』第10巻第7號、1924年7月、165頁。

⁴⁰江勇振（石井弓訳）「男性は「人」、女性は「他者」—『婦女雜誌』におけるジェンダー論」、同注12、村田、260頁。

1923 年 11 月、『婦女雜誌』は「配偶選擇號」という特集號を出し、「私の理想的な配偶者」（私之理想的配偶）というテーマで読者に対するアンケートを行った。章錫琛の集計した数値によれば、応募者は全部で 155 名、その中で男性は 129 名だったのに対して、女性は僅か 16% の 26 名にすぎなかった⁴¹。大多数の応募者は学生もしくは教職員であった。「身體」、「容貌」、「年齡」、「教育」、「人格」、「性情」、「行爲」、「研究趣味」、「宗教」、「才職」、「愛情」、「裝飾」、「職業」、「財産」などの項目で読者の回答を募り、男女別で分析した⁴²。結果によれば 89 名の男性は理想的な配偶者として教育を受けたことを求め、さらに中等教育を受けたことを望んだ男性は半分以上を占めたことが分かった。

また、応募者の投稿内容を見てみると、T.E.D という読者は彼の理想的な女性を、健康で性格は優しく、手足のバランスがよく、少なくとも一つの外国語を話せる、運動、音楽、文学、書道などの趣味を持つ人だと述べた⁴³。また最も多く条件を出したのは、禰參化という読者である。英語ができ、音楽が上手く、幼稚園に通ったことがあり、親族に名のある学者がおり、両親が 25 歳から 35 歳だった間に生まれた女性など、50 項目の条件を提示した⁴⁴。

20 世紀の初頭までに、男性知識人の中には伝統的な家族制度に反抗する者が多く現れ、妻を自分で選ぶことを望んだ。「近代的」で「教養」のある女性との結婚を望む彼らは、「女は才能がないことが徳」といった従来の儒教的女性観を否定し、理想的な配偶者として女性に良好な教育を期待した。

例えば、「職業」の項目に対して章錫琛は、「この項目は、男性はあまり挙げなかったが、女性は比較的多い⁴⁵」と指摘する。即ち、男性知識人は女性が職業を持つことに対してそれほど関心を示さなかったが、女性からの理想的な配偶者としての男性が職業を持つことという願望が強かったと読み取れる。この「先進期」と言われる時期でも、伝統社會の男女分業理念が知識人の中に根強く存在し、「男性が外で働いている間、女性が家の内を整理する⁴⁶」といった『婦女雜誌』初期の主張と殆ど変わらなかったことが窺える。

1924 年 2 月の『婦女雜誌』の「卷頭語」の中に、「生殖的美與神聖⁴⁷」（生殖の美と神聖）をテーマとした記事があった。その内容は、生殖は醜惡及び不潔なものと見做されることが人類墮落の主要な原因である。この人類の墮落を救うために、人々に生殖の神聖性を自覚させなければならない。章錫琛は女性が職業を獲得する機会はますます増加していくと考えていたが、職業問題の状況は男性の方面でも同様に厳しくなると示唆する。彼は、職業より、恋愛問題を討論することは比較的に重要であると説いていた⁴⁸。

一方、1920 年代後半の『婦女雜誌』においては、女性が家庭外の職業に従事することが重要視されるようになってきたと思われる。例えば顧綺仲は以下のように述べている。

⁴¹ 瑟廬、「現代青年男女配偶選擇の傾向」、『婦女雜誌』第 9 卷第 11 號、1923 年 11 月、65 頁。

⁴² 同注 41、瑟、65 頁。

⁴³ T.E.D、「我之理想的配偶」、『婦女雜誌』第 9 卷第 11 號、1923 年 11 月、81～84 頁。

⁴⁴ 禰參化、「我之理想的配偶」、『婦女雜誌』第 9 卷第 11 號、1923 年 11 月、143 頁。

⁴⁵ 原文「這一項在男子提及的很少、女子較多」、同注 41、瑟廬、75 頁。

⁴⁶ 飄萍、「實用一家經濟法（續）」、『婦女雜誌』第 1 卷第 9 號、1915 年 9 月、69 頁。

⁴⁷ 無名氏、「卷頭語」、『婦女雜誌』第 10 卷第 2 號、1924 年 2 月、16 頁。

⁴⁸ 陳竹影・章錫琛、「女子職業問題的討論」、『婦女雜誌』第 9 卷第 11 號、1923 年 11 月、232 頁。

女性が職業に従事することにより、実は家庭の維持のためであり、男性の負担を軽減させて家庭の幸福を増進させることができる（中略）男性が一人ならまだしも、生活できるが妻を養うこととなれば、困難である（中略）ここから見れば、女性が職業に従事することは、實に家庭福利の保障なのである⁴⁹。

先進的な男性知識人らは、「良妻賢母」制度を疑問視し、職業に従事する女性に対し、貸金労働に携わって家計を助けることを美德として主張していた。さらに、1920年代後半になると、上海や広州はもちろん、ほかの中国の主な大都市でも、各種の労働施設が増え、それと同時に接客業に従事しうる労働力に対する需要も増加してきた。その背景の下で、女性の就職口となったのは、『婦女雜誌』でかつて女子の職業として勧められた園芸、裁縫、養蚕などの家庭内の副業、教師や医者など高尚な専門職ではなく、販売員や店員などの接客業であった⁵⁰。

そして、「在爲新主婦所當爲」（新主婦に成すべきこと）という記事の中で、蔣星徳が「新式女性」となるための5つの資質を中国女性に求めた⁵¹。即ち「精神の革命化」、「生活の平民化」、「仕事の労働化」、「感情の藝術化」、「理知の常識化」という5つの要項が提起されていた⁵²。その中の「労働化」は女性の独立能力を育成することに重点が置かれ、男性の附属品にならないことを指している。そして、「女性職業＝副業」は家庭の経済的負担を軽減させるだけではなく、女性は労働によって「生利婦女⁵³」になるために、社会に利益をもたらさなければならないとも述べている。杜就田編集期の『婦女雜誌』は一見保守的な内容であったが、編集長の杜就田は一種の穩健な手法で女性読者に思想と文化を伝播し、この時期の『婦女雜誌』を真正の女性向けの刊行物に変化させたと思われる。

また、女性が経済的な自立すらできるとすれば、「国家社会を改革し、建設しようとしたら、まず家庭から始めねばならない。家庭の改革は当然ながら家庭の各成員が共同で担わなければならない。そして主婦は家庭改革の主動者である⁵⁴」。このように、「舊式女性」と区別される新時代の家庭の主婦になるために、まず教育を受けて経済的な生産活動に従事し、家庭改良と社会改良の方面に専念すべきと主張している。

1920年代から30年代の中国では、社会経済と女性教育の発展に伴って、職業女性が社会に進出するようになった。「女性は職業がなければ、社會の寄生虫であり、男性の附属

⁴⁹原文「婦女從事於職業、實爲要維繫家庭、減輕男子的負擔增加家庭的幸福（中略）如果男子僅顧自己一人、那還可以生活、如果養育妻子、那就困難了（中略）因此看來、婦女從事於職業、實爲家庭福利的保障」、顧綺仲、「婦女與職業的關係性」、『婦女雜誌』第12卷第12號、1926年12月、16頁。

⁵⁰同注2、陳、224頁。

⁵¹蔣星徳、「爲新主婦所當爲」、『婦女雜誌』第14卷第12號、1928年12月、31～35頁。

⁵²同注51、蔣、30～36頁。

⁵³繆程淑儀、「何謂生利婦女何謂分利婦女」、『婦女雜誌』第6卷第6號、1920年6月、73頁。

⁵⁴原文「要改革和建設國家社會、當先從家庭做起、改革家庭固然要家庭中各個人共同負責、而主婦是改革家庭的主動者」、同注51、蔣、30頁。

品である⁵⁵」と指摘されるように、女性が職業を持つ意味は、自らの社会価値を証明するに他ならない。女性が生産や労働に参加さえすれば、男性と同じく「人格」を持つ「人間」になると徐公仁が強く主張した。

1920年代前半から、『婦女雑誌』の一部の編集者がエレン・ケイの名で、女性が家庭外で行う一切の活動に反対したり、独身主義を攻撃したりする主張をした。しかし、章錫琛は終始「戀愛は一切の女性問題を解決できる」と強調し、男女平等という問題に対して女性の社会的な自立は早急に解決すべき問題ではないと提唱した。

そして一転して「一般女性のための面白い軟性讀物」を志向した1920年代後半期の『婦女雑誌』は、理論的な討論の場から実用的な討論の場へとなり、社会の発展と合わせて女性読者の立場に立ったより実際的な女性問題を取り上げたことが誌面から伺える。確かに、杜就田編集期の『婦女雑誌』は、章錫琛編集期と比較すると女性の個人解放よりは家庭生活を重視する方向に雑誌の性格を再び移行させたというやや保守的な傾向が見えた。しかし、この時期の『婦女雑誌』は家庭生活に偏重するより、女性が社会との関連性を重視し、むしろ女性の社会的な独立能力の養成を強調しようという意欲が見られる。

杜就田編集期の『婦女雑誌』と同時代の『大公報』副刊としての『婦女與家庭』（婦女と家庭）に掲載された「婦女應盡的職責」（婦女が果たすべき職責）という記事を見てみると、執筆者は明確に家庭内部の担当者として女性の役割を強調し、その能力を最大限に発揮すべきだとして男性が備えていない女性の「天職」を主張した⁵⁶

さらに、1929年3月に開催された国民党第三回全国代表大会では、教育実施方針に「男女教育機會平等」を掲げるとともに、女性教育において「母性の特質の保持」、「健全な品格の陶冶」、「良好な家庭生活と社會生活の建設」という特殊性を強調すべきと提案した⁵⁷。女性の生育価値を第一義とする当時の教育方針は大違い、杜就田編集期の『婦女雑誌』の内容が女性の労働価値を認めることは、中国女性解放の道において新しい一步を踏み出したといえる。

杜就田が辞職した1930年6月まで、『婦女雑誌』は女性読者の好むに依じる穏健な女性向け雑誌として、安穩に刊行され続けられていた。そして、彼の辞職の理由については、先行研究では商務印書館によって解雇された可能性を指摘している⁵⁸。

また、「新性道德論争」が起こった時期に、章錫琛は商務印書館に解雇され、退職金を資本金として「婦女問題研究會⁵⁹」の名義で同叢書の発行を開始した。その後、章錫琛は

⁵⁵原文「女子沒有職業、是社會的寄生蟲、是男子的附屬品」、徐公仁、「婦女職業問題」、『婦女雑誌』第12巻第6號、1926年6月、33頁。

⁵⁶原文「更要明白的認為、是和男子不同的女性的人、而進于是『女』的自覺、就是既做了和男子不同的女子、更不可不辦那些非女子不能辦的事業、而發揮女子應具有的最大能力」、永正、「婦女應盡的職責」、『婦女與家庭』（天津『大公報』副刊）第11期、1927年11月22日。

⁵⁷程謫凡、『中國近現代女子教育史』、中華書局、1936年、120頁。

⁵⁸同注2、陳、157頁。

⁵⁹同会の發起人となったのは李宗武、沈雁冰、周作人、周建人、胡愈之、夏丐尊、章錫琛などの男性知識人であった。この全員が過去に商務印書館内の編集者であったと同時に、『婦女雑誌』の執筆者である。婦女問題研究会は1922年7月に上海で発足した。その趣旨は、女性問題に関する学説の研究、国内外の女性の状況調査、女性問題に関する刊行物の編集を行うことであったことが明らかになっている。前

当時の奉天（現瀋陽）商務印書館で働いていた実弟の章錫珊（1891 年～1975 年）を呼び寄せ、兄弟で 1926 年 8 月 1 日に上海宝山路 60 號において開明書店を設立した⁶⁰。

次節では、章錫琛が開明書店において自ら創立した女性問題を討論できる拠点としての『新女性』の編集に関する考察を行いたい。その分析を通して、『新女性』という新しい女性雑誌を刊行した際に、章錫琛の女性観においてどのような変化があったのかを明らかにする。

第 2 節 『婦女雑誌』から『新女性』へ（1926 年～1929 年）

2.1 開明書店と『新女性』

章錫琛が女性解放論の形成と発展のために力を尽すことを考えなかったとしたら、『婦女雑誌』の後継雑誌として『新女性』が創刊されることはあり得なかっただろう。『婦女雑誌』から『新女性』へと乗り換えた五四新文化運動の婦女解放論の影響力は、1920 年代後半を通して維持され続けた。『婦女雑誌』から離れても、章錫琛は女性解放論を放棄したわけではなかった。彼が考えたのは、かつての『婦女雑誌』の精神を継ぎ、新しい雑誌『新女性』の創刊にとりかかることである。

『新女性』の出版社としての開明書店は立達学会⁶¹の活動基盤であったが、その成立の経緯などから背後には立達学会の他に婦女問題研究会や文学研究会が存在していた。「開明書店」という名前は、文学研究会発起人の一人である孫伏園⁶²が命名したものである⁶³。同出版社は立達学会、婦女問題研究会、文学研究会などを後援組織としていたが、実際には章錫琛、章錫珊兄弟の共同経営で、設立当初の資金は彼らの退職金及び社員らからの集金で成り立っていた⁶⁴。

開明書店は、設立当初の 1920 年代後半、『一般』、『新女性』、『国學門月刊』、『文學週報』という 4 つの雑誌を発行していた。開明書店では雑誌のほか、文学や芸術、社会科学

山加奈子、「婦女問題研究会と『現代婦女』（『時事新報』副刊）－中国の 1920 年代初期における「節育」観」、『駿河台大学論叢』（32）、駿河台大学、2006 年、173 頁～175 頁に詳しい。

⁶⁰王知伊、「開明書店紀事」、『出版史料』、第 4 期、1985 年 12 月、4～5 頁。

⁶¹立達学会：立達学園は自由で新しい教育を目指した匡互生、豐子愷などが中心となって 1925 年に設立された。そして、立達学園の教育方針に賛同する 51 名の知識人らによる同人会、立達学会が組織された。

⁶²孫伏園（1894 年～1966 年）：浙江省紹興の人。原名は福源、筆名は有伏、松年、柏生、桐柏等がある。1921 年に北京大学を卒業し、その後『國民公報』、『晨報』の編集に携わった。1919 年 1 月に新潮社に加入し、1921 年に文学研究会の結成に加わった。著作は『付園游記』、『魯迅二三事』がある。

⁶³大野公賀、「1920 年代および 30 年代上海における立達学園と開明書店」、『津田塾大学紀要』（42）、2010 年 3 月、321 頁。

⁶⁴宋雲彬、「開明舊事－我所知道的開明書店」、『文史資料選輯』第 31 輯、1950 年、2～5 頁。

に関する名著や翻訳も多数出版している。その中で特に好調を博したのが、夏丏尊訳の『愛的教育』である。原作はイタリア人作家であるデ・アミーチスの『クオーレ』(Cuore)であるが、夏丏尊の『愛的教育』は三浦修吾の日本語訳『愛の學校』を参考にして翻訳されたものである⁶⁵。

各出版物の編集はそれぞれ立達学会、一般雑誌編集部、婦女問題研究会、北京大学研究所国文学門、文学研究会とされていたが、このうち開明書店が実際に編集に関わったのは『一般』、『新女性』という雑誌であった。開明書店の中では夏丏尊ら立達学園関係者は主として『一般』の編集に携わり、『新女性』は章錫琛が続けて編集を担当した⁶⁶。

『新女性』は、『婦女雑誌』ほどの影響力を持つ雑誌とは言えないが、魯迅、葉聖陶、豐子凱、胡愈之など中国の先進的な男性知識人が度々投稿している。このような人材を活用したことによって、『新女性』は一定の知名度と名声を確立し、世間から好評を博した。その結果として1928年には同誌の発売部数が35000部に達しており、一定の読者数を擁していたと言えよう⁶⁷。

『新女性』という雑誌に関しては、『婦女雑誌』について論じられた際、部分的には論じられたが、論文としてのまとまった先行研究は、管見の限り殆ど見られなかった⁶⁸。また、この五四運動期間において、章錫琛は女性問題を積極的に模索する中国の男性知識人を代表する存在であり、その言論の歴史的意義は決して見逃すことができないと考える。

実は1920年代後半から女性論は、国民党や共産党などの政治団体からも注目されていた。1926年12月に共産党の指導のもとで創刊した『中国婦女』(楊之華編集)など女性向けの刊行物は、中国の現実に即した女性問題を取り上げていた。一般女性を相手にする『新女性』も、知識界の言論と政治的宣伝の発信源として社会全般に浸透することを期待された⁶⁹。

『新女性』には、発刊詞がなかった。同誌の宗旨は創刊號の「排完之後」という記事において簡潔に説明された。そして、女性雑誌としての態度は、「讀者に自然に見せるため、普通刊行物のような發刊詞も省略した⁷⁰」から読み取れる。ここには編集長の章錫琛が同誌の編集に対して持つ自信が窺える。章錫琛も「文化の發展⁷¹」という編集策略に従ってこの刊行の主旨を主張し続けた。

⁶⁵同注 63、大野、326 頁。

⁶⁶同注 63、大野、321 頁。

⁶⁷1924 年当時『婦女雑誌』の発行部数が 7000 部だったことや、1925 年当時上海における日刊紙の発行部数が「申報」は 20000 部、『新聞報』は 25000 部、『時報』は 5000 部ほどだったことと照らし合わせると、『新女性』は一定の読者を持った雑誌だったと言える。小関信行、『五四時期のジャーナリズム』、同朋舎、1985 年、119～121 頁。

⁶⁸『新女性』という雑誌の考察について見られるのは、蔡銀春の「章錫琛の編輯出版思想探析—以『新女性』为例」(『出版广角』、2014 年、88～91 頁)という中国語の短い文章だけである。

⁶⁹同注 2、陳、236 頁。

⁷⁰原文「新女性的宗旨和態度都在以下各文中顯明地表出、讀者自能看到、所以像普通刊物上所有照例的發刊詞也便省去了」、「排完之後」、『新女性』第 1 卷第 1 號、1926 年 1 月、1 頁。

⁷¹「婦女問題研究會宣言」、『婦女雑誌』第 8 卷第 8 號、1922 年 8 月、148 頁。

『新女性』の欄目は複雑、派手ではなかったが、章錫琛が同誌の宗旨をめぐって始終一貫した欄目を設置した。その中で「議論」というコーナーが設けられ、女性問題に関する記事も集中的に掲載されて紹介された。蔡銀春の研究では1926年と1928年に出版された『新女性』を取り上げ、その議論文はそれぞれ記事全体の43%と44%を占めることを明らかにし、その内容は「戀愛」、「婚姻」、「貞操」、「性道德」、「女性教育」、「女性職業」など女性問題に関連するものであったという⁷²。例えば、「性的比例和兩性關係」（性の比例と兩性關係⁷³）、「禁慾主義和戀愛自由」（禁欲主義と戀愛自由⁷⁴）、「改造社會與現代女子的苦惱問題」（改造社會と現代女子の苦惱問題⁷⁵）などの記事があった。そして、「記述」という欄目で大量の外国における女性関連する記事が掲載され、それを通して国内外様々な地域の女性生活、婚姻及び著名女性の伝記が紹介された。また、「時事欄」、「通信欄」などの欄目を通して、読者との交流を重視する部分も見られる。

『新女性』は、1929年12月に休刊するまでに48号を刊行したが、章錫琛は「時代はすでにわれらを必要としなくなった⁷⁶」という理由で自ら休刊の道を選んだ。1930年という時期は『新女性』が休刊しただけではなく、女性論をめぐって中国言論界の勢力図が根本的に揺らいだ年でもあった。「女性教育の成長とともに女性知識人の數も増えつつ」あり「女性論は政治勢力から」離れるべきという章錫琛の考えから、『新女性』の廃刊理由も理解できるであろう⁷⁷。

当時の中国にとって、近代国家の建設には西洋文明の導入が不可欠であり、また大前提でもあった。西洋文明は19世紀末頃から徐々に紹介され始めていたが、1910年代後半になると、影響力が高まった。近代的な市民意識の成長において、日本を経由した西洋の恋愛を取り入れることは非常に重要な意義を持っていた。章錫琛は「自由戀愛」、「自由離婚」などの女性思想を積極的に『婦女雜誌』や『新女性』を通して読者に紹介した。当時の男性知識人にとっては、先進的な欧米女性思想が中国女性問題に解決策を提示するに違いないと考えられていた。

そして、『新女性』は「青年男女の心の改造に努力する」とことと「新性道德の基礎を建設する」ことを目標に、「女性地位の向上」、「兩性道德の革新」、「婚姻制度の改造」、「家族主義の打破」、「兩性知識の普及」に関わる記事を掲載していた⁷⁸。これらの記事の内容は主に、五四新文化運動の女性解放思想に基づいており、『婦女雜誌』に引き続き女性の社会的な地位と観念に対する意識の改革と変化を意図したものである。

2.2 章錫琛の性道德観の変様—『婦女雜誌』から『新女性』へ

⁷²同注 68、蔡、89 頁

⁷³周建人、「性的比例和兩性關係」、『新女性』第 1 卷第 3 號、1926 年 3 月、151 頁。

⁷⁴高山、「禁慾主義和戀愛自由」、『新女性』第 1 卷第 4 號、1926 年 4 月、233 頁。

⁷⁵天宇女士、「改造社會與現代女子的苦惱問題」、『新女性』第 2 卷第 7 號、1927 年 7 月、723 頁。

⁷⁶原文「廢刊的原因很是單純、就是時代已經不需要我們了」、無名氏、「廢刊詞」、『新女性』第 4 卷第 12 號、1929 年 12 月、5 頁。

⁷⁷同注 76、無名氏、6 頁。

⁷⁸無名氏、「排完以後」、『新女性』第 3 卷第 3 號、1928 年 3 月、119 頁。

五四時期の旧道德批判は「戀愛」の自由を求め、ひいては「自由離婚」の主張と貞操観に含まれる伝統的な性觀念に対する批判へと発展した。新しい恋愛観に基づいて「新性道德」を建設しようとする動きによって、先進的な男性知識人は自由恋愛と優生学の立場に立って「性の自由」を追求するようになる。

国家と社会、及び個人のために自由を勝ち取ろうとする精神は、反伝統思想に集約され、五四運動にその最高潮を迎えた⁷⁹。「民国期のジェンダーとセクシュアリティをめぐる変化は、一九一五—一九二一年に新文化運動と五・四運動を推進した知識人たちによって引き起こされた⁸⁰」ものである。そして、中国の男性知識人は、西洋女性思想の影響の下で結婚は当事者間の愛情に基づくものでなければならぬと認めるが、性行為に関しては、依然として旧体制的な考え方で、男女を接近させないようにしていた。2000年以上も昔の「七歳不同席」、「男女授受不親」等の封建的な觀念は、新文化運動後その姿を消したかのようであるが、人々の頭の中には依然として残り続けていた。

「女性問題の専門家」となった章錫琛も、勿論貞操問題を看過するわけにはいかず、「戀愛」より「貞操」の重要性を強調した。1923年3月の『婦女雜誌』の「娼妓問題號」には、中国における娼妓の存在を世界人類の「恥辱」とし、貞操を失うことは最大の不道德であるとした。彼は「世界人類的恥辱」において、「廢娼問題」に対する具体的な解決策に論及した。

その一は性道德の平等、女性には必ず純潔な貞操を持つだけではなく、また男性の貞操觀念も打ち立てられねばならない。即ち貞操を失うことは最大な罪惡と見做されるべきである。その二には經濟制度の改造を謀るべきである。それによって世界から貧困の現象を無くし、女性はやむなく売春を生活の方法とする必要がないようにする。その三は教育の革新であり、青年男女なら誰でも完全な教育を受け、人々が貞操を失うことは最大の不道德と認めさせるべきである。特に十分な性教育を実施し、性的生活がいかにかに尊嚴あるものか、霉毒の害がいかにかに恐ろしいか理解させるべきである⁸¹。

とあり、章錫琛は道德、恋愛、自由、女性の地位などを重んじる観点から「廢娼問題」を論じ、教育の根本的な改革の必要性を述べた。

1917年のロシア革命以来、知識人は社会主義やアナキズムへの関心を強め、女性解放論でも「全ての女性の解放」を視野に入れ、娼妓問題、童養媳や婢女の解放、女子労働問題がとりあげられた。章錫琛が提起した対象は、明らかに女性だけではなく男性も含まれており、「必ず両性の結合が戀愛の基礎となり、少しも外的な壓迫は受けない。もし戀

⁷⁹林毓生著・穆善培訳、『中國意識の危機—五四時期激烈的反傳統主義』、貴州人民出版社、1988年、8頁。

⁸⁰スーザン・マン著、秋山洋子・板橋暁子・大橋史恵訳、『性からよむ中国史 男女隔離・纏足・同性愛』、平凡社、2015年、17頁。

⁸¹原文「其一是性道德の平等、不但女子須有純潔の貞操并且不可不建立男子的貞操、視失貞操為莫大的罪惡。第二須謀經濟制度的改造、務使世界上沒有貧乏の現象、女子不致被迫而以賣淫為生活的方法。第三是教育的革新、使青年男女都能受得完全的教育、人人視失貞操為莫大的不德。尤其施以充分的性教育、使知性的生活的如何尊嚴、霉毒的禍害如何可怕」、瑟盧、「世界人類の恥辱」、『婦女雜誌』第9卷第3號、1923年9月、22頁。

愛關係が破壊されると婚約を解除できるようにすれば、男女間の關係は非常に自由になるのだから、當然正當を越えた性的な關係は起きないはず⁸²」である。章錫琛にとって「失貞」（貞操を失う）という行為は既に道德の範囲内から排除されており、貞操は眞の戀愛によって保たれるべきである。本当の戀愛は基本的には男女の人格の結合である。このような結合は一種の道德的な關係により繋がるものであり、即ち貞操である。

1922 年 10 月の『婦女雜誌』では章錫琛は既に、戀愛問題に関する討論の中で以下のよう主張していた。

人類には食欲と性欲という二種の基本的欲望がある。社會の一切の習慣、規範、道德、法律、制度はみんなこの二種の欲望が中心にある（中略）それゆえ、飢餓と愛情はあらゆる社會問題の基礎である。社會において複雑に錯綜する一切の煩雜の事情、一切の戦いは、この二つの基本的欲望から生じたものである。社會主義は現代の飢餓問題を解決する根本的な方法であり、「戀愛自由主義」は現在の愛情問題を解決する根本的な方法である。これには疑問の余地は全くない。最後に私は依然として「戀愛自由は女性問題を解決する端緒であると同時に、女性問題を解決する締めくくりともなる」と言いたい⁸³。

何故戀愛の自由が重要か。章錫琛の観点によれば、戀愛による結婚をすれば、女性はその人格と自由意志とを認められ、男性の地位と対等になることができる。即ち戀愛は一切の社會問題の基礎であり、社會の基礎、生命の維持を担う両性の結合が従来のように金銭や権力によるものではなくなるためには、戀愛によるしかない。

女性問題の解決手段は女性問題の經濟と教育の變革を目指すだけでなく、戀愛自由を目指すこととした章錫琛の論説は、人類は「生殖の神聖」を自覚し、道德や法律の一切の基準をここにおくべきだというエレン・ケイの女性思想から逸脱するものである。当初、章錫琛の戀愛觀にはエレン・ケイの影響がよく見られたが、のちに彼の「貞操を失うことは最大な不道德」という貞操觀においては、従来の性規範にある貞操觀と比べると進歩しなかったと言えるであろう。

しかし、当時の社會理念としては、女性自身が男性と同等な立場になるためには、女性の經濟的に獨立することが實現されなければならないとされた。章錫琛はこの点をまったく気にせず、「戀愛の自由」を追求した。当時の先進的な男性知識人らは、封建家長制を支えていた家の束縛からの解放を求め、父母の取り決める旧式結婚に反対した。一方、知識を持っている中国女性にとって、戀愛結婚は、人間として自立し、伝統的な家庭制度の

⁸²原文「務使兩性的結合完全立在戀愛的基礎上、絲毫不受外的迫壓、戀愛一經破裂便可解除婚約男女間の關係既然非常自由、自然不會與越出正規的性的關係了」同注 81、瑟、22 頁。

⁸³原文「人類有兩種基本的欲望便是食欲和性欲、社會一切的習慣、風俗、道德、法律、制度、都以这两种欲望爲中心（中略）所以飢餓與愛的兩大問題是一切社會問題的基本問題、社會的一切糾纏、一切爭斗都是從這兩大問題發生的。社會主義是現在解決飢餓的問題的根本方法。戀愛自由主義是現在解決愛的問題的根本方法。這是毫無疑義的。最後我仍想這樣說『戀愛自由是解決婦女問題的起頭也是解決婦女問題的煞尾』」、瑟盧、「文明與獨身」、『婦女雜誌』第 8 卷第 10 號、1922 年 10 月、18 頁。

性差別から解放されることを意味した。恋愛の自由と並んで新性道德という議論にも知識人らから大きな関心が寄せられた。

章錫琛が提唱した性道德観は、1920年代後半からの女性雑誌にも影響を与えた。例えば、1926年1月の『新婦女月刊』の中で以下のような言論がある。

章錫琛先生のお言葉:片方が専ら自分の性欲の要求を満たすだけではなく、それと同時に相手の性欲も満たすべきであり、これこそが性道德の眞理である⁸⁴。

1920年代初頭の章錫琛が強調した貞操観と異なり、新性道德の根本的な道理は、男女双方が性欲を満たすことである。ここで、彼が男性の性欲による需要という従来の性規範を打倒するために、まず双方の性欲を尊重する必要があると提唱した。

1925年1月に「新性道德」特集号として刊行された『婦女雑誌』には、章錫琛の「新性道德是什麼」(新性道德とは何か)と周建人の「性道德之科學的標準」(新性道德の科學的な標準)という二文が掲載された。「新性道德是什麼」という記事の中で章錫琛は、以下のように述べる。

不貞操が不道德と認識されるということは、一人が性の行為によって他人の権限を加害するというわけである。既婚夫婦は一方に不貞操の行為があった際、離婚を認めればいい。不貞操者の行為と考えると、相手に何らかの損害を与えなかったため、刑罰を受けるはずがない。さらに双方の同意があれば、一夫二妻または二夫一妻のような不貞なケースがあっても、社会や他人に損害を及ぼさない限り不道德とすることはできない⁸⁵。

その中の「一夫二妻」と「二夫一妻」の主張に対して、北京大学教授の陳百年は「一夫一妻制度を厳守すべき」という前提のもとで、「一夫多妻の新しいお守り⁸⁶」として非難した。

章錫琛のこのような言論は明らかにエレン・ケイの「恋愛の自由」の思想を受容したものであり、「男女平等」を原則として、両性関係は自由意思による恋愛の状態であると示した。また、新性道德の根本とすべき部分を次のように述べた。

⁸⁴原文「章錫琛先生說:不特一方專爲滿足自己的性欲的要求、同時也要注意滿足對方的性欲、這方是性道德的眞詮」、同注36、鄧、45頁。

⁸⁵原文「不貞操の所以成爲不道德只以一個人因了性的行為而加害于他人的爲限、已婚的夫婦、一方有不貞操時、只須承認他方有離婚的權利便好、至于不貞操者的行為、對於彼方并没有何等的損害、所以不該因此而受到刑罰。甚至如果經過兩配偶者的許可、有了一種帶着一夫二妻或二夫一妻性質的不貞操形式、只要不損害于社會及其他個人、也不能認爲不道德的」、章錫琛、「新性道德是什麼」、『婦女雑誌』第11卷第1號、1925年1月、19頁。

⁸⁶原文「中國現在的家庭大有改革的必要。而我的偏見一位嚴格的一夫一妻制的小家庭最合理想、古來一夫多妻的坏風俗非極力打破不可。今以改革自任的新性道德家竟有許可一夫多妻的言論、竟庭審出來作一夫多妻的新護符、我不得不提出一種抗議了」、百年、「一夫多妻的新護符」、『現代評論』第1卷第14號、1925年、8頁。

性的道德は、完全に社會及び個人に有益か否かを絶對的な標準となす：消極的にいえば凡そ社會や個人に對して損害を與えないものは、我々は決してそれを不道德と称することができない、これは十分に明白したことである。我々が今後新性道德を建設するにおいては、これを基礎としなければならないのである⁸⁷。

以上の記事の中で、章錫琛は道德の意義を改めて定義し、道德は「個人や社會の最大多数の幸福を増進させて向上させるもの」だとし、そこで必要とされるのが各自の善意と慈愛の感情であるとした。そこから、貞操は女性の自然な欲求ではなく、男性に強いられたものであり存在する理由はなく、個人にも、民族にも有害なために、これを道德とすることはできないと考えた。さらに、性的行為の結果は未来の民族の優劣にかかわるので、男女の「性的」な行為により、健康な子供を産むことが最も重要だという優生学の観点がここから見られる。

この時期、章錫琛が「戀愛の自由」は変わらず重要なものと考えたが、身心共に健全な男女の結合により、各自の才能を社會の役に立たせ、個人と社會の為に健康な子供を産生し、教育することこそが最大の道德だとしていた。

1925年の春、国民革命の前段階として国民會議運動が高まりつつあった中で、当時の章錫琛は、個人の自由と平等及び社會と個人にとって有益であることを道德の規準として戀愛の自由と新性道德を主張した。この論争は当時の多くの人々の関心を引き、五四運動時期以降の女性問題に関する論争の中でも大規模な反響を呼んだ。

また、本論争の影響は薄れつつあった1927年8月になっても、章錫琛が本間久雄の『婦人問題十講⁸⁸』の第二講「新性的道德」を『蘇州婦女』第2號に翻訳して掲載した。ここから、彼は世間から大々的な批判を浴びせられたとしても、新性道德問題の討論を継続して積極的に取り組む姿が見えた。

1926年から1928年にかけて蒋介石(1887年～1975年)を総司令とした国民政府が廣東から北上、北伐戦争を開始し、その戦争によって当時の言論にも革命勢力の影響が現れた。国民党支配下の地域にせよ、共産党支配下の地域にせよ、革命と戀愛どちらが重要かという問題が出てきた。このような濃厚な革命の雰囲気の下で「現代の社會革命は女性の積極的な参加することを待っている⁸⁹」という言論まで現れている。

『新女性』が刊行された時期になると、戀愛に関する言論が現れる頻度が次第に減少し、その代わりに女性の貞操問題に関する文章が増加した⁹⁰。1927年10月、曙霞が「貞操？」

⁸⁷原文「性的道德、完全該以有益于社會及個人爲絶對的標準；從消極的方面說、凡是對於社會及個人并無損害的、我們絕不能稱之爲不道德、这是十分明白的、我們建設今後的新性道德、不能不以這爲基礎」同注85、章、19頁。

⁸⁸『婦人問題十講』のほか、章錫琛は1924年、本間久雄の『現代の婦人問題』(天佑社、1919年)を中国語に翻訳し、婦女問題研究会より出版した。

⁸⁹原文「現代的社會革命正待著婦女積極的去參加」、「第一次徵文當選：我所認爲新女子者」、謙弟、『新女性』、第1卷第11號、1926年11月、807頁。

⁹⁰『新女性』において章錫琛が執筆した貞操に関する文章は、「貞節之經濟起源」(第3卷第1号・1928年1月)、「中國女子的貞操問題—在上海各界婦女聯合會講」(第1卷第6号・1926年6月)などがある。

という記事を『婦女與家庭』に掲載した。『貞操』は愛情専一の表現であり、愛情をより濃厚にすれば、『貞操』もより頑丈になる⁹¹」と貞操と愛情の関連性を強調した。

そして、章錫琛は上海各界婦女連合会議の講演に基づき、「貞操觀念的改造」（貞操觀念の改造）という記事を1926年6月號の『新女性』に掲載した。

自分が愛する人と老年になるまで暮らすことは勿論最高の貞操だが、暴行され、姦淫され、無頼漢に誘惑されたとしても、直ぐ彼らを振り捨て、自分が愛している人と結合するもまた最高の貞操である。現代の女子の多くは最初暴行と姦淫、無頼漢の誘惑を被り、自分の一生を犠牲しても彼らと一緒に生活しようとするこそ古い貞操であり、新しい不貞操である。だから我々が注意して努力すべきなのは「貞操の破壊」ではなく、「貞操の改造」である⁹²。

このように、章錫琛が議論した「古い貞操」とは愛情が伴わぬ場合に女性は自らそれを不道德と認識することであり、章錫琛はケイの新性道德論の「戀愛を伴わぬ結婚は不道德」を「貞操の改造」の条件として活用し、さらに「貞操の改造」の重要性を主張した。その「新しい貞操」という概念について、彼が以下のように述べている。

我々が現在必要とする新しい貞操は、人々が守らなければならない道德というより、むしろ人々が持つべき訓練された藝術だと言った方がいい（中略）我々は人々が自らの生活を並外れて圓滿に、豊かにすることで、社會も並外れて美化され、そして幸福になるように望んでいる。古い貞操は受動的、矛盾的、殘酷的、拘束的な、弱くて醜いものであり、新しい貞操は自發的で、相對的、合理的、人道的、解放的で、固くて美しいものである⁹³。

上記の章錫琛の内容からみれば、「現在必要とする新しい貞操」は、人間の生活を向上させるために作られるものである。章錫琛は中国の伝統的な貞操觀に疑いを抱き、新しい貞操は「固い」、「美しい」ものであり、人々がそれを守る必要がある道德として紹介している。

続いて、「純潔は貞操と違い、新しく降り積んだ雪のようなものですぐ溶けてしまう。これに対して貞操というものは、白熱する火の中で鍛練された鋼のようなものである」と

⁹¹原文「『貞操』は愛情専一の表現、愛情愈濃、『貞操』愈堅」、曙霞、「貞操?」、『婦女與家庭』（天津『大公報』副刊）第4期、1927年10月5日。

⁹²原文「和一個自己心愛的人諧和到老、固然是最好的貞操；被強暴被侮辱、被無頼所誘惑、立刻丟開了他們、另和自己心愛的人結合、這也是最好的貞操。現代的女子、還有許多因了最初受強暴的侮辱、無頼的誘惑、情願犧牲自己一輩子跟他的、這是舊的貞操、新的不貞操。所以我們所應該注意應該努力的、並不是『貞操的破壞』、乃是『貞操的改造』」、章錫琛、「中國女子的貞操問題：在上海各界婦女聯合會講」、『新女性』第1卷第6號、1926年6月、406頁。

⁹³原文「我們現在所需要的新的貞操、與其說是人人都應遵守的道德、不如說是人人都應有這訓練的藝術（中略）我們只希望人人都能使他們自己的生活格外美滿豐富、因而使社會格外美化而且幸福。舊的貞操是被動的片面的矛盾的束縛的脆弱的醜惡的、新的貞操是自發的對等的合理的人道的解放的堅固的美麗的」、同注92、章、407頁。

いうエレン・ケイの言葉を引用し、「中国では以前、貞操が形容される時は『冰清玉洁』という形容詞が好んで用いられていたが、実は氷も玉石もいずれも割れやすいものであるから、以前の貞操はエレン・ケイが言う『雪』に過ぎない。我々が望んでいるのは『百鍊の鋼』のような貞操⁹⁴」であると結論付けた。これらの論議を見ても、伝統的な貞操観に反対することを前提としているようであり、貞操という観念そのものの否定には至っていない。そういった意味で、章錫琛の「新しい貞操観」には特異性が見られる。

章錫琛は貞操を新たに「外的」と「内的」に区別し、「貞操」を道徳として認識したが、むしろ「訓練」されるべきものだとして主張した。これも1918年の『新青年』において盛んに論じられた際に紹介された与謝野晶子の説いた「貞操は道徳以上に尊貴である」と異なっている。また、1927年5月、章錫琛は、読者であった謙弟の「非戀愛與戀愛」（非恋愛と恋愛）という記事に対して以下のように論じている。

私は戀愛をそもそも貞操であり、靈肉一致であると考えており、一方、靈的のみがあり性的な戀愛がないものを決して戀愛の完成とは認めない。そのほか、眞の戀愛は決して性的な戀愛のみがあり、靈的な戀愛がないものではない。だから私たちは、男女間の性交については必ず眞摯な愛情を原則にし、戀愛がある戀人同士が自然に結びつくのであって、自分の戀人以外の無愛情の異性との性関係が発生することはあり得ない。これこそ私が主張した戀愛貞操一致の由來である。（中略）私の所謂貞操は「内在的」「自發的」であり、即ち新しい貞操である⁹⁵。

即ち、「内在的」な貞操は「靈肉一致」という条件を持つものである。恋人同士がお互い「靈肉一致」の貞操を持つことで、他の異性と肉体関係を持つことが不可能になるので、自然に「一夫一妻」の関係が生まれると唱えた。章錫琛が『婦女雜誌』編集期において提起した優生学を含む「外在的」な貞操は、『新女性』編集期になると「古い貞操」に変わり、両性の結合による恋愛のもとに形成される「内在的」「新しい貞操」が彼の貞操観となった。

エレン・ケイの女性思想は1920年後半になるとその影響力が徐々に薄れると同時に、恋愛問題の討論も誌面から減少している。また、1920年代後半から、恋愛の神聖さは次第に失われ、「戀愛観」と「貞操観」のどちらにも「靈肉一致」の意義が付与された。これが『婦女雜誌』から離れてから変化した章錫琛の新性道徳観の特徴の一つであったと言える。章錫琛のような社会改良主義者が唱えた「戀愛による貞操は道徳である」などの個人の内在的な改造を通してより良い社会ができるという主張は『新女性』の誌面で繰り返し論じられたが、経済、政治、女性権利を含む社会制度の改造については殆ど論及されなかった。女性の「個人的」な自覚と努力が期待される姿勢が見られるが、もちろんここで

⁹⁴「中國從前喜歡用冰清玉洁來比喻貞操其實冰是極容易溶解、玉也極容易破碎的。所以中國從前的貞操至多不過愛倫凱所說的雪而已。我們所希望建設的乃是百鍊精鋼那樣的貞操」、同注92、章、407頁。

⁹⁵原文「我說戀愛的本身就是貞操、因為戀愛本來是靈肉一致的、在一方面、對於有靈無肉的不能認為戀愛的完成、在他方面、真正戀愛也決不能有肉而無靈。所以我們倘使承認了男女間的性交必須以摯愛的愛好為原則、則在有戀愛的戀人同志的各方、自然不會對於自己戀人以外無愛情的異性發生肉的关系。這便是我所以主張戀愛貞操一致說的由來。（中略）我的所謂貞操乃是內的自發的、即新的貞操」、章錫琛、「我的戀愛貞操觀：寫在謙弟劍波兩君的文後」、『新女性』第2卷第5號、1927年5月、534頁。

の「個人」は、社会的に価値のある女性に限定される。即ち知識もしくは育児能力を持たない「舊式女性」は、「社会改造できない」グループとして区分されることが考えられるであろう。

1930年7月から、葉聖陶が『婦女雑誌』の新しい編集長となった。さらに、金仲華は葉聖陶に続いて1931年4月以降『婦女雑誌』の主幹となる。『婦女雑誌』が1932年1月に廃刊された後、近代中国における最も大型の総合雑誌である『東方雑誌』は、のちに読者の要求に応じて「婦女と家庭欄」という欄目を設けた。

既に1927年に南京国民政府の成立によって男女教育の平等が明示されたが、実際に健康な子孫を養育できるように、女性は良い母親として期待されていたため、男性とは異なった教育内容を受けていた⁹⁶。さらに、1930年代初頭、中国の新生活運動が標榜した伝統的道德観や精神は社会の思潮を変化させ、女性の役割を再び「家の内」に戻した⁹⁷。「婦女回家」（女性は家に帰れ）という女性を差別する主張は先進的な男性知識人から批判されたが、その当時の社会制度の下で職業女性問題は徹底的に解決することができなかったと考えられる。

こうした社会風潮の影響で、1930年代に入ると、職業女性問題に関しては、『婦女雑誌』の男性知識人の間にどのような言論が生じたかについて次章で考察したい。

⁹⁶張素玲、『文化、性別与教育:1900－1930年代的中国女大学生』、教育科学出版社、2007年12月、189頁。

⁹⁷特に中等教育では女性特有の社会役割に応じた教育を行うために、男女分校を原則とし、女子中学校には家政、育児や女性の徳性養成などの科目を設けることとした。末次玲子、『二〇世紀中国女性史』、青木書店、2009年、223頁。

第五章 『婦女雑誌』の終焉と継承

1928 年以降、国民政府は蒋介石のもとで近代国家の建設を進めていた。その結果、都市では工業生産が増加し、商業が発達して消費市場も拡大した。しかし、1931 年 9 月 18 日に満州事変が勃発し、日本は中国への侵略を始め、国民政府は共産党との内戦を継続しながら日本との対決を回避する対策を採った。

そして、1934 年 2 月に蒋介石は南昌で「新生活運動」という社会運動を提唱し、全国で展開した。新生活運動は、伝統的儒教道徳を重視し、日常生活のなかで儒教道徳を実践することを強調し、男女分業制や「婦女回家」（女は家に帰れ）を賛美する論調や政策が出され、中国の女性解放運動は低調になる。1937 年 7 月 7 日には盧溝橋事件が発生し、日中両国は全面戦争に突入し、2 ヶ月後に蒋介石が共産党の提出した「国共合作」を受け入れたことで抗日民族統一戦線が構築された。翌年の 1938 年には、抗日運動と方向性を共有する中国の女性運動も高揚し、中国の女性たちは戦時下において兵士の慰労、団体の設立、雑誌の出版など様々な抗日救国運動を繰り広げるようになった。

「婦女回家」を理念として掲げる 30 年代初期の中国では、民族の存亡の危機にあたって、女性の責任は家庭の中心となること、夫を世話し、子どもを養育することであるという理念が広まっていった。本章では、1930 年代における『婦女雑誌』最後の編集長らがそうした風潮の下で、どのような編集方針を展開させたかを明らかにしたい。

第1節 葉聖陶編集期の『婦女雑誌』（1930 年～1931 年）

1.1 葉聖陶について

本節では、『婦女雑誌』の最後の 1 年半の内容を研究対象にし、まず 1930 年 7 月から 1931 年 3 月に編集長であった葉聖陶の女性思想について論じることによって、この時期の『婦女雑誌』の編集方針を明らかにしたい。

五四新文学運動を主導していた先進的な男性知識人の一人である葉聖陶（1893 年～1988 年）が、『婦女雑誌』の編集長として登場したのは第 16 巻第 7 号（1930 年 7 月）であった。彼の本名は葉紹鈞であり、江蘇省呉県の生まれで、6 歳から私塾で学び、科挙の合格を目指したが、1905 年の科挙制度廃止に伴い、教員への方向転換を余儀なくされる。そして、1915 年に彼は国文教科書の編集に携わる機会を得て国語教育の領域で活躍しはじめた¹。

¹水野あゆ、「夏丐尊と葉聖陶—近代中国における作文教育の先覚者」、『言語と交流』第 18 号、2015 年 7 月、4 頁。

1919年の五四新文化運動を経て、男女共学、女性参政権、社会進出、婚姻改革、自由恋愛、性の解放などが問題になった。女性は男性と同じく一人の「個人」であるとして、封建的な家庭制度からの「思想解放」や「男女平等」の意識が先進的な男性知識人によって強く主張された。葉聖陶はこの時期、『新潮²』という北京大学の機関誌に「女子人格問題³」という文章を投稿した。この文章において、人格とは「大勢の中で独立し、且つ健全な分子の一種の精神⁴」であるとし、男性が女性に対して二つの主義、即ち①「誘惑主義⁵」②「勢利主義⁶」を持っていると述べた。さらに女性の不幸の原因を論じ、この二つの主義により、女性自身の人格は遂に喪失してしまったと強調している。

「良妻賢母」はまた女子の大教訓である。最近女子學校が開設されると、この四文字を教育の主旨として標榜さえした。これは女子というものは人の妻になり、人の母になることのみが適切であり、他にできることはないと言っているのではないか。母はどうして良い母でなければならないか？それは男子の子女を養育するためである。妻はどうして賢い妻でなければならないか？それは男子の家業を手伝うためである。一人の人間が世間を生きるにあたり單に「個人」として關係するのであれば、このような人生は（中略）大群に対して、全く無關係とはいえないが、あっても無くてもよいこぶのようなものではないか⁷。

女性はそれ自身が「一人の人間」であり、男性も「誘惑主義」、「勢利主義」を放棄すべきであるとした。葉聖陶は当時の中国女性が自覚に欠け、大部分の女性が男性の指導に過度に頼っていることを批判した。ただし、ここで「人格」として論じられるものは、社会、経済などと無關係であり、女性の社会的な地位を向上すべきことが個人の問題として主張されるにとどまる。女性自身の個人的精神改造は定期されても、その具体的な改造方法は出てこない。

²『新潮』：新潮社は1918年10月北京大学の学生によって学内で組織された。その機関誌『新潮』は1919年1月に創刊されたが、新潮社の学生たちが五・四運動のデモに参加したため、その年の5月から5ヵ月間休刊した。後に、1922年3月（3巻2號）に廃刊した。中山義弘、『近代中国における女性解放の思想と行動』、北九州中国書店、1983年、227頁。

³葉紹鈞、「女子人格問題」、初出『新潮』第1巻第2號（1919年2月）。

⁴原文「做大群里的獨立健全の分子の一種精神」、「女子人格問題」、葉聖陶、『葉聖陶集』、江蘇教育出版社、1988年、3頁。

⁵葉聖陶が述べる「誘惑主義」とは、男性は「三從四德」、「貞操」等の伝統的な規範によって女性を束縛し、女性を騙して人格を廃棄することである。

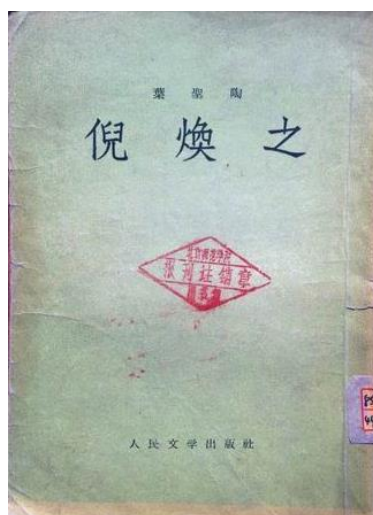
⁶葉聖陶が述べる「勢利主義」とは、男性が女性を輕視して同等の人間として認めず、人格を認めないことである。

⁷「“良妻賢母”又是女子的大教訓。近時開設了女學校、甚至標榜這四個字做施教的主旨。這豈不是說女子祇配做某某的妻、某某的母、除此以外、沒有別的可做了。母為什麼要良？因為要扶養男子的兒女。妻為什麼要賢？因為要幫助男子立家業。試問一個人活在世間、單單對於個人有關係、這種人生（中略）對於大群、不是毫無關係、成了可有可無的一個贅瘤麼？」同注3、葉、5～6頁。

五四運動以降、日本から受容された「良妻賢母」主義を批判した葉聖陶のような中国男性知識人は、女性が男性と同等な地位を認められるために、職業を持つべきことを要求した。その一方で、母親になって子供を養育することを女性の「天職」とする認識は一部の男性知識人から称揚されている。章錫琛編集期の『婦女雜誌』において最も盛んに討論されたテーマは、恋愛、結婚、離婚についてであったが、葉聖陶編集期の『婦女雜誌』になると、女性の教育、女性の社会進出の必要性に関連する記事が多く取り上げられた。しかし、「新式女性」と「舊式女性」それぞれの生活形式を記録して比較する記事も多かった⁸。

例えば、陶希聖の「新舊商品與新舊婦女」（新旧商品と新旧婦女）という記事には、「新式女性」は活気に溢れる毎日を過ごし、楽しい人生を十分に味わえる。それに対して「舊式女性」は細々した家事に追われて精力と時間を消耗し、その中で次第に精神も鈍くなってしまうと述べている。葉聖陶の『倪煥之⁹』では、その生々しい事実が描写されている。以下では1928年、『教育雜誌¹⁰』（1909～1948）に12回にわたって連載された長編小説の『倪煥之』を通して、葉聖陶の女性観を読み取ってみたい。

図 6. 葉聖陶、『倪煥之』表紙、人民文学出版社、1930 年出版（筆者撮影）。



『倪煥之』は主人公である倪煥之^{げいかんし}を教師に設定し、彼が一生を通してどのような姿勢で教育に取り組んだかを中心とした物語である¹¹。倪煥之は友人金樹伯の妹佩璋と結婚し、

⁸例えば、樊仲雲「從女學生到少奶奶」（第17巻第1號、1931年1月）、陶希聖「新舊商品與新舊婦女」（第17巻第2號、1931年2月）など記事がある。

⁹葉聖陶の作品の主なものは殆ど1920年代に集中しており、この間に短篇小説集は5冊も刊行されている。1928年に長編小説『倪煥之』を執筆してからは、彼の創作活動は停滞してしまう。陰山達弥、「葉聖陶—解放前中国の散文作家（2）」、『京都外国語大学研究論叢』（35）、京都外国語大学、1990年、241頁。

¹⁰『教育雜誌』は、1909年から1948年まで、途中2回の廃刊を挟んで前後約40年間にわたって商務印書館から刊行された教育雑誌である。

¹¹杉野元子、「葉紹鈞『倪煥之』について」、『藝文研究』（檜谷昭彦・佐藤一郎両教授退任記念論文集）

夫婦共に学校の国語教師になり、国語教育書を共同で編集した。しかし、間もなく佩璋は妊娠するが、煥之はあまり喜ばない。彼女は学校のことを気にしなくなり、服や靴の品質と値段に興味を持ち、書物とは「永久にお別れ」し、教師生活も「終わってしまった¹²⁾」と言う。倪煥之は、この妻の変化に生きる意味を失うほどに深く失望し、「妻を得たが、戀人と同志を失った¹³⁾」という結論に至る。

小説の最後で、煥之は1927年の国民革命の失敗に落胆し、酒に溺れる毎日を過ごし、身体を壊し、腸チフスにかかった挙句に病死した。佩璋は地元から上海に駆け付けたが、彼の死を看取ることはできなかった。葬式の時、佩璋はこのように言っている。

私は家を出てやるべき事をやります。自分のために、社會のために、私はやらなければなりません。私は子供を産んでから家庭に隠れてしまったという以前の間違いを自覚しました。しかし、後悔しても無意味です。幸い私の命はまだあります。今から始めてもまだ遅くはありません。一昨年煥之は外に向かって飛び立ちたいと言いましたが、私は今、彼と同じ心に燃えています！¹⁴⁾

葉聖陶は『倪煥之』において、女性教師である「佩璋」の描写を通して、中国女性の長所と短所を挙げた。中国女性の長所を、勤勉、温順、記憶力、忍耐力、細やかな心遣いなどであるとし、他人への依存心、虚栄心、臆病、贅沢などを短所としても示した。結婚後の佩璋は子供を産んでから間もなく職業を放棄するが、まるで「家庭に束縛される」「子供しか目に入らない」などの「舊式女性」のような特徴は、やはり彼女の中国女性としての性格からくるものだと、夫である倪煥之は考えている。

知識女性としての佩璋は結婚前、経済的に独立できる所謂「新式女性」とされたが、当時の観念では結婚後には子どもを世話するために夫と妻が家庭の中でそれぞれの役割を果たすという「男は外、女は内」の夫婦分業が、理想の家庭像として期待された。しかし、『倪煥之』の最後、佩璋が家庭から抜け出すべきであることを自覚したという展開において、葉聖陶は女性が自立と職業の重要性を自覚すべきと強調しようとしたと思われるが、伝統的な家庭制度を根本的に改善しようという倪煥之—即ち葉聖陶の意欲は全く見られないのである。

以上のように、葉聖陶の女性観をまとめてみると、伝統的な「舊式女性」であれ、革新的な「新式女性」であれ、彼はそれに対して大きな不満を抱えていた。その原因は、女性が職業を放棄すれば、永久に男性と同様の「一個の人間」として認められないと葉聖陶が考えていたためである。即ち、「舊式女性」の実際の生活状況は、葉聖陶の抱く問題関心

65、1993年、382頁。

¹²⁾葉聖陶、「倪煥之」、『葉聖陶集』第3巻、江蘇教育出版社、1987年、170～171頁参照。

¹³⁾同注12、葉、173頁。

¹⁴⁾原文「我要出去做點兒事、爲自己、爲社會、爲家庭、我都應該做點兒事。我覺悟以前的不對、一生下孩子就躲在家裏。但是追悔也無益。好在我的生命還在、就此開頭還不遲。前年煥之說要往外面飛翔、我此刻就燃燒着與他同樣的心情！」同注12、葉、272頁。

ではなく、享樂生活に耽溺し、家計と育児に束縛される「佩璋」に「舊式女性」を代弁させて新旧双方の女性像を批判することが彼の目的なのである。

1.2 『婦女雜誌』から見る葉聖陶の女性観

葉聖陶は1923年に商務印書館に入り、雑誌の編集を始めた。杜就田が『婦女雜誌』を離れると、葉聖陶が1930年7月から編集長に任命された。彼が『婦女雜誌』に登場するとともに、姿を消していた章錫琛、周建人、陶希聖などの五四時期の代表的な男性知識人が再び誌面に復帰した¹⁵。この時期の『婦女雜誌』には、章錫琛の編集期と比較できるほど多くはないが、女性解放、女性運動に関する記事が数多く掲載され、その数は杜就田編集期より多かった。また「婦女談藪」という欄目も設置され、各国女性の状況や女性問題に関する翻訳記事が紹介され、雑誌が廃刊となる直前の1932年1月まで毎月途切れることなく続いた。

『婦女雜誌』は五四新文化運動のもとで「獨立した個人」としての女性像を創出したはずだが、1930年代以降の『婦女雜誌』では、家庭の中で母親としての義務につとめ、子供の教育に専念することこそが女性の天職であると再び論じられる。しかし、葉聖陶が主宰した『婦女雜誌』において、家庭管理に関する記事の数を減らし、その代わりに女性教育、女性の就業を紹介する記事が多く掲載されたという傾向が見られる。また、杜就田編集期のような、無秩序に投稿記事を採用するのとは違い、葉聖陶は「讀者原稿募集」という読者と交流できる欄目を新設し、当時の女性問題を反映している投稿だけを選択して誌面に載せるようになった。

そして、社会で提唱された「新良妻賢母」という言論に対して、声を上げた女性の投稿も現れ始めた。例えば「しかし母親は本當に女の終身の肩書でしょうか？」¹⁶「女子の責任が單に澤山の子供を産むべきことにあるのか、私の疑問です」¹⁷などの意見が『婦女雜誌』に続々と登場した。女性が役割を果たせる場所は家庭に限らないと主張した葉聖陶は、家事と育児に悩んだ主婦の本音と自己表現を『婦女雜誌』を通して誠実に紹介したことがわかる。

しかし、これは単に「價值」がある投稿を提示しているだけで、編集者陣と読者陣が相互に意見を交換し合う場であるとは言えない。当時の『婦女雜誌』は、理論と現状の両方から女性問題を捉えようとしていたが、読者が編集者との意見を交わすメディアではなかった。その理由について、葉聖陶は以下のように述べている。

¹⁵葉聖陶編集期に、掲載された章錫琛の記事は2篇ある。それぞれは「倍倍爾的『婦人與社會主義』」（1930年7月、第16巻第7號）、「穆勒的『婦女服從論』」（1931年1月、第17巻第1號）である。

¹⁶原文「可是母親真就是女人的終身頭銜麼？」、殷琪、「作了母親」、『婦女雜誌』第17巻第1號、1931年1月、56頁。

¹⁷原文「是不是女子的責任單單在生育這一大群的孩子這是我的疑問」、蘇蘭英、「一個疑問」、『婦女雜誌』第17巻第2號、1931年2月、137頁。

近來、このような投稿の中から特に意義の重大がある幾つかを選んで掲載することによって現代社會の様々な様相を暴露でき、少なからぬ価値があると考えています。そして投稿者側は現実的なことを讀者大衆と相談し合い、讀者大衆からの返信を受けることはできなくても、社會的影響の面において返信より更に切實な回答を得られるかもしれないので、第十七卷第一號から通信欄を追加します¹⁸。

葉聖陶が讀者からの投稿を広く募集し、その中から社會の様相を反映しており価値がある文章を選んだことには、杜就田編集期のようにむやみに讀者投稿をできるだけ多く掲載するよりも、新局面の打開を目指すという葉聖陶の期待が見出すことができる。しかし、讀者と頻繁に交流した章錫琛編集期の『婦女雜誌』と比較すれば、この時期の『婦女雜誌』は、一方的に讀者からの声を聴くだけで、解決方法が讀者に伝わらないこともあり、特に現実と厳密に繋がった「重大」な問題には、改良の方案はもちろん、編集長自身の意見を述べることもさえるべく避ける傾向が見られる。

結局、『婦女雜誌』に「通信欄」が存在する意義について、編集長の工夫が女性讀者の納得を得られたかどうか、実際の生活上に役立ったかどうかは、疑わしいと思われる。「通信欄」を開設してから間もなく、葉聖陶は商務印書館を辞職し、章錫琛が創立した開明書店に移った¹⁹。その後、フランス留学を経験した女流作家である楊潤余が編集長として『婦女雜誌』に登場した。彼女は女性である面が重視されて商務印書館に起用されたと考えられる。楊潤余が主宰した『婦女雜誌』は、編集者陣の大幅な入れ替えが行われず、助手であった金仲華は葉聖陶編集期の編集方針をそのまま受け継いだため、誌面の論調も葉聖陶編集期と変わらなかった。「女性の志向は家庭が原因で葬り去られる²⁰」、「母親が子女を養育することは女の一生の仕事ではない²¹」など讀者からの投稿を見れば、葉聖陶編集期の『婦女雜誌』の影響は彼が辞職してからも続いていたようである。

さらに、『婦女雜誌』ではかつて、女性が職業につく意義とは、男性と同等な地位になり、男性の「附属物」にならずにすむことにであると議論された²²。しかし、1931年12月

¹⁸原文「近來覺得如果從這種來信中選取意義較重大的若干封刊布出來、也足以暴露現代社會的種種形相有不小的價值、而在投書者方面把切身的事情與讀者大衆商量雖不接讀者大衆的回信、但從社會影響上也許會得到比回信更切實的答復、因此從十七卷一號起添著通信一欄」、「通信」、『婦女雜誌』第17卷第2號、1931年2月、136頁。

¹⁹葉聖陶、「我和商務印書館」、『商務印書館九〇年（1897～1987）—我和商務印書館』、商務印書館、1987年、300頁。

²⁰原文「女子的志向都是被家庭斷送的」、洪芳競、「平庸人的希望」、『婦女雜誌』第17卷第9號、1931年9月、64頁。

²¹原文「母親養育子女并不是她一生的工作」、謝曼・呂獻椒、「婦女勞働問題」、『婦女雜誌』第17卷第10號、1931年10月、17頁。

²²五四運動期の知識人は伝統的な家父長制家族制度が中国の近代化を阻害する最大の問題であるという認識を共有している。この時期の『婦女雜誌』では主に女性解放の提唱に関する文章を掲載されて、女性の社会的な進出もその一環として期待された。例えば、胡仰莫の「一個婦女問題的先決問題（擴張婦女職業的領域）」（第9卷第2號、1923年2月）、克士の「婦女職業和母性」（第10卷第6號、1924年6月）など記事がある。

の『婦女雜誌』の「婦女勞動問題」という記事を見ると、「家庭生活改良の方法は婦女を社會への服務で喜ばせるということである。何故なら婦女の労働は經濟的な問題だけではなく、同時に自己表現の一種の方法であり、人類を進歩させるために必要な条件である²³」と述べられている。女性の經濟独立が男女平等と繋がることの重要性は、1930年代以来『婦女雜誌』の誌面で重要な論点となったからである。

また、これらの投稿からは、上海、広州などの大都市で職業女性が増加したことに従って、中国女性の活躍する場所が徐々に「家庭」から「社會」に移り始めたことが伺える。葉聖陶は17巻3號の内容まで編集を務めた後、商務印書館を出て他の革新的な刊行物の出版を始めた。葉聖陶を引き継いで『婦女雜誌』の主幹となったのは、金仲華である。仲華はこの時期商務印書館に入社して5年目であった。次節では『婦女雜誌』最後の編集主幹である金仲華とその編集期の特徴について考察したい。

第2節 『婦女雜誌』の終焉（1931年～1932年）

2.1 金仲華について

金仲華（1907年～1968年）は1907年に浙江省桐郷県に生まれ、孟如、仰山などの筆名を用いた。1928年春、彼は商務印書館に入社した。はじめ『婦女雜誌』の助手であった仲華は、編集長である葉聖陶が辞職した後、フランス留学を経験した女流作家である楊潤余（1902年～？）²⁴とともに編集作業に携わった。しかし、1932年1月に上海事変の戦災で商務印書館の建物が被害を受けた後、『婦女雜誌』は廃刊となった。そして、同年の10月に『東方雜誌』（第29巻第4號）の「婦女與家庭」欄に統合され、金仲華は1934年2月（第31巻第1號）まで編集を継続した²⁵。

金仲華が小学校に入った頃は正に辛亥革命が勃発した時期であり、共和革命の影響もあって、女性を抑圧する伝統的な儒教思想に反感を覚えたと考えられる²⁶。このような個人的な体験があったからこそ、彼は女性問題に着目するようになったと考えられる。

²³原文「改良家庭生活的形式而使婦女樂於社會的服務。因爲婦女的勞動不僅是經濟上的問題、同時是自身表現的一種方法、也是人類進步的必要條件」、謝曼、呂獻椒、「婦女勞動問題」、『婦女雜誌』第17巻第12號、1931年12月、20頁。

²⁴楊潤余の生年は1902年であるが、没年は未詳である。

²⁵村田雄二郎編、『『婦女雜誌』からみる近代中国女性』、研文出版、2005年、378頁。

²⁶幼い時、金仲華は父親の書齋にある『幼学瓊林』（中国古代における児童向けの啓蒙用読み物）という書物を手に取り、その中に書かれた「婦人は主に食事をつくり、ただ酒食衣服の礼に仕えるのみ」（婦主中饋、惟事酒食衣服之禮（中略）何爲三從？從父、從夫、從子）という内容に憤慨し、その文章の上に赤い毛筆で「否否否」と書き加えたという。女性問題に関心を寄せ始めたのはこの時期からではないかと考えられる。鄭彭年、『宋慶齡和她的助手金仲華』、新華出版社、2001年、52頁。

金仲華が女性問題に本格的に取り組み出したのは、入社したばかりの頃であった²⁷。1928年、21歳の金仲華は上海商務印書館に入り、『婦女雜誌』の編集長杜就田の編集助手を務め、編集方法を学んだ。杜就田が商務印書館を離れると、葉聖陶が編集長となった。金仲華は葉聖陶のもとでも引き続き編集助手を続け、彼の影響の下で、編集出版事業や女性問題により深い興味を持つようになっていた²⁸。

1930年代初頭、新生活運動が標榜した伝統的道德観や精神は、女性の役割を再び家庭内に戻した。また、戦争によって女性は新国民として、家庭から後方支援に携わることが要求された。このようにして「女は家に歸れ」のスローガンや理想的な「良妻賢母」像が再び横行するようになったのである²⁹。

葉聖陶は、1931年3月（第17巻第3號）以降、商務印書館を出て、新たな刊行物の出版を始めた³⁰。金仲華は葉聖陶の後を引き継いで『婦女雜誌』の中心的人物となり、第15巻第10號（1929年10月）から記事を執筆し始め、世界の女性関連の記事を毎月2～3篇掲載している。

2.1 『婦女雜誌』から見る金仲華の女性観

金仲華の最初の記事は、杜就田編集期における最後の特集號「嫁前與嫁後特輯號」「結婚前と結婚後特集号」に掲載されている。本特集號の焦点は、近代中国における結婚前後の女性の責任問題であった。「嫁前與嫁後應有的知識」（結婚前と結婚後に持つべき知識）という記事の中で、女性は結婚前の時期に、①知識の訓練、②政治の趣味、③生産の技能という3つの能力を習得すべきと指摘し、結婚後の女性にはさらに家庭教育を「盤石」にするために、直接子女に対して相当の責任を果たすことを求めた³¹。そのため、結婚前後の女性の生理と心理上の変化について討論する必要があると、この特集号では述べている³²。

²⁷原文「我開始留意婦女問題是在民國17年進入婦女雜誌社之時候、因為職務的關係我陸續收集了一些關於婦女的資料同時對於國內外婦女運動的進展狀況、也很為關切」、金仲華、前言、『婦女問題的各方面』、開明書店、1934年、1頁。

²⁸同注26、鄭、58頁。

²⁹新生活運動が始まる前の1929年に、世界的な経済恐慌によって引き起こされた失業者の激増問題を解決するために、ドイツでは女性が家庭に戻り、職場を男性に譲り渡すよう強要された。中国はドイツと同様に、失業者を救済するために、女性の役割を家庭に戻すことが要求された。また、抗日戦争によって、女性も新国民として家庭から後方支援に参加することも求められた。中国女性史研究会編、『中国女性の一〇〇年』、青木書店、2004年、136頁。

³⁰葉聖陶は生活書店を設立し、総合雑誌の『生活週刊』を刊行するなど、出版事業を行った。

³¹朱秉国、「嫁前與嫁後應有的知識」、『婦女雜誌』第15巻第10號、1929年10月、22頁。

³²原文「『嫁前』與『嫁後』實有提出特別討論之必要、而婦女雜誌發行『嫁前與嫁後』專號委實是有重大的意義與價值」（筆者による日本語訳：「結婚前」と「結婚後」は實に討論する必要がある、そして婦女雜誌によって刊行した「結婚前と結婚後に持つべき知識」という特集號は確かに重大な意義と価値があります）、同注31、朱、21頁。

朱秉國は「結婚後の女性は實質的に『良妻賢母』としての責任を免れることができない³³」として家事や育児に最優先に取り組むべきと主張し、「家居婦人重要的職事」（家居婦人重要な職業）という記事では、女性の家庭内労働を①衛生、②教育、③道德、④管理、⑤財政、⑥雜務という6つの項目に分類した。つまり食事の用意、子女の看護、人格の訓練、經濟の管理、來客の応対なども一種の職業とされ、結婚後の女性は、一定の期間はそれらに専念することが推奨されたのである。

特集号「結婚前と結婚後」の記事は、以下のとおりである（表14 参照・太字は筆者より）

表14. 『婦女雜誌』1929年10月（第15卷第10號）：「嫁前與嫁後特輯號」

タイトル	日本語（筆者訳）	著者
「嫁前嫁後應有的知識」	結婚前後に持つべき知識	朱秉國
「談々嫁事の本義」	結婚の本義を話す	文索
「女子嫁後の責任」	女性結婚後の責任	徐亞生
「嫁前與嫁後の生活概論」	結婚前後の生活概論	仲華
「嫁前與嫁後の戀愛問題」	結婚前後の戀愛問題	仲華
「嫁前の修養」	結婚前の修養	廖國芳
「嫁前和嫁後の心理變遷」	結婚前後の心理變遷	袁植隱
「馬爾德茵的嫁之研究」	マルティーンの結婚の研究	趙譽船
「女子的嫁之起因與變化」	女性の結婚する原因と變化	周敬庠
「女子出嫁前後生活的比較」	女性結婚前後生活の比較	許君可
「嫁前選擇配偶的標準」	結婚前に配偶者を選択する標準	飈生
「嫁的雜談」	結婚に関する雜談	葉曾駿
「嫁後小言」	結婚後の説教	挹奇
「女道婦道の商榷」	女道婦道の商榷	梨秋村女
「妻の責任」	妻の責任	宋孝璠
「婦女在家庭中的任務」	婦女の家庭内での任務	鏡影
「嫁後女子的國籍問題」	結婚後女性の國籍問題	仲華
「餘姚女子的嫁前與嫁後」	餘姚女性の結婚前と結婚後	紀芳
「育嬰的法則」	育児の法則	達如
「一位女畫家の嫁前與嫁後」	一人の女性畫家の結婚前と結婚後	頌堯
「她嫁了後」	彼女が結婚した後	徐學文

以上に挙げた記事の内容のほとんどにおいて、「良妻賢母」を女性教育の精神ではなく、男尊女卑を基底とする儒教的な女性観に支配された特別な職業としての観点から論

³³原文「女子在嫁後實不容辭她的『賢妻良母』的責任」、同注31、朱、23頁。

じられ、結婚後の女性は全力で家庭に仕えることが、社会への貢献となると強調している³⁴。

また、1929 年末、週刊誌『生活³⁵』上で活躍した教育専門家・陳選善（1903 年～1972 年）も、結婚前後の女性の職業について「結婚の準備をする女子は、母という職業に就く準備をすべきである。結婚生活と職業生活は兩立できないことはないが、二つの仕事に心を分散させるのは一つの仕事に集中するよりも効率が悪い³⁶」と主張した。ここから、当時の中国の男性知識人は「女性が妻・母として家事労働に勤しむことは女の『職業』であり『自然』な分業である³⁷」という政治的なスローガンの下で、結婚後の女性に家庭において「天職」を果たすことを求めていたことが確認できる。

一方の金仲華は、最初の「嫁前與嫁後的戀愛問題」（結婚前と結婚後の戀愛問題）という記事の中で、自由恋愛と自由結婚の重要性を唱えていた³⁸。そして、「嫁前與嫁後の生活概論」（結婚前と結婚後の生活概論）の中で、結婚後の女性、すなわち妻の最も重要な責任について、以下のように説いている。

妻としての責任あるいは主婦の責任については古來より男は外、女は内という言い方があり、その分業によって各自の責任を果たすことをいう。現代では家庭内分業に弊害が生じているので方針を改め協力にしなければならない。即ち男女が共に家を離れて仕事し、お互いに家計を負担しなければならない。しかし男女の天賦の能力はそれぞれ異なり、女性の子を産み育てる能力は決して男性が代行することではない。かえって女性を外に行かせて生計を分担する責任を加えれば、女性のみが負う負担があまりにも重すぎるのではないか？もし女性のみを損をさせようとするのでなければ、信頼できる保育機關を早急に求めねばならない³⁹。

³⁴原文「據我個人的意見:以爲女子最好先將家政料理完美爲社會建築一個堅固美好的基礎、然後再出其所學、從事其他服務社會的工作、須知處理家政、也是一件服務社會的重大工作啊」、宋孝璠、「妻的責任」、『婦女雜誌』第 15 卷第 10 號、1929 年 10 月、143 頁。

³⁵『生活』：1925 年 10 月上海で創刊され、1926 年 10 月から鄒韜奮（1895 年～1944 年）が編集長となった。

³⁶原文「我以爲結婚的生活與職業的生活并非不能并存的、不過分心與兩種工作當然比專心於一種工作的效率小些」、陳選善、「婦女解放思潮引起的問題」、『生活』第 5 卷第 1 期、1929 年 12 月 1 日、28 頁。

³⁷白水紀子、「中国における「近代家族」の形成：女性の国民化と二重役割の歴史」、『横浜国立大学教育人間科学部紀要（Ⅱ）人文科学』、2004 年、145 頁。

³⁸彼は自由離婚については、中国女性を西洋女性と比較し、自立と職業についての社会的な差が大きいこと、離婚後に様々な生活上の苦難が発生し、人生が不幸になる可能性を考慮し、慎重に考えるべきだと強調した。仲華、「嫁前與嫁後的戀愛問題」、『婦女雜誌』第 15 卷第 10 號、1929 年 10 月、90 頁。

³⁹原文「爲妻的責任或主婦的責任古語有男治外女治內之說、這是因分工而各負責而在現代以家庭分工制積久生弊將改弦易轍而爲合作、則男女共須出外離家互相負擔經濟、但是男女的天賦不同在女的一方面孕育子女決非男子可以代行的、而反要她加重了出外謀生的肩責、這不是女的一方所負太重麼？如果不使女的一方吃虧非急須謀一極可靠的公育機關不可」、仲華、「嫁前與嫁後の生活概論」、『婦女雜誌』、第 15 卷第 10 號、1929 年 10 月、87 頁。

結婚後の女性の育児と家政の問題について、「結婚前と結婚後の戀愛問題」が他の記事と異なるのは、金仲華は女性に「妻」と「母」としての責任がある点については認めるものの、それと同時に女性は結婚しても経済的に独立して社会進出できるようにすべきと主張した点にある。さらに、結婚後女性は社会進出して職に就くことはできるが、彼女らの負担を軽減するために、子どもの集団保育を担う保育機関を早急に設立すべきであると提唱した点にある。

蒋介石による復古思潮の推進と、それに歯止めをかけようとする陣営との対立のもと、当時の『婦女雑誌』編集長である杜就田が採用した『婦女雑誌』の編集方針は、保守的なものであった。したがって金仲華が杜就田から編集方法を学んでいた頃から、彼の記事内容に多方面での影響を受けていたことは想像に難くない。このような経緯から、商務印書館に入った直後の金仲華は、『婦女雑誌』に掲載した最初の記事において、自分の意見を明確に打ち出すことができなかった可能性があると推測される。

しかし、金仲華の文章からは他の記事と異なる点が見出せる。彼が、(1)結婚後に働く多忙な女性への同情と理解を示しながらも、(2)結婚した後の女性が家庭と職業を両立できない現状に対し社会にその解決方法を要求し、(3)他の記事にない「戀愛問題」を提起した点である。

金仲華は23歳の時に、葉聖陶の推薦で『婦女雑誌』の編集主幹となった。彼は読者からの投稿を重視する編集方針であったため、若い読者から支持を集めていた。金仲華が書いた記事は、主として『婦女雑誌』に掲載され、世界各地の女性運動や女性の置かれた社会状況を紹介・解説する内容が多かった。彼が編集した時期の『婦女雑誌』は、女性教育・職業・婚姻・参政権など幅広い分野において大量の翻訳活動を行っていた。これは美術、写真の掲載を中心とした杜就田編集期の『婦女雑誌』と比較すると、大きく異なる点である。

これらの翻訳記事は当時の『婦女雑誌』において重要な位置を占めており、ここから金仲華は新知識、新思想に触れながら近代の女性解放思想を醸成し、女性解放を実現するために努力を重ねていたことがわかる。

中でも、彼は単に著作をそのまま中国語に翻訳するだけではなく、雑誌の中で、マーガレット・ヒギンズ・サンガー (Margaret Higgins Sanger 1879 年～1966 年)⁴⁰、バートランド・ラッセル (Bertrand Russell 1872 年～1970 年)⁴¹、ヘンリー・ハヴロック・エリス (Henry Havelock Ellis 1859 年～1939 年)⁴²、シャーロット・パーキンス・

⁴⁰華君、「山格夫人提倡節育的近著」、『婦女雑誌』第16巻第9号、1930年9月、135頁。サンガー夫人(山格夫人)はアメリカの産児制限活動家であり、優生学の唱導者である。

⁴¹仲華、「羅素的『婚姻與道德』」、『婦女雑誌』第16巻第11号、1930年11月、35頁。現代イギリスを代表する思想家である。数学者、論理学者、平和主義者として活躍していた。ラッセル家は代々、「貴族的自由主義」を掲げるイギリス貴族の名門で、祖父ジョン・ラッセルは、ヴィクトリア女王に仕え、自由党を率いて2回首相となった。バートランド・ラッセル(著)、安藤貞雄(訳)、『結婚論』、岩波書店、1996年、344頁。

⁴²金仲華、「露理斯的『男與女』」、『婦女雑誌』第17巻第2号、1931年2月、47頁。ヘンリー・ハヴロック・エリスはイギリスの性科学者で性の研究を行った。

ギルマン（*Charlotte Perkins Gilman* 1860 年～1935 年）⁴³などの西洋思想家による女性思想についての著作を取り上げた。

また金仲華は簡潔な言葉で各章の内容を説明した上で個人的な見解も添えた。例えば、彼はラッセルの『婚姻與道德⁴⁴』（婚姻と道德）を紹介した際に、その選択の理由を「今問題視されている婚姻制度と兩性制度に対して不自然さと不徹底さを感じ彷徨したり苦悶したりする人のため⁴⁵」であったと述べた。

しかし、金仲華はラッセルの著作中の「母性家庭」論には賛同していない。「母性家庭」論とは、母親になる女性固有の問題つまり生命の生産に社会的な保障を与え、母性がこれまで負ってきた出産、育児を社会で引き受けていくことを主張する内容である。すなわち母性を母親となる女性の専業とし、彼女らが出産と育児に専念するために、社会からある程度の保障を受けられるようにすべきであるという主張である。

これに対し、金仲華は「母性家庭論では母性は婦女の専業であったが、婦女が解放された近代に至り、婦女は既に各種の職業界に入っている。私は彼女らが育児に専念したいと思っているとは思じられない⁴⁶」とラッセルに反論している。

ラッセルの作品を紹介する以前、金仲華は『婦女雜誌』で女性解放思想を主題とした論説の紹介を行った。仲華は、エリス、ギルマンなどの欧米の女性解放家の著作から多大な影響を受けていたと考えられる。既に女性解放運動が行われていた欧米諸国は、女性解放の第一步を、女性の社会進出としており、女性の職業教育に重点を置いていた。これに影響を受けた金仲華は、女性が自活できる職業を持つことで、これまでの社会の女性の能力に対する軽視を一掃し、女性の地位も高まると考えたと言える。

そして、エリスの『男與女⁴⁷』（男と女）を紹介した際には、金仲華自身もエリスと同様の意見を述べている。そして「婦女が家庭以外の仕事に従事することは必然的な趨勢である。人類學によれば原始時代の婦女はかつて健全な軀格であらゆる工業に参加し、しかもあらゆる工業は婦女によって創始されていた。故に婦女の社会労働の分担も、昔から自ずと存在したのである⁴⁸」と主張する。金仲華はエリスの「原始民族に於いて、

⁴³金仲華、「居爾門夫人的『婦女與經濟』」、『婦女雜誌』第 31 卷第 3 號、1931 年 3 月、44 頁。アメリカの女性解放思想家、評論家、作家。著作『女性と經濟』（1898 年）がベストセラーとなり、20 世紀初めには重要な思想家として評価された。

⁴⁴『婚姻與道德』：原名『*Marriage and Morals*』は 1929 年に出版された。中国訳は『婚姻革命』、訳者は野廬、世界学会から 1930 年に出版された。

⁴⁵原文「在一般感覺到目前婚姻制度與兩性道德的不自然不徹底而徬徨苦悶的人讀了羅素這冊書會得到許多有益的提示。」同注 41、仲華、35 頁。

⁴⁶原文「母性家庭將使母性成為婦女的專業、在婦女解放的現代、婦女已走入各種職業界、我不相信她們再願意以生育子女為專業。」同注 41、仲華、46 頁。

⁴⁷『男與女』：原名『*Man and Woman : A Study of Human Secondary Sexual Characters*』（『男及び女：人間に於ける第二義の性的特徴の研究』）、1894 年、小倉清三郎によれば、「性的特徴には第一義のものと、第二義のものとがある。直接に生殖に係る器官及び作用が第一義のものとせられ、その他が第二義のものとせられてある。」小倉清三郎訳、『世界女性学基礎文献集成』（「明治大正編」第 14 卷）、初版 1913 年、再版 2001 年、2 頁。

⁴⁸原文「然而婦女的從事家庭以外的工作已成為必然的趨勢。就人類學講原始的婦女曾以健全的體格參與一切的工業、并且一切的工業都是由婦女所創始的。所以婦女的擔任社會的工作也未始有昔乎自然、

狩猟と戦争は男の役割であり、家事と工業は女の役割である⁴⁹」という意見に影響を受け、原始社会から男女の分業があったとする歴史をふまえ、現代において女性が職業に就くこともまた必然的な成り行きであると考えていたのである。

また、彼はギルマン（*Charlotte Perkins Gilman*）の『婦女與經濟⁵⁰』（『女性と經濟』）の紹介もしている。ギルマンはアメリカの作家であり、『女性と經濟』において「女性が一つの職業を持つべきであることをより適切に説明」した人物として知られていた。女性が職業を持つことのメリットを「家庭外での作業によって、女性は健全な身軀をもつことができ、強健な子女を産み出すこともできる。家庭外で社会の人々と多く接触することは婦女の見聞を広め、知識を進化させ、思想を培わせ、優良な後嗣を育成できる⁵¹」と述べている。

『女性と經濟』においてギルマンは、女性の本来の性は男性に劣らないものであるが、女性が生存手段を男性に依存する「不自然」な関係を持つに至ったという、この「性による経済的關係」、「不自然」な関係が慣習化されたものが結婚制度だと指摘した⁵²。そして、このような経済的な関係から脱するために、「働く母親」が重要であり、これが理想的な女性像であるとギルマンは主張した。金仲華もギルマンの「家事労働から解放され、『人間』として目覚めた女性が仕事に従事すべき⁵³」という主張に賛同し、「この著作を紹介するのはさらに女性の読者らの努力をうながし、職業の範囲を拡大し、獨立のための基礎を打ち立てる⁵⁴」ためであるとして、女性の職業の重要性を強調したのである。

1920年代から1930年代前半にかけて、『婦女雜誌』はラッセル、エリス、ギルマンら西洋女性の思想を翻訳して紹介したことで、これらの議論はより活発に展開した。金仲華が職業に関する新たな見解を持つ西洋の女性解放運動家らの意見を翻訳して発表する場を積極的に提供したのは、女性に対して、家庭内の役割よりも社会的な役割を果たすことを期待したためではないかと読み取れる。また多くの読者もこれらを引用し、女性の職業問題を真剣に議論し始めるようになっていた⁵⁵。以上のような観点を持つ金

同注 42、金仲華、49 頁。

⁴⁹原文「在原始的民族中大概游獵和戰爭歸於男子家事和工業屬於女子」、同注 42、金仲華、42 頁。

⁵⁰『婦女與經濟』：原名『*Women and Economics*』、1898 年に出版された。ギルマンが女性の経済的自立と「母性」の関係をどのように論じたかに焦点に当てたものである。結婚後子供を産んだギルマン自身も「家庭性」の美德という圧迫の中で苦しみ、女性が経済的に男性に依存する関係から脱するために、家事労働の社会化を主張した。

⁵¹原文「在家庭外作工活動可以使婦女發展健全的體格產生強健的兒女在家庭外多和社會人群接觸可以使婦女見聞廣博知識增進思想開豁而培養出優良的後嗣」同注 40、華君、135 頁。

⁵²ギルマン著、水田珠枝監修、『婦人と經濟』（初出 1911 年、大日本文明協會編）、ゆまに書房、2001 年、23 頁。

⁵³原文「希望婦女讀者能認識這時機的重要、努力將職業的範圍擴展起來、努力將獨立的基礎樹立穩固起來」、同注 43、金仲華、52 頁。

⁵⁴原文「現在介紹這本書更希望婦女讀者能認識這時機的重要、努力將職業的範圍擴展推廣起來、努力將獨立的基礎樹立穩固起來」同注 43、金仲華、52 頁。

⁵⁵例えば、陳碧雲によれば、ギルマンが女性の職業を主張し、女性の知力の発展を尊重するが、それは完全に資本主義的な自由競争説である。陳碧雲、『婦女問題討論集』、中華基督教女青年會全國協會、

仲華は、第1回の「婦女回家」論争⁵⁶の中でどのような立場に立ったのであろうか。次の節で述べることにしたい。

第3節 『婦女雑誌』の「継承者」(1932年～1934年) —『東方雑誌』(婦女與家庭欄)を中心に

3.2 「婦女回家」論争から見る金仲華の女性観

1933年9月13日、上海の『時事新報』⁵⁷に掲載された林語堂⁵⁸(1895年～1976年)の「婚嫁與女子職業」(嫁入りと女子の職業)は第1回「婦女回家」論争のきっかけになった。その記事では、女性にとって唯一男性との競争が起きない職業は結婚だけであると示されていた。すぐに、同誌に査士驥が「女子出嫁後就不必有職業嗎？」(女子が結婚後に職業を持つ必要がないのか?)という記事で林の主張に反駁した。

さらに、「女性には職業と家庭を両立すべきである」という新しい意見も現れた。同時期に『婦女共鳴』⁵⁹に掲載された「婚嫁能算女子職業嗎？」⁶⁰(結婚は女子職業として認

1935年、3頁。

⁵⁶第1回「女は家に歸れ」論争の口火を切ったのは、1933年9月13日『時事新報』に掲載された林語堂の「結婚と女性の職業」という記事である。その中で林語堂は、現在の経済制度ではどの職業においても男性に比べて女性が不利であること、唯一有利な職業は「結婚」であること、そして多くの中国の女性はこの職業に最も適していると述べた。また、1936年に出版された彼の『My Country and My People』(『我国土・我国民』)では、結婚は女性を最も安全な環境に置き、女性の唯一の幸福に対する保証であり、母親になることは最大の権利であるとした。そして、中国女性は西洋女性の持つ自立した精神に欠け、離婚や再婚によっては幸福にはなれないとも論じられた。

また、夏蓉の研究としての「20世紀30年代中期關於『婦女回家』與『賢妻良母』的論争」(『華南師範大学学报科学版』、華南師範大学、2004年6月)では、第1回「婦女回家」論争における男性知識人の言論を主に以下のようにまとめている。

- i. 家庭の管理、子女の養育など全ての家事労働が女性の「天職」である。
- ii. 女性の家事労働は家庭に貢献すると同時に、社会への貢献にもなる。
- iii. 派手な都市のモダンガールにならないような、良妻賢母教育こそが女性を正しく導く。

⁵⁷『時事新報』：前身は1907年12月5日に上海で創刊された『時事報』と1908年2月29日に創刊された『輿論日報』である。『時事報』の編集長は汪劍秋、『輿論日報』の編集長は狄葆豊である。両誌は1909年合併し、最初の名称は『輿論時事報』であったが、1911年5月18日に『時事新報』に改名し、1949年5月27日廃刊するまで合わせて14785期を出版された。

⁵⁸林語堂：福建省漳州県出身の文学者、評論家である。牧師の父親を持ち、上海の聖約翰大学を卒業し、アメリカとドイツに留学した。北京大学・厦門大学の教員を経て、雑誌や新聞に寄稿する傍ら、自らでも雑誌を編集、刊行した。

⁵⁹『婦女共鳴』は1929年に「婦女共鳴」社より上海で刊行された機関誌である。1944年に廃刊した。

⁶⁰談社英、「婚嫁能算女子職業嗎?」、『婦女共鳴』第2巻第9號、1930年9月。

められるか) という記事もまた強い論調で林語堂の主張を批判した。ここから、論争の中心が徐々に封建社会の根本的な男女不平等の根絶に移行したことが分かる。そして、1937 年になると、日中戦争が勃発し、中国女性に家庭を出て戦争協力に参加することが要求されるようになったため、第 1 回「婦女回家」論争は議論の途中で休止した。

1934 年 9 月、金仲華のこれまでの女性問題研究の集大成である著作として『婦女問題的各方面』(婦女問題の各方面) が章錫琛の開明書店から出版された。この著作の内容は、女性問題に関する記事を婦女の思想・経済・性愛・参政と教育問題に分かれたものである。(表 15 参照)。

表 15. 金仲華『婦女問題的各方面』(開明書店・1934 年出版) 目次

タイトル	日本語訳(筆者訳)	初出誌	出版年月	バックナンバー
婦女的な生活形態と思想	婦女的な生活形態と思想	『東方雑誌』	1933 年 4 月 1 日	第 30 巻第 7 号
近代婦女解放運動 在文學上的反映	近代女性解放運動の文 学的な反映	『婦女雑誌』	1931 年 7 月	第 17 巻第 7 号
從家庭到政治	家庭から政治へ	『婦女雑誌』	1931 年 5 月	第 17 巻第 5 号
從職業回到家庭么	職業から家庭に戻るか	『東方雑誌』	1933 年 12 月 1 日	第 30 巻第 23 号
婦女労働問題之生 物學的觀察	婦女労働問題の生物学 の觀察	『東方雑誌』	1932 年 10 月 16 日	第 29 巻第 4 号
家事社會化	家事社会化	『東方雑誌』	1932 年 11 月 1 日	第 29 巻第 5 号
我國婦女知識解放 運動的檢視 ⁶¹	我が国婦女知識解放運 動の檢視			
我國新婦女與婚姻 糾紛	我が国新婦女と婚姻紛 争	『東方雑誌』	1932 年 10 月 16 日	第 29 巻第 4 号
目前我國的婦孺保 護問題	目前我が国の婦孺児童 保護問題	『東方雑誌』	1933 年 5 月 1 日	第 30 巻第 9 号
托兒所與嬰兒院之 理論的基礎	托児所と嬰兒院の理論 的な基礎	『東方雑誌』	1933 年 9 月 1 日	第 30 巻第 17 号
禁娼與公娼	禁娼と公娼	『東方雑誌』	1933 年 7 月 1 日	第 30 巻第 13 号
節制生育與婦人生 理的解放	生育節制と婦人生理の 解放	『婦女雑誌』	1931 年 9 月	第 17 巻第 9 号
世界婦女奴隸現状	世界婦女奴隸現状	『婦女雑誌』	1930 年 8 月	第 16 巻第 8 号

⁶¹表 15 に示されたタイトルの「我国婦女知識解放運動的檢視」、初出掲載誌は現時点で不明である。筆者が『婦女問題的各方面』の発表にあたって、金仲華の書き下ろした文章ではないかと推測している。

当時の社会経済の状況は、女性の就業を制限することで男性失業者に労働の機会を増やし、軍事力の基盤となる人口を増加させようとする傾向があった⁶²。それに対し金仲華は、人口を増加させるための方法は女性を家庭に帰らせることだけではなく、女性だけが家事と育児の全責任を負うべきだとは言えない。即ち、男性にも責任があると論じたのである。

『婦女問題的各方面』では金仲華の『婦女雑誌』と『東方雑誌』における代表的なものを選択して収録しているが、『婦女雑誌』に掲載された「嫁前與嫁後の生活概論」（結婚前と結婚後の生活概論）という最初の記事が選ばれていない。その理由は恐らく当時の『婦女雑誌』全体の誌面の性格に影響を受け、金仲華はその記事に対して1934年現在の考え方と大きく食い違うため、意図的に選択しなかった可能性があると推測できる。

第1回「婦女回家」論争⁶³は1933年9月に発生したが、この際、金仲華は1933年12月の『東方雑誌』に「從職業回到家庭嗎⁶⁴」（職業から家庭に戻るか）という記事を発表した。恐らく、「婦女回家」論争に対して、金仲華は不満を持ったからこそ、「職業から家庭に戻るか」という疑問を投げ出したのであろう。民国期に入ると、職業女性が中国都市部の人々に広く認識されるようになった。

金仲華は「最近まさに新しい良妻賢母の主張が、薄っすらと現れるようになってきた⁶⁵」と当時の中国社会に現れた「婦女回家」の風潮を感じ取っている。女性の社会活動は既に確定的な地位を占めているため、彼女らは「社会」の一員であることを十分に意識して相応の貢献を行うべきと提唱している⁶⁶。金仲華は明確に「女性の社会進出は抑えられない」とする自分の信念を持ったうえで、「①婦女を家庭に帰るべきとして抑えつけた者がそうする動機は何か？また②婦女は現在の職業界においてどのような地位

⁶²陳延媛、「女性に語りかける雑誌、女性を語りあう雑誌—『婦女雑誌』一七略史」、同注25、村田、247頁。

⁶³この論争についての先行研究は多数存在する。代表的な研究は前山加奈子の「林語堂と『婦女回家』論争—1930年に於ける女性論」（柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族、汲古書院、1993年）や、江上幸子の「中国の賢妻良母思想と『モダンガール』—1930年代中期の『女は家に歸れ』論争から」（『東アジアの国民国家形成とジェンダー—女性像をめぐる』、青木書店、2007年）である。前者は、「女は家に歸れ」論争の中で林語堂の女性に関する言論について考察した上で、林の思想背景に触れた。また「女性の職業」に関しては、時代を超えた重要な問題として取りあげられ、以降の各論争でも常に焦点となった。後者は、論争に表れた言説を四派—(A)：良妻賢母派（清末型）、(B)：新良妻賢母派（近代家族型）、(C)：新良妻賢母派（家庭・職業両立型）、(D)：賢母良母否定派（経済自立・社会変革型）に分類し、その言論から中国の「良妻賢母」思想及びそれに抵抗した人々のジェンダー観を探り、「良妻賢母」思想が単に「封建的」一色のものではなく、しかし一律に「反動」の思想として切り捨てられるわけでもないという結論を導き出している。

⁶⁴孟如、「從職業回到家庭嗎」、『東方雑誌』第30巻第23號、1933年12月1日、125頁。

⁶⁵原文「社會上甚至因為排斥職業婦女的趨向，已經發生了一種新的以家庭為婦女天職的說素。最近德國的獎勵婦女結婚和提倡賢妻良母教育，可說是這種趨勢的極頂的發展，在中國雖然一切都遠落人後，而最近竟也有新的賢母良妻的主張，隱約地發現出來」、同注64、孟、125頁。

⁶⁶原文「婦女已經在職業界占著確定的地位了，社會職業在許多婦女已經成為她們的生活的基礎。在目前婦女只應該以更大的努力，把她們的職業生活改善起來」、同注64、孟、129頁。

に立っているのか？⁶⁷」という読者からの質問に対して、それぞれ回答しているので、簡単に紹介したい。

当時の社会経済の状況は、女性の就業を制限して男性失業者の労働機会を増やすと同時に、軍事力の基盤となる人口を増加させようとする傾向があった。そのため1つ目の問いに対して金仲華は、人口を増加させる方法は必ずしも女性を家庭に帰らせることにはなく、女性だけが家事と育児の全責任を負うべきだとは言えないと答える。男性も育児の責任を負担すべきであり、また児童教育も母親だけの責任ではなく、社会共同的な責任であると論じた。

2つ目の問いに対して金仲華は、職業女性の中で、「花瓶」を除く大部分は女性工場労働者である。それゆえ「社会へのサービスを職業とする女性」たちは、「花瓶」を反面教師にして努力する必要があると唱えた。また、女性工場労働者は殆ど家族の生計を担う必要があるため、一生懸命に自らの家族の生活費を稼いだ彼女たちが、それぞれの業界で重要な地位を占めていたと金仲華は回答した。

ここで、金仲華が「婦女回家」論に反対した理由は2つあったと考えられる。1つは女性を家庭に帰らせても、戦争と経済による人口減少の問題を解決できるわけではない点である。もう1つは、職業を持つ女性が社会で重要な地位を占めていると証明した点である。女性が働くことの重要性は家庭の生計を負担することだけではなく、「社会へのサービス」の点にあると彼が認識した点である。

1935年以降になると、金仲華の女性問題に関する発言は少なくなる。彼の著作『婦女問題的各方面』（婦女問題の各方面）ではその理由を明らかにしている。それによると半分は多忙のためであり、半分は「女性問題について話すべきことは既に話し終えた⁶⁸」ためであると述べている。最初金仲華は女性問題を女性だけの問題としていたが、その後彼は、当時の様々な社会問題の一つとしてこの問題があることを示した。これは、婦女問題を軽視しているわけでも、もしくは解決したと考えたわけでもなく、他の社会問題と合わせて解決方法を求めるべきだと金仲華が考えたからである⁶⁹。その後、金仲華は政治問題に注目し、女性論の研究を辞めて政治の世界に転向したのである。

3.2 金仲華編集期の『東方雑誌』（婦女與家庭欄）

『東方雑誌』の前身は『外交報』である。商務印書館によって1901年に創刊された同社最初の雑誌である『外交報』は1910年に廃刊し、1904年1月25日に至って『東方雑誌』が創刊され、『外交報』と合併した。『東方雑誌』は月刊誌であり、毎期の頁数

⁶⁷原文「(一) 企圖驅使婦女重返於家庭者是抱著怎樣的動機？(二) 婦女在目前的職業界占有怎樣的地位？」、同注64、孟如、126頁。

⁶⁸原文「我的辭去『婦女與家庭欄』的事務、一半是因為別的職務太忙、一半也因為覺得對於婦女問題、所有應說的話都已說過了」、金仲華、『婦女問題的各方面』、開明書店、1934年9月、2頁。

⁶⁹原文「最先我把婦女問題作為單獨屬於婦女一性的問題來看、後來我總算認識了這是屬於許多社會問題中的一個問題」、同注68、金仲華、2頁。

は約 250 枚で、図画は 10 枚ほどである。同誌の創刊主旨は「啓導國民、連絡東亞⁷⁰」（國民を啓發し、東アジアの連結を実現する）である。即ち、時事の分析を通して、東アジアにある国家との関係を重視し、中国が世界で一日も早く重要な位置を占めることを期待している。

1932 年 1 月 28 日、日本軍の爆撃により商務印書館が被災したことを機に、『婦女雜誌』はそのまま廃刊となり、編集長であった金仲華も暫く失業していた。商務印書館は、1932 年 8 月に復業し、同年 10 月に『東方雜誌』（図 7 は復刊当時の『東方雜誌』の表紙）、『英語週刊』、『兒童世界』、『兒童畫報』を復刊したが、『婦女雜誌』、『小説月報』、『教育雜誌』、『學生雜誌』、『少年雜誌』、『自然界』は暫く休刊が公布された。

復刊された『東方雜誌』の誌面には、「教育欄」、「婦女與家庭欄」、「文藝」という 3 つの欄目が設けられ、それぞれ『教育雜誌』、『婦女雜誌』、『小説月報』が担っていた役割を受け継いだ⁷¹。それぞれの欄目の編集者はかつての各雑誌の編集に携わっていた者を起用した。「教育欄」は徐調孚⁷²が編集長を務めていたが、彼はかつて『小説月報』の編集を担当していた。そして、「婦女與家庭欄」は『婦女雜誌』最後の編集長である金仲華が編集を担当した。しかし、「婦女與家庭欄⁷³」は独立した雑誌の形式を回復することなく、1939 年 8 月（第 36 巻第 15 號）まで継続した後、資金問題によって「婦女與家庭欄」は廃止された⁷⁴。

「婦女與家庭欄」が停止された理由は、1932 年 12 月に、『東方雜誌』が復刊したばかりの頃の編集長の文章から既に読み取ることができる。「來年の計畫」（明年的計劃）という記事の中で、読者の「軟性文學の増加」という希望に対して、以下のように述べている。

婦女與家庭欄に収められていた大部分は軟性の讀物です。その爲東方（『東方雜誌』を指すこと、筆者註）の正文には政治、經濟、學術思想的な論文のみ収集することとなった。以前の各種短篇の材料は全て手放すしかなかった。そして、我々も『東方雜誌』を巷で流行りの低俗な讀物にし、學術的な固有の地位を失わねことを望まない。我々はただ編集の面しか讀者の興味を引くことに努力することができな

⁷⁰無名氏、「新出東方雜誌簡要章程」、『東方雜誌』第 1 卷第 1 期、1904 年 1 月、1 頁。

⁷¹王雲五・黃良吉編『東方雜誌之刊行及其影響之研究』、臺灣商務印書館、1969 年、114 頁。

⁷²徐調孚（1901 年～1981 年）：出身地は浙江省平湖で、筆名は孚、蒲梢である。嘉興第二中学校から卒業後、1921 年上海商務印書館に入社し、『小説月報』の編集を提携した。1933 年 7 月に『文学』月刊誌の編集委員に担任する。『母親的故事』、『中国文学名著講話』など著書がある。徐友春編、『民国人物大辞典』、河北人民出版社、1991 年、724 頁。

⁷³黃良吉の研究によれば、「教育」欄と「婦女與家庭」欄は第 4 號から、1 號毎に交代で刊行されるようになった。即ち奇数號に「婦女與家庭」欄、偶数號に「教育」欄という順番である。同注 71、王・黃、114 頁。

⁷⁴陳延媛「女性に語りかける雑誌、女性を語りあう雑誌—『婦女雜誌』一七略史」、同注 25、村田、46 頁。

い。しかし軟性文學を偏重しすぎではいけない。この點について愛讀者はご理解されることであろう⁷⁵。

この点から、当時の『東方雜誌』の目標と着眼点は、実際の學術問題を解決したり、知識文化を宣伝したりする方向であることが覗える。「婦女與家庭欄」という女性問題を議論する欄目はあくまで、「裝飾物」として『東方雜誌』の内容を飾り付けるためのものであり、商務印書館にとっては決して重要な存在ではないと見られていた。

図 7. 『東方雜誌』復刊號表紙①（第 29 卷第 4 號・1932 年 10 月）

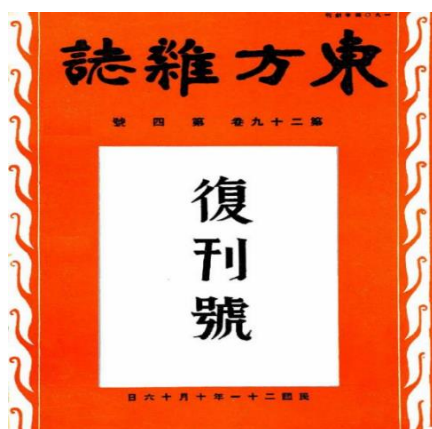
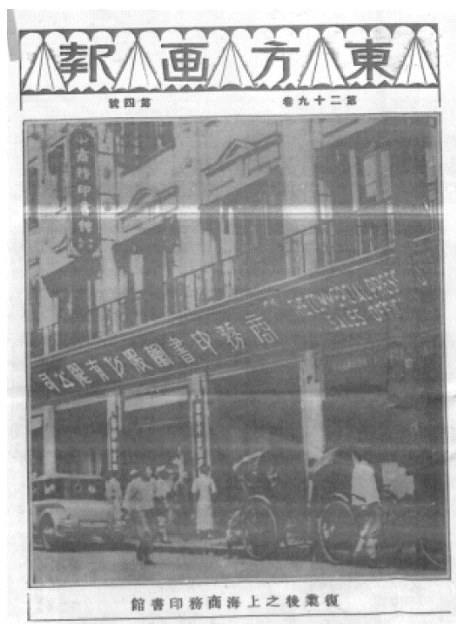


図 8. 『東方雜誌』復刊號表紙②（中国語表記：復業後の上海商務印書館）



⁷⁵原文「婦女與家庭欄所收大半是軟性讀物、因此東方正文中只能容納关于政治、經濟、學術思想的論文、以前所有的各种短篇材料、只能割弃。此外我們也不愿意使東方雜誌變成坊間流行的庸俗讀物、失却學術上的固有地位、我們只能從編輯方面力求引起讀者的趣味、但不能過分偏重軟性文字、這一点應該得愛讀者的諒解」、無名氏、「明年的計劃」、『東方雜誌』第 29 卷第 7 號、1932 年 12 月、56 頁。

そのため、『東方雑誌』の「婦女與家庭欄」については情報が非常に少ない。筆者の調査によれば、この欄目は、1934年から1939年まで不定期に刊行され、全部で153篇の記事があった。金仲華は『東方雑誌』の第29巻第4號（1932年10月）から、商務印書館を辞職する第31巻第17號（1934年9月）まで2年近くに渡って本欄の編集を担当し、殆どの記事の内容を手掛けていた⁷⁶。

その中の一つ、1933年の1月1日に掲載した記事「中国女性往何處去」（「中国女性はどこへ行く」）の中で、金仲華は中国の女性に対し、以下のように述べている。

經濟の困窮、建設の荒廢、文化の衰退、これらに少しでも心あたりのある人であればこの現象にある危機を感じている。生活を家事に消耗していた婦女でも、これらの影響を感じている（中略）かつて數年來、婦女は家庭の中に帰るべき、家庭を整える良妻賢母になるべきだという主張があった。また、ある人は婦女が以前よりさらに大規模に社會生活に参加すべきと熱烈に主張した。同時にある人は、婦女は積極的に政治に参加して家庭・社會・政治により多く寄與すべきと主張した。そしてほかに示された道は澤山あるが、中國婦女はどちらの道に進むべきであろうか？

77

この文章からは、女性の力は国家・社会にとって必要だという認識の下、中国の政治經濟が危険な状態にあり、社会文化的側面に対しても強い危機感を抱いていることが述べられている⁷⁸。この時期の金仲華の女性問題研究の特色は、一つの問題に限らず、戦争の影響と經濟の危機により1930年代当初の中国が深刻な不況に陥っている事を踏まえ、中国女性の運命を国家興亡という大きな方面から扱う点、すなわち女性解放を救国と結びつけて論じていた点であろう。

先述したように、中国では1930年代の半ば、「婦女回家」論争が起こった。江上幸子によれば、その背景には、(一)世界恐慌 (二)蒋介石により展開された新生活運動 (三)上海などの都市において「モダンガール」の出現が問題視されたことがある⁷⁹。こうした中で、家庭において「良妻賢母」となることが女性の天職であり、国家と民族に貢献する最優先の道であることが提唱され、一方、それに反対する評論が続出し、中国全土に広げて影響が大きい論争となった。

⁷⁶同注74、陳、47頁。

⁷⁷原文「經濟的困蹶、建設的荒廢、文化的衰落、每個有感覺的人都能體會到這種現象的危機。就是把生活消磨在家務中的婦女、也能感到這種影響的襲擊（中略）幾年來曾經有人主張婦女要回到家庭中做一個治家的賢母良妻也曾經有人較前更熱烈的主張婦女要大規模地參加社會生活同樣有人主張婦女應積極的參加政治進行家庭社會政治還有其他許多標出着的路中國婦女要向那一條去呢」、仲華、「中國婦女往何處去」、『東方雑誌』第30巻第1號、1933年1月1日、229頁。

⁷⁸同注77、仲華、230頁。

⁷⁹江上幸子、「中国の賢妻良母思想と『モダンガール』—1930年代中期の『女は家に帰れ』論争から」、『東アジアの国民国家形成とジェンダー—女性像をめぐって』、青木書店、2007年、279頁。

この論争の中で、金仲華は西洋の先進的な女性解放思想を受容し、「婦女回家」に反対する立場に立って女性の社会進出の重要性を強調した。この主張は五四時期の「女性の覚醒⁸⁰」に類似しているが、現実的に中国女性が抱える育児問題に正面から向き合い、子どもの養育が職業の障害になったことを認識した点が異なる。

「良妻賢母」に戻るか、それとも「ノラ」になるのかという問題に対し、陳碧雲が「怎樣才能養成『良母』？」（どうやって「良母」を養成できるか？）という記事の中で、子どもを教養する責任を完全に女性に負わせ、婦女を家庭の中に帰らせることは、根本的に女性の解放を束縛し、婦女を永久的な家庭奴隷と男性の附属品と看做すことであり、正当ではない⁸¹と主張した。陳碧雲は「婦女回家」の風潮の下で、婦女の家庭役割に価値を認めようとはせず、また「社會の全体的な環境を改造する必要がある（中略）即ち必ず婦女を一切の社會活動に参加させ、それによって良好な子供教育を実施する能力を養う⁸²」ことと社会改良を解決する以外に、女性解放への具体的な方策は見出せないと感じた。しかし、社会改良の成果としては、女性は結局、「母性」を強調されて家庭をきちんと管理し、「良母」となるために育児・家事を身に付けることが要求される。

そして、同時期の『婦女共鳴』に掲載されていた記事には、「家事協作組織」、「母親會」、「婦女聯合會」などの団体の成立を女性らに求めている⁸³。金仲華も、女性職業が家事との関係を調整するために、「家事社會化」、「兒童公育」など家庭と、職業が両立できる方案を提出した。また、女性知識人の郭箴一⁸⁴も職業女性問題に対し、「兒童公育がある所であれば、一般的に社会に奉仕する婦女は、真の気持ちを一つに社会のために働くことができ、しかも子女の健全に影響を及ぼさない⁸⁵」と金仲華と同じく社会制度の改良を目標とした。

「婦女回家」の主張は、社会改造を得ることと同じく困難であり、ましてや、現実社会における少数の富裕層以外、一般的な女性には殆ど不可能だと示している。さらに、大多数の貧困層の女性には、教育も就職の機会もなく、「実際には男女不平等の原因は経済的な問題、環境的な問題であり、宗法社会の伝統的な思想が完全に打破されなければ、男女間の真に平等な制度も生み出すことができない。目下中国婦女問題の根本的な

⁸⁰五四新文化運動によって「旧家庭」からの女性解放が声高に提唱されたこともあって、職員・店員として職業を持つ知識女性が増加していた。

⁸¹原文「把教養兒童的責任完全課諸婦女、要婦女回到家庭中去当賢妻良母根本就是束縛婦女解放、把婦女當作永久的家庭奴隸和男子的附属品看待、這是不正當」、陳碧雲、「怎樣才能養成『良母』？」、『東方雜誌』第31卷第21號、1934年11月、72頁。

⁸²原文「應在于改造整个社會環境（中略）即必須讓婦女參加一切社會活動。以培养其能施良好教育于兒童的能力」、同注81、陳、72頁。

⁸³峙山、「再談家事協作問題」、『婦女共鳴』第3卷第2号、1934年2月、10頁。

⁸⁴郭箴一は1931年に復旦大学から卒業した女性作家である。『少女之春』（1931年）、『中国婦女問題』（1935年）、『中国小説史』（1939年）、など著作がある。

⁸⁵原文「有兒童公育的地方、那麼一般在社會服務的婦女、就真正能一心爲社會服務、而不使子女在健全上發生影響」、郭箴一、「大上海計劃中應注意的幾個婦女問題」、『東方雜誌』31卷5號、1934年3月、1頁。

解決はそのような無知識の女性らに相当の教育を受けさせることである⁸⁶。即ち、男女平等の条件として、知識のある「新式女性」だけではなく、労働力とみなされる「舊式女性」も経済的に自立するために、教育を受けさせるべきと主張している。

以上から、『東方雑誌』（婦女與家庭欄）は 1930 年代「婦女回家」思潮の中で、編集者の殆どは金仲華と同様な立場に立って一致した意見を述べていることが分かった。彼らは、労働女性が抱える教育問題に気付き、妻と母の役割を女性の天職として提唱することに激しく批判した。しかし、彼らのような先進的な知識人は、女性が社会に出て経済的に自立することを女性解放の前提とする点を共有していたが、女性教育の最終目的は、やはり国家の将来となる子どもをよりよく育てることであり、実質的には女性解放運動の発展を遅らせるものであると見なせる。

1937 年 7 月、日中戦争が勃発し、「婦女與家庭欄」の内容の大部分は、女性問題を単独は提起するのではなく、反日本軍国主義を女性解放運動の重要な方法とし、『東方雑誌』の女性読者に戦時下の女性と子どもの生活状況を大量に報道した⁸⁷。そして、1939 年 9 月以降「婦女與家庭欄」は『東方雑誌』という舞台を去ってしまう。『婦女雑誌』との最後の繋がりとしての「継承者」は永久に読者の視線から消えてしまったのである。

⁸⁶原文「其實男女不能真正平等的原因是經濟關係、是環境關係、因為宗法社會的傳統思想沒有完全打破、男女真正的平等的制度也就不能產生。目下中國婦女問題的根本解決就是要使那些無知識的婦女受到相當的教育」、同注 85、郭、1 頁。

⁸⁷例えば、陳碧雲の「日軍侵略下上海婦孺所遭受的劫難」（第 35 卷第 1 期、1938 年 1 月）、莫湮の「婦女怎樣認識抗戰與怎樣參加抗戰」（第 35 卷第 1 期、1938 年 1 月）、曾苑の「抗戰期中婦女生活的改善」（第 35 卷第 13 期、1938 年 7 月）、陸傳籍の「戰時兒童的養護問題」（第 36 卷第 1 期、1939 年 1 月）など記事は戦時の『東方雑誌』（婦女与家庭欄）に掲載された。

終章

近年来の中国女性学研究の特徴の一つとして、女性雑誌など女性向け定期刊行物への注目を挙げることが出来る¹。そして女性雑誌の研究を通して当時における女性解放、女性生活、女性教育などに関して新たな成果が陸続と生まれつつある。それらは当時の女性観の変化、女性生活の変遷、女性運動の展開と緊密に連携していたと考えられる。大部分の女性雑誌の内容は当時の社会生活を反映しているため、女性学のみならず、思想史、社会史の分野でも女性雑誌を重要な資料として重視する必要があると思われる。

女性雑誌などの女性向け定期刊行物に関する全体的な研究は、劉人峰の論考がある²。その中で『解放畫報』、『現代婦女』、『婦女聲』など従来の研究の中で殆ど無視されていた雑誌にも注目し、そこに見える史的な価値を認めている。しかし、それぞれの誌面を丁寧に読み解き、編集長ごとの編集方針の変遷を考察する試みは未だに詳細に研究がなされていないのが現状である。中国の女性雑誌の紹介には時間的また数量的な限界があるといえる³。

本研究では、民国期における代表的な女性雑誌である『婦女雑誌』の誌面内容に焦点を当て考察した。『婦女雑誌』は、1915年1月から1931年12月まで、上海の商務印書館によって刊行された女性雑誌である。

考察した内容は、具体的には3つの要点をまとめられている。

- ① 『婦女雑誌』の各編集長の女性観及びその編集方針
- ② 『婦女雑誌』と関連する『新女性』と『東方雑誌』（婦女与家庭欄）の考察
- ③ 外国の先進的な女性思想の受容と影響

以下、各章での分析によって明らかとなったことを要約しながら、本研究の内容を整理していきたい。

第1節 本研究の各章内容

本研究の第一章では、予備的な考察として、清末における女性雑誌の出版活動を分析した。近代中国における雑誌の刊行は西洋宣教師によって始められたが、中国では日清戦争

¹前山加奈子、「近10年間の中国女性史研究―主として日本における動向と展望」、『近きに在りて』(48)、2005年、40頁。

²劉人峰、『中国妇女报刊史研究』、中国社会科学出版社、2012年。

³近年来、『上海沦陷时期「女声」杂志研究』（涂晓华、中国传媒大学出版社、2014年）のように単独の雑誌を対象とする研究は現れたが、著作として出版されたものは多くない。

の敗北を経て康有為、梁啓超など維新派の男性知識人が変法運動を宣伝するために、大量の維新変法を主旨とする革命的な雑誌を発刊した。それが近代中国の女性教育発展の推進力となり、女性雑誌の産生に必要な条件を創造した。

清末の女性雑誌は日本からの影響が多かった。当時東京で創刊された『中国新女界雑誌』は最も代表的な女性雑誌であると言われる。編集長である燕斌（煉石）は、日本留学中に見た日本の女性問題を語った上で、国家に貢献できる欧米女性を見本とし、独立精神を持つ「女国民」を育成することを同誌の主旨とした。さらに、清末における40種類ほどの女性刊行物の中から発行時期が最長の『女子世界』を取り上げて考察した。同誌は『中国新女界』が主張した「女国民」と比較すると、「國民の母」を強調する傾向が強かった。また、『女子世界』は日本から翻訳された大量の記事を啓蒙手段としていることから、当時の中国知識人が日本に高い関心を持っていたことがうかがえる。第1章の最後では、『女子世界』に受容された明治期の『女学世界』という女性雑誌に掲載した記事を分析した。戦時の女性の状況と女性教育などについての記事を翻訳翻案したものを見ると、中国人にとって馴染みの薄い言語と文化に関する内容を削除し、言葉を付け加えた記事が散見される。確かに『女子世界』に掲載された女性問題に関する最新の情報は、中国女性読者の見聞を高めただけでなく、これらの翻訳文を読んだ彼女ら自身の現状を認識させるほど多大な刺激を与えたに違いないことが分かった。『女子世界』の場合は、外来文化を吸収した一方、中国伝統文化の独自性も追求していた姿勢は評価に値する。しかし、守旧的な翻訳方式のために、若干本来の意味を離れた部分があることは否定できない。

第二章では、『婦女雑誌』初期の編集長としての胡彬夏、王蘊章を取り上げて考察した。『婦女雑誌』創刊当初の編集長は王蘊章であったが、1916年から僅か1年間であったが、胡彬夏が最初の女性編集長として迎えられた。『婦女雑誌』に掲載された彼女の記事は、理想的な家庭像として、夫が家庭の中心的位置に立ち、妻が常に夫を補助する形を想定する。そして、家庭を改良できる女性を養成するために、必ず高い知能力を持つ女性、即ち高等教育を受けた女性が必要であるとした。しかし、胡彬夏のこのような女性教育理念はあまりにも時代に先行しすぎていたため、当時の良妻賢母的な女性教育が主流であった社会背景と相容れなかった。

1917年1月、王蘊章が再び『婦女雑誌』に戻り、1920年11月まで同誌の編集長として担当し続けてきた。そして、1918年1月の『婦女雑誌』に掲載された記事の中に、日本臨時軍事調査委員会によって出版された『歐洲戰と交戦各國婦人』（中国語訳『歐戰與各交戦國婦人之真相』）という著作の翻訳文がある。王蘊章がその著作を翻訳した理由は、従来の家庭内での女性の役割を強調しつつ、女性を間接的に国家の一員として認識する言論に対して、女性の役割を家庭内に限定する規範から一步踏み込んだ、進歩的な一面を認めたためであると見られる。しかし、王蘊章の他の翻訳文では、女性の社会進出問題に関して、否定するよりむしろ回避しようという意図を読み取ることができる。

そして、民国期に入り、中国の知識人は人材の育成が国家強大化のための重要な手段であると意識した。健全な子どもを育成するために、育児経験が不十分な母親に科学的な「養育」知識が必要となり、雑誌、新聞などメディアの宣伝と紹介が非常に重要な役割を果たしている。当時の『婦女雑誌』の内容を見てみると、西洋と日本の育児経験を積極的に紹

介しつつ、子どもを「保護されるべき人間」として子どもの養育方法に言及する表現が見られる。ここで、「衣」、「食」、「住」という三つの方面から、近代中国の先進的な男性知識人が何を新式女性に要求したのかについて考察した。

例えば、服装を選択する際に、何よりも子どもの健康を優先条件として適切なものを着用すべきとした一方、衣服の清潔維持など、衛生面でも子どもに良好な生活習慣を身に付けさせることも母親に求めた。そして、「食」の面では、西洋の食文化の伝来が子どもの食生活に影響をもたらした。『婦女雑誌』では、子どもの成長に適当な栄養に含んだ食事を与える必要があることが指摘されたが、数年間の記事の内容には一致しない点から見られたことから、科学的な子どもの食生活についての概念が定着するまでには一定の時間が必要であると分かった。「住」については、科学的な家庭教育と、子どもの成長に相応しい生活環境が特に重視された。しかし、「衣」、「食」、「住」をめぐって論じられた改良方法は、下層家庭の子どもにとって無縁の存在であったと考えられる。最初から、貧困層の子どもは「教育されるべき者」の枠から排除されていたことが容易に推測できる。教育の面では、「徳育」（道德教育）と「智育」（智能教育）が、家庭の中で特に重要視されるようになった。儒教思想に基づく子どもの行動の支配、1910年代後半の『婦女雑誌』では以前と比べると幾分異なる論調の言論が見られる。子どもを「小さな大人」と看做するのではなくその個性を尊重して自由に伸ばす教育が家庭教育の一環として紹介され、その中で特に日本を経由した欧米のモンテッソーリ教育方法も重要な役割を果たしたと考えられる。

第三章では、1920年代前半を扱った。この時期は、日本の大正デモクラシーにあたり、中国社会の各分野では様々な変革が行われ、特に女性解放や教育などが重視された時代である。そして、五四運動を経て、章錫琛を『婦女雑誌』の編集長として迎えた時期の誌面内容を検討した。章錫琛編集期の『婦女雑誌』の特徴は、女性問題や女性解放など多くの問題を論議した上で、「自由恋愛」、「自由離婚」など西洋の女性問題を紹介することを通して、「女性の地位向上及び家庭改革⁴」を唱える女性雑誌への変化を目指したことである。

本章では主に、明治女性思想家である平塚らいてうと章錫琛に焦点を当て、スウェーデンの女性解放思想家であるエレン・ケイの女性観をほぼ同時に受容した二人の相違点について考察を試みた。まず「恋愛観」に対しては、二人ともケイの恋愛至上主義という思想に傾倒したが、章錫琛と比較すると、らいてうは種族保存と生殖のほかに、女性の社会的な地位を求める部分がケイに近いことが分かった。もう一つの特徴として、らいてうがケイと同様に、「来るべき子どもの権利の保護」と「婦人の社会的な自立」について認識しているという共通の傾向が伺えた。章錫琛は不健康な子どもを生み出さない限り、社会に害を与えなければ、如何なる結婚形式でも不道德とは認められないと考える。その一方、らいてうとケイの、「一夫一妻」以外の恋愛形式は決して道徳と認めない、むしろ自主的な制限として「一夫一妻」を存続するという認識である。章錫琛のこの観念は、エレン・ケイの女性思想から受容されたものであると考えられる。

⁴原文「本誌の主旨固在謀婦女地位的向上和家庭的革新」、無名氏、「編輯餘録」、『婦女雑誌』第7巻第2号、1921年2月、143頁。

第四章では、第三章に引き続き、章錫琛の女性観を論じた。商務印書館から離れていた章錫琛は、1926年1月に『新女性』を創刊し、『婦女雜誌』の女性解放精神をそのまま受け継いだと言われる。一方、杜就田を編集長とする新しい『婦女雜誌』は、編集方針から誌面内容まで比較的に「保守」であると先行研究で指摘されていたが、章錫琛編集期の『婦女雜誌』より、女性読者から好評を得た。この章ではまず、1920年代前半の『婦女雜誌』で討論の頂点に達した「離婚問題號」（離婚問題号）と「配偶選擇號」（配偶選択号）という二つの特集号を取り上げて、杜就田編集期の「自由離婚」と「理想的な配偶者」など編集者の言論と比較してその変化を明らかにした。まず、「自由離婚」という観念が中国に伝来した際、『婦女雜誌』の編集者は反対の立場に立って「人倫の不幸」と語ったが、「先進的」な五四時期になっても一部の知識人は「自由離婚」を「道德墮落の元凶」と視なした。しかし、「保守的」と言われると杜就田編集期の『婦女雜誌』には「自由離婚」に対して男性知識人が疑問を呈する発言が見られなくなってきた。

また、1920年代前半の男性知識人は「女は才能がないことが徳」といった従来の儒教的な女性観を否定し、理想的な配偶者として女性に良好な教育を求めたが、女性が職務を持つことに対してそれほど関心を示さず、むしろ男性が外で働くべきという主張が強化された。一方、1920年代後半の『婦女雜誌』では「勞働力」など女性の独立能力を育成することに重心に置かれ、女性は「家庭改革の主動者」と認識され、経済的な生産に専念すべきと『婦女雜誌』の編集者らは主張した。杜就田編集期の『婦女雜誌』を見る限り、「保守的」、「中庸的」という判断は一面的であり、編集者らは当時の中国社会と家庭問題に対する自らの理解に基づいて実際の女性問題を考える立場に立ち、実践と討論の空間を作り上げようとしていたのではないかと思われる。

本章の一部の内容は、章錫琛が1926年1月に創刊した『新女性』という雑誌について論じたものである。『新女性』は「青年男女の心の改造に努力する」とことと「新性道德の基礎を建設する」ことを目標とし、女性の社会的な地位と性に対する意識の変革を意図したものである⁵。章錫琛の恋愛観はエレン・ケイの女性思想から大きな影響を受けたものであることは第三章で示したとおりである。貞操観の変容について、『婦女雜誌』編集期の章錫琛は、「男女同等」の立場から男性も女性も貞操を守らなければならないと強く主張したが、『新女性』編集時期になると、貞操は恋愛と同様に「靈肉一致」の意義を付与され、決して第三者が加わらない「戀愛」と「貞操」を条件として「内的」「自然的」な「一夫一妻」を理想とする形式へと変貌するようになった。しかし、章錫琛のような社会改良者が提唱した貞操観を見れば、個人の内在的な改造という主張は『新女性』の誌面で繰り返し論じられたが、経済、政治、女性の権利などを含む社会制度の改造については殆ど論及されなかった。勿論この「個人」から知識もしくは育児能力を持たない「舊式女性」は排除されていたと考えられる。

第五章では、まず1930年代最初の編集長である葉聖陶が執筆した記事と小説を材料にして、彼の女性観の形成を考察した。葉聖陶は中国女性が自覚に欠け、大部分が男性の指導に過度に依頼していることを批判し、女性教育と女性の社会進出の必要性に関連する記

⁵無名氏、「排完以後」、『新女性』第3巻第3號、1928年3月、119頁。

事を多く掲載した。また、彼は読者の投稿を広く募集したが、この時期の『婦女雑誌』は一方的に読者の声を聞くだけで、解決方法が読者に伝わらないこともあり、特に現実と緊密に繋がった重大な問題には、改良の方案はもちろん、編集長自分の意見を示すことは殆どなかった。

その後、葉聖陶が商務印書館から辞職し、金仲華が新しい編集主幹として迎えられた。金仲華が執筆した記事は、主に世界各地の女性思想及び女性の置かれた社会状況を紹介・解説するという内容が多かった。特に、女性教育・婚姻・職業など幅広い分野において大量の翻訳を行ったことは、美術・写真の掲載を中心とした杜就田編集期の『婦女雑誌』と比べて大きく異なる点である。そして1920年代後半に入ると、女性が職業を持つことは必然的であることとなったが、一方、女性に対し、家庭内の役割を期待する意見も現れ、論争に発展した。その論争に対し、金仲華は明確に「婦女の社会進出は抑えられない」という信念を持つことによって、「婦女回家」論（女は家に帰れ）に反対する立場に立ったことが分かった。

論争の展開と殆ど同じ時期に、1932年1月に商務印書館が戦災を被ったことを機に、『婦女雑誌』はそのまま廃刊されたが、同年10月に『東方雑誌』に「婦女与家庭欄」が創設され、かつての『婦女雑誌』の役目を果たすようになった。金仲華は2年近くに渡って本欄の編集を担当し、殆どの記事の内容を手掛けていた。同欄の編集者の殆どは金仲華と同様の認識を持って意見が一致していたが、彼らにとって女性解放の意義は、女性が「良母」となり、よりよく国家の「将来」となる子どもを養育するためであり、現実の様々な女性問題を解決することに向かうより、実質的には女性解放運動の発展を後回しにした傾向が認められる。

第2節 『婦女雑誌』の男性知識人から見る女性観

『婦女雑誌』は常に時代と共に変化する読者の要求に応じていた。周知のように、近代中国において女性雑誌の発刊は女性の手によるものであったが、女性の編集による雑誌はわずかであった。商務印書館など大型出版社の女性雑誌の編集は、殆ど男性編集者の手に委ねられていた。そこでは、女性教育、家政知識、生活改良、外国の人物などの紹介も掲載された。彼らの言論は広範な女性読者に影響を与えた。早期には、纏足、女性教育の促進など中国社会の封建思想の否定を試み、民国初期に入ると、日本由来の「良妻賢母」という教育方針の紹介、五四時期以降の男女平等、女性の社会進出について議論を展開した。『婦女雑誌』が女性雑誌として果たした役割は、中国女性の生活状況を記録するだけではなく、各方面から当時の女性を支えたことにあるだろう。

そして、『婦女雑誌』で作り上げた様々な理想の「女性像」は決して同様な意味を付与されたわけではなく、その時代の風潮に応じて変化する流動的な存在であった⁶。しかし、理想的な女性像はメディアで称揚される存在である同時に、社会的な批判を浴びた存在でもあるような関係と思われる。『婦女雑誌』の「女性像」は、伝統的な「良妻賢母」にせよ、30年代初期に現れた「新式女性」にせよ、これらの女性形象を通して、男性編集者の女性観が社会の「分利」（利益を分け合う）としての存在から社会の「生利」（利益を生産する）の一員へと変遷する過程を読み取ることが出来る⁷。

そして、本研究では各時期の編集長及び編集者の言論に対する考察を女性教育、女性職業など極力広いテーマから検討した。もちろん、これで『婦女雑誌』の全体像が鮮明されたというわけではない。例えば、『婦女雑誌』に紹介された労働女性の生活に対する考察については、本研究で殆ど検討できなかった⁸。

筆者は序章で、*Jacqueline Nivard* の『婦女雑誌』時期区分（表1参照）に関する先行研究を引用し、それぞれ時期に応じた編集方針の解釈に疑問を投げかけた。『婦女雑誌』全時期の再考察を通して、改めて新しい認識を得た（表2参照）。

表1. Jacqueline Nivardによる『婦女雑誌』各時期の編集方針

時期名	期間	編集方針	編集長
The Beginning	1915年～1920年	良妻賢母	王蘊章、胡彬夏
The Taking off	1921年～1925年	女性解放	章錫琛
The Reaction	1926年～1930年	反動復古	杜就田
Tentative Revival	1930年～1931年	急進回復	葉聖陶、楊潤余（金仲華）

表2. 筆者による『婦女雑誌』各時期の編集方針

期間	編集長	編集方針	外国語能力	女性教育	社会進出	家庭役割	社会役割
1915年～1920年	王蘊章	科学普及	日本語・英語	男女別教育	否定	内職	夫の補助
	胡彬夏	高等教育	日本語・英語	高等教育		家庭教育	
1921年～1925年	章錫琛	女性解放	日本語	男女共学	肯定	無関心	種族改善

⁶何瑋、「1920年代中国社会における『新婦女』－『婦女雑誌』を主なテキストとして」、『ジェンダー研究』（7）、2004年、67頁。

⁷繆程淑儀、「何謂生利婦女何謂分利婦女」、『婦女雑誌』第6巻第6号、1920年6月、73頁。

⁸『婦女雑誌』の読者層に関して、葉韋君の「個人経験與公共領域：『婦女雑誌』通信欄研究（1915～1931）」（『近代中国婦女史研究』第29期、中央研究院近代史研究所、2017年、51～104頁）という論文で『婦女雑誌』を4つの時期に区分し、それぞれ時期の読者層の特徴を分析した。ただし、葉氏は詳細な考察を行っておらず、一層の検討が俟たれる。読者層の問題は本研究の範囲から外れるため、本論では詳しく言及していない。

1926 年～1930 年	杜就田	感性養成	不明	男女別教育	否定	家庭教育	家庭改革
1930 年～1931 年	葉聖陶	人格独立	英語	男女共学	肯定	無関心	精神改造
	金仲華	社会進出	英語	男女共学	肯定	集団保育	社会服務

民国期以来、女性に対する束縛は、様々な角度から揺さぶりがかけられた。男性知識人の中から、女性を労働力として活用して国家の近代化を目指す意見が現れ、女性解放運動の先駆けを成した⁹。『婦女雑誌』の考察を通して明らかになった。それぞれ編集長の女性解放に関する意見は以下のとおりである。

王蘊章	女性が副業に従事することは家庭だけではなく、国家經濟の発展に寄与する。
胡彬夏	家庭の中で女性の才能を発揮させることが社会を前進させる源泉となる。
章錫琛	女性教育や經濟的自立などの問題の解決は女性解放の手段であって目的ではなく、恋愛問題は一切の女性問題を解決する最も根本的な方法である。
杜就田	女性が職業を持つことに対してさほど関心を示さなかったが、むしろ女性としての感性を磨くことは重要である。
葉聖陶	女性の經濟独立が男女平等に繋がる。
金仲華	女性は家庭外作業によって、健全な身軀を持つことが出来る。

以上のように、1920 年代以降の『婦女雑誌』の内容から見ると、家庭内における女性の役割を強調することによって、女性を間接的に国家と社会のために、「生利」の一員として付け加えようとする言論と思想には、女性の役割を家庭内に限定する従来の「良妻賢母」の規範と異なる進歩的な一面があったことを明らかにした。結局、『婦女雑誌』の男性知識人らは、中国の儒教的な女性観に対する抵抗を意識しながら、家庭教育、家政知識などの提供によって外国の先進的な女性思想を中国に導入し、それと同時に科学的な知識を備えた女性が、主婦として家政管理能力を発揮することで国家発展に貢献する能力を持つという近代的な「理想的な女性像」を提示しようとしたのではないかと推測できる。

本研究の検討で明らかになったように、『婦女雑誌』に登場した知識人が中国女性に付与した役割は、「個人」として、「家庭」と「国家」という二つの側面により示されるものである。そして、彼らの言論には殆ど女性問題を「国家建設」と関連させる傾向があると見られている。『婦女雑誌』の中で最も先進的だと言われるのは章錫琛編集期であるが、新思想に染まった章錫琛が自由結婚、自由離婚、産児制限、新性道德など女性問題に積極的に取り組んでも、新性道德を提唱する際に、優生学を第一に考え、女性の生殖をコント

⁹関西中国女性史研究会編、『中国女性史入門』、人文書院、2005 年、61 頁。

ロールし国家の発展と繋げる方法とみなしていた点が注目される。また、金仲華は結婚後の女性は社会進出を可能にするために、子どもの集団保育を担う保育機関を早急に設立すべきと主張し、それを実行に移すことは、決して容易ではないことが推察されるはずと考える。彼らは「科学的」「先進的」な理念を受け入れる一方、それが中国社会の現状に適應するかどうかについては、彼らの中に明確な答えを持っていなかった可能性がある。

『婦女雑誌』の歴代の編集長は、女性解放思想を危険視しないことでは共通していたが、その時期の編集方針に従って必ずしも編集者全員の意見は一致してはいなかった。例えば、杜就田編集期において、杜就田は撮影技術、芸術鑑賞に関する記事を多く採用し、『婦女雑誌』を「軟性読物」にすることを目指したが、当時一部の記事には女性の職業の重要性を提唱し、男性の「附属品」にならないように呼び掛ける内容もあった。これらの言論からやがて女性の就業が中国の女性解放思想に結びつける思想が生まれることが分かった。

また、『婦女雑誌』初期で称賛された「新良妻賢母」という女性像は決して一般的な理解がいうように、完全的「封建的」なものではない。そして、1930年代の中国文化界で一斉批判された「モダン・ガール」は、経済の発展に従って生まれた新たな階層の女性であり、ショートカットのヘアスタイル、ハイヒール、それに顔に施された外国の化粧品など贅沢と逸楽の象徴を身にまとった女性は、同時に職業を持つ知識女性として家庭や社会に貢献する可能性もあると考えられた。『婦女雑誌』において議論された称賛される女性像にせよ、批判される女性像にせよ、男性知識人が想定したすべての女性像は、彼女らを最終的に「家庭」の中に押し込もうとするものにほかならなかった。

本研究では民国期の女性の情況に多く関心を注いたが、メディアを通して男性知識人からの言論を分析することで、近代中国における女性像の変化と、それに伴う女性問題の多様性を理解することができたと考える。そして古い倫理規範や良妻賢母主義などの問題は、解決が21世紀に持ち越され、都市と農村の地域格差の問題と絡み合って、さらに複雑化しており、中国女性学研究の大きな課題となり続けると考えられる。

第3節 今後の課題

本研究では、近代中国女性史研究の進展と女性雑誌研究を参照しつつ、『婦女雑誌』で西洋及び日本の女性思想などが直接的かつ間接的に受容・影響されていることを明らかにした。本研究では、知識人がそれらをそのまま受容したわけではなく、中国の現状に応じた変更を加え、独自の言論として『婦女雑誌』に発表したと結論づけるに至った。しかしながら、未だ十分に考察されていない部分がいくつか残る。まず、『婦女雑誌』に現れた男性知識人の言論に対し、読者及びほかの雑誌が示した反応がどのような役割を果たしたのかという問題について、本論では初歩的な検討を加えたに留まっているので、より詳細に検証する必要がある。それを踏まえて、次の3点を今後の課題としたい。

第1に、『婦女雑誌』（1915年～1931年）は、民国女性雑誌に関する研究の一環として様々な先行研究で紹介された。本研究では、『婦女雑誌』の誌面から西洋と日本からどの

ような影響があったかを考察したが、実際に、先進国から受けた知識と思想は読者にどのような程度で受け入れたのかについては殆ど論じられなかった。今後は、『婦女雑誌』の読者投稿を踏まえて、先進国の新しい技術と情報の実際の普及度及び現場での利用効果などについても検討したい。

第2に、商務印書館は数多く日本の出版物を編集して出版したことが明らかにされている。本研究では、『婦女雑誌』が発刊される以前に商務印書館によって刊行された出版物について殆ど考察しなかった。『婦女雑誌』が刊行された同時期に、日本の女性雑誌あるいは修身教科書が常に翻訳され出版されたことはなかったとしても、一部の内容が雑誌に取り入れられた可能性は高いと考えられる。今後は、1915年以前の商務印書館の出版状況を踏まえて、日本の出版物から影響を受けたかどうか、女性雑誌だけではなく、日本から取り入れられた修身教科書も視野に入れて考察したい。

第3に、『婦女雑誌』の刊行時期は1931年12月までであり、1930年代の中国女性史を研究するには不十分であると思われる。今後は1930年代中国女性の表象を研究課題とし、『玲瓏』、『良友』、『上海婦女』など30年代の代表的な雑誌を通して、1930年代の女性が抱える問題を分析したい。そして、より広い範囲で新しい研究成果を取り上げ、近代中国における女性雑誌の考察という課題を、さらに多様な観点から検討し続けたい。

近代中国における女性雑誌の研究は、まだ端緒を開いたばかりである。

参考文献

*すべて時間順

【日本語文献】

雑誌

松原岩五郎ほか『女学世界』（博文館、1901～1925）

章彦安「支那婦人は何を理想とするか」『婦人世界』11〔11〕（實業之日本社、1906）

論文：

中村正直「人ノ一生ハ幼時ノ教育ニ在ルノ説」（『大日本教育会雑誌』14、大日本教育會假事務所、1884）

笹島恒輔「軍国民教育思想・国家主義教育思想・軍事教育思想の中華民国の学校体育に及ぼした影響」（『体育研究所紀要』8、慶應義塾大学体育研究所、1968）

多賀秋五郎編「奏定蒙養院章程及家庭教育法章程」（『近代中国教育史資料清末編』、日本学術振興会、1976）

黒沢文貴「臨時軍事調査委員会について」（『紀尾井史学』2、上智大学大学院史学専攻院生会、1982）

石井洋子「辛亥革命期の留日女子学生」（『史論』36、東京女子大学学会史学研究室、1983）

金子幸子「大正期における西洋女性解放論受容の方法—エレン・ケイ『恋愛と結婚』を手掛かりに」（『社会科学ジャーナル』24〔1〕、1985）

陰山達弥「葉聖陶—解放前中国の散文作家（2）」（『京都外国語大学研究論叢』35、京都外国語大学、1990）

西槇偉「1920年代中国における恋愛観の受容と日本『婦女雑誌』を中心に」（『比較文学研究』64、1993）

桑島由美子「『民国日報・婦女評論』における沈雁冰（茅盾）の女性主義観（フェミニズム）」（『言語文化論集』38、1994）

白水紀子『婦女雑誌』における新性道德論—エレン・ケイを中心に」（『横浜国立大学人文紀要第二類語学・文学』42、1995）

加藤祐子『母性』の誕生と変容—エレン・ケイから母性保護論争までを通して」（『中央大学大学院研究年報』28、1998）

前山加奈子・王宓「日中両国間の女性論の伝播と受容——『婦女評論』における堺利彦」（『中国女性史研究』9、1999年）

末次玲子「中国女性史上の民国前期—政治と女性史との関係を中心に」（『中国女性史研究』9、1999）

工藤貴正「任白涛『恋愛論』と夏丐尊『近代的恋愛観』について」（『大阪教育大学紀要Ⅰ、人文科学』50〔1〕、2001）

- 内藤寿子「大正期の〈エレン・ケイ〉—翻訳・解説・受容の力学」（『文藝と批判』9〔4〕、2001）
- 杉本史子「民国初期における女子家事科教育—その『近代』性と限界について」（『立命館大学言語文化研究』13〔4〕、2002）
- 李卓「学と不学の違い：近代中日女子教育の比較」（『日本研究:国際日本文化研究センター紀要』24、2002）
- 何瑋「1920年代中国社会における「新婦女」—『婦女雑誌』を主なテキストとして」（『ジェンダー研究』7、2004）
- 白水紀子「中国における『近代家族』の形成—女性の国民化と二重役割の歴史」（『横浜国立大学教育人間科学部紀要』2・人文科学6、2004）
- 前山加奈子「近10年間の中国女性史研究—主として日本における動向と展望」、（『近きに在りて』48、2005）
- 羽田朝子「『婦女雑誌』の研究史をふりかえって—『婦女雑誌』にみる近代中国女性の意義」、（『人間文化研究科年報』、2006）
- 広瀬玲子「平塚らいてうの思想形成—エレン・ケイ思想の受容をめぐる本間久雄との違い」（『ジェンダー史学』2、2006）
- 前山加奈子「婦女問題研究会と『現代婦女』（『時事新報』副刊）—中国の1920年代初期における「節育」観」（『駿河台大学論叢』32、駿河台大学、2006）
- 江上幸子「中国の賢妻良母思想と『モダンガール』—1930年代中期の『女は家に帰れ』論争から」（『東アジアの国民国家形成とジェンダー—女性像をめぐって』、青木書店、2007）
- 孫峰茗「清末日本留学女子学生から見る明治良妻賢母主義教育の影—『中国新女界雑誌』」（『言葉と文化』8、名古屋大学大学院、2007）
- 松本咲江「ゆるる乳房—杜就田編集時期の『婦女雑誌』（医事衛生顧問）における身体論を中心に」（『鸞鸞』16、中国語文学会、2008）
- 陳燕燕「近代中国における『女国民』の誕生」（『千葉大学人文社会科学研究』19、2009）
- 寇振峰「中国の『東方雑誌』と日本の『太陽』」（『メディアと社会』1、2009）
- 大野公賀、「1920年代および30年代上海における立達学園と開明書店」（『津田塾大学紀要』42、2010）
- ジョアン・ジャッジ著・大橋史恵訳、「民国初期の日常生活—『婦女時報』から読み解く」（『中国女性史研究』19、中国女性史研究会、2010）
- 水田珠枝「レスター・ウォードの『女性中心説』の受容」（『比較文化研究』29、比較文化研究会、2010）
- 湯山トミ子「近代中国における子ども観の社会史的考察（1）伝統的子ども観の揺らぎと近代的孩子観への胎動」（『成蹊法学』72、2010）
- 前山加奈子「1920年代初頭における日本と中国の女性定期刊行物—呉覚農が紹介・論争した女性運動論からみる」（『駿河台大学論叢』42、駿河台大学、2011）

- 翁麗霞・神川康子、「中国の古典書における家庭教育の社会学的要素について」（『人間発達科学部紀要』6〔2〕、富山大学人間発達科学部、2012）
- 方光鋭、「張元済と商務印書館版『最新修身教科書』（『文化記号研究』1、2012年）
- 横井和彦・高明珠「中国清末における留学生派遣政策の展開—日本の留学生派遣政策との比較をふまえて」（『経済学論叢』64〔1〕、同志社大学、2012）
- 方光鋭、「張元済と商務印書館版『最新修身教科書』（1905年）」（『文化記号研究』1、2012）
- 顔淑蘭「〈声〉の転用：夏丐尊による『支那遊記』抄訳の問題系」（『文学・語学（206）』、2013）
- 木村絵里子「『女学世界』における女性美のディスコース：1901年～1925年の広告分析から」（『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』19、2013）
- 鳥谷まゆみ「一九二〇年代中国における小品文形成と周作人、夏丐尊（周作人と日中文化史）」（『アジア遊学』164、2013）
- 前山加奈子「日中両国の女性観に関して：『女性改造』誌（1922年～1924年）よりみる」（『駿河台経済論集』22〔2〕、2013）
- 顔淑蘭「芥川龍之介『支那遊記』と夏丐尊訳『中国遊記』の問題系」（『日本文学』63〔6〕、2014）
- 顔淑蘭「夏丐尊訳・田山花袋『蒲団』の問題系：翻訳と〈新しい知識人〉の構築」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊〔22—2〕』、2014）
- 韓韓「『婦女雑誌』に紹介された日本の家政知識：良妻賢母教育理念の受容を中心に」（『家政学研究』60〔2〕、2014）
- 金子幸子「エレン・ケイ女性論の受容—平塚らいてうを中心に」（『平塚らいてうの会紀要』7、2014）
- 鄭谷心「夏丐尊の国語教育方法論に関する一考察：1930年代の中国における国語学力の問題に焦点をあてて」（『教育方法学研究』（40）、2014）
- 董秋艷「中国近代学制の歴史的変容：民国初期における教育制度「壬子癸丑學制」制定に注目して」（『教育基礎学研究』12、九州大学大学院人間環境学府教育哲学・教育社会史研究室、2014）
- 日暮トモ子「近代中国の幼稚園論の展開にみるモンテッソーリ教育法の受容に関する考察」（『有明教育芸術短期大学紀要』6、2015）
- 水野あゆ「夏丐尊と葉聖陶：近代中国における作文教育の先覚者」（『言語と交流』18、2015）
- 顔淑蘭「夏丐尊訳・国木田独歩『女難』：「同情」の力学と日中の自然主義文学」（『野草』98、2016）
- 鳥谷まゆみ「夏丐尊と日本：宏文学院留学と小品文受容を中心に」（『立命館経済学』64〔4〕、2016）
- 朴雪梅「在日中国人女子留学生の理想的女性像—『中国新女界雑誌』の翻訳記事を中心に」（『日本研究』56、2017）

張淑婷「『中国新女界雑誌』に見られる日本の事象」（『東アジア文化交渉研究』11、関西大学大学院東アジア文化研究科、2018）

著書

- 田所美治『菊池前文相演述九十九集』（大日本図書株式会社、1903）
- 中村正直『敬宇文集』3（吉川弘文館、1903）
- 本間久雄訳、エレン・ケイ著『婦女の道德』（南北社、1913）
- 堺利彦訳、レスター・ウォード著『女性中心説』（牧民社、1916）
- 原田實訳、エレン・ケイ著『児童の世紀』（新潮社、1916）
- 原田實訳、エレン・ケイ著『児童の教育』（新潮社、1916）
- 原田實訳、エレン・ケイ著『婦人運動』（大日本文明協会、1916）
- 本間久雄訳、エレン・ケイ著『若き時代人』（北文館、1916）
- 臨時軍事調査委員会編纂『歐洲戦と交戦各國婦人』（川流堂、1917）
- 本間久雄訳、エレン・ケイ著『戦争、平和及び未来』（大日本文明協会、1918）
- 原田實訳、エレン・ケイ著『恋愛と結婚』（新潮社、1919）
- 平塚らいてう訳、エレン・ケイ著『母性の新生』（新潮社、1919）
- 平塚らいてう『元始女性は太陽であった（下）』（大月書店、1971）
- 小野寺信・百合子訳、エレン・ケイ著『恋愛と結婚 下』（岩波文庫、1973）
- 多賀秋五郎編『近代中国教育史資料清末編』（日本学術振興会、1976）
- 平塚らいてう『むしろ女子の性を礼拝せよ』（人文書院、1977）
- 実践女子学園八十年史編纂委員会編『実践女子学園八十年史』（実践女子学園、1981）
- 実藤恵秀『中国留学生史談』（第一書房、1981）
- 平塚らいてう『平塚らいてう著作書 3』（大月書店、1983）
- 平塚らいてう『平塚らいてう著作集 5』（大月書店、1983）
- 平塚らいてう『平塚らいてう著作集 7』（大月書店、1983）
- 香内信子『資料母性保護論争』（ドメス出版、1984）
- 蔡元培・徐特立著、石川啓二・大塚豊著訳『中国の近代化と教育』（明治図書出版、1984）
- 小関信行『五四時期のジャーナリズム』（同朋舎、1985）
- 長尾十三二編『新教育運動の生成と展開』（栄泰印書館、1988）
- 文部省『複製国定修身教科書 解説』（大空社、1990）
- 秦郁彦『日本陸海軍総合事典』（東京大学出版会、1991）
- エレン・ケイ著、原田実訳『児童の世紀』（久山社、1995）
- バートランド・ラッセル著、安藤貞雄訳『結婚論』（岩波書店、1996）
- エレン・ケイ著、小野寺信・小野寺百合子訳『恋愛と結婚』（新評論、1997）
- 小浜正子『近代上海の公共性と国家』（研文出版、2000）
- 周一川『中国人女性の日本留学史研究』（国書刊行会、2000）
- 樽本照雄、『初期商務印書館』（清末小説研究会、2000）
- ギルマン著、水田珠枝監修、『婦人と経済』（ゆまに書房、2001）
- 菊池敏夫『上海職業さまざま』（勉誠出版、2002）

小林善文『中国近代教育の普及と改革に関する研究』（汲古書院、2002）
 方厚栓著・前野昭吉訳『中国出版史話』（新曜社、2002）
 小川澄江『中村正直の教育思想』（コスモヒルズ、2004）
 謝黎『チャイナドレスをまとう女性たち—旗袍にみる中国の近・現代』（青弓社、2004）
 樽本照雄『初期商務印書館研究』（清末小説研究会、2004）
 与謝野晶子『鉄幹晶子全集』第16集（勉誠出版、2004）
 関西中国女性史研究会編『中国女性史入門』（人文書院、2005）
 村田雄二郎編『「婦女雑誌」からみる近代中国女性』（研文出版、2005）
 陳延媛『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』（勁草書房、2006）
 崔淑芬『中国女子教育史—古代から一九四八年まで』（中国書店、2007）
 末次玲子『二〇世紀中国女性史』（青木書店、2009）
 岩間一弘『上海近代のホワイトカラー—揺れる新中間層の形成』（研文出版、2011）
 山本英史『近代中国の地域像』（山川出版社、2011）
 田中仁他『新図説 中国近現代史—日中新時代の見取図』（法律文化社、2012）
 吉沢千恵子・小山静子監修『女學世界』（柏書房、2012）
 前山加奈子「日中両国の女性観に関して：『女性改造』誌（1922年～1924年）よりみる」（『駿河台経済論集』22〔2〕、2013）
 坪谷善四郎著・佐藤哲彦解説『博文館五十年史』（ゆまに書房、2014）
 スーザン・マン著、秋山洋子・板橋暁子・大橋史恵訳（『性からよむ中国史 男女隔離・纏足・同性愛』、平凡社、2015）
 飯塚一幸『日清・日露戦争と帝国日本』（吉川弘文館、2016）
 中国女性史研究会編、『中国のメディア・表象とジェンダー』（研文出版、2016）
 新村出編『広辞苑』第7版（岩波書店、2018）
 久保亨、『日本で生まれた中国国歌—「義勇軍行進曲」の時代』（岩波書店、2019）

【中国語文献】

雑誌

李蕙仙ほか『女学報』（中国女学会、1898～1903）
 燕斌ほか『中国新女界雑誌』（中国同盟会河南支部、1907.2～1907.6）
 丁初我ほか『女子世界』（常熟女子世界社、1904～1907）
 王蘊章ほか『婦女雑誌』（商務印書館、1915～1931）
 陳独秀ほか『新青年』（新青年雑誌社、1915～1922）
 傅斯年ほか『新潮』（北京大学新潮社、1919.1～1919.10）
 章錫琛『新女性』（開明書店、1926～1929）
 金仲華ほか『東方雑誌』（商務印書館、1932～1934）

新聞

碧城「興女學議」『大公報』（大公報報社、1902年2月26日）

梅生「讀婦女雜誌的感想」、『覺悟』（上海民國日報副刊、1921年6月5日）

論文

王知伊「開明書店紀事」（『出版史料』4、1985）

任文京·劉偉娜「杜就田主編時期『婦女雜誌』征文中的女性风貌」（『河北大學學報』、2008）

陶賢都·艾焱龍「『婦女雜誌』與中國近代的科技傳播」（『中國科技期刊研究』24〔6〕、2008）

王秀田「沉寂於歷史深處的報界女傑—胡彬夏」（『蘭台世界』、2010）

蔡銀春「章錫琛的編輯出版思想探析—以『新女性』為例」（『出版廣角』、2014）

葉韋君「個人經驗與公共領域：『婦女雜誌』通信欄研究（1915～1931）」（『近代中國婦女史研究』29、中央研究院近代史研究所、2017）

侯強「從清末婦女報刊的興辦看女性解放的思想啓蒙」（『編輯之友』8、2017）

苏美盆「浅谈日本对中国晚清女性主义的影响—以报刊『女学世界』的翻译为例」（『安徽文学』、2017）

黃相輔「居家必備：『婦女雜誌』在五四前的通俗科學啓蒙（1915-1919）」（『中央研究院近代史研究所集刊』100、2018）

著書：

金仲華『婦女問題的各方面』（開明書店、1934）

陳碧雲『婦女問題討論集』（中華基督教女青年會全國協會、1935）

上海通社編『上海研究資料』（中華書局、1936）

程謫凡『中國近現代女子教育史』（中華書局、1936）

梁啟超『飲冰室合集·文集』2（中華書局、1941）

胡適『胡適留學日記』1（商務印書館、1947）

宋雲彬『文史資料選輯』31（中華書局、1950）

舒新城編『中國近代教育史資料—上冊』（人民教育出版社、1961）

王雲五·黃良吉編『東方雜誌之刊行及其影響之研究』（臺灣商務印書館、1969）

中國科學院語言研究所詞典編輯室編『現代漢語辭典』（商務印書館、1973）

梁啟超·章斗航編『飲冰室文集類編』下冊（華正書局、1974）

李又寧·張玉法編『近代中國女權運動史料（1842-1911）』（傳記文學社、1975）

張允侯『五四時期的社團』3（生活·讀書·新知三聯書店、1979）

中華全國婦女聯合會婦女運動歷史研究室編『五四時期婦女問題文選』（生活·讀書·新知三聯書店、1981）

茅盾『我走過的道路』上冊（生活·讀書·新知三聯書店、1981）

鄭觀應·夏東元編『鄭觀應集』上冊（上海人民出版社、1982）

謝菊曾『十里洋場的側影』（花城出版社、1983）

吳嘉勛編『梁啟超選集』（上海人民出版社、1984）

史夙儀『中国古代婚姻與家庭』（湖北人民出版社、1987）

蔡元培ほか『商務印書館九〇年（一八九七～一九八七）—我和商務印書館』（商務印書館、1987）

葉聖陶『葉聖陶集』（江蘇教育出版社、1988）

林毓生著、穆善培譯『中國意識的危機—五四時期激烈的反傳統主義』（貴州人民出版社、1988）

梁啟超『飲冰室合集』2（中華書局、1989）

李盛平『中国近現代人名大辭典』（中国國際廣播出版社、1989）

許傑『章錫琛先生誕辰一百周年紀念文集』（出版史料編輯部、1990）

文部省『複刻国定修身教科書 解説』（大空社、1990）

璩鑫圭·唐良炎編『中国近代教育史資料匯編·學制演變』（上海教育出版社、1991）

徐友春編『民国人物大辭典』（河北人民出版社、1991）

樂梅健編『哀情巨子—鴛鴦派開山祖—徐枕亞』（南京出版社、1994）

胡適著、周資平編『胡適早年文存』（遠流出版、1995）

周叙琪『一九一〇～一九二〇年代都會新婦女生活風貌—以「婦女雜誌」為分析實例』（國立台灣大學文史叢刊、1996）

劉志琴編『近代中國社會文化變遷錄』（浙江人民出版社、1998）

周葱秀·涂明『中国近現代文化期刊史』（山西教育出版社、1999）

許敏·熊月之『上海通史』10（上海人民出版社、1999）

王建輝『文化的商務—王雲五專題研究』（商務印書館、2000）

上海婦女志編纂委員會編『上海婦女志』（上海社會科學院出版社、2000）

楊揚『商務印書館民間出版社業的興衰』（上海教育出版社、2000）

黃瑚『中国新闻事业发展史』（復旦大學出版社、2001）

陳明遠『文化人与钱』（百花文藝出版社、2001）

鄭彭年『宋庆齡和她的助手金仲华』（新华出版社、2001）

張之洞『勸學篇』（上海書店出版社、2002）

金天翮著、陳雁編『女界鐘』（上海古籍出版社、2003）

王飛仙『期刊 出版與社會文化變遷:五四前後的商務印書館與「學生雜誌」』（國立政治大學學歷史學系、政治大學史學叢書 14、2004）

夏曉虹『晚清女性与近代中国』（北京大學出版社、2004）

李家駒『商務印書館與近代知識文化的傳播』（商務印書館、2005）

宋素紅『女性媒介:历史与传统』（中國傳媒大學出版社、2006）

梅家玲編『文化啓蒙與知識生產:跨領域的視野』（麥田出版社、2006）

王學哲·方鵬程『勇往直前 商務印書館百年經營史（1897～2007）』（臺灣商務印書館、2007）

張素玲『文化、性別与教育:1900—1930 年代的中国女大学生』（教育科學出版社、2007）

李曉紅·黃鳴奮『女性的声音—民国时期上海知识女性与大众传媒』（學林出版社、2008）

須藤瑞代著·姚毅訳『中国「女权」概念の变迁—清末民初の人权和社会性別』（社会科学文献出版社、2010）

柯小菁『塑造新母親:近代中国育兒知識的建構及实践（1900～1937）』（山西教育出版社、2011）

張麗萍『報刊与文化身份—1898～1981 中国婦女報刊研究』（中国書籍出版社、2012）

刘人峰『中国妇女报刊史研究』（中国社会科学出版社、2012）

邵雍『中国近代婦女史』（合肥工業大学出版社、2013）

鄭永福·呂美頤『近代中国妇女与社会』（大象出版社、2013）

夏曉虹『晚清女性与近代中国』第2版（北京大学出版社、2014）

朱丹編『新女性』（首都經濟貿易大学出版社、2015）

王鑫『商務印書館与中国現代女性啓蒙』（商務印書館、2016）

夏曉虹『晚清女子国民常識的建构』（北京大学出版社、2016）

何瑋『「新女性」的誕生与近代中国社会—兼論与日本之比較』（厦門大学出版社、2017）

【英語文献】

論文：

Nivard. Jacqueline, *Women and the women's Press: The case of the Ladies' Journal (Funv zazhi) 1915-1931, Republican China*, 1984, vol.10, pp37-49

Wang. Zheng, *A Case of Circulating Feminism: The Ladies' Journal. Women in the Chinese Enlightenment*, Ind: University of California Press, 1999, pp67-116

著書：

Judge. Joan , *Republican Lens: Gender, Visuality and Experience in the Early Chinese Periodical Press*, California: University of California Press, 2015

謝 辞

本研究を遂行し学位論文をまとめるに当たり、多くの方々のご支援とご指導を頂きました。その中で指導教官である勝山稔教授に深く感謝しております。5年間に渡って、時に厳しくご指導いただいたこと、常に優しく励ましてくださったことを通して、自分自身の不足なところを意識できたことは今後の努力の原動力になるものであります。博士課程へ進学してから、研究全般だけではなく、日常生活の面も勝山先生より様々な暖かいサポートを頂き、心より御礼申し上げます。

また、本研究を遂行するに当たり、日々多くのご指導をしていただき、研究だけではなく多岐にわたりご指導を賜りました同講座の黒田卓教授、大河原知樹教授、朱琳准教授にも深く感謝いたします。お世話になった全ての方々のお名前をここで挙げられませんが、先輩の方々、及び大学院生の方々など研究室の「戦友」たちと常に意見交換を行い、いつもたくさんの率直で有意義な意見をくれた後輩の張蕊様、閻秋君様に感謝いたします。

修士時代にご指導を頂いた東北大学日本思想史研究室の佐藤弘夫教授、片岡龍准教授にも厚く御礼申し上げます。お二人の先生から「研究」の面白さを、常に示して頂いて親身なご指導を頂きました。また、同じく修士時代に御世話になった先輩の小嶋翔様、吉川裕様にも感謝いたします。このような不器用な私を啓発してくださった日本思想史研究室の先輩方々の恩情にも深謝しています。

そして、一般財団法人東北開発記念財団からは、2016年から2017年まで経済的な支援を頂き、感謝を申し上げます。また、台湾中央研究院近代史研究所において、2018年9月から12月まで3ヵ月間の資料調査を行うことが、本研究に多大なご援助を提供して頂きました。所内の連玲玲教授と游鑑明教授が私の研究に莫大な激励と鼓舞を与えていただいたことに対し、心から感謝いたします。さらに、元東京大学の村田雄二郎教授に深く感謝いたします。村田先生から頂いた貴重な『「婦女雑誌」総目録・索引』は今回博論の作成において大いに活躍し、今後の研究にも大事に活用させていただきたいと思います。

また、東北大学文学研究科の菊地仁美様、福長悠様のご二人、ネイティブチェックのお手伝いをしてくださりまして、本当に感謝をいたします。

最後に、これまで自分の思う道を進むことに対し、温かく見守りそしていつまでも変わらずに陰で支えてくださって家族に対しては深く感謝の意を表して謝辞と致します。

参 考 論 文

楊 妍

〈靈性〉と〈平和〉

第二号

シンポジウム

- 趣旨説明 片岡龍、北原かな子 (1)
- シンポジウム次第 (3)

年間活動報告

- 第1回研究会～第9回研究会 (5)
-

論文

- 韓南塘の実心実学を通して見た金農巖評価
- 理気をめぐる「批判」思惟の両面性再考 渡邊裕馬 (7)
- 近代中国における男性知識人の日本女性観についての考察
- 1920年代～1930年代を中心に 楊妍 (25)
- 新渡戸稲造の神秘思想 アントニウス・プジョ (38)
- 元良勇次郎の思想形成期 森川多聞 (53)

2017年3月
東アジア〈靈性〉・〈平和〉研究会

近代中国における男性知識人の日本女性観についての考察

——1920年代～1930年代を中心に——

楊 妍

はじめに

中国は20世紀から西洋に対する認識が日増しに深まった一方で、日本との思想的及び文化的な相互交流の機会も急激に増加し続けた。その中で雑誌には、メディアとして、海外の情報を紹介し、他方でその先進的な思想を伝播するという二つの特徴があった。1920年代以降、『婦女雑誌』は中国においてずば抜けて大きな影響力を持つ女性向けの刊行物¹として、「本格的に婦女問題を探求する」という方針のもとで、編集者らは当時の先進国と見なされた日本からの作品を大量に翻訳していた。

一方、商務印書館が20世紀前半に発行した著名な雑誌である『東方雑誌』（1904年～1948年）も45年間にわたって刊行を続け、近代中国史上最大の総合雑誌として日中の政治問題に関する記事を数多く掲載した。

この二誌は、いずれも近代中国を研究する資料として頻繁に用いられた。その理由の一つは、「売れる雑誌」として時代の潮流を代弁していたからである。もう一つは、それらの雑誌が、日本を介して西洋の新思想をもたらすものだと、中国の男性知識人に認識された。彼らは雑誌を新思想を宣伝する絶好な手段として認め、続々雑誌を通して大衆に積極的に日本から流された西洋の新思想を紹介し、刺激を与えようとした。その中で日本女性の生き様に関連する記事も断続的に載せたのである。近年の研究としては、須藤瑞代氏の「『婦女雑誌』と日本女性——近代東アジアにおける『同じ女』の意味とは」²があげられる。その中で須藤氏は、「中国女性と日本女性の間には、共通の課題に直面した『同じ女』であることを確認するなかで一種連帯感が形成される」³と指摘するが、『婦女雑誌』に反映された「同じ女」という言葉に対して、日本からの新思想の導入と日本女性への評価の低下という二つの要素が本当に共存できるのかは疑問である。そのために1920年代の『婦女雑誌』を再考察する必要がある。

また、1930年代に入ってから日本女性観という概念がどのような形式で理解されたのかについても注意しながら、本論文において『東方雑誌』の「婦女與家庭」欄を取り上げ、1930年代における中国知識人の日本女性観を究明することを目的とする。

一、先行研究

近代中国の雑誌に反映された中国男性知識人の日本女性観について論じた先行研究は、管見の限りでは、主に須藤氏の論文⁴と前山加奈子氏の「日中両国の女性観に関して——『女

性改造』誌（1922 年～1924 年）よりみる」⁵という研究⁶しか見当たらない。須藤氏の研究は、主に 1920 年代の『婦女雑誌』の誌面から見た日本女性観を分析することによって、当時の中国男性知識人が日本の抑圧された女性の自殺など当時の日本女性が直面する社会問題及び日中政治的関係への関心の欠如を明らかにしたものである。日本女性への比較的低い評価については、『婦女雑誌』の刊行最後の年である 1931 年になってもそのまま継続していたと主張した⁷。また、『東方雑誌』に関しては、「やはり日本についての記事が多く取り上げられているが、圧倒的に政治的動向に関するものが多い」⁸と、読者の大部分が男性であったために、女性の立場からの言論が少ないと須藤氏は指摘した。しかし、1932 年から『東方雑誌』に設立された「婦女と家庭」欄に掲載された日本女性観に関する記事数は非常に多く⁹、その中で政治問題だけではなく、日本女性への考察及び職業女性の現状など、日常的な生活問題の討論が盛り上がったことを考えれば、そこから新たな認識が生まれてきたのではないかと予想できる。

前山氏の研究は、須藤氏との接点が多いが、視点が異なっている。前山氏は、日本の『女性改造』¹⁰（1922～1924）に掲載された中国女性に関わる記事から日中両国の女性観を考察した。しかし、生田長江、山川菊栄など日本の思想家は中国の女性たち新旧入り混じりながら、新時代に入ってきたと捉えていたが、女性の参政権運動にしても具体的に全体像を論評する内容には至っていないと指摘する。前山氏は、『女性改造』など女性雑誌が提供したのは五四運動を経験した中国人留学生が模索した新しい男女の在り方、言い換えれば、革新しようとしたジェンダー観を展開していたと結論づけている¹¹。しかし、この論文では、日本女性観についての分析が少ないように思われる。

その分析の前に、一先ず『婦女雑誌』から見た初期の日本女性観を整理しておく。

二. 草創期の『婦女雑誌』から見た初期日本女性観（1915 年～1919 年）

『婦女雑誌』という女性誌は、17 年間の刊行期間にわたり、編集長の変更によって 4 つの時期に区分することができる。すなわち草創期（1915 年～1919 年）、成長期（1920 年～1925 年）、復古期（1926 年～1930 年）、再興期（1930 年～1931 年）である¹²。草創期の『婦女雑誌』の誌面は「良妻賢母」主義を提唱し、所謂「富国強兵」を担う優秀な国民を産生するには、「国民の母」となる女性にも教育が必要であるという認識から、欧米列強に並ぶ強国とされた日本の女学を高く評価した¹³。

中国の女子教育は、明治維新以降の日本の近代女子教育をモデルとし、「奏定女学堂章程」¹⁴などの女子教育制度に見られるように、目的・内容・方法にいたるまですべての面で日本を模倣した。教育を受ける中国の女性は、家事、裁縫などの科目を学ぶ以外に「良妻」と「賢母」となることも期待された¹⁵。それに合わせるために、『婦女雑誌』も「中国型」の家庭で役に立ちそうな「実用一家経済法」、「家庭教育之精義」など良妻賢母主義に相応しい記事を大量に翻訳し紹介した。例えば、日本衆議院書記官であった林田亀太

郎¹⁶が娘一代子の結婚を契機として記した「嫁之心得」¹⁷（「嫁としての心得」）を『婦女雑誌』に掲載し、結婚する女性にとって夫の家は即ち自分の家であり、何があっても絶対に夫の命令に反抗してはならないと主張している。女性に対する明治政府の教育政策がそのまま『婦女雑誌』に反映された。その記事を翻訳した理由としては、中国の『新婦譜』に類似した「尤深切過」¹⁸（しみじみと感じた）があげられる。日本の良妻賢母教育を強調しながら妻となり母となる女性の心構えを記した「嫁之心得」など良妻賢母育成関連の記事は草創期の『婦女雑誌』に掲載され、当時の中国女子教育にとって恰好の教育素材となったことは言うまでもない。

草創期の『婦女雑誌』に載せられた外国の翻訳記事の数量を調べてみると、アメリカが最も多く、ついでに日本、イギリス、フランスという順番となった¹⁹。日本の記事がヨーロッパ諸国より多く翻訳されていたことから、日本への関心度は先進国を超えていたこと、日本の情報を重視していたことがわかった。

しかし、その内容を見ると、日本女性が現れていた記事は3篇しかなかった²⁰。日本語から翻訳された記事の多さの反面、日本女性への関心度が非常に低かった。1919年1月の「我之日本婦人観」（「私の日本婦人観」）という記事には日本女性の衛生、職業、教育、文学などの事情が具体的に紹介された。しかし、結論として、中国女性は日本にはるかに及ばないと評価された。その原因は、中国の男性知識人において当時の日本女子教育に対する関心度が高くなったため、日本女性を中国女性のモデルとするべく評価も高くなったとも想定できるであろう。

この時期の『婦女雑誌』を見る限り、「良妻賢母」教育を主張する記事への評価が非常に高かったが、女性の解放運動の情况及び女性運動家の紹介など先進的な女性像を提唱する記事は殆ど見当らない。つまり草創期の『婦女雑誌』は、女性解放への注意を払っていなかったといえるだろう。一方、日本の女性運動の発起は、自由民権主義の高揚期にあたる1882年（明治15年）に遡る²¹。1910年代は、「青鞥運動」と「母性保護論争」に挟まれた時期であったにもかかわらず、誌面に女性運動に関する記事が一つもなかったことからして、恐らく『婦女雑誌』の編集者たちがそれを無用のことからして、思想的ではなく実用的な知識にひたすら偏向した記事に限定して採用したことがわかるのであろう。女性解放運動に関する記事が『婦女雑誌』で大量に発表されたことと、それが日本女性観にもたらした変化は、次の時代から始まった。

三. 1920年代の日本女性観——『婦女雑誌』を中心に（1920年～1925年）

1921年から編集者の交代によって『婦女雑誌』の誌面性格に重要な変化が出始め、全体的な論調が急激に進歩し、女性解放思想の革新に対して大きな関心が寄せられた²²。筆者の調査から、この時期の『婦女雑誌』に掲載された日本女性に関連する記事は全部で25篇があり、その中で日本女性運動に関する記事が半分以上の割合を占めたことがわかった。

その原因は恐らく 1920 年代以降、日本の女性解放論の重心が民主主義女性解放論から社会主義女性解放論へと移り、社会主義女性解放を支える理論への要請も日々に高まっていたからである²³。その流れの中で、日本の先進的な知識人らは、社会主義思想に関連する知識を追求するようになった。その影響を受けた中国の先進的な知識人らも、堺利彦、山川均、山川菊栄（山川均の妻）等社会主義フェミニストの思想に目を止め、『婦女雑誌』を通して作品をぞくぞくと紹介した。その中でとりわけ山川菊栄の作品は 12 篇も翻訳されており（表 1）、中国と大きく関わりを持った与謝野晶子²⁴よりも、翻訳された作品数が多いことが分かった。

表 1		
1.	山川菊栄	12
2.	与謝野晶子	9
3.	竹中繁	5
4.	市川房枝	4
5.	奥むめお	2
6.	伊藤野枝	1

山川菊栄（1890 年～1980 年、以下菊栄と省略）は、女性解放家であり評論家でもあった。同時に「社会差別の視点で女性解放を捉え、聡明さと強い意志を持った女性運動家」²⁵でもあった。1912 年に津田塾大学を卒業した後定職につかず、1916 年に平民講演会で知り合った山川均と結婚し、社会主義運動に近づき、その運動を通してその時期に独自の社会主義女性論を確立した²⁶。その社会主義女性論の「原点」は、菊栄が紡績工場で見学した際に、「工場女性労働者」の悲惨な姿からその問題解決の必要性を痛感したことにあり、この視点が、彼女を社会科学、社会主義への道に踏み出させたのである²⁷。

菊栄の社会主義女性論は、具体的には 1918 年（大正 7 年）の「母性保護論争」まで遡ることができる。この論争の内容とは、平塚らいてうが、国家は母性を保護し、妊娠、出産、育児期の女性は国家によって保護されるべきだと「母性中心主義」を唱えたのに対し、与謝野晶子が、国家による母性保護を否定し、らいてうの唱える母性中心主義を「新良妻賢母」にすぎないと非難したというものである。菊栄は、らいてうと晶子の主張の双方を部分的に認めながら、らいてうの理想的な「母性中心主義」は差別のない社会でしか実現できないという社会主義の立場から独自の主張を打ち出し、事実上論争を終結させた。

母性保護論争以降、菊栄による女性解放関連の著作が度々出版された一方、彼女は、活動家の一面も持っていた。1921 年に日本最初の社会主義女性団体「赤瀾会」²⁸を結成し、無産階級としての立場をさらに強めて社会主義女性論の実現につとめた。

ほぼ同時期の 1920 年に中国の共産主義グループが上海で結成され、中国共産党は 1925 年春以降著しい発展を遂げるようになった。この時期は中国のマルクス主義が普及された時期だと言える²⁹。

その時代背景の下で、菊栄の社会主義的な論説が 1920 年代の中国知識人に認識され、大量に導入されるに至ったことは想像に難くない。『婦女雑誌』における菊栄著作の翻訳でいえば、13 点にも達している。しかし、表 2 に示されように、1925 年以降、彼女の著作の翻訳は『婦女雑誌』から突然消失した。

その原因については、二つの可能性が考えられる。一つ目は、『婦女雑誌』の「復古期」に入ると編集長の交代によって外国からの翻訳記事が大幅に減らされたこと、もう一つは、

表 2 (翻訳年代の順番によって並べる)

初版年代	出典	題目 (原文)	翻訳年代	期号	題目 (翻訳文)	訳者
1920 年 4 月	『解放』	婦人解放と「天賦」の問題	1920 年 6 月	第 6 巻第 6 号	婦女解放与男性化之 (上)	瑟廬 (章錫琛)
			1920 年 7 月	第 6 巻第 7 号	婦女解放与男性化之 (下)	
1921 年 3 月	『解放』 3 月号	紳士階と婦女解放	1921 年 6 月	第 7 巻第 6 号	紳士階与婦女解放	李達
1919 年 4 月	『改造』 第 1 巻第 1 号	男性よりの解放	1922 年 2 月	第 8 巻第 2 号	男女戦闘之過去現在与将来	嬰彦
1921 年 6 月	『社会主義研究』	産児制限論と社会主義	1922 年 6 月	第 8 巻第 6 号	産児制限与社会主義	味辛 (銭雲鶴)
1921 年 2 月	『社会主義研究』 2 月号	労農露西亞における婦人の解放	1922 年 10 月	第 8 巻第 10 号	新俄羅斯の建設与婦女	薇生
1922 年 10 月	『改造』 第 1 巻第 2 号	回教国の婦人問題	1923 年 1 月	第 9 巻第 1 号	回教國的婦女運動	易閑
1921 年 1 月	『大観』	労農露西亞の児童解放	1923 年 6 月	第 9 巻第 6 号	労農俄國的児童解放	存統 (施存統)
1923 年 7 月	『改造』 第 2 巻第 7 号	第三インタナショナルと婦人	1923 年 9 月	第 9 巻第 9 号	第三國際及其婦女部	光亮 (施存統)
不明	不明	不明	1924 年 6 月	第 10 巻第 6 号	日本婦女的自由職業	高山 (周健人)
不明	不明	不明	1924 年 6 月	第 10 巻第 6 号	日本婦女職業生活概況	
1924 年 10 月	『女性改造』	婦人非解放論の淺薄さ——生田長江の婦人論を評す	1924 年 11 月	第 10 巻第 11 号	婦女非解放論的淺薄——評生田長江的婦女論	無競
1920 年 9 月	『解放』	貴婦人生活の解剖	1925 年 1 月	第 11 巻第 1 号	貴婦人生活解剖	一鷗女士

菊栄の女性運動論が、無産階級運動の中で最も影響力があったのは、「婦人部論争」と言われる 1925 年前後であったので、「日本マルクス主義の運動は二つの流れに分かれ、混沌たる様相を呈するが、山川菊栄は、いわゆる『主流』からはずれ、かかわりをうすめて³⁰⁾」といったことが挙げられる。つまり、中国語に翻訳された菊栄の作品が 1920 年から 1925 年までの間に集中していた要因はこの点にあると考えられ、主流から外された結果、掲載されなくなったということである。

ここで注目すべきことは、1924 年 6 月の『婦女雑誌』において、周建人³¹⁾ (魯迅・周作人の弟) によって翻訳された菊栄の「日本婦女的自由職業」と「日本婦女職業生活概況」という二つの文章が、彼女の作品集では確認できない点である。筆者は、これらは菊栄の

作品のタイトルを変え、その内容からさらに一部を抜粋したのではないかと推測している。また、1924年以前の菊栄の作品を見てみると、女性の職業に関連する作品は「婦人と職業問題」³²（1919年）と「誤れる婦人職業論」³³（1919年）という二点しかない。さらに内容的にはいずれも『婦女雑誌』に載せられた文章と異なったものである。「日本婦女職業生活概況」という文章の中で、農作婦女、女子鉱員、家庭工業作業員、紡績作業員など作業の給料、内容、環境まで具体的に描写したが、日本の職業女性に対して極めて低い評価を与えた。しかし、ここで注目したいのは、その事態を招いた原因として、菊栄が「根本的な問題は農民の問題である。（中略）娘たちは飢餓を回避するために、少ない給料の仕事でも続けたいので、だから日本女性労働者の問題の解決方法は先に農民問題を解決しなければならない」³⁴と述べている点である。

農民問題の解決に繋がった女性労働者の問題に関しては、菊栄が1919年に書いた「婦人と職業問題」という文章では同じく女性労働者をめぐって論じたが、解決方法としては「要するに労働者の問題は労働者自身の自覚に俟つのほか、解決の道はないのである」³⁵と女性労働者自身の覚醒が最も有効な解決方法だと強調した。当時、悲惨な境遇に落とし込まれた女性労働者の姿を見た菊栄は、「女性の自我の覚醒を呼び起こすべき」だという意識がその大きな衝撃から生じたと言えるであろう。

また、Y.D³⁶というペンネームの『婦女雑誌』記者が山川菊栄の自宅に出向いて訪問し、その訪問内容を記事にして『婦女雑誌』に掲載した³⁷。その記事の中で菊栄は、中国の女性運動について意見を求められたが、彼女は、あまり詳しくない様子で「農村問題を放棄してはならないだろう」³⁸と回答した。しかし、菊栄によれば、女性が国民として持つべき権利は、国家の「慈悲」によるものではなく、労働者階級の女性達が自ら戦いとるべきものだという³⁹。菊栄は、労働階級の女性に関心を持っていたが、農民及び農村問題の解決よりも女性自身の目覚めを促進することが最も有効な方法だ⁴⁰と評価した。前述した「日本婦女職業生活概況」においては農村問題を重視していたが、この時期においては優先順位が下がっていることが窺えるだろう。この点については「日本婦女生活概況」の出典を明らかにする必要がある、今後の検討を要するところである。

1920年代の日本においては、女性解放運動の発展が活発化し、「矯風会」、「新婦人協会」など市民階級の主婦層や有識職業婦人を対象とした男女平等のための運動団体が次々に設立された⁴¹。女性解放という意識と、自分たちは「抑圧されているのだ」という自覚を受け入れた女性労働者の増加に従って、「女性地位の向上」というスローガンが日本全国に広まった。この時期の『婦女雑誌』は、積極的に日本の思想家らの女性運動に関連する作品を中国語に翻訳したが、彼らが示そうとした姿勢が、それらの翻訳記事を通じてありのままに伝えられたとは言えない。それは、恐らく言語翻訳の問題だけではなく、中国の男性知識人が女性解放を論じた際に、当時の社会背景を元にして日本の言論を借りながら中国国内で想定された問題の解決方法を展開して、広げていこうと考えていたからである。

四. 1930年代の日本女性観——『東方雑誌』を中心に（1934年～1937年）

1920年代を中心に盛り上がった山川菊栄の女性観は、五四運動後の中国の思想界における社会主義風潮の高まりを促進したが、1930年代になると日本女性観が大きく変化するようになった。その正体を究明する際に、『婦女雑誌』と同じく「母体」と言われた商務印書館から誕生した『東方雑誌』を研究対象として考察したい。

1904年に創立された『婦女雑誌』の「母親」と称された商務印書館は、日本との関わりが非常に深く、『東方雑誌』の発行地域と読者数からみても、当時の日本女性観の形成に一定の影響を与えた⁴²。章錫琛が『婦女雑誌』の編集長として務める以前、彼は、主に『東方雑誌』の編集に協力し、日本語に精通していたことから、大量の日本の雑誌と書籍から文章を選んで翻訳した。『東方雑誌』の基本的な特徴は、その総合性にある⁴³。20年代における『東方雑誌』の誌面は、当時の時事政治を中心に採用し、女性問題に関する記事は殆ど見られなかった⁴⁴。

しかし、1931年9月18日に満洲事変が勃発し、中国では反日感情が高まり、10月に北平女界抗日救国会は成立した後、上海事変を契機に、中国婦女反日救国大同盟が結成された。その社会背景の下で、1934年から『東方雑誌』は政治問題以外、まるで『婦女雑誌』の替え玉のように積極的に女性問題を取り上げるようになった⁴⁵。その印として、特別欄として「婦女と家庭」⁴⁶という女性問題に関する記事において討論の場が設けられた。筆者の統計では、1934年から1937年にかけての4年間、特別欄に載せられた日本女性に関する記事は、13篇もあった。

『婦女雑誌』が休刊する前年の1930年には、日本女性の生活に関する記事の中で次のような文章が掲載されている。

日本は中国文化の植民地であることは誰でも知っている。現在の日本人の生活からも、わが国（日本）の古代の生活状況を思い浮かぶことができる（中略）日本の女性は男性に服従することだけで、実に「良妻賢母」と呼ばれる。女性は新しい社会的地位を持たず、女性の生活の実状は、単に家事を処理し、子女を養育するだけなのである⁴⁷。

『東方雑誌』はこのように、日本女性の「後進性」を示唆している⁴⁸。1930年代という戦争の時代において『東方雑誌』の誌面に政治問題が盛り上がる一方、女性が国家及び社会との関係性も注目された。そして、中国の男性知識人がそれに対してどのような印象を受け入れたのかについて、次に進みたい。

I. 日本女性が直面する政治問題

まず女性労働者問題について、『東方雑誌』のある記事は、「日本女性の労働が国家に対して重大な関係があった」⁴⁹と冒頭で述べ、「家庭労働」は日常の簡単な労働生活と区別すべき国策であることを強調している。記者は、「女子は内を治め」という伝統的な価値観が、既に「国家と社会に対する責任を尽くした」という「富国強兵」の理念に変化し、

「私がこんなことを紹介する目的は我が国の女性同士の覚悟を促進したい」からである。そして、日本女性には「好労働」⁵⁰（労働が上手）の人が多いと称賛した。

また、1920年代の『婦女雑誌』では全く討論されなかった「軍国主義」などの観点からの論説も、『東方雑誌』の誌面においては見られる⁵¹。日本では、1931年（昭和6年）之満洲事変の勃発を契機に、大衆のナショナルリズムという感情が湧き上がり、女性たちの愛国心が呼び起こされ、有事においては国家のために身を投げる日本女性もいた⁵²。「軍国民主主義下の日本婦女」（「軍国民主主義下の日本女性」）という記事では、当時の状況を以下のように述べている。

現在、日本政府の命令によって大勢の「田舎娘」が中国の東北に派遣され、満洲にいった（日本人の）将士達と結婚の約束をした。双方の写真を交換する方法である。その役割は二つあり、一つは美しい「田舎娘」が将士達の「心」を励ますこと、もう一つは移民のため、大和民族の後代をさらに（満洲の）大陸で繁殖させることである⁵³。

しかし、「日本女性の大部分は戦争を嫌がる」ので、「戦争に反対するという立場に立った日本女性の願いを必ず実現して欲しい」⁵⁴という表現から、対華政策の下で日本に対して「軍国主義」国家として期待した一方、「戦争反対」を提唱した「善良」な日本女性が多いと読者に認識されるようになった。『東方雑誌』の編集者が初めて「軍国主義」を日本女性と並べて論じた原因の一つは、恐らく、1930年代という戦争が本格化した時代背景のもと、総合雑誌という雑誌の性格からして、政治的な文章を多く採用する傾向にあったからであろう。もう一つは、日本女性が日本という国家と区別して納得され、日本女性に対して同情を持つというよりも、むしろ好意を示す姿勢が読み取れた⁵⁵。

また『東方雑誌』に掲載された女性運動の論説に関しては、1920年代数が一層少なくなり、政治問題よりも日本女性の生活の紹介に偏るという傾向があった⁵⁶。その中で、女性参政権の獲得に関するテーマを多く取り上げ、「参議院は現在になってもまだ参政権を女性に賦与していない。それは今の日本女性が政治問題に対して非常に関心を持ち、女性の票数が男性のそれを超える可能性がある」と憂慮する人がいたことは議案が否定される主要な理由になるであろう⁵⁷として、日本の女性参政権については、特に積極的に評価した。また、1931年は婦人参政権を条件付きで認める法案が衆議院を通過したが、参議院の反対で廃案に追い込まれた年であったため、「日本女性は相変わらず努力し続けてようやく衆議院は女性が参政権を持つ法案を通過したが、参議院がそれを軽々しく否定した⁵⁸」と怒り口調で日本女性への不平等を説いた。

1930年代は、1920年代と比べれば、日本女性の独立を少しでも認めるようになったといえる。その流れはこうである。1934年のある記事の中で「女性問題は社会問題と分離することができない。封建制度と資本搾取という二重圧迫の下で苦しく息をしていた日本女性がもし自分自身の徹底的な解放を求めるのであれば、社会運動と合流しなければいけない」⁵⁹と述べた。そして1937年になると「国会議員は女性が参政権を持つことを認めるべきである。勿論この修正案の提出は婦人参政運動の氣勢を緩和するために（中略）そして

我々は日本女性解放運動が既に狭義的な女権運動から社会全体的な運動と合流して進んでいたこととわかった」⁶⁰と新しい目線で日本女性の女性運動とりわけ参政権運動を見直した。つまり、女性は、人間として家で「妻」の責任を担うだけではなく、社会進出や参政権の取得も女性の社会地位を高める有効な手段として認識された。それを通して女性の社会的な人格を確立できる、と政治的な面でも日本の女性運動を肯定したのである。

Ⅱ. 日本女性が直面する社会問題

日本企業の事業量の増加、第3次産業の増長により低賃金労働者を求める声が高まり、「職業婦人」と呼ばれる日本女性の動きが活発になってきた。1930年（昭和5年）の第3回日本国勢調査の結果によれば、女子人口3205万のうち1509万人が働く女性であり、其のうち農業関係は6割を占め、工業は143万人で、タイピストなどの「職業婦人」は56万人であった⁶¹。つまり、働く女性が増えはじめ、その職種の数も飛躍的に増大していたのである⁶²。

『東方雑誌』もそれについて1930年（昭和5年）の日本における働く女性の人数についての統計をそのまま報道した。ところが、記事に載せられた数字は実に不正確で、働く女性の合計数は989万2287人、農業に従事する人数は639万7042人と、事実から遥かに離れていた。しかも、デパートで働く女性店員の人数は実際は2万2000人であったが、記事では1236人⁶³しか記載されていないという大きなミスが発覚した。

1935年の日本当時、デパートは女性の花形職場であった。1929年の世界大恐慌⁶⁴以来の経済不況によって失業、解雇、就職難が社会に激しい勢いで襲いかかってきた。デパートは女性の賃金が低下したため、大量に女性店員を雇用するようになった⁶⁵。「日本女性問題の現階段」という記事では女子店員を多く雇用する理由を以下のように語っている。一般的な商店と機関が女子職員を雇用しようとする目的は、日本でも中国と同じく、女性の社会的及び経済的な地位を高めることや女性の才能を重視する点にあるわけではなく、客を招くところにあるということである⁶⁶。

例を挙げると、「東京のある百貨店会社が女性職員を募集する時、第一は『愛嬌豊富』とし、同じバス会社の募集条件も『健康美麗』を第一要件⁶⁷」とし、また、デパートのエレベーター係も「若くて綺麗」な女性に担当させた。賃金の低さ、競争の激しさの結果、日本女性は常に失業の危機にさらされていると論じられたが、それにしても「彼女たちの西方姉妹」⁶⁸「欧米と並べられる」⁶⁹などの言葉から、日本女性はいつの間にか「強い」と思われるようになった。「姉妹」という言葉は、中国国内では同志的なニュアンスで用いられていた⁷⁰。1930年代の中国知識人は、まさに「職業競争」、「失業」など社会的な問題と向かい合うことで日本女性の職業の先進性に驚いていた。それは、『東方雑誌』をみると「日本職業婦人」に関する記事が多く掲載されたことから、編集者の関心の高さが見られる。

しかし、1930年代の中国では、職業女性は「花瓶」（「職場の花」）という蔑称と呼ばれ、中国の女性が社会に進出できる分野は限られていた。さらに、1930年の萎縮した社会経済

状態のもとで女性が男性の雇用機会を横取りしているという批判的な視線も女性に向けられた。「婦女回家」（「女性が家に帰りなさい」）という論調が 1930 年代中国社会のスローガンとなり、女性が職業が制限されたと同時に、出産と育児を天職とする「良妻賢母」主義が取り上げられるようになった。このように 1930 年代になると、日本女性が中国女性と関係付けられることは次第になくなっていった⁷¹。中国の知識人が考えた「彼女たちの西洋姉妹」のように、日本女性と中国女性の「同じ女」という特徴は、経済と社会の変動に伴って、地域的な近さや歴史的関連性があるにもかかわらず、内部から分離されたと考えられる。

終わりに

本研究は近代中国における日本女性観を明らかにすることを目的とし、それを論じるために代表的な刊行物となった『婦女雑誌』と『東方雑誌』を主要な研究対象として考察した。二誌の出版社である商務印書館は日本との関係が非常に深い。また編集者らは殆ど日本に留学した経験があり、当時の日本女性の状況を読者に宣伝したことからも、当時の中国人の日本女性観の形成に一定の影響を与えたことは間違いないだろう。

正文には、先行研究を基礎にして二つの主線を設立した。一つは『婦女雑誌』を中心に当時の中国社会で盛り上がった社会主義女性解放論を再考察した。社会主義が盛行した中国では社会主義者であった山川菊栄の文章が多数紹介されたことは当然だったが、彼女の作品と思想の読み取り方にズレが生じ、それによって中国では日本女性の解放運動など新しい動きを中国では把握しきれなかったと見られる。

もう一つ、近代中国における最も大型の総合雑誌である『東方雑誌』は、1934 年から読者の要求に応じて「婦女と家庭」欄を設けた。満洲事変の後、政治的局面が不穏の中、日本の軍国主義に対しては敵視していたにもかかわらず、日本女性への関心度は決して低いとは言えない。女性運動に関する記事が減っていくなかでも、積極的に女性参政権を獲得しようとする日本女性の姿に好感を示した。日本という国家と一線を画した日本女性の活躍として中国の男性知識人らに認識された。また、職業の面では、日本女性の社会進出が欧米女性と並べられるだと称賛されたが、1930 年代の「婦女回家」という中国の社会風潮の中で、日本女性は中国女性と「同じ女」でなくなったと冷たい目で見つめられた。

この点に関しては、『婦女雑誌』のみならず他の雑誌、あるいは上海以外の地域の雑誌をも総合した形で検討を加えなくてはならない。ここでは、基礎的な作業として『婦女雑誌』について考察を行ってきたわけが、多くの課題がまだ残されている。特に、同時期の女性雑誌との比較考察まで行うことはできず、なかでも『婦女時報』等主に上海で発行された雑誌の検討は重要だと考えられる。いずれも今後の課題にしたい。

- ¹ 劉人鋒『中国婦女報刊史研究』中国社会科学出版社、2012年、46頁。
- ² 須藤瑞代『『婦女雑誌』と日本女性——近代東アジアにおける『同じ女』の意味とは』『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』村田雄二郎編、研文出版、2005年、307～333頁。
- ³ 前掲注2、須藤、327頁。
- ⁴ 前掲注2、須藤、307～333頁。
- ⁵ 前山加奈子「日中両国の女性観に関して：『女性改造』誌（1922年～1924年）よりみる」駿河台経済論集22（2）、駿河台大学、2013年3月、39頁～66頁。
- ⁶ 他には、潘蕾の「中国狐文化の受容から見た日本古典文学における女性観」『比較日本文学研究』8、2015年、120～131頁。石川照子の「中国YWCA（女青年会）の日本観」『歴史学研究』765号、青木書店、2002年8月、25～34頁。などの先行研究があったが、雑誌から日本女性観を考察するという研究ではなかった。
- ⁷ 前掲注2、須藤、320頁。
- ⁸ 前掲注2、須藤、321頁。
- ⁹ 筆者の調べた限り、『東方雑誌』において日本の女性に関連する記事は11篇があった。当時の総合雑誌であった『東方雑誌』が立った立場から考えると数は決して少ないとは言えない。
- ¹⁰ 『女性改造』は1922年10月に日本の雑誌『改造』の姉妹誌として創刊され、1920年代のフェミニズムの旗手である女性たちが多数執筆し、先進的な女性解放雑誌として女性解放論を進歩させ、一時代を画した。
- ¹¹ 前掲注5、前山、62頁。
- ¹² Nvard Japublican、「Women and Women's Press:The Case of The Ladies' Journal (funuzazhi)、1915-1931」、『Republican China』Vol.10、November1984、37～55頁参照。
- ¹³ 韓韓『『婦女雑誌』に紹介された日本の家政知識——良妻賢母教育理念の受容を中心に』『家政学研究』60（2）、奈良女子大学家政学会、2014年3月、81頁。
- ¹⁴ 1907年、学部の学務大臣は女学を興すべきだという上奏文を光緒皇帝に進呈し、中国が初めて女性の学校教育を認め、女性のために小学堂と師範学堂を設立する法令を公布することに至った。
- ¹⁵ 韓韓「近代中国女子教育における手芸科目と日本の影響」『日本研究』48、国際日本文化研究センター、2013年9月、130頁。
- ¹⁶ 林田亀太郎（1863年-1927年）、熊本縣出身、明治大正時代の官僚、政治家。衆議院書記官長、衆議院議員を経験した。
- ¹⁷ 蔡静媛訳。「嫁之心得」『婦女雑誌』第1巻第4号、1915年4月、88～90頁。明治44年（1911年）の日本『婦人世界』に掲載された。
- ¹⁸ 前掲注15、蔡、89頁。
- ¹⁹ 筆者の調査により、1915年から1919年にかけて『婦女雑誌』に掲載された外国記事数において、アメリカは87篇、日本は68篇、イギリスは35篇、フランスは9篇であった。
- ²⁰ 3篇の記事それぞれは「日本婦人職業指南」（上）『婦女雑誌』第3巻第6号 1917年6月、「日本婦人職業指南」（下）『婦女雑誌』第3巻第10号 1917年10月、「日本婦人之清潔」『婦女雑誌』第5巻第1号、1919年1月である。
- ²¹ 山田洸『女性解放の思想家たち』青木書店、1987年、3頁。
- ²² 杜若松・劉雨『『婦女雑誌』と日本学者的近代女性観』『外国問題研究』第4期、東北師範大学文学院、2012年11月、48頁。
- ²³ 王宓「李達的女性解放論における山川菊栄の影響」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第21号、1998年1月、37頁。
- ²⁴ 「近代日本には数多くの文学者が活躍したが、中国と関わりを持った女性作家はそう多くない。例外は与謝野晶子である」「日本に留学した魯迅や郭沫若らが中国に新しい思想や文学をもたらしたのと同じように、一人の留学生張嬋が晶子の論説を読んで中国に帰国後、二十数編の評論を翻訳し、『与謝野晶子論文集』という名で上海開明書店より1926年と1929年に二回も刊行された。」司亜娟・和田勉、「一九二〇年代後半の与謝野晶子について——中国との関わりを視座として」『九州産業大学国際文化学部紀要』第34号、2006年、1頁。
- ²⁵ 前掲注5、前山、52頁。
- ²⁶ 鈴木裕子編『山川菊栄評論集』、岩波書店、1990年、312～316頁参照。
- ²⁷ 前掲注25、鈴木、320～321頁参照。
- ²⁸ 1921年4月に伊藤野枝、山川菊栄らによって結成され、会員は42名。研究会や講演会を開いて、社会主義の宣伝普及、婦人の地位向上のために努めたが、政府の弾圧で独自に運動を行うことは極めて困難になって翌年3月8日「八日会」に改組された。
- ²⁹ M.メイスナー著、丸山松幸・上野恵司訳『中国マルクス主義の源流』平凡社、1971年、169頁。

- ³⁰ 前掲注 25、鈴木、111 頁。
- ³¹ 周建人（1887～1984）中国の生物学者。生物学の教科書、啓蒙書を多数編集翻訳。『種の起源』の訳者として有名であった。日本で理学を学んだ後、1921 年から商務印書館に入社して『婦女雑誌』の編集に関わっているながらも、生物学教科書の編集担当者であった。『婦女雑誌』の編集経歴を除けば、商務印書館での彼の仕事は常に生物学を主軸していた。章錫琛『1897—1987 商務印書館九十年——我和商務印書館』、商務印書館、1987 年、117 頁。
- ³² 出典：『国家学会雑誌』1919 年 2 月号及び 3 月号（原題「婦人職業問題二就テ」）
- ³³ 出典：『不平』1919 年 4 月 5 日臨時号（原題「誤れる婦人職業論の一標示」）
- ³⁴ 原文「根本問題是在于农民問題…女儿们为免饥饿起见，不能不去赚些少的工资，因此日本的女工问题如不待农民问题先行解决，是解决不来的。」（『日本婦女職業生活概況』『婦女雑誌』第 10 卷第 6 号、1924 年 6 月。）
- ³⁵ 山川菊栄「婦人と職業問題」鈴木裕子編、『山川菊栄 女性解放論集①』、岩波書店、1984 年、14 頁。
- ³⁶ 先行研究では Y.D は呉覚農である可能性が高いと論じられた。「Y.D とは誰か——日本の女性問題を紹介・評論した呉覚農について」前山加奈子『中国女性史研究』17、64 頁～88 頁、2008 年 2 月。
- ³⁷ Y.D「日本婦女団体及婦女運動者訪問記」、『婦女雑誌』9 卷 1 号、1923 年 1 月。
- ³⁸ 前掲注 36、Y.D、277～278 頁。原文「大抵妇女运动应该归于各国的情形而定。但是中国为数千年来来的农业国所以无论取如何形式的行动绝不可不把农村问题放弃，这是最紧要的一事。望你郑重的代我告诉贵国的姐妹们。」
- ³⁹ 前掲注 25、鈴木、318 頁。
- ⁴⁰ 前掲注 34、山川、205 頁。
- ⁴¹ 山下悦子『日本女性解放思想の起源』海鳴社、1988 年、121 頁。
- ⁴² 寇振鋒「中国の『東方雑誌』と日本の『太陽』『メディアと社会』1、2009 年 3 月、7～22 頁参照。
- ⁴³ 雑誌『太陽』第 1 卷（第 1 年）のジャンルには、「論説」「講演」「地理」「政治」「小説」「雑録」「文苑」「家庭」「法律」「文学」「科学」「美術」等が総勢 24 項目もあったが、翌年からは「政治」「実業」「文学」「科学」「家庭」「小説」「史伝」「地理」「宗教」「軍事」等が 15 項目あったことからその総合性がわかった。前掲注 41、寇、10 頁。
- ⁴⁴ 『東方雑誌』の全文資料庫により、1920 年代における日本女性に関連する記事は「日本婦女界之新運動」（1920 年 5 月、第 17 卷第 5 号）一篇しかなかった。
- ⁴⁵ 1932 年 1 月 28 日に日本軍の爆撃により商務印書館が被爆したことによって、『婦女雑誌』はそのまま停刊となった。
- ⁴⁶ 『東方雑誌』の「婦女と家庭」欄について情報が非常に少ない。筆者には 1932 年から 1937 年まで不定期刊行され、全部で 153 篇記事があったという情報しか判明できなかった。
- ⁴⁷ 原文「大家都知道日本是中国文化的殖民地，如今在日本人的生活中有些地方我们还可以想见我国古代的生活情状…纯日本式的妇女对于男子只有服从是十足的「良妻贤母」，在新社会上妇女是没有地位的。妇女的实际生活只是操持家务，养育子女。」（賀昌群「日本的一般社会和婦女生活」『婦女雑誌』第 16 卷 7 期、1930 年 7 月、150 頁。）
- ⁴⁸ 陳延媛『東アジアの良妻賢母論——創られた伝統』勁草書房、2006 年、242 頁。
- ⁴⁹ 陳振楨「日本婦女労働與国家産業政策」『東方雑誌』第 33 卷第 1 号、1936 年。
- ⁵⁰ 前掲注 48、陳、517 頁。
- ⁵¹ 「軍国主義があまり論じられなかった」に関する内容は須藤氏の先行研究にも提起された。（前掲注 2、須藤、321 頁。）
- ⁵² 岩見照代「解題」『時代が求めた「女性像」——「女性像」の変容と変遷——』第 20 卷、ゆまに書房、2013 年 11 月、5 頁。
- ⁵³ 原文「在日本政府的命令之下更派遣大批的『田舎娘』到东北去与在满的将士们结婚其订婚方法只是经过双方换一个照片便成这一种方法的作用有二即想以美人计以鼓励将士的『心』另一方面则是为了移民以繁殖大和民族于大陆。」（莫湮「軍国民主主義下的日本婦女」『東方雑誌』第 33 卷第 21 号 1936 年、116 頁。）
- ⁵⁴ 原文「但我相信随着日本国社会矛盾的发展，最基本的妇女大众，是会渐渐地厌恶其统治者疯狂的行为，而了解她们的出路，会和殖民地妇女站在同一条战线上的吧？」（前掲注 52、莫、118 頁。）
- ⁵⁵ 原文「写到这里我记起了日本反对战争者的呼声了「对海岸的朋友们连起手吧」现在我们在这里也应高呼着『对海岸的女朋友们我们也联起手呀！』」（前掲注 52、莫、118 頁。）
- ⁵⁶ 女性運動の団体である「青鞥社」という名称を「踏青社」と書き間違えた記事もあった。宋雯芳「現代日本文壇上の女作家」『東方雑誌』第 33 卷第 11 号、1936 年。
- ⁵⁷ 原文「参政议会到现在还没有把参政权给予妇女，因为日本妇女对于政治问题大都非常关切，遂有人顾虑女子的票数会超越男子这便是此项提案被否决的主要理由」（比金「日本婦女の新生活」『東方雑誌』第

30 卷第 7 号、1933 年。)

- ⁵⁸ 原文「日本妇女继续不断的努力好容易在众议院通过了妇女有参加政权但是被参议院轻轻地否决了。」(王慧中「日本婦女地位之演變」『東方雜誌』第 34 卷第 22 号、1937 年、162 頁。)
- ⁵⁹ 原文「妇女问题与社会问题是不能分开的。喘息在封建制度及资本剥削两重压迫下日本妇女如果要求自身彻底的解放必然非与社会运动合流不可。」(志堅「日本婦女問題的現階段」『東方雜誌』第 31 卷第 10 期、1934 年、215 頁。)
- ⁶⁰ 原文「国会议员不得不承认女子有选举权及被选举权这种修正案的提出当然是为了缓和妇女参政运动的气焰...因此看来我们可以知道日本的妇女解放运动早已由狭义的女权运动走到了整个社会运动合流前进的趋势。」(韻覽「日本婦女生活之考察」『東方雜誌』、1937 年、102 頁。)
- ⁶¹ 金谷千慧子『わかりやすい日本民衆と女性の歴史・近現代編』明石書店、1991 年 6 月、28 頁。
- ⁶² 前掲注 40、山下、120 頁。
- ⁶³ 魯沙白「日本職業婦人の現状」『東方雜誌』、第 33 卷第 23 号、1936 年、107 頁。
- ⁶⁴ 1929 年 10 月 24 日、アメリカのニューヨーク市場で株価が大暴落したのをきっかけに、世界的に深刻な長期不況に陥った。日本にも波及し、1930 年から 1933 年頃まで続いた。
- ⁶⁵ 前掲注 60、金谷、28 頁。
- ⁶⁶ 原文「日本の职业妇人正也和中国职业妇人一样，一般的商店和机关雇用女职员的目的并不是提高女子社会的经济地位或者重视女子的才干及能力他们的目的是招揽顾客。」(志堅「日本婦女問題的現階段」『東方雜誌』、第 31 卷第 19 号、1934 年、212 頁。)
- ⁶⁷ 原文「东京某百货公司在招收女职员的资格项下第一项就是「爱娇丰富」公共汽车在招考女子售票员时也以「健美」为第一要件其他如百货公司中管门的卖化妆品的开电梯的都是雇用年轻貌美的女子担任。」(前掲注 63、志、212 頁。)
- ⁶⁸ 原文「拥挤着女职员女店员女接线生女教师女工及女电差她们充塞于街车和地下电车中或攀援着公共汽车中的吊环神气宛如住在纽约的她们的西方姐妹。」(比金「日本婦女的新生活」『東方雜誌』第 30 卷第 7 号、1933 年、8 頁。)
- ⁶⁹ 原文「尤其是妇女职业的发达更是一日千里在这短短十数年来日本的职业妇女也居然和欧美并驾驱之势。」(前掲注 60、魯、107 頁。)
- ⁷⁰ 前掲注 47、陳、325 頁。
- ⁷¹ 岩間一弘『上海近代のホワイトカラー揺れる中間層の形成』研文出版、2011 年、33 頁。

(東北大学大学院)

〈靈性〉と〈平和〉
第二号

発行 2017 年 3 月 31 日
発行者 東アジア〈靈性〉・〈平和〉研究会
編集者 森川多聞・青野誠・松本学

正 誤 表

下記の通り、誤記がありましたので訂正いたします。

	正誤箇所	誤	正
1	目次「2.2」	変様	変容
2	目次「3.1」	誕生	産生
3	P1,上から 5 行目	意味	意義
4	P3,下から 3 行目	『広辞苑』	しかし、『広辞苑』
5	P3,注 12	『』	『
6	P6、上から 1 と 5 行目	1925	1926
7	P6、下から 1 行目	同誌	『東方雑誌』
8	P7、注 27	注 16、周	注 22、何
9	P13、下から 2 行目	3 点あり	3 点があり
10	P15、上から 6 行目	女性雑誌の誌面内	男性知識人の言論自由
11	P17、上から 15 行目	1930 年代	1930 年初
12	P17、上から 16 行目	で	の中から
13	P18、注 1	『禮記』大学篇所収	削除
14	.P24,上から 2 行目	表 3	表 4
15	P27、下から 1 行目	「家庭主婦」	「家庭主婦」像
16	P27、下から 1 行目	即ち「新良妻賢母」像	削除
17	表 6 の下から 1 行目	表 6 の内容から	削除
18	P32、表 6 の下から 3 行目	日本の女性思想	先進的な思想と知識

19	p44,注 118	1348	1336
20	p57,上から 10 行目	中国界	中国女性界
21	P58、上から 5 行目	それよりの娯楽があるで しょうか？	それと同等の娯楽は何が あるのでしょうか？
22	p64,上から 15 行目	参戦	加入
23	p86,下から 8 行目	さらに	第二
24	P94,下から 12 行目	一方の	削除
25	p96,注 83		削除
26	p102,上から 4 行目	1926	1921
27	P124,下から 2 行目	。	、
28	P146,下から 5 行目	する	し
29	p152,表 2	目的	社会役割
30	p153,表 2	不明	英語
31	p154,下から 9 行目	使用	影響
32	p155,上から 6 行目	婦女雑誌	『婦女雑誌』
33	p155,下から 1 行目	女性学	女性雑誌
34	p158,上から 19 行目	韓韓...2014	p158,22 行目に移動
35	p158,上から 23 行目	…院教育学研究科...2014	p158,19 行目に移動